

拙訳『探険家』は一九九九年、近代文藝社から出版したものです。それを今回、田原創氏が主宰なさるサマセット・モーム倶楽部に掲載して頂くとうと思った理由は二つあります。一つは、この本が廃版となってしまつて手に入りにくいこと。もう一つは、翻訳してから二十年が経過し、久々に読み返してみても、手を入れたい箇所が多数見つかったことです。

会員の方々の中には、田原氏が翻訳し「サマセット・モーム劇場」に発表してくださつた戯曲版『探険家』をお読みになつた方もいらっしゃるでしょう。私が小説版『探険家』を出版した頃には戯曲版は原文を入手することすら出来ませんでした。それが今では、インターネットの発達のお蔭で、容易に閲覧でき、しかも田原氏のお蔭で日本語でも読める。好い時代になつたものです。ならば、今では入手困難となつてしまつた小説版『探険家』を、インターネットを利用して読めるようにしておくことにも多少の意味があるのではないかと、そう考えた次第です。

訳文に関して言えば、『探険家』は私が公に発表した最初の翻訳で、今読み返してみると、訳し忘れ、誤訳があるのは勿論のこと、最初の作品にありがちな、熱意は感じられるもののそれが空回りした、文字通り拙い文でした。そこで今回、最初から最後まで丹念に見直し、気づいた誤訳は訂正し（田原氏の訳を大いに参考にさせていただきました）、少しなりとも読みやすいものにしたつもりです。その作業をしながら意識したことを、これから翻訳に挑戦してみようと思つている若い人たちのお役に立てるのではないかと考え、幾つか述べてみます。①代名詞（とりわけ三人称の人称代名詞）

は使わないで済むなら使わないこと。どうしても使う必要がある場合にも、それが連続することを避けるために固有名詞を交ぜるようにすること。代名詞は日本語の生理と相性が悪いようです。②文末の工夫を怠らないこと。過去形で語られる英文の物語を日本語に訳してゆくと、どうしても「…た」で終わる文が多くなります。その単調さを少しなりとも破るように訳者は心を配るべきです。③直接話法での女性言葉に気を付けること。私たち男が考える女性言葉は、女性の目から見ると不自然極まりないものが多いようです。とりわけ文末を「…わ」にすることは出来るだけ少なく抑えたほうが良さそうです。これは松岡和子著『深読みシェイクスピア』（新潮選書二〇一一年）で教わつたことです。もちろん意図的に芝居がかつた言葉遣いをさせたい場合は構わないと思います（『探険家』ではクローリー夫人の台詞がその例です）。④いわゆる *that* 節を「…すること」「…したこと」と訳し過ぎないこと。私のような元英語教師は「*that* 以下ということ」が口癖になつていて、節全体を名詞化するための「こと」を訳文の中に使いすぎる傾向があるようです。

最後に、田原氏が戯曲の翻訳を発表してくださつていたので、折角ですから、戯曲版と小説版との違いについて一言述べさせていただきます。「あとがき」に書きましたが、モームは『サミングアップ』の中でこの作品について「緊急に金が欲しくて戯曲を小説化しただけの恥ずかしいもの」と自己評価を下していますが、果たして本心でしょうか。戯曲と小説とを読み比べてみると、小説では様々なことが細部に至るまで丁寧に書き込まれていて、それぞれの人物がとる行動の動機に説得力が増していることに気づきます。モームは至つて良心的に小説化を行なつた、決して金欲しさのお座成りなものではなかった、そう考えるのは私だけではないと思います。戯曲と小説との差異はいろいろあります

が、戯曲の最大の弱点は、ディック・ローマスをアレック・マッケンジーのアフリカ探険隊に加わらせたことです。ディックの富と人間性を考えれば、彼が遠征に加わることは全く考えられません。また、親友アレックとの婚約を破棄しようとするルーシーに、死の前日のジョージとアレックとの遣り取りを（何しろその現場に立ち会っていたのですから）自分の口から語ることで、アレックの取った行動がやむを得ないものであったことを理解させようと努力してもおかしくないのに、何もしようとしない。これはいかにも不自然です。モームも当然そうしたことには気づいていたのでしょう、小説ではディックをアフリカに同行させず、代わりにウォーカーというディックに性格のよく似た（但し金銭的に困窮した）若者を登場させています。そしてウォーカーを戦死させることで、ジョージの死の真相を知る者はアレック一人だけになるという状況を作り出しています。戯曲には上演時間という制約があるのと同時に、経費の制約もあるでしょうから、登場人物をなるべく少なく抑えたいという気持が働いたのかもしれませんが。しかし小説ならそのどちらの制約にも縛られないで済む。そこでモームは、戯曲の中では表現しきれなかったものを、小説では、作家としての良心に従って、きちんと書き込んだ。私にはそう思われます。モームが公に向かって自作を高く評価しないのはいつものことですので、私たちは、「恥ずかしいもの」との本人の評価を一旦頭から拭い去って、虚心坦懐に小説『探険家』を読んでみる必要があるのではないのでしょうか。

この翻訳が、これからモームを色々と読んでみたいと思っっている方々、あるいは若い世代のモーム研究家のお役に立てれば幸いです。

二〇一八年十二月

この翻訳を宮下博司先生に捧げます。

W・サマセツト・モーム

探 険 家

宮川 誠 訳

親愛なるG・W・ステイヴン夫人に

「探険家」 おもな登場人物

フレッド・アラトン……ハムリンズ・パールー莊園の当主
ルーシー・アラトン……フレッドの娘 小説のヒロイン
ジョージ・アラトン……フレッドの息子
ケルシー夫人(アリス)……ルーシー、ジョージの伯母
ロバート(ボビー)・ボールガー……ルーシー、ジョージの従兄
リチャード(ディック)・ローマス……フレッド・アラトン、ケルシー夫人の友人
ジュリア・クロリー……アメリカ生まれの未亡人 デイックの友人
アレクザンダー(アレック)・マッケンジー……探険家 デイックの友人 小説のヒーロー

1

海は穏やかだった。視界に船の姿はなく、灰色をした鏡のような水面に鷗かもめが浮かんでいる。雲が低く垂れこめ、風はなかった。水平線はくつきり見える。人影のない砂利の浜には、纏ちりれあった海草が散在し、無数の貝殻が足の下で碎ける。防波堤は止やむことのない波の浸食をくいとめようとはしていたが、寄る年波には勝てず、朽ちはて、ねばねばした緑の藻で覆おわれている。荒涼とした風景だったが、そのもの悲しさのなかに或る安やすらぎもあった。その静けさ、単調だが柔和な色調には、ここを癒やしてくれる何かがあった。

しかしそうしたのも、今そこに一人立っている女の苦悩を和らげることではできなかった。女は微動だにしない。視線は一点を見つめているが何も見ていないのである。自然には愛もなければ憎しみもないのだわ。いつも無関心で、こころ軽やかな人には微笑ほほえみを、悩める人には更に深い悲しみを与えるのだわ。あの古代ギリシャの人たち、あんなにも賢く分別があった人たち。神々はわたしたち地上の人間の喜怒哀楽にはおよそ関わりをもたず、わたしたちが喜んだり悲しんだり、希望を抱いだいたり絶望にのたうちまわっていることなど何も気にすることなく、天上の宮殿で、それこそ神々ごうごうしく生活していると考えた人たち。——その賢く分別ある古代ギリシャの人たちが、今ではただ享樂主義の使

徒としてしか人々に思い出してもらえないのは、なんて皮肉なんだろう。

しかしこの押し黙った女は、慰めを外に求めているのではなかった。強い自負心を持ち、慰めはこのところの中に求めるものと決めていた。だから、思わず大粒の涙が頬を伝って落ちたとき、我慢ならないというふうには首を振り、大きく息を吸いこむと、なんとでも思考の流れを変えようとした。

しかしその考え、思い出は執拗にここに取りつき、締め出すことは到底できなかった。家路につき鳥のように、空想は軽やかな翼に乗ってもう一つの海辺へ飛んでゆく。この海を見ていると、もう一つの海がどうしてもここに浮かんでくるのだ。ソーレント海峡である。幼少の頃からその海の広がりや人生の欠くべからざるの一部のように思え、いま足元にある静けさが、知りつくしたその風景をあらがいようもなくここに呼びさます……。あのハンブシャーの海岸を洗う小波には、他の場所にはない、人を説き伏せる魅力があり、その広がりや、なるほど大洋のもつ壮大さには欠けるもの、いつも身近にある細々とした小物のように愛おしいものだった。しかもそこには新鮮な潮の香りがあり、海は彼方に目を移せば、ここは解放され昂揚してくるのだ。時に冬の午後の薄暗がりのなか、ソーレント海峡のことを、いま目の前にあるケントの海と同じように荒涼とした海として思い出すこともあった。しかし普段想像の中に現れるソーレント海峡は、旅に出ようとする、あるいは旅から帰ってくる船が頻繁に行きかう海なのだ。彼女は海峡を行く船を見るのが好きだった。遠洋定期船が、悪天候や風などものともせず、いっぱい乗客を乗せて疾走する姿、夜には長い光の帯としか見えぬ船には、いったいどんな人たちが、どんな未知の世界へ旅立とうとして乗っているのだろう。また、買い物に行ったり、農作物を売りに行く近隣の善良な人たちを乗せ、サウサンプトンへ喘ぐように海

を渡って行くフェリー。そうしたフェリーの屈強な船乗りたちとはお馴染みでもあったし、彼らの尊大さが可笑しくもあった。どんな天候の中でも漁に出かけてゆく漁船。いかにも取り澄まして湾の中を飛ぶように横切ってゆくヨット。そして、そよ風を帆いっぱい孕ませて、勇壮に、堂々と入港してくる大型バーク船、ブリガントイン船。それらはまるで大きな鳥のようで、見ているだけで喜びにふるえた。

しかしなんといつても一番気に入っていたのは、港から港へと、忠実で厳めしい粘着力をもって、とぼとぼと進んでゆく不定期貨物船だった。不細工で、見苦しく、嵐に痛めつけられ、黒ずんで、ペンキが剥げかかっていることも多かったが、そうした船に彼女は惹かれた。その運命が栄光に満ちていないからこそ、こころ打たれるのだ。船乗りの仕事に就いたばかりの者は、このような船の美しさを愛することもなければ、風を孕んだ帆を見上げ、自分にも解らない何かに歓喜することもない。貨物船の乗客となった者たちも、その船足を誇りにすることもなければ、その優雅さを褒め讃えることもない。こうした船は、正直で、働き者で、信頼に足る、勇氣ある商人であり、航海中不断に起こる悪天候、危険なものともしないが、それを声高に叫ぶこともない。彼女はそうした謙虚なあり方の中に、本能的に、真のロマンスと、黙々と自らの義務を果たす者の美しさを見いだすのだった。そしてこうした船を見ていると、彼女の空想は、運ばれてゆく様々な商品や、遠い世界への長旅の思いで彩られていった。ここには何ともいえない魅力があった。これらの船は南の海へ、真つ青な空のもと静まりかえった街へ、曲がりくねった細い路と白い壁の街へ出かけてゆくのだ。

激しい絶望感から我が身を引き離そうと尚も努力しながら、この孤独な女は、振りむくと、湖沼を

横切る小道へと向かった。しかし、湿地と浅い水路、沿岸警備隊の詰め所といったものが目に入ってきたとき、彼女の気持は一層沈んだ。それらは子供の頃から馴染みのものだった。羊があちこちで草を食^はんでいる。草場に放牧された二頭の馬が、彼女の通りすぎるのを物憂げに眺めている。牛は気^{だる}怠^{だる}そうに尻尾で蠅^{はえ}を追い払っている。無関心な人々には、このケントの海岸は、あまりに平板で単調、まったく面白みのないものかもしれない。しかし彼女の目には美しいものだった。それは、もう二度と見ることがないかもしれない故郷のことを思い出させずにはおかなかった。

すると、今まではいわば恐々^{こわこわ}と周辺部をさまよいながら、その縁^{へり}に触れるだけで、身を完全に任せ^{まか}ることを無意識に避けてきた生家への熱い思いが、堰^{せき}を切ったように溢れ出てくるのだった。

ハムリンズ・パールーは三百年にわたりアラトン家の所有地だった。教区教会の内陣には、アラトン家の繁栄の礎^{いしずえ}を築いた者の肖像が、襪襟^{ソックス}と固い胸締め^{マテイング}をまとった二人の妻の姿とともに、石板に彫られ、埋めこまれていた。このレリーフは、ウエストミンスター大聖堂付属の聖母礼拝堂を建てた職人たちとともに誘われてこの国へ来たイタリア人彫刻家の手によるもので、垢抜けない英国風の教区教会にあつては、このルネッサンス期独特の優美なレリーフは一服の清涼剤だった。アラトン家は三百年の間、分別、勇氣、富の象徴で、教会の壁は彼らの美德、業績を示す石板であふれていた。彼らは近隣の郷士たちと次々に姻戚関係を結んでいったので、教会の銘板を見れば、この三百年のハンプシャーの著名人の名はほとんど知ることができる。すなわち、ブライズ荘のマドウン家、ホートン・パーク荘のフレッチャー家、モールデン・ホール荘のドーンシー家、ペンダ荘のギャロッド家などで

ある。これらの郷士たちは、この三百年、ハムリンズ・パールーに居を構えるアラトン家に娘を嫁がせた。逆にアラトン家では、ペンダ荘のギャロッド家に、モールデン・ホール荘のドーンシー家に、ホートン・パーク荘のフレッチャー家に、ブライズ荘のマドウン家に、潤沢な持参金とともに娘を嫁がせてきた。一世代ごとにアラトン家の誇りは増していった。彼らには近隣の人々とは少しばかり異なつたところがあつたが、それは館^{やかた}のある土地の特殊性のためだろう。というのは、ギャロッド家とドーンシー家とフレッチャー家とはお互いに歩いて行ける距離にあつたし、ブライズ荘のマドウン家も、その地位の高さ、富の豊かさにおいてこの州で抜きん出ているもの、この三家とはせいぜい六、七マイルしか離れていなかったのに対し、ハムリンズ・パールーの館は海の近くに位置し、他の館とは森によって隔てられていたからである。この館の歴代^ゆの主は、近隣の他の郷士たちとあまり行き来することのない生活を強いられたがために、彼らとは性質を異にする人間になつていった。

アラトン家の人々は何エーカーにもおよぶ荘園に強い誇りを持っていた。確かにその多くは塩分を含んだ沼地であり、荒涼としたヒースの生い茂る土地であつたが、残りの土地だけでもハンプシャー州の他のどの荘園にも劣らず広く肥沃だった。英国紳士録や名士録に載つたアラトン家の項は、こうした所有地の名を数えあげてゆくだけでも壯観なものとなつた。しかし彼らが心中もつとも誇りとしたものは自分たちの教養だった。およそ自らの知性にたいする誇りほど誇らしいものはない。アラトン家の人間から見れば、近隣の紳士淑女も粗野な田舎者にすぎなかつた。彼らの内省好きが、生まれ育つたこの館の特殊な地理的条件によるものなのか、それとも遺伝上の偶然によるものなのかよく判らないが、いずれにせよ、アラトン家の人々は皆、精神的なものに深い興味を示した。そうしたもの

は、フレッチャー家の人々や、ペンダ荘のギャロッド家、あるいは領主ブライズ荘のマドゥン家の人々の頭を悩ませたことのない問題だった。アラトン家の人間も、他の人々同様、狩は大好きで、誰にも負けず巧みではあったが、同時に彼らは膨大な量の本を読み、繊細な知性を持っていた。こうしたことは普通、郷土階級の間には見られないことだった。この郡の多くの大地主は、とんでもない学識を持った者として彼らに一目置き、自分たちの中にこのような人間のことを喜んだ。私らのなかに、家柄は良いし、生まれ落ちたときからあふれるほどの財産があつて、おまけに百科辞典みたいな知識を持った者がいるとは、本当に有難いことだ。人間、普通、どれか一つ、よくても二つしかもてないものじゃないかね、とワインを飲みながらよく言ったものだ。身のまわりの何を見てもアラトン家の人々の自負心を強めてくれるものばかりだった。彼らは、普段付き合っている人々を一段高いところから見下していた——まあ、これはよくあることだ——ところが、まさにその見下された人々が、疑いようもなく、アラトン家の人間を尊敬していたのである。

アラトン家の息子たちは、青年時代、一家の威厳にふさわしい旅支度で大陸大旅行に出かけていった。いまでも書類箱の中には、それぞれの息子が、パリやヴェニス、ドレスデン、ミュンヘン、ローマでの印象を綴った手紙が、細心の注意を払って保管されていて、どのような高貴な人々が彼らを歓迎してくれたかを知ることができる。また、それらの手紙には、彼らがどんなに芸術に夢中になつていたかが述べられている。そして息子たちは旅の途中必ず、土産として、それぞれの時代の趣味にしたがつて、素晴らしい品々や美術品を買求めた。ハムリンズ・パールーは石造りで、その外見だけでもたいしたものだったが、一歩なかに入れば、そこは、数々のイタリアの絵画、フランスの寄木細

工の目もあやな家具、あらゆる種類のブロンズ像、タペストリー、中近東の古色豊かなカーペットなどであふれていた。庭園も愛情深く手入れされ、英国内の他の場所ではその名も知られていないような草花が育っていた。歴代のアラトン家の人々は、それぞれに、情熱と自負心を持ってこの領地を守ってきた。その時々々の美しさに少しなりとも新しい美しさを加え、それを子孫に今以上に素晴らしい遺産として譲り渡すこと、それを家長たる者の特権と考えてきたのだった。

しかし、ついにハムリンズ・パールーがフレッド・アラトンの手に落ちる時がやってきた。神々はいままで長い間この家の繁栄を見過ごしてきたのだが、いまや悪意のかぎりをおちまけてやろうと決心でもしたかのようだった。フレッド・アラトンは彼の家系に固有の多くの特徴を具えていた。が、彼においてはそうした特徴が突然向きを変え、彼を足早に破滅へと追いやった。アラトン家の人間は、代々、立派な容姿、説得力のある態度、そしてきわめて自由な精神の持主だった。その中でフレッドは多分もつともハンサム、間違いなくもつともチャーミングな人物だった。歴代の家長にあつては、偏見のない自由な精神は、一家の誇り、自負心への極端な耽溺を防いでくれたのだが、彼フレッドにあつては、その自由な精神は並外れた無節操へと陥つていった。

両親が他界したとき彼はまだ二十歳だった。そしてその一年後にはこの広大な荘園の主となつていった。当時、社会の情勢は土地に依つて生活する人々には厳しいもので、フレッドは祖先のようにきわめて裕福というわけにはゆかなかつた。しかし彼は快樂の追求に、それこそ一身を捧げはじめた。歴代の家長の中でハムリンズ・パールーに居を定めなかつたのはフレッドだけである。彼はこの荘園に

まったく興味を持っていないようだった。ときどき狩に来ることを除けば、生まれ故郷に姿を見せることはなく、ほとんどはパリで暮らしていた。当時パリは、第三共和制が始まってはいたが、未だ帝政時代の放恣な雰囲気の色濃く漂わせていた。この都で彼は放蕩と賭事ですぐに名を揚げた。ただ、フレッドには運がなかった。なすこと総てがひどい結果に終わった。しかし、だからといって陽気さが損なわれることはなかった。ヨーロッパ中のカジノ、競馬場で大損したことを自慢し、自分の馬が一回だけ勝つてくれれば忌々しい競馬から足を洗うと宣言した。その魅力的な物腰には抵抗しがたいものがあった。彼ほど友達をたくさん持っている者はいなかった。気前がよく、求められれば誰にでも喜んで金を貸した。しかし誰からも好かれる人間でいることは、種馬の馬主となるよりも金のかかることなのだ。やがてフレッドは手元不如意の状態に落ちこんでしまった。彼は躊躇なく所有地を次々と抵当に入れ、借りた資金が底をつくまで、この派手で陽気な生活を続けた。

とうとうハムリンズ・パールはなになにまで抵当に入ってしまった、おまけに借金で首が回らなくなってしまった。それでもなお彼は、立派な馬に乗り、高級アパートに住み、ロンドンではお目にかからないような洒落た服を着て、誰彼かまわず贅沢な晩餐に招待していた。しかしやがて、この苦境から抜けだし資産を回復するには金持ちの女と結婚するしかないと悟った。フレッド・アラトンは今でも充分ハンサムだったし、長い経験から、女性が喜びそうなことを言うのは彼にとついても簡単なことだった。その独特の輝きを持った青い目で見つめられると、誰でも彼の心根の良さを確信せずにはいられなかった。そしてなにより、彼には快活さと、はち切れんばかりの生命力があった。

フレッドはボールガー嬢という、リヴァプールの製造業者の娘にねらいを定め、驚くほど短期間のうちに自分の情熱を相手に納得させることに成功した。言葉のすべてに真実とまごころの響きがこもり、彼女は喜んで恋の炎に身を投げだした。ボールガー嬢には姉が一人いたが、こちらもどうやらフレッドといつ恋に落ちてもいいという様子だった。彼は親しい友人に、例によって率直、陽気に洩らしたことがある。この国の法律のおかげで同時に二人の女と結婚できないとは残念。二人と結婚できれば、財産も一人分じゃなく二人分手に入るのに、と。結局彼は妹の方と結婚し、その持参金でハムリンズ・パールの抵当を請け出し、借金も清算し、再び派手で贅沢な暮らしを始めることができた。フレッドの人間の欠陥を見抜けなかったこの夫人は、かわいそうに、夫を全身全霊敬愛していた。夫に自分の財産の管理をすべて任せ、夫が仕事に関連した用向きで始終ロンドンに出かけなければならず、館に居る機会の少ないことだけを残念がった。この結婚のおかげで新たに商工業関係の人間と付き合うようになったフレッドは、やがて自分には商才があると信じだし、様々な融資事業に首を突っこむようになる。一つの事業が失敗し、会社が破産宣告を受けるとすぐに、今度こそ大儲けするぞと、冷めることのない熱情を持って新たな事業に取りかかるのだった。アラトン夫人存命中の十五年間ほどハムリンズ・パールが活気にあふれていた時はない。フレッドは、それこそあらゆる種類の人間を連れてきた。この数百年間、ギリシャ、ローマの著作家たちの長所について、またイタリヤの大家たちの美点について、学識豊かな、あるいは時に冷やかすような議論が戦わされた威厳ある応接間で、今度は、株式だの、配当だの、法人会社、企業連合だの、選択売買権、所有財産だのといった言葉が飛びかった。アラトン夫人は、急逝したとき、子供たちのために取っておいた蓄えがすべて夫により浪費され、先祖代々の広大な所有地が再び抵当に供され、一家が借金で身動きできない状態にあ

ることを知らなかった。息を引き取りながら、夫人は夫の名を口にし、二人が初めて会った日のことを神に感謝した。夫人には息子と娘が一人ずついた。母親が死んだとき、娘のルーシーは十五歳、息子のジョージは十歳だった。

いまケントの海に背を向け、ゆっくりと沼地を横切つて歩いているのは二十五になったルーシーである。歩きながら、ルーシーの目の前には、母の死以来過ぎ去つたこの十年の年月が走馬燈のように甦つていた。

初めのうちは、父が世界一素晴らしい人のように思われ、子供ごころに崇拜していた。それに比べたら、母に抱いていた愛は弱いものだった。というのは、ルーシーは、愛情をこちらにはこれだけ、あちらにはこれだけと分けることのできるような性分ではなかったからだ。父には子供のころに同化できる天賦の才があり、言葉では言い表わせない魅力でルーシーをすつかり擒とりこにしてしまった。父という時がいちばん嬉しかった。父はルーシーを楽しませ、夢中にさせてくれた。だから、父の時間をあんなにもたくさん奪つてしまう仕事仲間の人たちが、ルーシーは大嫌いだった。

アラトン夫人が亡くなって、ジョージは寄宿学校に入ることになったが、彼女は女性家庭教師の保護の下、本と、犬や馬を友として、一年中ハムリンズ・パールで暮らした。そしてやがて、自分でもどうしてかはよく解らないのだが、かつては騎士道の鑑かたみのように思われた父が、本当は意志薄弱で、信頼が置けず、狡い人間なのではないかという考えが次第に頭をもたげてきた。ルーシーはこころを毒すこの疑いの念に強く抵抗しようとし、己の魂の卑しさを激しく責めたてた。しかし次々と起こる細々とした出来事を通して、真実は否応なしに明らかとなつてきた。父の言う正直さ、誠実さの基準

が自分の考えるものとまったく異なるものであることを知ったとき、ルーシーは深い悲しみに身をふるわせた。父は、約束とはどうしても守らなければならないもの、とは考えていなかった。金銭問題に關しても良心的とは言えなかった。ルーシーにとつては、いかなることにおいても正直で誠実で厳格でなくてはならないという気持は、本能的なものであるばかりでなく、これまでの人生のなかで考へ抜き、育んできた大切なものだった。なぜなら、自分の生まれを強く誇りとする以上、こうしたことは普通の人間よりも何倍も何十倍も注意を払わなければならない義務のようなものだと感じていたからである。

あちこちから聞こえてくるちよつとした言葉、怖くて本当はしたくない推理、そして一種本能的憶測によつて、やがてルーシーは父の生活の真実のありさまをはつきりと理解した。ハムリンズ・パールは全て抵当に入っていること、家具は売りに出されていること、何枚もの絵画が競売に掛けられたこと、そして最後に、母が自分とジョージのためにと父に託してくれてあつたお金も一文残らず使われてしまったことを知った。そして未だに父フレッド・アラトンは贅沢な放蕩三昧の生活を送っているのだ。

ルーシーは徐々に徐々にこうしたことを発見していった。相談できる人がいなかったもので、何か行動の指針となるようなものを自分で考え出す必要があつた。父についての知識は全て憶測であり、何も確かに判っているわけではないのだ、これ以上深く詮索するのはよそう、とルーシーは決心した。しかし事態がゆつくりと判明してきたぶんだけ、それにどう対処すべきか考える余裕はあつた。アラトン家の人間としての誇り、自負心は、不思議なことに父フレッドにはまったく欠如していたが、娘

のルーシーにはしつかりと受け継がれていた。父の所行を知れば知るほど、この誇り、自負心は彼女のなかで増大していった。自分の理想としたものが次々と壊れていくとき、ルーシーがアラトン家の誇りを理不尽なほど大切にしたのは、それ以外にこのころの支えとなるものがなかったからである。館のどの部屋に入っても、崇拜する歴代アラトン家の人々の肖像画が彼女を見下ろしていた。いまだはもうその名前とキャンバスに描かれた表情しか残されていない、これら祖先の人々の威光によって、父の人間の弱さ、欠点が相殺そうさいされることを、ルーシーは空想し、願った。高潔な魂、強靱な精神力、善良なところ、そうした特性を持った多くの祖先の中に入れば、父という、本能のままに生きている、手に負えない一人の例外的人間のことなど、いつの日か忘れ去られるに違いない。

愛するハムリンズ・パール。いくつもの靈妙と言えるほど美しい部屋を持った館、みどり豊かな庭園、肥沃で広大な領地、なかでもとりわけ、荒涼としたヒースの丘、塩分を含んだ平坦な沼地、それらのものをルーシーは身を焦がすように愛おしんだ。アラトン家の所有権が危機に瀕していればこそ、悲しみに打ちひしがれながらも、なお一層愛おしく思うのだった。どんな困難があろうとも、力の限りをつくしてこの莊園を守るのだ、弟のためにも……。ルーシーの一番の願いは、弟の気持をこの莊園の再興に向けさせることだった。弟と力を合わせ、いま見ず知らずの者の手に渡ろうとしているこの土地を取り戻し、かつての自由で闊達なハムリンズ・パールを復活させるのだ。

ジョージにルーシーの期待の全てが懸かっていた。弟なら、失われたアラトン家の資産を回復することができらるだろう。そのために彼を鍛え、この栄光ある仕事に向かわせることが自分の役目なのだ。弟も大きくなってきている。父の弱さについて自分が知ったことは伏せておこう。ジョージにとって

父はあくまで立派な本物の紳士でなくてはならない。

ルーシーは、それまでは父に惜しみなく与えていた愛情を、すべて弟に振り向けた。大きくなってゆくのを優しく見守り、弟が関心を持つことに関心を持ち、彼にとって、ただ姉であるばかりでなく、失った母親、父親失格の父親の代わりであろうと努めた。パブリック・スクールに入る年齢に達すると、名門ウインチェスター校に入学させた。熱心に彼の進むべき人生行路をととのえ、彼の為になると思えばどんなことでも誠心誠意やった。

それまでの愛情こそ失ってしまったものの、代わりにルーシーは、父に対して、憐れみのこもった優しい気持を抱くようになった。ただ、自分の気持に変化のあつたことは父にできるだけ悟られないようにと努めた。一緒にいるときには、それは易しいことだった。父の生来の魅力に逆らうことは不可能なことだったからだ。問題は別れた後だった。様々なことを説得力をもって説明してくれる父がもはやそこにいなくなると、ルーシーは、父のことを考えるとき決まって感じる嫌悪感と憤りを押さえられないのだった。しかしこの気持は誰にも悟られていないはずだ、このもつれにもつれた事態をできるだけ上手に切り抜けてゆくだけでなく、現状が本当はどうなっているのかを人の目から隠しておくためにも、慎重に行動しなくてはならない、ルーシーはそう自分に言い聞かせた。

というのも、これまでは欲しいだけ即座に借りられた金が、もはやフレッド・アラトンといえどもそう簡単には借りられなくなっているようだったからである。ルーシーは細心の注意を払って儉約に努めなくてはならなかった。彼女はいろいろな面でできるだけ出費を切りつめ、館に一人にいるときには、それ以上はできないくらい慎ましく暮らした。父に金の無心をするのは厭いやだった。父は、これ

までもしばしば、本来彼女のものであるはずの手当を払わないで済ませていたから、父に頼むことは自制せざるをえなかった。ルーシーは、大人になるとすぐに、家計を含め一家の諸々のことを自分自身の手で行なうようになっていた。だから、やつとの思いで家計をやりくりしていることを世間の目から隠しておくことはなんとかできた。今や事態がいよいよ危機的状況に陥りつつあると感じたルーシーは、まず馬を全て売り、つづいてほとんどの召使に暇をやった。もはやハムリンズ・パールを維持してゆくことは不可能なのではあるまいか、そう思うと彼女は恐慌に襲われた。この先祖伝来の領地のためなら、そこに留まることさえ許されるなら、喜んであらゆるものを犠牲にする覚悟はできている。どんなに貧しい暮らしをすることになろうとも、少しもかまわないが……。

闘いはますます厳しいものになっていった。しかし、アラトン家を何とか維持していこうという努力のなかで彼女がどんなに辛い思いをしているかを知る者はいなかった。すべてのことに耐えてはいたが、ルーシーの表情はあくまで明るかった。姻戚関係やら、長い友達付き合いやらで、彼女には近隣の紳士階級の人々と頻繁に会う機会があったが、そうした人の誰一人として、ルーシーの不安の大きさを正しくは理解していなかった。まわりの人々がアラトン家の現状を本当は知っているのではないかと漠然と感じることはあつたけれども、彼女は背筋をしゃんと伸ばし、誰にも憐れみをかける機会を与えなかった。父はますます館に寄りつかなくなっていた。どうやらルーシーと二人きりになるのを避けているようだった。二人がハムリンズ・パールの状況について話し合うことはまったく無かった。というのは、父はルーシーといると、決まってわざと軽薄な態度をとり、真面目な話題を避けたからだ。ルーシーの二十一歳の誕生日、父は、今では彼女のものであるはずの母が残してくれたお

金について、あるお道化たことを言ったのだが、その言い方が、上っ面だけのものにせよ、あまりに魅力的だったので、ルーシーはこの話題を持ち出すことはもうできないと感じた。仮に機会があつたとしても持ち出すまい。なぜなら、法的には確かに自分のお金であるが、すでに父が浪費してしまつたに違いない以上、どうしようもないではないか。確認しないにこしたことはない。継承権がどうの、母の遺言がどうのと言つたところで、そのお金でしたいことをするかどうかは、実際は、父の気持次第なのだ。父に対する批難と受け取られるような言動は厳に慎もう、そう彼女は心に決めていた。

そして、ついに、破局がやってきた。

ある日——もうすぐ二十三歳になろうとしていた頃だが——母の古くからの友人リチャード・ローマスから、昼食に伺いたいの電報が届いた。ルーシーは歩いて駅まで迎えに行つた。彼のことはとても気に入っていた。人柄が良いからというばかりでなく、母が彼のことをとても気に入っていたからでもある。彼と親しく付き合うことで、生前少なからず軽視していたと今では申し訳なく思っている亡き母のそばに、多少なりとも近づけるような気がするのだ。ディック・ローマスは法廷弁護士で、下院議員に二度落選した後、先の総選挙で当選し、すでにそのウィットに富んだ演説とぶつきらぼうな良識で名を揚げていた。彼には、多くの議員仲間に見られる、もったいぶつた、尊大などころもなければ、押しつけがましい、独断的などころもなかった。彼を知る人々からは、分別はあるが退屈な男ではない、頭は切れるが生意気ではないという評価を頂戴していた。これは、人間、なかなかできることではない。賢明だったので、しゃべりすぎる愚は避けた。もし彼にユーモアのセンスという、英国の政界ではいつも疑いの目をもって見られるものさえなかったら、政治家として輝かしい未来を

夢見ることもできたかもしれない。小柄ではあるが引き締まった躰つき、鋭いが愛想の良い表情、きらきら輝く眼をしていた。ディック・ローマスは生まれてからの三十七年を愉快地生きてきた人だった。

しかし今日の彼はめずらしく深刻な様子だった。ルーシーは、突然彼が訪問したいと言ってきたときも驚いたが、いつもは明るい灰色の目に当惑の表情のあるのを見て、何か困ったことが起こったのだとすぐに感じ取った。心臓が早鐘のように打ち始めた。相変わらず御健勝のようでも何よりですと握手しながら、彼が無理に微笑^{ほほえ}もうとしているのは明らかだった。二人は駅からゆつくりと歩き始めた。ディックがとりとめのないことを話している間、ルーシーは、今度はいったいどんなことが起こったのだろうと、取り乱したところで考えていた。昼食の席に着いたとき、ディックは目の前に並べられた料理を見て、いつものことながら本当に美味^{おい}しそうですねと言ってくれたが、料理にはほとんど手をつけなかった。それはルーシーも同じだった。彼は、食事の終わるのを待ってられない、しかし一方、今ここに重くのしかかっている問題を取りあげるのも気が進まない、そんな様子だった。二人はコーヒートを飲んだ。

「気分転換に、庭を歩きませんか。」ディックが言った。
「ええ。」

この前の訪問の後、彼はウェストミンスターのとある店で見つけた古い時計を送ってよこしていた。そんな置物がこの場所にあつたら素敵でしょうね、と以前二人で話したことがあったのだが、いま二人は庭のそちらの方へ歩いて行った。日時計の話題がしばらく続いた。が、突然二人とも黙り

こんでしまった。そして今度は無言のまま並んで歩いた。ディックはルーシーの腕に自分の腕をそつと滑り込ませ、愛撫するような優しさで腕を組むと、館に向かって引き返し始めた。こうした優しさに慣れていないルーシーは、嗚咽がこみ上げてくるのを感じた。二人は館に戻り、応接間に入った。高い壁からはこの家の宝とも言える何枚かの油絵が彼らを見下ろしている。レイノルズの描いた肖像画、ホプナーによる肖像画、グアルデイが描いたヴェラニスの大運河の美しい風景画、それにイベリア戦争を戦った祖先アラトン將軍のゴヤの筆による肖像画もある。それらの絵をちらつと見たディックは、いつもながら讚嘆の念で血がうずくのを覚えた。彼は暖炉に寄りかかった。

「お父さまがあなたに会いに行つてくれと……あなたのこと心配で、ご自分では来られないとおっしゃるのです。」

ルーシーは沈んだ顔つきで彼を見つめていたが、返事はしなかった。

「お父さまは最近随分と運^きがなかった。ご自分の商才に誇りをお持ちなのですが、本当はそうしたことに關しては、小さな子供と同じで、ほとんど何も解^とつていらつしやらない。空想家なのです。なにか面白そうな計画でもあると、ロマンチックな気持ちに駆られて、平衡感覚を失つておしまになる。」

ディックは再び言い淀んだ。打撃を和らげることはできそうもない。ありのままに言うしかない。「株取引でギャンブルに出て、思惑がひどくはずれたのです。高値を見込んで南アメリカ鉄道の株を信用取引で買いあさっていたのですが、市場が暴落して、大損なされた。債権者との話し合いがうまく決着するかどうか判りませんが、もしうまくいかなければ完全に破産です。しかしいづれにせよ、

残念ながらハムリンズ・パールは売却しなければならぬでしょう。」

ルーシーは窓のところにいき、外に目をやった。しかし何も見えていなかった。目は涙で霞んでいた。彼女は何とか感情を抑えようと、小さく息を吸った。

「ずっと前から予想はしていました。」ルーシーはやつのこと言った。「ただ、真剣に考えることを避けていたのです。考えまいとしていたのです。でも、いつかは必ずこうなるに違いないと分かっています。」

「お気の毒です。」ディックは他に言葉が見つからなかった。

ルーシーは頬を紅潮させ、挑むような険しい表情で彼を見やった。しかしどうにか怒りを抑え、喉まで出かかった苦々しい辛辣な言葉を言わずにすませることができた。絶望のなかで何とか感情を抑えようとしているその痛ましい姿を見て、ディックは自分の言った言葉がまったく慰めになっていないことを感じた。この人の歎きの大きさからみたら、なんと無力な言葉だったろう。彼は黙っているしかなかった。

「それで、ジョージのことは？」ルーシーが訊いた。

ジョージはそのとき十八歳で、ちょうどウィンチェスター校を卒業し、新学期からはオックスフォード大学に行くことになっていた。

「ケルシー夫人が、大学のほうで掛かる費用はすべて出そうと申し出てくださいました。」ディックは答えた。「それに夫人はあなたにも、当分の間自分のところに来て一緒に暮らしたらどうかとおっしゃってくださいています。」

「ということとは、本当にわたしたち、一文無しなの？」ルーシーの声には絶望の響きがあった。

「お父さまにいままでのように援助を求めることはできないでしょう。」

ルーシーは再び黙ってしまった。

ケルシー夫人は、故アラトン夫人の姉で、妹の結婚の後しばらくして、裕福な商人の求婚を受けられた。その男は、父親の共同経営者の息子で、国会議員としても活躍し、最後には自らの議員の資格を選挙で敗れたある大臣に譲って引退したのだが、その行為がきわめて愛国的だというので騎士の爵位まで授かった人だった。今は他界し、夫人には十分な遺産を残してくれた。しかし二人の間に子供はなかった。ケルシー夫人にはジョージの他に一人だけ甥がいた。名をロバート・ボールガーといい、兄の一人息子だったが、彼はボールガー・アンド・ケルシー商會を引き継ぎ、何不自由なく暮らしていたので、夫人の愛情はもっぱら、かつて自分がこころから愛し、結局は妹と結婚した男の子供たちの上に注がれていた。

「実は、私と一緒に今日ロンドンに来てくださることを願っていたのですが……。ケルシー夫人があなたの来るのを楽しみにしていらっしやいます。それに私としても、あなたがここに一人きりで残るなんて、考えただけでも辛いのです。」

「最後までここに留まるつもりですわ。」

ディックは再びためらった。一切合切の事実はできれば明かしたくなかった。それはルーシーにとつてまったく残酷な打撃なのだ。しかし遅かれ早かれ知らせねばならない。

「実は、ここはすでに売られてしまったのです。お父さまがジャレットからの申し出を受け入れたの

です。憶えているでしょう、ここに来たことがある男だから。お父さまの株仲間^{ブローカー}で、一番の債権者なんです。他のこまごまとしたものも全て、クリスティーで競売に掛けられることになっていきます。」

「それなら、もうこれ以上申し上げることはありませんわね。」

彼女はデイックに手を差し出した。

「駅までお送りできませんが、赦してください。」

「では、ロンドンへは来てもらえないのですか。」

ルーシーは首を振った。

「一人になりたいの。ごめんなさい、追いついてるようで。」

「いえいえ、そう言っていただけで有難い。汽車に乗り遅れないですみません。」デイックはさりげなく微笑んだ。

「さようなら。それから、ありがとう。」

2

ルーシーがあてどなく海辺を歩きながら、辛い過去のことを思い出している頃、古くからの友人デイックは、一緒に海岸に行くのは億劫^{おっくう}と、コート・リーズ荘の応接間に腰掛け、その館の主^{あるじ}に話しかけていた。

クローリー夫人はアメリカの出身で、あるイギリス人と結婚し、未亡人となった後もそのままこの国に留ま^{とど}って暮らしていた。夫人は人生を徹底的に楽しもうとする人だった。実際、そうしてならない理由はまったくなかった。若くて、可愛らしく、おまけに金持ちだったし、機転が利いて、話していて楽しかった。その小柄なことといったらこのうえなく、デイック・ローマスもけっして大柄というわけではなかったが、彼女の横にいるとなんだか自分がやけに大きく感じられた。非常に均整のとれた躰つきで、見たことのないような小さな手、整った顔立ち、完璧な肌の色、軽やかで優雅な身のことなし、どれをとってみても惚れぼれしてしまい、とても生身の人間とは思えなかった。世俗の喧騒の中を生きていくには繊細上品すぎるのではないかと心配になるほどで、我々普通の人間を作っているのと同じ土塊^{つちぐれ}できているとはとうてい信じられなかった。ロココ時代のチャーミングな画家、ワトーの名作『シテール島への船出』に描かれた申し分なく雅^{みやび}やかな貴婦人たちに感じられる、少しば

かり人工的な優雅さを彼女は身につけていた。淡い色合いの繻子織サテンの服を着て、宮廷の気の利くデカダンな伊達男キツアライにかしずかれ、太陽の燦々さんさんと降りそそぐ浜辺をのんびり散歩でもしたら、さぞ似合ったことだろう。彼女に真面目な話題をもちかけるなんて、とんでもないことだった。気取った、軽い冗談を言い合うことこそふさわしく思われた。

クローリー夫人は、数年という条件で最近借りたばかりのコート・リーズ荘に、ルーシーとディック・ローマスを招待したのだった。借りてから一週間は、自分の好みに合うようにと、屋敷の内部をあれこれ一人で模様替えした。そして今、趣味の良さを褒めてもらおうと、ディックに、新装なった屋敷を案内しましょうと強く申し出ているところだった。彼の方は庭園を一廻りしてきたばかりだったので、くたくただからお茶の時間まで休まなくては、と譲らなかつた。

「ところで、またなぜここを借りる気になつたんですか。えらく辺鄙へんびな所じゃないですか。」

「この冬、ローマで持主もちぬしの方とお会ひしたの。クラドック夫人って方なんですけれど、わたしが家を探していると言うと、ここを見に来てはどうかとおっしゃってくれて。」

「何故自分で住まないのかな。」

「分らないわ。でも、どうやら、とつても愛していらつしやつた旦那様が、狩のとき馬から落ちて首の骨を折つたらしいの。それで、とてもここに住む気にはなれないらしいの。」

クローリー夫人は満足気に応接間を見渡した。最初見たときは、人の住んでいない家に特有の、もの寂しい、陰気な雰囲気があつたのだが、花を飾り、写真を掛け、銀の装飾品を置くことで、今ではすっかり明るい部屋に変わつていた。シェラトンの手になる家具、更紗チ木綿ツのカーテンは夫人の美感

を満足させた。彼女は、この心地よい部屋が自分によく似合うと感じていた。いま着ているこの服フロックもこの部屋の雰囲気によく合っているわ、わたしにぴったりなだけでなくて。

ディックはあちこちに散らかつた本をぼんやり眺めていた。

「ここに散らかつているこのすごい本は、いったい、教養を高めるため？ それとも、あなたが知的な人だということを私に痛感させてやろうという、なんともかたじけないお気持のためですか。」

「まさか、あなたのような軽薄な人にわたしの教養を分かつてもらおうと思うほど馬鹿だとは、いくらなんだつてお思いにならないでしょう？」

ディックの脇にあるテーブルには、ラ・レヴュ・デ・ドウ・モンド誌とザ・フォートナイトリー・リヴュー誌が置かれていた。彼は分厚い本を二冊手に取つてみた。一冊は当時英国で新しもの好きな人々によつて読まれ始めていた（そしてまもなく文学、哲学に携わる人々の間に一大センセーションを巻き起こすことになる）ニーチェの『悦ばしき知識』、もう一冊はクローリー夫人の同胞、ウィリアム・ジェイムズのものだった。

「あなた方アメリカの女性には驚かされますね。ドーセみたいな店で下着を買うかとおもえば、ハーバート・スペンサーを熱心に読むんですから。しかも、どうもスペンサーが好きらしい。イギリスの女がそんな真面目な本を読んだら、きつと自分のことを気取り屋だと感じるでしょうね。で、自分が気取り屋だと感じると、さつそくコルセットみたいな面倒なものは外したくなるらしい。」

「どうやらわたしにお世辞を言つてくださっているみたいですね。」クローリー夫人がやり返した。「あんまり難かしくつて、何だかよく分からないけれど。」

「本当に良いお世辞というのは、蝶々のようにひらひらと頭の周りを廻っているだけなんです。」
「わたしなら、昆虫採集のケースにしっかりと入れておきたいと思うわ。お腹にはピンを刺して、羽は薄いテープで留めて。」

十月だったが、今年は秋の来るのが遅く、木々の葉はほとんど緑のままだったし、日中は暖かだった。けれども、クロリー夫人は寒がり屋で、暖炉には火が入っていた。夫人はその中にもう一本薪を入れ、ばちばちと気持の良い音とともに燃え出すのを眺めていた。

「ルーシーを招待してくださいさつて本当にありがとう。」ディックが出し抜けに言った。

「なぜかよくは分からないの。でもあの人がとても好きなの。それにあの人ならきつとこの家に似合うんじゃないかと思つて。彼女、ちよつとゲインズボローの肖像画に出てきそうじゃなくつて？ このジョージ王朝風のお屋敷にあの人を置いてみたかつたの。」

「随分と昔のような気がしますね、あのアラトン家の土地が売り払われたのが。あの時のことはあの娘にとつて大変な悲しみだつた……。」

「競売で買ったものをここに持つてくるなんて、わたしも無神経ね。」

ハムリンズ・パールの家財がクリステイーに送られてきたとき、夫に先立たれたばかりで、新たな住居のことを思案していたクロリー夫人は、油絵を数枚と、骨董品の椅子を数脚競り落とした。夫人はそれをコート・リーズ荘に持ち込んでいたのだが、その品々がルーシーに新たな悲しみを与えるのではないかとところを痛めていたのである。

「多分ルーシーは気づいていませんよ。」

「莫迦おつしやい。もちろん気がついていませんとも。この部屋に入ったとたん、あのレイノルズの絵を見ていましたもの。」

「でも、見ず知らずの人に買い取られるよりは、あなたに買ってもらつてよかつたと、きつと思つていますよ。」

「あの人、なにも言わないの。ねえ、わたし、あの人のこととても気にいつているし、とてもえらいとも思うわ。でも、ちよつと控えめすぎなくつて？ もうちよつと素直に自分を出してくれたら、わたしたち、もつと仲良くなれると思ふの。わたし、あなた方の、いわゆるイギリス的性格に死ぬまで馴染めそうもないわ。あなた方つて、わたしの胸を同情の気持でいつぱいにしておいて、次の瞬間にはそれに蓋をしてしまふ。そうして、その蓋の上にとつかり坐りこんでしまふんですもの。」

「まあ、坐つて休むんなら、肘掛椅子のほうがずつと楽でしょうな。」

「わたし、できたら買ったものをみんなルーシーに返してあげたいと思ふの。でも、きつとすげなく断られるのが落ちよね。」

「恩知らずつてわけじゃないんです。ただ、ルーシーはとても辛い生活を送つてきて、それがあの娘の性格に影響を与えた。あの娘がこの十年どんな経験をしてきたかは誰にも想像できないと思ひますよ。十五の時から一家の責任を何から何まで背負つていたんですから。アラトン家がつと早く潰れずにすんだのは、あの娘のおかげなんです。かわいそうに、あの娘には青春つてものがなかつた。子供からいきなり大人になつてしまつたんです。」

「でも、恋人は何人かいたんでしょう？」

「あの娘を口説くのはかなり大変だと思いますよ。甘ったるくて意味のない愛の言葉をあの娘の耳元で囁くなんて、よっぽど度胸のある男でないとできやしません。そんなことしたら、自分がえらく馬鹿に見えるだけだから。」

「でもとにかく、少なくともボビー・ボールガーがいるわ。あの人、何十回もルーシーにプロポーズしたそうじゃない。」

サー・ロバート・ボールガーは、製造業者の父親の跡を継ぎ、父親同様、準男爵の称号を授かる。すぐに、ルーシーの前に自らの富を差し出し、自らの人間としての長所を数え上げ、結婚を迫った。彼のルーシーに対する献身的愛情は、友人の間では周知のことだった。彼らは皆ボビーから、この情熱が永遠に不滅であることの厳かな宣言を、耳に聃胼がでるくらい聞かされていたが、ルーシーはこの宣言を、落ち着いたユーモアをもって、優しく笑って受け流していた。ケルシー夫人にとってはロバートは甥、ルーシーは姪にあたり、夫人はこの二人を一緒にしようと思えるだけのことをしてきた。どの点から見てもこの二人の結婚が望ましいことは明らかだったからである。ロバートは見た目も悪くないし、財産は相当なものであり、礼儀作法もしっかり身につけている。気立ての良い、気持の好い青年で、性格の強さはあまり持ち合わせていないかもしれないが、その点ならルーシーが二人分持っているから大丈夫だ。彼女がすっかり彼の手綱を握っていてくれれば、ロバートにだって将来ひとかどの人物になるだけの頭は充分ある、夫人はそう考えていた。

「わたし、ルーシーのお父さまにお目にかかったことはありませんが、」と、しばらくしてクロリー夫人が言った。「きつと、ひどい人なんでしょうね。」

「とんでもない。まったく逆です。あんなに魅力的な人にこれまで会ったことありませんね。あの人に百ポンド貸したとします。すると、何だかこちらの方があの人から恩を受けているような気になる。そんな人、ロンドン中探したついでにないと思えますよ。あなたもあの人に会ってみるといい。話があるあなたの得意な、ええと、何でしたっけ、そうそう、複本位制の話題に移る前に、きつと、あの人にぞつこん、てことになってますな。」

「複本位制のことなんか、わたし、お話ししたことなくつてよ。」クロリー夫人が抗議した。

「女性はみんなそうです。」

「なにが？」

「あの人にぞつこんまいってしまう。女性にどんな話をすればいいのか、よく分かっている。おまけに声に素晴らしく説得力があるときている。ケルシー夫人はこの二十五年間、一瞬だつてあの人のことを忘れたことはないと思いますよ。亡くなった人の姉妹と結婚してもいいという法案が未だ我が国会を通過していなくてよかつた。さもないや、あの人はケルシー夫人と結婚して、夫人のお金をすつかり使ってしまったでしょう。亡くなった奥さんのお金と同じようにね。いまでも非常にハンサムで、誠実さが躰中からにじみ出ている。あの人の魅力にはあなたも逆らえないでしょうな。」

「それで、あのひどい出来事のあと、どうなさっているの？」

「破産宣告を受けたままで未だ責任を免除されていない人の立場というのは、なかなか厄介でしてね。ただ、私の知り合いに、そんな立場にいながら、このごろ流行りの自動車とやらは乗り廻すわ、カールトンで夕食はとるわ、まあ派手にやっついて、それでいながら一般世間とはまったく波風立てずに

暮らしている人も数人いるにはいますがね。しかしフレッド・アラトン氏の場合、破産管財人とのやりとりが大分こたえたようで、今ではすっかり以前の自信を失なくしています。子供たちを巻き込まないですんだことは不幸中の幸いと言っていました。それにケルシー夫人も喜んで子供たちの面倒を見てくれていきますから。この二年間アラトン氏がどんな暮らしをしていたのか、よく判りません。ただ、相変わらずいろいろと馬鹿げた事業に首を突っ込んでいるらしく、私のところへも何回か、事業に投資してみないかと来たことがあります。」

「まさか、お金を出すような馬鹿なこと、なさらなかったでしょうね。」

「もちろん。自慢じゃありませんが、私という人間の中では、人の良さと淡泊さが絶妙のバランスで同居しているんです。で、結局いつも、しばらく話を聞かせてもらった後五ポンドほど渡すと、満足してお帰りになるんです。しかし残念ながら、事態はますます悪くなっているようで、この頃では、昔のあの活潑さは影を潜め、外見もそうですが、性格も少々だらしなくなっているようです。どことなく人目を気にしているようなところがあって、あまりガラス張りにしたくないようなことでも企たくらんでいるんじゃないかという感じがするんです。なんと言うか、いつも辺りをうかがっているようで、一緒にいるとどうも気まずいんです。」

「まさか、人に言えないような悪いことをしようとしているんじゃないでしょうね。」

「いや、決してそんなことはないと思います。あの人は法律にひっかかるような、いわゆる危ない橋を渡るような神経は持ちあわせていない。まあいろんなことはありましたが、実際、根は正直な人だと思います。ただ、誰も見ていないときだけ、ちよつと心配かな。面と向かっているときには、あの

魅力には敵かたわない。あれこれ悪いことを聞いていますが、とても信じる気になれない。」

そのとき、こちらの方に歩いてくるルーシーの姿が見えた。ディック・ローマスは立ち上がってフランス窓に寄ったが、クロリー夫人はじつと椅子に坐ったままルーシーを見ていた。二人とも無言だった。やがてクロリー夫人の口許くちもとに同情の笑みが浮んだ。なんて多くのことをこの人は経験してきたのだろう。何か漠然とした記憶がよみがえり、さてなんだったかしら、と夫人はちよつと考えた。すぐに、脳裏を行きつ戻りつしていたものに思い当たった。そうだわ。夫人ははつきりと思い出した。それはミルバンクのジョン・ファーズが描いた『高地に立つダイアナ』という絵で、夫人はこの絵の前に立ついつも喜びを覚えたものだ。その美しさ、画家の力強い筆使いもさることながら、彼女の目には、この絵の中に、いわばイギリス人魂のすべてが描かれているように思えたからである。自身アメリカ人だったので、夫人は、いわゆるイギリス人気質といったものを観察することに興味を持っていた。また、広く系統だった読書をしていたから、比較し分析する力もあつた。この肖像画には、二匹の猟犬を連れた若い女が風の吹く北の原野ムアに立っている姿が描かれている。風のためにスカートが女の躰にまといつき、しなやかな姿態の輪郭を浮かび上がらせている。クロリー夫人には、この絵がまさしく十八世紀イギリス絵画の伝統に沿ったもののように思われた。ちようどレイノルズやゲインズボローが、髪には粉を振りつけ、ウエスト・ラインの高いドレスを身につけた優雅な貴婦人たちを、森の緑豊かな樹々の下に描いたとき、知らず知らずのうちに「理性の時代」のイギリス——品が良く、美しく、人工的で、少しばかり息が詰まるイギリスを表現していたように、ファーズはこの絵の中に今日こんにちのイギリスを表現していると感じるからだ。それは、肉体であれ精神であれ、な

により清潔を重んじるイギリスであり、また、戸外での活動を愛し、荒涼とした自然にも、激しく人間に襲いかかる自然にも怯えることのないイギリスである。クロリー夫人は長く祖先の国で暮らしてきたので、これこそ本当のイギリスだと思った。単純で正直なイギリス。ちよつと偏狭、偏屈だが、力強く、勇敢で、大きな理想を抱いているイギリス。あの高地に立ち、なにも包み隠すことのない青い眼で何物かを見つめている女は、間違いなくサー・ジョシユアが描いた貴婦人たちの末裔なのだ。ただしこの人は毎朝お風呂に入るし、犬を可愛がり、スカートは短めの動きやすいものを穿く。クロリー夫人はこころの中で微笑んだ、——エマソンの作品はたいいてい自分にとって退屈だし、イギリス文学についてもまだまだ勉強不足だ。でも、さしあたりこの点は大目に見てもいいだろう。というのも自分は今、このイギリスの性格と、その性格が生み出すイギリスの典型と言えるものを、すべて素直に認め、良いものだと考えているのだから。

ルーシーが部屋に入ってきた。クロリー夫人はお帰りなさいというふうにながら、いま空想していることがとても気に入っていたので、それを中断する気にはならなかった。夫人は、ルーシーが『高地に立つダイアナ』と同じ率直な眼差し、繊細で感受性豊かな表情を持つていると思った。その表情は、たしかに何世紀にもわたる育ちの良さが生み出した洗練されたものではあるけれど、決して弱々しいものではなく、生気にあふれ、日々の生活が活動的なものであることを示している。肌の色艶もとても良かった。あらゆる天候に晒されてきたためだろう、独特の清々しさがあつた。散歩の後で明るい金髪が少し乱れていたの、ルーシーは鏡の前に行き、それを整えはじめた。クロリー夫人は、彼女のまつすぐな鼻筋、美妙的な曲線を描く唇をほればれと見ていた。ルーシーは長身で、引き

締まった躰つきをしており、また、そのうっとりするようなしなやかさには、乗馬でもやったらさぞ上手だろうと思わせるものがあつた。

しかしなによりクロリー夫人のこころを強く打つたのは、ルーシーが、この年齢の女性としては考えられないような辛い経験をしてきたにもかかわらず、全くと言っていいほどそれが表情に現れていないことだつた。余程鋭い観察力の持主でなければ、それをルーシーの表情のなかに認めることはできないだろう。ルーシーを知らない人は、その明るい笑顔、優しい、共感あふれる眼差しに、ただ嬉しくなるだけだろう。彼女が若い娘というよりは、はるかに大人の女であることは、これまでで嘗てきた辛酸を知つて初めて分かるのだ。あの落ち着きは、長い長い間アラトン家の責任の一切を背負ってきたところからくるのだ。そしてあの慎み深さ——魅力的な物腰の陰になつていて、本当に親しい友人でなければ分からない慎み深さは、友人でもその殻を破ることはできないのだ。クロリー夫人も何度か、アメリカ人によく見られる衝動に駆られて、その殻を破ってみようとしたことがある。(もちろん生まれつきの優しい気持からそうしたのでが。)しかし上手くいったことは一遍もなかった。身悶えするような足掻き、やり場のない不満、深い悲しみ、そして突然襲ってくる絶望と熱い期待、嵐のような怒り、そうしたものはすべてこころの奥深くで起こっていた。もしもルーシーがこうしたものを人に知られるのを想像でもしたなら、裸でいるところを見られたときのよう^{うろた}に狼狽えたことだろう。誇りと羞恥心が混じり合い、ルーシーはこころのもつとも深いところにある感情を決して人に見せようとしなかった。誰にも憐れみや同情の言葉をかける機会を与えてくれなかった。「ねえ、お茶の仕度をするようにと、ベルを鳴らしてくださいませんか？」ルーシーが鏡から離れるのを

見てクローリー夫人が言った。「ローマスさまも、なにか知性を刺激してくれるようなものを召し上がらないと、おもしろいことを言ってくれそうにありませんし。」

「お送りしたお茶、お気に召しましたかな。」

「ええ、とつても。でも、ちよつとひどいじゃありません、あの量じゃ、ちよつどあなたがここにいらつしやるあいだし保ちそうにありませんわ。」

「田舎のお宅にお邪魔させていただくときは、いつも前もつてお茶をお送りすることになっているんです。実際、あれが世界で唯一最高のお茶なんです。あれを見つけるために、親父に七年間も中国に行つてもらいましたよ。親父の人生もまんざら無駄じゃなかった。そうお思いでしょ。」

お茶が運ばれ、すべては滞りなく進んでいった。クローリー夫人はルーシーに弟の様子を尋ねた。ジョージがオックスフォードに行つてから二年が経っていた。

「きのう弟から手紙がありました。とてもうまくやっているようです。来年には学位が取れると思います。」

弟のことを話すと、ルーシーの眼は幸せそうに輝いた。そして、自分の口調があまりに熱を帯びていたことに気づき、顔を赤らめて謝った。

「そのう、ジョージが十のときからあの子の面倒を見てきたのです。ですから母親のような気がするのです。本当はこんなこと申し上げるべきではないのですが、あの子がどんなふうはしかに麻疹をのりこえたか、どんなに我慢強く予防注射を受けたことか……。」

ルーシーは弟をとつても自慢にしていた。勇前だったし、素直な、とても好い笑顔をしている。いま自分ののしかかっている様々な苦勞をジョージには絶対見せまい、あの子がいま世界に対して感じている若者らしい満足感をできるかぎり持ち続けさせるのだ、と自分に言いきかせていた。弟が自分に頼りがちなのはよく分かつていた。あの子があまえるのは自分が甘いからだ、と自らをたしなめることも時々あつたが、あまえてくれるとき感じるあの素晴らしい喜びを抑えることはなかなかできなかった。ジョージはまだ若いのだ。そのうちには成長して男らしくなってくれるだろう。たとえ今自分に頼りきつていても、たいした問題ではない。ルーシーは、弟が自分を熱烈に愛してくれていると考えると嬉しかった。口には出さないが、自分を信じて、自分の判断を完全に信頼してくれていると思うと、いけないとは分かつていても、誇らしさで胸がいっぱいになった。この誇らしさがあればこそ、氣持を強くもつて、人生のいろいろな困難に立ち向かうことができるのだ。ルーシーのころは現在よりも未来にあつたので、ジョージが友達みんなから愛されていることが嬉しかった。誰もが喜んであの子のことを考えてくれる。弟のために描いてきた将来にとつて、このことは好い前兆のように思われる。

いまルーシーは、最後に弟に会つた時のことを思い出していた。二人は夏の一時期をテムズ川沿いにあるケルシー夫人の小別荘コテージで過すごしていたのだが、ジョージには近々友人とスコットランドに出かける予定があり、一方ルーシーは別のところへその日の午後出発することになっていた。弟が駅まで見送りに来てくれた。自分にとつても弟と別れるのは辛いことだったが、ジョージが明らかに感極まつた表情をしているのを見て、ルーシーは強くこころを動かされた。プラットホームで別れのキスをしたが、ジョージは眼に涙をうかべていた。列車がロンドンへ向かつて速度を上げたとき、手を

振っている弟の姿が見えた。ほっそりしていて、ハンサムで、白の夏服を着ているせいか、いつも以上に子供っぽく見える。ルーシーはそのとき突然、感謝とでもいうほかない気持ちに襲われた。この歎き悲しみの中にあっても、自分には少なくとも弟がいるのだ。

「弟は射撃は上手だと思います。」クローリー夫人から紅茶の入ったカップを受けとりながらルーシーが言ったが、話に脈絡のないことには気づいていなかった。「そういう家系ですもの。」

「いや、たいした家系です。」とディックが少し皮肉っぽく言った。「どうせ上手なら、足し算、引き算が上手なことを願ったほうが賢明というものかもしれませんね。」

「弟は数学も得意だと思いますわ。」

ジョージは将来、ケルシー夫人が大株主である商社に入れてもらうことになっていた。ルーシーは弟がお金をたくさん稼いでくれることを願っていた。そうすれば父の借金を返し、もしかしたら、長い間アラトン家のものであった館を買い戻せるかもしれない。

「弟には賢い商人になってほしいと願っています。だって、いま弟にひらかれた道はそれしかないんですから。……それにスポーツマンとしても最高に。」

自分の大きな望みを人に述べるのは恥ずかしくてできなかったが、ルーシーのころの中にはすでに、弟が将来やらなければならぬ、いや、やってくれるにちがいない仕事の輝かしい未来像が描かれていた。アラトン家には生まれつき人生のより高貴なものに向かおうという性向があつて、弟の人生もきつとそうしたもので美しく彩られるだろう。ルーシーは、弟がフィレンツェのあの豪商たちのような生き方をする人間になってくれることを夢見ていた。メディチ家を代表とするフィレンツェの

豪商たちは、自由で進歩的な人生観を持つことで、商業が崇高なものとなりえることを証明し、後の世代の者たちに一つの理想を残してくれた。弟も、彼らのように、商売においては譲歩することなく富を蓄え——現在では富が力を得るためのもつとも確実な手段であることがルーシーにはよく分かっていた——また一方で、音楽、美術、文学を愛し、精神的なものをこころから慈しみ、同時に、戸外でのスポーツすべてに秀でた人間になってくれるものと信じていた。そのとき、人生はこれ以上望みようのないほど充実したものとなるだろう。そして、こうしたものが交じり合いながら人生を豊かに彩り、弟は美と威光に包まれた生涯を送ることになるだろう。

「自分が男だったらなってると思います。」明るく微笑みながらルーシーが叫ぶように言った。「辛いです、家にじっとしていて、他の人を励ますことしかできないなんて。もつといるんことを自分の手でやってみよう。」

クローリー夫人は背を椅子に凭せかけ、自分の姿がもつと優雅に見えるようにと、ちよつとスカートひだの襷たもとのぐあいを直した。

「わたしは、自分が女でよかったと思っと思っていますわ。」夫人はつぶやくように言った。「男性と同じ権利が欲しいなんてちつとも思いません。だって、わたし、男が女より強いことは喜んで認めますもの。男の人は、気高くて、勇ましくて、献身的であつてほしいと思います。そうすればこの厄介な世の中からわたしを守ってくださいるでしょうし、わたしの世話を焼いて、わたしのためにいろいろなことをしてくださいるでしょ。どんなに無理なことを申し上げても——わたし、無責任な人間ですから——面倒がらずにやってくださいる。また莫迦なことを言っている、可愛い奴めっておっしゃりながら。ど

んなに困らせても、ちよつとヒステリックなだけさ、と決してお怒りになるはずがない。ああ、ほんとうに、わたし、莫迦な、かわい女でいたいと思いますわ。」

「いや、まいった。恐るべき犬儒家、皮肉屋さんですな。」ディックが叫んだ。「本当はありもしないかわさを、昔の海賊みたいに残忍にご利用なさっているくせに。あなたの無邪気さは、こめかみに突きつけられたピストルのようなものですよ。金か、しからずんば命かって叫びながらね。」

「あら、でも、ローマスさま、あなた、いつも随分と満足そうでいらつしやつてよ。」と夫人はやり返した。「もしもわたしが今、足置きフットスツールの位置を直してくださらないとお願いしたら、あなた、お気を悪くなさつて？」

「おおいに気を悪くしますね。」彼は微笑んだ。が、動こうとはしなかった。

「ねえ、おねがい。」ほのかに哀れを誘うような表情で夫人は言った。「なにか落ち着かないの。足の感覚がなくなつてしまひそう。それに、そんなに冷たくなさらくともよろしいんじゃないんじやなくて？」

「本気でおつしやっているとはいけませんでした。」彼は素直に立ちあがつて、夫人に言われるがままに足置きフットスツールの位置を調整した。

「うそよ。」彼が終えるのを待つて夫人は言った。「あなたつて、本当にめんどくさがり屋さんですよ。だからちよつと試してみたかったの、わたしが冗談よつて申し上げる前にあなたが動いてくださるかどうか。わたしつて、ほんとうに女らしい女じゃなくつて？」

「アレック・マッケンジーにも同じことをなさいますかな。」笑いながらディックが気さくに尋ねた。

「とんでもない。絶対しませんわ。まだ気づいていらつしやらないの？ 女は本能的に、どの殿方とのがたはからかつて差しつかえないか分かるんです。だからそうした方々にだけ、とつておきの手管てくだを使うんです。女が自分のもてる力を十二分に發揮するためには、たくましい常識さえあればことたりんです。それさえあれば、男性というお城を攻めることくらいできますわ。ただ、攻める前にすでに半分は落ちていようなものですけれど。」

「あなたのお話をうかがっていると、なんだか女性はみんなポテパルの奥方のように、男を誘惑するために生きてるみたいに思えてきますな。勿論、男がみんなヨセフみたいに志操堅固というわけにもいきませんが。」

「おつしやつていふこと、あんまりにも明け透けで、気が利いているとはとても申し上げられませんけれど、」クローリー夫人がやり返した。「真実を突いていない、とも言いませんわね。」

ルーシーは笑いながら、二人のたわいもないやりとりを聞いていた。二人といると現実感がすつかりなくなつていった。クローリー夫人は見た目はとても弱々しかったし、ディックは滑稽なくらい陽気だったから、ふたりを現実の人間と見なすことができなような気がした。自分のほうが二人より大人で、なんだか子供っぽい遊びのお手伝いでもしているような気持だった。そこではテニスの大一番におけるラリーよろしく、途方もない考えがやりとりされていた。

「あなた方お二人のように話題がどんどん横道に逸それてゆく方、見たことありませんわ。」ルーシーが少し抗議するように言った。「いったい、マッケンジー氏がジュリアさんのために足置きフットスツールを調整してくださるかどうかと、女性の身持ちが悪いのと、どんな関係がありますの。」

「まあ、そんなに厳格にならなくても。」クローリー夫人が言った。「あの方が到着する前に、私の軽薄さをぜーんぶ出しておかないといけないの。そうすれば、今度は女王様のように威厳をもってお話できるでしょ。」

「アレックはいつ来るんですか。」ディックが尋ねた。

「もうすぐ、今この瞬間にも。あの方のために駅に馬車を差し向けたわ。ねえ、ディック、わたし、あの方とお話ししていると憂鬱な気分になることが多いの。そうならないように協力してくださいね。」

「それならなぜ招待なさったりするんです？」ルーシーが笑いながら訊いた。

「でも、わたし、あの方が好きなの——少なくとも好きだと思っはいますわ——なんと言っても、本当に偉い方だし、きっと自分のためになると思うの。それに、このローマスさまが招待してほしいとおっしゃいましたから。あの方、ブリッジはとってもお上手なのよ。ほんとうに、わたし、あの方に興味津々。でも、一つだけ好きになれないことがありますの。わたしが気の利いたことを言っても笑ってくださらないし、馬鹿なことを言ったときには居心地の悪そうなお顔になる。」

「よかった。私はあなたが気の利いたことをおっしゃったときには笑いますからね。」

「嘘おっしゃい。あなたが心から大笑いなさるの、ご自分の冗談に対してでしょう。ですから、ときどき、わたし、あなたが冗談を言い終わらないうちに、急いで自分の冗談を挟ませていただくことにしていますの。そうすれば、あなたがわたしの冗談に笑ってくださったような気になれますもの。」

「で、ルーシーさん、あなたのアレック・マッケンジーについてのご意見は？」

彼女は少し躊躇ためらっていた。

「よく分かりません。どちらかという嫌いだと思うことときどきありますし。でも、ジュリアさんと同じで、本当に偉い方だとは思っています。」

「ともかく、まあ驚くべき人間ではありませんね。」とディックが言った。「近づき難いところがあるし、人の気取った態度には明らかに我慢できないようだし。どこか気難しいところがあって、親しく付き合っている者でないと、一緒にいて気話まりするでしょうな。」

「あなたの一番のお友達でいらつしやるんでしょう？」

「ええ。」

ディックはちよつと間まを置いた。

「もう二十年の付き合いですからね。ともかく私が知っている中では最高の男です。あいつの友人であることは、この上なく光栄なことだと思っはいます。」

「知りませんでしたわ、そんな特別な畏敬の念をあの方にお持ちだったとは。」クローリー夫人が言った。

「いや、困ったなあ！」ディックが叫んだ。「すごい男だとは思っはいますが、一緒のときはあいつのことをただ笑っはいるだけなんですよ。」

「それをあの方は、他の人にはお見せにならない愛想の良さで耐えていらつしやるというわけね。」

「あいつとどうやって知り合っはったか、お話ししましたっけ？ 水深およそ五十尋ひら、陸を離れること少

なくとも千哩マイルのところでした。」

「初対面の場所としてはずいぶん不便なところね。」

「二人ともずぶ濡れでしたよ。当時は私も若僧でして、馬鹿なことをよくしました。オックスフォードへ進学が決まっていたんですが、かたじけなくも親父が、私を一回り大きな人間にしてやろうと、アメリカへ旅に出してくれたんです。で、その船の上から落っこちましてね。溺死への道をまっしぐら。そのときアレックが私の後から飛び込んで、髪の毛を掴んで引っ張り上げてくれたんです。」

「今しようと思っても、ちよっと難しいでしょうね。」デイククの薄くなった髪をちらっと見てクローリー夫人が言った。

「で、おかしなことに、あいつ、助ける機会を与えてくれたというんで、馬鹿みたいに私に感謝したんです。どうも、ただあいつに引っ張り上げさせるため——そのために私がわざとサービスして大西洋に落っこちたと考えているようでした。」

デイククがそう言い終わらないうちに、馬車がコート・リーズ荘の玄関先に近づいてくる音が聞こえた。

「さあ、来ましたよ。」デイククが待つてましたとばかり叫んだ。

クローリー夫人の執事がドアを開け、いま話題になつてゐる男の到着を告げた。アレグザンダー・マッケンジーが入ってきた。

身長は六フィート弱、痩せて、均整のとれた躰つきをしている。一目見ただけではとりたてて力強い印象は受けないが、手足はがっしりしていて、贅肉はなく、すぐに強い忍耐力の持主だということ

に気づく。髪は黒く、非常に短く刈られている。赤毛の、これも短い口髭と顎髭髭をたくわえていて、それが、えらの張つた顎の線、意志強固な唇の線を隠している。眼は大きくないが、いったん注意を引いたものは執拗に見つめ続ける眼だ。話すときにはきよるきよるすることなく、まっすぐにこちらを見る。そのじつと固定された視線には何か意図的なものが感じられ、見つめられた者を当惑させる。歩き方は大股、かつ軽やかで、毎日何マイルも歩くことを習慣としてきた男のものだ。また、その立居振舞たちまひに感じられる自信から、彼が命令することに慣れた男であることが判る。肌は熱帯地方の太陽に焼かれ、赤銅色だ。

クローリー夫人とデイククは気楽にたわいもないおしゃべりに興じることのできる人間だったが、彼にそうした才能がないのは明らかで、おきまりの挨拶がすむと黙りこんでしまった。お茶もいらな
いと云つた。しかしクローリー夫人はかまわずカップに一杯そそぐと、それを手渡した。

「お飲みくださらなくてけっこうよ。でも、ぜひ手に持っていてくださいね。なんでもすぐにいらな
いっておっしゃる方は大嫌い。わが家ではお坊さんのような禁欲生活は許しておりませんの。」

アレックは微笑んだが、いかにも真面目な笑みだった。

「もちろん、それで気がお済みになるのなら喜んで飲ませていただきますよ。アフリカにいたとき
一日二食で済ます習慣が身につけてしまつて、今となつてはそこから抜け出せないのです。しかし、
どうやら、私の友人たちにとつては、これがいろいろと差しつかえるらしい。」彼はローマスを見た。
口許に笑みはなかったが、眼はかすかに笑っている。半分は愛情のこもつた、半分は面白がついてい
るような表情だった。「デイククは、もちろん食べ過ぎですが。」

「とんでもない。私こそロンドンに残されたほとんど唯一、完璧に正常な人間ですよ。毎日三度々々規則的に十分な食事をとり、おまけにいつも心ゆくまでお茶を楽しんでいます。病気になんか罹りません。健康そのもの。好き嫌いはないし、それに、栗鼠が木の実を齧ったり、鳥が葡萄をつつくような、そんなみみっちい食べ方はしません。ペプシンの、プロテインの、なんだかんだ訳の解らない言葉なんかまったく気にしませんね。肉食主義者？ とんでもない。肉食動物ですよ。喉が渴けば飲みますよ。それも、絶対、アルコールの入ったやつの方がいい。」

「わたし、きょう昼食のとき考えていましたの、」とクローリー夫人が言った。「ビールをお飲みになりながらロースト・ビーフを召し上がっていらっしやるときの、あなたのうれしそうな顔と言ったら、本当に野蛮で冷酷だわって。」

「美味しい食事、——なんと言われようが、私は大好きです。人生の他のすべての素晴らしいもの同様、心から愛しています。それに、美味しい食事を楽しむ才能があるからこそ、私は平常心をもって未来を見ることができるとです。」

「なぜ？」とアレックが訊いた。

「うまい食事を楽しむこと、唯一これが、人間、歳を取ったときに残されるものだからさ。…愛情？ 五十半ばを過ぎて、みっともない禿げ頭を隠しようもなくなったとき、愛が何だというのだね。野心？ 畢竟名誉は尊大な奴のところへ行き、栄光は俗悪な奴のところへ行くと判ってしまったとき、野心がなんだというのだね。結局我々はみんな歳を取らなくちゃならない。歳を取れば、どんな情熱も虚しく見える。どんなに強い望みでも苦勞してまで叶えるだけの価値はないと思うようになる。し

かし、そのときでも、人間、食欲だけは充分残っている。朝、昼、晩と毎日三度々々の喜びだけは残るだろう。」

アレックは何も言わずにディックを見つめていた。ディックをただ面白いから無意味なことを喋りまくる軽薄な少年と見なす習慣からまったく抜け出していなかった。いまアレックは、セント・バーナード犬が自分の仕掛けた罠の下をトイ・テリア犬が通り過ぎるとき見せるような、楽しそうでいて、軽蔑したような表情を浮かべている。

「頼むから何か言ってくれないか。」少し苛々しながらディックが叫んだ。

「僕が反論するようにと君はそんなことを言っているんだらう。なぜ反論しなくちゃいけないのかな。君の言っていることはまったく間違っている。一つとして同意できることはない。しかし、意味のないことを言うのが君にとって楽しいのなら、そうしてはいけない理由もないだらう。」

「なあ、アレック、君との会話はまるで中世の決闘だ。せめて鎧兜をはずしてくれたらと思うよ。鍛冶屋の使うような大槌で達磨落しの遊びをやるのはえらく難しいんだ。」

ルーシーは椅子に腰掛け、黙って、この新たに到着した男を観察していた。アレックがモンバサカら帰るとすぐに、ディックはクローリー夫人とルーシーを昼食に招待して彼に会わせたのだった。あれは二ヶ月前のことだった。それ以来ルーシーはアレックに何度か会ったが、最初に会ったとき以上に彼のことを解ったとは思えず、いったい自分がこの男を好きなのかどうか決めかねていた。だから、彼が自分たちとともにコート・リーズ荘に滞在することになって内心喜んでいた。これでこの人を本当に知る機会が持てるだらう。多少厄介でも、知るに値する人間であることに疑問の余地はないのだ。

暖炉の炎が彼の顔に薄気味悪い光と影を映し、その表情はいっそう尊大で毅然として見えた。わたしに見られていることをこの人は意識していない。自分が人々の間に呼び起こす注目には全く無関心な人なのだ。

ルーシーはアレックに、これまで彼がしてきたこと、携わってきたことを自ら語らせてみたいと思つた。彼女自身いつも苦勞とか努力といったものを占められているので、彼のこれまでの経歴には並々ならぬ興味を覚えるのだ。加えて、そこには或る謎めいたものもあった。というのは、彼に関するルーシーの知識には欠けている部分があつて、それは本人以外の誰にも埋められないように思われるからだ。アレックはロンドンに知り合いをほとんど持つていなかったが、なにやかやで多くの人が彼のことを知っていた。そして彼と接触があつた人々の見解は皆一致していた、——アレックは他の誰も知らないアフリカを知っている。彼はこの十五年の間にアフリカのそれこそあらゆるところへ出かけ、それまで白人が足を踏み入れたことのない地域を踏破していた。しかし彼はそうした経験について本にまとめるようなことは何もしていない。一つには自分の行なつたことを記録に留めることへの無関心、一つには生来の秘密主義のためだった。自分の行為を逐一語ることを彼は好まなかつた。アレックにあつては自制心というのは深く根づいた本能のようなもので、自分の発見したものを此見よがしに発表することは決してしなかつた。彼の業績は、それゆえ一般大衆にはあまり知られていなかったが、しかし専門家の間では高く評価されていた。彼は一度だけ英国地理学会で論文を読み上げたことがある。(ただし、そうするよう説き伏せるにはかなりの圧力が必要だった。)この論文は大きな関心を引き起こした。そして、時たまではあるが、彼からの手紙がネイチャー誌や民族学

の出版物に掲載されることがあつたが、そうした手紙の中でアレックは、自分のした何らかの発見、あるいは記録に留めておく必要があると考へた観察結果を簡潔に述べていた。時折外務省から、彼の知っている国々に関係することについて、情報、意見を求められることもあつた。そうしたとき、彼の知識、洞察力は政治家や官僚からそれ以上ないほど高く評価された、——そうルーシーは聞いていた。

彼女はアレック・マッケンジーの経歴について自分の知っている事実をまとめてみた。

彼はかなりの資産家だった。スコットランドの旧家に属し、ハイランドに素晴らしい領地を持っていたが、主な収入源はランカシャーにある炭坑だった。幼い頃に両親を亡くし、成人するまでの間に家の資産は大幅に増やしていた。伯父からアメリカ西部の牧場を遺産として貰い、そこを見たくなくて、イートン校卒業後オックスフォードに入学するまでの間を利用して、生まれて初めての船旅に出た。リチャード・ローマスと知り合つたのはその時で、以来アレックにとつてもっとも親しい友人だった。二人がまったく似ていないことが、ひよつとすると、この友情の絆を強めたのかもしれない。一方の持つ激しい情熱が、もう一方の持つにぎやかな陽気さの中に、ほつとするような安心感を見いだしたのだろう。オックスフォードを卒業するとすぐに、マッケンジーは狩のためアルジェリアへ短期間出かけたのだが、そこで広大な大陸の神秘に捉えられた。ときに、人は、まったく新しいところへ行き、なぜか異様なほど親しみの持てる場所、いつかここに来たことがある、と殆ど確信に近い感情を覚える場所に出会うことがある。アレックは突然、アフリカの限らない広がりの中で自分が寛いでいることに気がついた。目の前に広がる砂漠を見ていると不思議にこころが浮きたち、これまでは自分の中

にあると思ひもしなかつた可能性を意識した。彼は自分を野心的な男だと思つたことはなかつた。が、いま、野心が彼を捉えた。自分が詩的な感情に動かされる男だと思つたことはなかつた。が、いま突然、冒険に富んだ人生という詩的感情が彼の中に湧きあがつた。彼はスコットランド人独特の常識で、ロマンズなどというものは軽蔑の念をもつて見ていたが、いま、まるで未知の海、神秘の海の波濤が次から次へと押し寄せてくるように、ロマンチックなものに対する欲求が抗いがたく彼を襲つた。

英国へ戻つても、ここは奇妙に落ち着かなかつた。仲間はずの獲物を自慢しあつていたが、彼はそうしたことに關心が持てず、自分が狭いところに押し込められ閉じ込められているように感じた。都会の空気が彼にとつては息苦しかつた。

彼はアフリカ探険の驚嘆すべき記録を読み始め、ページごとに見れる妖しい魅力に血が疼くのを覚えた。最初は、彼と同じスコットランド人、マンゴー・パークだつた。パークの目的はニジェル河の源流をつきとめること、そしてこの河沿いに海まで下ることだつた。パークは自分の人生をしつかりと自分の手中に収め、危険な天候、野蛮な異教徒、妬み深い回教徒に勇敢に立ち向かい、まずはこの大河の源流域に辿り着いた。二度目の遠征では、この河沿いに海まで下ることを企てた。一行のうち、ある者は病に倒れ、ある者は原住民に殺害され、誰一人生き残つた者はいなかつた。唯一マンゴー・パークの軌跡をたどることのできるものは、後にイギリス人探険家によつて原住民の酋長の小屋で見られ、パークの所持品だつたと判明した一冊の分厚いノートだけである。

次にアレック・マッケンジーは、十九世紀の野心的な探険家たちによつて大きな目標だつたティンブクトウを目指す数々の努力の物語を読んだ。そこは、かつて黄金の国エル・ドラードとその都市モアがエリザベス女王の時代の探険家たちの魂を奪つたように、彼ら十九世紀の探険家たちの魂を奪つていた。ティンブクトウは強力な豊かな国の首都と考へられていた。探険家たちの熱い思いの中には、一旦そこに至りさえすれば、数々の驚嘆すべきものが彼らを待ちうけているはずだつた。しかし彼らを駆りたてていたものは決して黄金を求めぬ気持ではなく、むしろ、抗いがたい好奇心、己の勇氣に対する誇りだつた。次々と必死の試みがなされ、ついにもう一人のスコットランド人、アレグザンダー・ゴードン・ライングによつてティンブクトウは発見された。彼の成功は、まさに、この世における人間の努力と、それが報われたときの——たとえどんなに素晴らしい結果を得ようとも——虚しさを象徴していたと言える。というのは、探険家たちの夢の中で黄金の都市だつたものは、一貧村にすぎなかつたからである。

一人、また一人と、アレックは偉大な男たちの生涯を研究していった。そして発見したことは、偉大な上にも偉大な探険家は、大きな軍隊を自らの背後に引き連れるのではなく、限られた人数、ときにはただ一人の従者も連れずに未知の世界に出かけて行くということ、そして、成功するかどうかは、武器の力によるのではなく、己の性格の力によるということだつた。将校としてイベリア戦争を戦い、ヨーロッパ人として初めてサハラ砂漠を縦断したダーラム少佐がいた。従者リチャード・ランダー一人を連れて、初めて地中海からギニアの海岸へとアフリカを横切り、旅の終わりに死んだクラパートン大佐がいた。忠実な従者、リチャード・ランダーの大佐に対する献身的忠誠も立派なものだつた。彼は主人の仕事を受け継ぎ、ニジェル河の大きな謎をついに解き明かした。そして彼もまた、仕事を成し遂げると同時に、原住民に負わされた傷がもとで死んだのである。そこはあんなにも長く旅を

続けてきた河の河口近くだった。そうした初期の探険家たちの中で命を落とさなかった者は一人としていなかった。彼らがしようとしたことは気狂いじみたことには違いなかったが、しかしそこには行き当たりばったりの無謀さは微塵もなかった。彼らは犠牲をしっかりと考慮に入れた上で危険を冒した。未知なる世界の魅力の大きさ、自分が成し遂げてみせようと乗り出したものの魅力の大きさの前では、死でさえもほんの小さなものにすぎなかったのだ。

とりわけ二人の男がアレック・マッケンジーの気持を捉えた。一人は、あの力強く、謎めいた男、成しとげたことよりもその人間性ゆえに称讃されるべき男、リチャード・バートン。そしてもう一人は、アフリカ探険家の中でも最も偉大な、あのリヴィングストーンだった。この穏やかで教養あるスコットランド人の性格の中には、何か非常にこころを打つものがあった。マッケンジーは、何であれ、めったに熱狂したり絶讃したりするような人ではなかったが、その孤独な死、愛して止まなかった暗黒大陸の只中ただなかにある彼の墓のことを考えると不思議な感動を覚え、このリヴィングストーンとだけは是非とも知り合いになってみたかと思うのだった。彼の墓にも、サー・クリストファー・レンの墓に刻まれているのと同じ墓碑銘が刻まれてしかるべきではあるまいか。

アレックは最後にヘンリー・M・スタンリーの作品を研究した。ここには称讃を引き起こすものも、愛情をかきたてるものも見つけられず、ただ冷たい尊敬の念を感じるだけだったが、彼の力の偉大さを認めない訳にはいかなかった。彼はナポレオンの本能の持主で、自分の目的のために最善の手段を選び出すと、その目的を達成するまで情け容赦なく戦い、前進した。彼の書いた本はどれも興味深く、実践的だった。ここからは多くのことを学べると直感したアレックは、その性格にふさわしく、これ

らの作品を徹底的に研究した。

こうしてアフリカ探険に関する書物を読み終えたとき、こころは決まった。彼は天命を悟ったのだ。アレックは自分の計画を、それが熟すまでは、友人にも明かさなかった。ただその間にも、情報を与えてくれる人には会うよう心掛け、そしてついにザンジバルに向けて出航した。自分の力を試すための旅に乗り出したのである。一月後、彼は病気にかかり、運び込まれた伝道教会では、もう助からないだろうと言われた。十週間、彼は死の入口にいた。しかし敵に屈服するわけにはいかなかった。彼は最後に自分を海辺の町まで戻してくれるように頼み、その町で、まるで意志の力によってもあるかのように快復したのだった。探険に適した季節は過ぎてしまっていたので、彼はいったん英国へ戻らざるをえなかった。大抵の男ならこの経験ですっかり参ってしまったことだろう。しかしアレックの決意はますます堅くなるだけだった。彼はアフリカの天候をある意味で人間のように見なし、それに負ける自分を赦せゆるなかった。短い経験ではあったが、彼はそこから必要なものを学んでいた。だから、英国に戻るとすぐに、生鬻なまかひりではあっても多少の医学的知識と、旅行者に求められる科学的知識を手に入れることに取りかかった。彼には並外れた集中力があり、一年間の努力の後には、植物学、地質学、そして生き残るために必要な基本的知識を身につけていた。熱帯地方で人々がかかりやすい病気の治療法、骨折の対処法を学び、また簡単な外科的手術なら自分でできるようになった。そして彼は、たとえ前回以上に困難な探険でももう大丈夫だと感じた。ただし今度はモンバサから始めるつもりだった。

ここまでのところはルーシーにも、一つには自分の想像力で、一つにはディックが語ってくれたこ

とよって知ることができた。ディックは王立地理協会の会報も見せてくれたのだが、そこにはアレック・マッケンジーがその後五年間に歩き回った地域についての報告が載っていた。実に、彼がその五年間に探険した国々こそ、後に英国領東アフリカとなった地域だったのである。

しかしそのとき晩餐^{ディナー}を伝えるベルが鳴り、ルーシーの思考は中断された。

3

食後すぐ、ブリッジが始まった。クローリー夫人によれば、会話というのは一種素晴らしい芸術であって、肉体が消化の活動に従事しているときに追求できるものではない。それに対し、ランプのゲームは心地よい気分転換となり、知性にとっては、肉体の欲求が満たされて初めて生まれる警句や皮肉、冗談や洒落^{しゃれ}の準備運動になるのだそうだ。カードを引いた結果アレック・マッケンジーと組むことになったので、ルーシーは、自分が出したカードに彼がどう反応し、どうゲームを組み立ててゆくのか、じっくり観察することができた。彼は、ディックのように陽気に、大雑把にゲームをするとはなかった。ディックはゲームの間中、思いつくままに軽口をたたいていたが、アレックは全神経を集中し、ほんのわずかでもゲームから注意を逸^そらすことはなく、ディックの滑稽な言葉にはいっさい耳を貸さなかった。しばらくするうちに、ルーシーはゲームそのものよりもアレックのゲームの進め方に興味を持つようになった。その集中力も大したものだったが、大胆さにも畏^{おそ}れいった。この人には、ほとんど最初から、誰の手にどの札^{ふだ}があるのか見抜く不思議な能力がある。それに、パートナーの助けを借りず、親の自分だけで役を作つてゆくとき最もゲームに没頭できるようだ。すべてを自分一人で背負うのを好む人。責任を分担することはこの人を苛^{いら}立たせるだけなのだ。

五回戦勝負が終わったとき、ディックはいまいましそうに椅子の上でのけぞった。

「解らん。」彼は叫んだ。「僕のほうが君より上手いはずなのに。それに手だつて僕のほうが良い。なのにカードはみんな君が取ってしまう。」

ディックはブリッジの名手として知られていた。だから彼が苛立つのも無理はなかった。

「一つもミスはしなかったはずですよ。」と彼はパートナーであるクロリー夫人に請け合った。「それに実際、勝負手はこちらが握っていた。なのに僕らの作戦は何をやっても上手くいかない。彼のはみんな上手くいく。」彼はアレックの方を向いた。「いったいどうして僕がクイーンを二枚持っていることが判つたんだ？」

「君とはもう二十年の付き合いになるからね。」とアレックが笑いながら答えた。「分かっているさ。君は衝動的で感情的だが、抜け目がないわけじゃない。頭の回転もかなり速いし、かなり先の手までしつかり読める。で、それを読み切ったと喜んだときには、君は必ずそうなるものとしてゲームを進めてくる。まあ、そうしたことが頭に入っているから、二、三巡すれば、君がどんなカードを持っているか、おおよそ判るのさ。」

「わたしの持っているカードをどうやってお知りになるのか、よく解らないけど、でも本当に驚異的！」とクロリー夫人が言った。

「人の顔つきからかなりのことが判るんです。なにしろアフリカではいろいろな経験をしましたから。どうも原住民にとっては本当のことを言うよりも嘘を言うことのほうがずっと易しいらしい。そういうところで暮らしていると、人が何を言っているかは無視して、どんな顔つきで言っているかのほう

に注意を払うようになるんです。」

クロリー夫人が、この屋敷ではもつともお気に入りの、自分専用になっている肘掛椅子にゆつたりと身を沈めると、ディックは暖炉のところに行き、その前に立った。おかげで他の三人には暖炉の熱がとどかなくなつてしまった。

「探険に最初に興味をお持ちになつたのは、なぜ？」出し抜けにクロリー夫人が訊いた。

アレックはゆつくりと、例の詮索するような目つきで夫人を見たが、答えたときには微笑をうかべていた。

「自分にも解りません。当時何もすることがなくて、お金だけは沢山あったからでしょうか。」

「とんでもない。」とディックが割つて入った。「以前、気のおかしな男がいましたね。これまで誰も足を踏み入れたことのないある地域を見つけてやろうと出かけたんです。といつても、足を踏み入れたところで何の役にも立たない所なんですよ。なぜって、たとえ原住民に殺されなくても、ひどい天候が代わりに殺してくれる、そんな所ですから。で、その男、結局熱病にやられて、尾羽打ち枯らして戻ってきました。もちろん企ては失敗ですよ。男は、ローファの国へは行けっこない、生きて戻れっこない、そこへ行くなんて夢まぼろしだと言って、その計画を諦めた。するとアレックはすぐに旅の荷物をまとめると、その土地目指して出発したんです。」

「僕はある男が間違っていたことを証明した。」アレックが穏やかな口調で言った。「ローファとはとても仲良くなつてね、僕の妹と結婚したいと言っていたよ。ただ残念ながら、僕には妹も姉もいないがね。」

「誰かが、片足けんけんでアジアを横切るなんて不可能だと言えば、君は出かけて行って、やってみせる。ただやれることを見せるためにね。」とディックが応酬した。「難しければ難しいほど、危険なら危険なほど、君はますますそれをやりたがる。それが全く不可能だということにでもなれば、舌なめずりして取りかかる。」

「君は、どうも僕のことをメロドラマの主人公にしたいらしいな。」アレックは笑った。

「でも、まさにそうじゃないか。君みたいに三流芝居のヒーローにびったりな男に出会ったことはないね。」ディックはルーシーとクロリー夫人の方を向くと、「ひとつ、お二人に証拠をお見せしましょう。」と始めた。「よろしいですか、アレックはオックスフォード大学にいたとき、古典はいつもダントツだった。教授以外は誰も読みたがらない言語で詩を書くなんていう才能を持っていたから、ゆくゆくはとんでもない学者になるだろうとみんな思っていた。」

「これはディックの十八番なんです。」アレックが言った。「本当のことなら実に面白いんですが。」しかしディックは話の腰を折らせなかった。

「ところが数学ときたら、からきし駄目です。ご承知のように、人間、数字に関する方面の頭を持ち合わせていない者もいるんです。二たす二は、とやりだせば、いつの間にか五七五になってしまふ。ある日、数学の教師が怒り心頭、こいつに教えるくらいなら煉瓦の壁に教えた方がましだと言った。私はたまたまそこに居合わせたんですが、先生の言い方もかなりきつかった。この先生、学生に自信を失わせることにかけては、天才的でした。で、アレックはなにも言わずにその教師を見つめていた。ついでですが、アレックはカッとなったとき、普通の陽気な人間のように顔を真っ赤にした

り、物を投げたりすることは無い。ただ顔が少し青白くなって、相手をじっと睨み込んでいます。」

「お願いですから、ディックの言うことは一言だって信じないでください。」アレックが異議を唱えた。

「で、アレックは古典の勉強は放棄したんです。関係者はみんな彼の常識に訴えて、思いとどまらせようとした。でも、思えば、キリスト教世界で最高に馬鹿な頑固者に訴えていたんですな。アレックはもう数学者になろうと決めてしまっていた。それから二年以上にわたって、アレックは、聞いただけでも虫酸が走る科目を一日十時間以上勉強した。全身全霊この科目に打ち込んで、神様が与えることを拒んだ能力を力づくでも手に入れようとした。そしてついに一流の数学者になってしまったんです。それに、この経験は彼にとつてとても役に立った。」

アレックは肩をすくめて、

「数学を気に入ったということではないんです。そうではなくて、この経験は私に、英語の中でいちばん不都合な言葉を取り越えることを教えてくれたんです。」

「いったい、その言葉って？」

「こう言うのと、きつととても自惚れて聞こえると思うんですが、」アレックは笑った。「不可能という言葉です。」

ディックはわざと怒ったふりをして鼻を鳴らした。

「ついでに、自分を虐めて喜ぶことも憶えたんだろう。ぞっとするね。もし中世に生まれていたら、君はきつと、断食、荒業みたいな苦行や、人生の喜びすべてを否定することに悪魔的喜びを感じたこ

とだろうよ。君って奴は、自分を徹底的に惨めにしなくちゃ完全な幸せを感じられないんだ。」

「なあ、ディック、イギリスに帰ってくるたびに、君はますます意味のないことを口走るようになってる。」とアレックは素っ気なくやり返した。

「僕は、無意味なことを喋ることができるといふ、現代人としてはめずらしい人間なんだ。」アレックの友人は笑いながら答えた。「だから僕がこんなに魅力的なのさ。他の連中はみんな真面目すぎる。厭いやになるほどね。」

彼の演説はいよいよ佳境に入ってきた。

「だいたい、今の世の中、万事猛烈すぎる。歎なげかわしいことさ。何かをすることが称讃すべきことであつて、その何かをしている限りその人間がどんな人間かなんて問題じゃないとみんな考えてしまつてゐる。何かをしなくちゃいけないという強迫観念に駆られて、みんな右往左往している。嫌だね。何もしないでいることの素晴らしさをみんなに教えてやりたいよ。」

「その良さをあなたご自身が磨きあげるぶんには、だれにも非難できませんわ。」とルーシーが微笑みながら言った。

ディックは考えるようにしばらくルーシーを見ていた。

「私もそろそろ四十なんです。」

「お背中に太陽を置けば、まだまだ三十二で通りますわ。」とクロリー夫人が茶々を入れた。

ディックはその言葉を真まに受けた様子で夫人のほうを向いた。

「白髪しらがはまだ一本もありませんよ。」

「毎朝召使に抜かせていらつしやるんじゃなくって？」

「とんでもない、そんなこと、めつたに……せいぜい月に一本つてとこです。」

「あら、左のこめかみに一本見えるような気がしますけど。」

ディックはあわてて鏡のほうを向いた。

「やれやれ、チャールズの奴、見落としたな！ 叱ちつてやらなくちゃ。」

「さあ、こちらへ。わたしが抜いてさしあげますわ。」

「そんなことをしていただくわけにはいきません。それじゃ、あんまりにも馴れ馴れしい。」

「いま君は、自分ももうそろそろ四十だつていう、まあ、人に知らせる必要もない報告をしていたんじゃないのかね。」とアレックが言った。

「うん、先日そのことがふと頭をよぎつてね。かなりショックだったよ。で、自分の送ってきた人生をよく考えてみたんだ。弁護士としてはもう十五年も汗水たらして働いてきた。それに前の選挙からは議員も務めている。収入は年二千ポンドほどあるし、それにもともと四千ポンドほどの資産があった。使う金はせいぜい千ポンドちよつと。そこで思ったんだ、いったい本当に価値があるのかつてね——一日八時間を馬鹿な連中のさもしい喧嘩の仲裁についやして、もう八時間は、国を治めるとかいう、お笑いぐさの猿芝居についやすことに。」

「どうして政治をそんなふうにするのかな？」

ディック・ローマスは馬鹿にするように肩をすくめた。

「実際そうだからさ。一握りの、でかい顔をした連中がすべてを牛耳ぎゅうじつて、我々残りの人間は、イギ

リス国民に、我が国は国民主権の民主国家ですよっていう幻想を与えるためにだけいるんだから。」
「君の間違っている点は、君が政治の中に本心夢中になれるような目標を持っていないということじゃないのかな。」アレックが真面目に言った。

「失礼ながら、僕ほど熱烈な婦人参政権論者はいないのだよ。」かすかな笑みをうかべてディックが答えた。

「あら、そうだななんて思いもしませんでしたわ。」見事な趣味のドレスに身をかためたクロリー夫人が言った。「また、どうして婦人参政権に力癪をお入れになるように？」

ディックは再び肩をすくめた。

「一度でも選挙に立候補してみれば誰にでも分かることですが、人が投票する理由なんて、くだらなくて、浅ましくて、けちなものです。自分の肩に置かれた責任を本当に意識している人間なんてほとんどいない。現在問題になっている政治課題がどんなに重要かってことにはまったく無関心。投票を卑しい取引行為にしてしまう。立候補者なんて、要は、有権者という、気まぐれで、気の変な連中のなすがままなんです。さて、そこで、女性にも投票権を与える。投票できるとなったら女性はどうするか。きつと、さらにけちな理由で投票しますよ。投票という行為を、さらにくだらない、浅ましいものにしてしまうでしょう。そうなれば、普通選挙制度そのものが馬鹿げたものだということが分かるかもしれない。そのとき初めて、何か他のやり方を試してみようという気になるかもしれない。」
ディックがこんなに熱く話すのはめつたにないことだった。アレックは面白そうに眺めていた。
「それで君はどんな結論に達したのだね？」

しばらくディックは答えないうたが、やがて、しょうがないといった笑みを浮かべた。

「僕がしたいと思っていることは、僕にとってはきわめて重大なことだが、きつと他の人間にとつてはまったくどうでもいいことだろう、それはちゃんと分かっている。たぶん二、三ヶ月後には総選挙がある。そのとき党の幹部の連中に、僕はもう立候補しないと行ってやることに決めただ。リンカーン法律事務所の一部屋も引き払う。そう、店じまいさ。リチャード・ローマス氏はいつさいの公的活動から身を引くんだ。」

「まさか、本当にそんなことなさるおつもりじゃ？」クロリー夫人が叫んだ。

「いけないですか？」

「一月もたてば、退屈で退屈でたまらなくなつてよ。」

「そうでしょうか。私には、仕事は大切なものだ、良いものだと世間で言われすぎるような気がするんです。仕事なんて、創造性のない人間が、何もしないでいることの落ち着かない気持、苦しさを避けるために飲む一種の薬ですよ。仕事が常に美しい言葉で飾られてきたのも、それがほとんどの人間にとつて必需品だからなんです。その薬を飲まざるをえないから甘い言葉で包みます。仕事は鎮静剤です。これを飲めば、人間、落ち着いた気分になって安心できるんです。指導者にとつて都合の良い人間ができる。キリスト教の最大の欺瞞は、労働の喜びを謳っていることではないでしょうか。初期のキリスト教信者は奴隷だった。だから、彼らに、辛い労働をすることは高貴なこと、美德なのだと示す必要があった。でも何だかんだ言っても、人間、結局は食べるため、妻や子を養うために働くんです。必要だから辛くてもやっていることであつて、けつして英雄的行為ではない。もし皆さんが、

目的そのものよりも手段により高い価値を置こうとおつしやるなら、私としては皆さんの知性の不足を嘆き、肩をすくめて立ち去るしかありませんね。」

「ご自分だけ、そんなに沢山いっぺんに喋るなんて、ずるいわ。」と、可愛らしい手を上げながらクローリー夫人が言った。

しかしディックは止めなかった。

「私には妻も子もいません。それに、充分すぎるほどの収入もある。だから、誰かの食い扶持になるものを取り上げてしまうべきではないと思うんです。それに、私が——他の法廷弁護士にはなかなかできないことなんですが——訴訟に必要な書類をいつも簡単に手に入れられるからと言って、それは私の手柄でもなんでもありません。たまたま私のうしろに大きな法律事務所があつて、そこで事務弁護士が準備してくれるからにすぎない。それに、私は訴訟という馬鹿げた口論に加わることになんの価値も見いだせないんです。たいがい、こちらに六分の理があれば、むこうにも六分の理がある。どちらの側も不当で、どちらの側も強情だ。いや、確かに弁護士業だって、他の仕事と同じように、生計を立てていくための立派な手段ではある。でもそれ以上ではない。だから、もしやらなくても生きていけるなら、どうしてドンキホーテみたいに、人間苦勞して働くことが立派なことだなどという金科玉条にしがみついていることなくちゃならないのか、私には解らない。……私がなぜ議員を辞めるつもりかは、もうお話ししましたよね。」

「君は分かっているのかな、輝かしい未来を投げ捨てようとしているんだよ。次期政権では政務次官くらいにはなれるかもしれないじゃないか。」

「でも、それは、僕が軽蔑している奴らにもっとおべっかを使えつてことだろう。」

「いま君がやろうとしていることは非常に危険な賭だ。」

ディックはアレック・マッケンジーの眼をまじまじと見た。

「そう忠告してくれるのが、よりにもよって君だとはね！」そう言ってディックは笑った。「たしか、賭は危険なほど面白いんじゃないかな。」

「それで、実際、お暇になったとして、どんなことをなさるおつもりなの？」クローリー夫人が尋ねた。

「無為に生きることを一つの芸術にしてみたいんです。」ディックが笑って答えた。「この頃は、風流人は鼻であしらわれますよね。そう、私はディレッタントになるつもりです。人生の雅やかなものに身を捧げてみたい。私もそろそろ四十です。おそらく、もうそう何年も生きられないでしょう。その残された時間に、この世界をよく知ってみたい。世界にある優雅なもの、うっとりするようなものを全て体験してみたいんです。」

アレックは暖炉の炎をじつと見つめたまま物思いに沈んでいた。やがて深く息を吸うと、椅子から立ち上がり、背筋をまっすぐに伸ばした。

「それもまた一つの人生だろうね。どれが良い人生で、どれが悪い人生かは誰にも言えない。ただ、僕は、倒れるまでこの今の生き方を続けたいと思う。やりたいことは何千とある。もし十回生まれ変わったとしても、僕にとって今どうしてもやらなくてはならないことの十分の一もできないだろう。」

「で、人生の最後はどんなふうになると思っているんだい？」デイクが訊いた。

「僕のかね？」

デイクは頷いたが、言葉では何も言わなかった。アレックは微かに笑った。

「さて、たぶん、どこかの人里離れた沼地で野垂死^{のたれじ}つとてこだろう。疫病と厳しい天候に晒^{さら}されたせいで、ぼろぼろになってね。荷物担ぎの連中は、僕の銃と食料を持って逃げ出すだろうな。あとはジヤッカルがやってくれるさ。」

「なんて恐ろしいこと。」クローリー夫人は身を震わせた。

「私は運命論者なんです。信仰の一番深いところに運命論が横たわっている人間の中であまりにも長い間暮らしてきたおかげで、他のものにはなれなくなってしまったんです。死ぬときが来たら死ぬしかない。」彼は奇妙な笑みを見せた。「しかし私はキニーネも信じているんです。この感心な薬を毎日飲めば、命の糸が少しは切れにくくなる。」

ルーシーにとって、これは素晴らしい勉強だった。この二人の男の対照！一方は、全身全霊を一つの目的のために捧げ、最後は恐ろしい孤独な死が待っていると知りながら、獐^{どう}猛^{もう}ともいえる烈しさでそれを追求する男。また一方は、人生の美しいものを残らず集め、まるで庭の花壇の花を育てるように、その優美なものにさらに磨きを掛けようとあえて決心した男。……

「で、最悪なのは、百年も経てばどっちでも同じということになってしまうことさ。」とデイクが言った。「百年どころか、もっと前に二人とも忘れられちまうだろうよ。君の奮闘努力も、僕の愚かさ加減もね。」

「それで、あなた、そこからどんな結論をお導きになるの？」とクローリー夫人が尋ねた。

「心理学的見地から言って、最適な時間が来たということくらいですか、——ハイボールを飲むのに最適な……。」

クローリー夫人が借りた荘園にはちよつとした獵場があつて、翌日、デイックはそこがどんな具合か見に行くと言つたが、アレックは同行を断つた。

「イギリスの狩というのは、僕にはちよつと退屈なんだ。食用にするわけでもないのに生き物を殺すことがどうしても好きになれないし、それに、イギリスの鳥つてやつはいかにも飼ひ慣らされていて、にわとりを撃つみたいなんじゃやないかね。」

「君の言うことは一言だつて信じないな。」ドアを出ながらデイックが言った。「實際は河馬かばより小さいものは撃つても当たらないだろう。ここには君のま的になつてくれるものがない、クローリー夫人の牛以外はね。」

昼食の後、アレック・マッケンジーが、一緒に散歩に行かないかとルーシーを誘つた。ルーシーは喜んだ。

「どこがご希望ですか。」彼女は尋ねた。

「海辺を歩きましょう。」

ルーシーは、ブラックステイブルの漁村からウェイヴニーの村まで通じる「喜びの径ジョイレイン」という小道

にアレックを連れていった。その海には独特の広がりがあつて、そよ風に乗つた潮の香りが心地よく感覚を刺激する。海辺には平坦な沼地があり、周りの景色がいつそう広々したものに見える。そのためか、アレックの歩みは知らず知らず速くなつた。しかし見た目にはけつして速いものには感じられず、徒歩の長旅に慣れた男のしつかりした足取りが地面をとらえている、そんな印象だつた。歩くことに慣れていてよかつた、とルーシーは思った。

最初のうちこそ二人はとりとめのないことを話していたが、やがて沈黙が訪れた。アレックが何か考え込んでいる様子だつたので、ルーシーは邪魔にならないようにしていた。散歩に誘つておきながら、なにもそれらしい気遣いをしないとこころがいかにこの人らしい、そう思うと可笑おかしかつた。ときどきアレックは、不思議な、誇りに満ちた様子で海の方に顔を向け、じつとそちらを眺める。鷗うみづが物憂げに海面をかすめて飛んでいる。数日前ルーシーのこころを掻き乱したこの荒涼とした風景が、いまこの人の魂にも入りこんでしまったのだろう。しかし、不思議なことに、この風景を前にすると、ルーシーは何も言わず並んで歩いた。どこを歩くかにアレックがまったく無頓着な様子だつたので、ルーシーは海から離れる道を選んだ。それはきれいに刈り込まれた生け垣と肥沃な畑の間を走る、曲がりくねつた道だつた。この田園風景はケント特有の暖かな雰囲気キャラバンに満ちている——作為のない優雅さ、人を優しく包む美しさがある。二人は幌馬車の横を通りかかつた。たてがみをくしゃくしゃにした馬が道端で草を食はんでいる。ジブシーの一家が焚き火を囲んで坐つている。ルーシーは奇妙にこころを動かされた。唯一の家であり故郷である今にも壊れそうなこの馬車以外なものにも縛られるこ

となく各地の野原を旅して歩く生活、普通の人の知らない隠された場所を知っているに違いないこの人たちの放浪生活。それを思うと、ルーシーは、自分も自由に生きてみたい、自分もこの広々とした地平線の彼方へ旅してみたいという激しい渴望を覚えるのだった。

とうとうコート・リーズ荘の門の前に来た。堂々とした門の先は榆の並木が館まで続いている。

「さあ、着きましたわ。」長い沈黙を破ってルーシーが言った。

「もう？」アレックが身を震わせたように見えた。「付き合ってくださいさつてありがたい。楽しいお話ができました。」

「そうかしら？」ルーシーは笑った。アレックが驚いた表情になるのが分かった。「この二時間、あなたは何も言ってくださいませんでしたわ。」

「申し訳ありません。」彼は陽に焼けた肌をいつそう赤らめた。「随分無礼な奴だと思いいになったことでしょう。一人でいることに慣れっこになってしまつて、どう振舞ったらいいのか忘れてしまつたのです。」

「気にしません。」彼女は微笑んだ。「またいつかお話を聞く機会がありますもの。」

ルーシーはかすかな満足を覚えていた。この程度の言葉でもこの人にとっては女性に対する精一杯のお世辞なのだと感じられたからだ。そして、ほとんど話らしい会話のなかったこの散歩が、なぜかは分からないが、二人の間に或る絆を生み出したようにルーシーには思われた。アレックのほうもそう感じているようだった。というのも、この散歩を境に、彼のルーシーに対する態度が今までにはなかった親しみのこもったものになったからである。彼は今ではルーシーを、単なる知人ではなく、

友人と見なしているようだった。

数日後、クロリー夫人が馬車でターカンベリーの大聖堂を見にいと提案したとき、マッケンジーは、自分は歩いていってもいいかと訊いた。

彼はルーシーの方を向いて、

「一緒に来ていただけるかどうかお願いする勇氣はほとんどないのですが……。」と言った。

「よろこんで。」

「この前の時よりはまともに振舞うようにするつもりですが……。」

「そんなに気をお遣いにならなくても。」ルーシーは微笑んだ。

デイクは、馬車を利用できるときに歩いて行くことは馬鹿らしいと考える人だったので、クロリー夫人と軽装馬車トラップで出かけていった。アレックはルーシーを待った。彼女は、犬と一緒に連れて行きたいと、納屋の方に廻っていた。

ルーシーが歩いてくるのが見えた。アレックにとつて、ほとんどの人間は抽象概念にすぎなかった。彼らを見、彼らに話しかけ、それぞれの個性に気づきはしたが、畢竟ひつじきよう生きた人間ではなかった。いわば影であつて、考慮に入れなければならないものではあつても、自分の一部になれるものではなかった。だから今ルーシーを見て、ショックを受けた。突然彼女に新しい興味を持った。初めて見たような気がして、そのまれなる美しさに不思議な感動を覚えた。サージのドレス、長手袋、乗馬用の帽子ザリットレットを身に着け、ヴェールを風になびかせながら、ステッキを持ってこちらに歩いてくるルーシーの姿が、

突然、この数日間自分がさまよっていたこの田舎の美しさそのものを表わしているように思われた。背筋を伸ばしたほっそりした姿、快活な歩みを見てみると、思いもよらない喜びを感じるのだった。あの青い眼には何かとても魅力的なものがある。

アレックは話をしたいという強い欲求に捉えられた。自分にとって強い関心のあることが、ルーシーにとってはまったくどうでもいいことなのかもしれないなど一切考えることなく、常にここを占めていることについて話し始めた。前後関係には注意を払わず、興味のおもむくままに、一つ、また一つと話していった。今どんなことに携わっているのかから始めて、なぜ今の仕事に惹かれるようになったのかに戻った。次に将来の計画について語り、その計画の意味をより明らかにするために、どんな事がきっかけでその決断に至ったかを後で述べた。ルーシーは注意深く聴いていた。ときどき質問もした。やがて頭の中ですべてが明確な形を取り始めた。ディックの話には欠けていた細かな点が判明し、それらに関連づけることができたのだった。

数年間、アレック・マッケンジはこれといった目的は持たずアフリカを旅していた。単なる好奇心、未知なるものへの憧れ——それ以上の野心といったものはなかった。最初の重要な遠征も、実際には、他のイギリス人探険家の失敗を受けて行われたものである。この遠征で彼はアフリカの旅につきものの様々な困難を経験した。病氣と空腹、果てしなく続く湿地帯、一日一マイル以上は進めないジャングル、荷役人夫の逃走、原住民の背信——あらゆる信じがたい困難に出会った。そしてようやく遠征の目的地にたどり着くと、そこには白人に対して強い敵愾心てきがいしんを燃やす蛮族の酋長が待っていて、今度は自分の一行に注意を払わなければならなかった。というのは、荷役人夫はいま訪れようとしている部族を見苦しいほど恐がり、いつ藪の中へ逃げ出してもおかしくなかったからである。酋長は、もし都に近づこうとするなら殺すと警告してきた。

そこから先の話をアレックは、自分が恥ずかしいと謝っているような、自分の冒した危険、自分の示した勇気を極力小さなものに見せようと、卑下するような調子で、ユーモアをまじえながら語った。酋長のメッセージを受け取るとすぐに、アレック・マッケンジは強い口調で、昼前に王の村へ行くと伝えよと使者に返答した。酋長に驚きから回復する時間を与えたくなかったので、彼は使者が村に戻る時間を見計らって、間髪を入れず酋長の前に姿を現わした。武器も持たず、供も連れずにである。「酋長にはなんておっしゃったの？」ルーシーが尋ねた。

「あんな無礼なメッセージを送ってよこすとは一体どういうつもりなのか、と訊いてやりました。」アレックは微笑んだ。

「怖くはなかったんですか。」

「怖かったですよ。」

アレックは暫し黙った。そして、無意識のうちにそのときの気持がよみがえってきたのか、歩みを緩めた。

「ああするよりほかなかったです。食料が底をつき始めていて、なんとしても手に入れなければならなかった。もしこちらが臆病な様子を見せたら、彼らは何の躊躇ためらいもなく私たちに襲いかかってきたでしょう。私の一行はみんなその部族をとて怖がっていて、戦おうなんていう気持は毛頭なかつ

た。だから、もし戦闘になっていたら、羊の群みたいに一掃されていたことでしょう。しかし私は、なにか本能的感覚とでもいうんでしょうか、うまくゆくだろうと感じていた。いよいよ最後の時が来たとは思いませんでした。」

しかし、最後の時はこなかったが、アレックの生命いのちはそれから三時間、宙ぶらりんの状態にあったのである。最終的に努力が衰り、不機嫌で疑い深い敵を温かい味方に変えることができたのは、一いっにアレックの素晴らしい勇氣のためだったのだ、とルーシーは理解した。

彼は遠征の目的を達成した。羚羊アンテロープの新しい種を発見し、一揃ひと揃いの骨格と二枚の皮を自然歴史博物館に持って帰った。いくつかの地理的観測を行ない、それまで流布していた誤りを正した。その国の政治的、経済的状况を注意深く調べた。可能なことは全て学び終え、残忍な酋長とは最良の友好関係を保ったまま、アレックはモンバサへ向けて出発した。到着したとき、そこを発つてから五年と一月ひとつきが経過していた。

旅の収穫はごく小さなものだったが、アレックはこの旅の一つの実習ととらえていた。旅を通して自分の健脚を確かめ、もっと大きな探険でも大丈夫だと確信した。原住民との接し方を学び、自分には彼らに対して生まれながらの影響力があることに気づいた。アレックは自信を持った。厳しい天候も乗り切り、自分には強い日射しや熱病に対しての抵抗力があると感じた。海岸に戻ったとき、彼の躰はいままでにない頑健なものとなっており、アフリカの旅への思い入れは何倍にも膨らんでいた。アフリカという妖精が彼の魂を攫さらんでしまい、そこから逃れることはもはや不可能だった。

アレックは一年を英国で過ごす、再びアフリカに戻った。今度はいくつかの大きな湖の北部地域を探険する予定だった。そこは英国領東アフリカの後背地で、英国が暗に領有権を主張しているものの、実際の占領は行われておらず、アラブ人首長の支配の下、いくつかの独立小国家に分かれている地域だった。今回アレックは英国政府の正式な委任を受け、各小国家の首長と条約を結ぶ権限を与えられて出発した。彼はこの地域で六年を過ごし、組織的な調査を行なった。貴重な地図を作製し、莫大な科学的資料を集め、原住民の風俗習慣を研究し、政治情勢を観察した。彼が発見したのは、地域全体が絶え間ない戦闘に明け暮れていること、本来肥沃で白人が開拓するにふさわしい広大な土地が荒れるにまかされていることだった。そして、アレックが奴隷狩りの忌まわしさを知り、これをなくすことが自分の将来の大きな目的でなくてはならないと自覚したのもこのときだった。彼の力は微々たるものだった。だから、アラブ奴隷商人の敵意を煽ることなく、この地域で己の地位を確かなものにするためには、相当の外交手腕を発揮する必要があった。彼は自分が強い疑いの目で見られていることは解っていた。感謝と友情で結ばれているはずの小国の支配者にも全面的な信頼を寄せることはできなかった。ある期間、アレックはこの地域でもっとも強力な国の君主サルタンによって軟禁状態にさせられ、うち一年は重大な生命の危険に晒さらされた。今日こそは陽の沈むところを見られないのではないかと考える日々が続いた。アラブ人は礼をもって彼を遇してはいたが、軟禁を解くことはなかった。やっとアレックが逃げ出したのは、統治権を強奪しようとする弟とサルタンとが戦っている最中、その間隙をついてのことである。まさに命からがらで、何冊かのノート、いくつかの標本、何丁かの銃以外、持ち物は全て捨ててこなければならなかった。

英国に到着すると、マッケンジーは外務省に行つて、かの地の研究の結果を報告した。絶えざる奴

隷狩りのために豊かな国が無政府状態に陥っていることを指摘し、政府高官に、人道上の理由はもとより、英国の威信のためにも遠征隊を送り、この殺人行為ともいえる奴隷交易を押し潰すようにと懇願した。勿論自分も付いて行き、できることは何でもするつもりだ。正義の戦いに加わる機会が与えられるのであれば、政府の選んだどんな指揮官の下でも働く。その地域に関する自分の知識、住民への影響力は欠くことのできないものだ。もしある程度の数の銃と三人のイギリス人将校を与えてくれるなら、全てのごときは一年で片付くだろう、そうアレックは請け合った。

しかし政府はボーア戦争による疲弊からまだ抜け出していなかった。だから、アレックの主張に説得力のあることは認め、介入の必要性は理解しても、新たな活動に踏み込むことに乗り気ではなかった。このように小規模な遠征でも、ゆくゆくは当初の予想より遙かに重大な事態に発展してゆく可能性がある——この苦い教訓を政府はボーア戦争で学んだばかりだった。現状では、失敗につながるかもしれないどんな些細な危険も冒すわけにはいかない。たとえ小さな兵力でも、それを派遣し戦いに敗れるようなことになれば、それは英国の威信にとって大きな打撃となるだろう。ニュースはアフリカばかりか、アラブ人によってインドにも伝わり、今度は、絶対に負けることのない軍隊を至急送らなくてはならなくなる。そのための資力も人材も今の英国にはなかった。

アレックの要求は言い訳に次ぐ言い訳で逸らされた。彼には意図的に障害が設けられているように思われた。実際、英国と他のヨーロッパ諸国との関係から考えて、彼の計画は小さなものではあっても大変迷惑なものようだった。結局アレックの要求はきっぱりと断られた。

しかし、だからといってそこで止めることはできなかった。拒絶にあったことで、この仕事をやり

遂げようというアレックの決意はむしろ強固なものとなった。遠いところで起こっていることを、人から聞いただけで理解納得することが難しいのは承知していた。しかしアレックはあの筆舌に尽くしがたい恐怖を自分の目で見てきたのだ。彼には奴隷狩りの残酷さが分かっていた。彼の耳には、今でも、村がアラブ人に襲われ、火をかけられたときの苦悶の叫び声が鳴り響いていた。一度ならず、二度ならず、何度も何度もアレックはトウモロコシ畑に抱かれた村をあとにした。そうした村は風変わりな原始的なものではあったが、詩人ゴールドスミスが優しく流麗な韻律で描いたスコットランドの田舎の村のように愛らしいものだった。小さな子供たちが裸で元気いっぱい遊んでいる。女たちは何人かずつかたまり、坐ってトウモロコシを挽きながらおしゃべりに興じている。男たちは畑で働くか、小屋の入り口あたりにのんびりとしゃがみこんでいる。それは素敵な光景だった。ひよつとしたら、ここに人生の一つの大きな謎に対する答があるのではないか、そんな気がした。というのは、ここでは誰の顔も幸福で輝き、生きることの喜びがそれだけで存在の充分な理由になっていたからである。そして、アレックが戻ってみると、村は灰の山となり、煙がまだ揚がっていた。あちこちに死んだ者、傷ついた者が横たわっていた。まるまると太った男の子の腹に槍の傷跡があった。女の顔が銃で吹き飛ばされていた。男がひどく荒らされた地面の上に投げ出され、血を流しながら末期の呻きをもらしていた。残りの住民は、何かまわず追い立てられ、獣のように扱われ、半分餓死状態で奴隷商人の手に渡されるまで痛ましい旅を続けさせられるのだ。

アレック・マッケンジーはもう一度外務省へ出向いた。全ての仕事を一人で引き受けるつもりだった。自費で軍隊を集めるから、権限を与えて欲しいとだけ頼んだ。しかし役人たちは腰抜けだった。

この男がどんな困難に自分たちを巻き込むか分かったものではない。もしこの男に公の権限を与え、個人として責任をとる必要がない状態で行かせたら、自分たちが窮地に追い込まれないとも限らない。大陸列強の勢力圏は尊重すべきものであり、他でもない今このとき、他国の嫉妬心を煽るような行為は厳に慎むべきだ。出かけるなら一私人として行かなくてはならない、援助は与えられない、たとえ間接的にせよ英国政府はいつさい彼の行為とは関係を持たない、そうマッケンジーは言い渡された。この解答は予想していたものだったから失望はしなかった。政府が自ら事態の解決に乗り出す気がないのなら、それならそれで、公式ゆえの制約なしに事に当たれるではないか。これはむしろ彼の望むところだった。この独立不羈の男は、英国よりも広い地域の奴隷交易を自分一人で一掃しようとした。英国の援助を受けることなく、十名ばかりの酋長たちと協力して、二万人のアラブの戦士に戦いを挑もうというのだ。まさにドンキホーテ的挑戦だった。しかしアレックは、危険は充分承知したうえで、喜んでそれに臨もうとしていた。彼にはその地域に関する完璧な知識があった。原住民に対しては彼の人柄ゆえの影響力もあつたし、扱いかたも或る程度心得ていた。必要とされる外交上の駆け引きにも今では慣れていたし、地域の政治情勢も熟知していた。

海岸地帯で兵力を集めることはさして難しくないだろうし、原住民で組織した軍隊を進んで指揮してくれる勇敢で冒険好きな連中も沢山いるだろう。もちろん金を払いさえすればの話だが……。いつでも使える金が不可欠だった。彼は大西洋を渡り、テキサスにある領地を売った。さらに、ランカシヤの炭坑から生まれる利益をいつでも回せるよう手配した。外科医も雇った。この医者とは昔からの馴染みで、緊急のとき頼りになる男だった。そしてアレックは、まず自分の下で働いてくれる白人

を見つめるべく、ザンジバルへと出航した。つぎにモンバサへ行き、これまでの何度かの遠征で一緒だった荷役人夫を集めた。彼の名声は原住民の間に広く行き渡っていたので、多数が集まり、その中から今回の目的に合った人夫を選び出すことができた。アレックの一行は総勢三百人を超えた。

作戦地域に到着してしばらくは、全てが順調に運んだ。アレックは敵を分断することに大きな手腕を發揮した。小国の支配者たちは互いに嫉妬心を燃やし、奴隷狩りの季節が不首尾のまま終わると、仲間の国を襲うのに熱心になるのだった。アレックの計画は、こうした小国を二、三連合させて、もっとも強力な国に攻撃を仕掛け、これを完全に粉碎すること、その後、もしその小国の支配者たちが、平和に暮らしている種族を襲うのを止めると保証しない場合は、かつての味方とは言え、その国を一つずつ占領してしまうことだった。自分は原住民に対して大きな影響力を持っているのだから、ひとたび自信を与えてやることさえできれば、彼らが恐れる敵アラブ人に攻撃を仕掛けるようしむけることは充分可能だ、そう感じていた。全てはアレックの望んだように運んでいった。

全地域に対する指導権の確保を狙っていた大国が戦いに敗れた。アレックは、今では習性となった組織的な方法で、野蛮な状態から回復した地域を有機的に再構築することに取りかかった。協力して戦ったアラブの首長たちを押さえ込むことに成功し、戦いの中で信頼を裏切った首長たちには、厳しい教訓として、恐怖心を植えつけた。かつての安全な土地が戻りつつあった。もう五年もすれば、この土地もイギリスと同じように隅から隅まで安心して旅行できるようになるだろう、そう確信した。ところが、突然、全てが元の木阿弥になってしまった。文明の発達していない国で時々起こることなのだが、アラブ人の中から一人の指導者が現れたのである。その男がどこから来たのか誰も知らな

った。駱駝を連れて歩く者だったと言われ、「びつこのモハメッド」と呼ばれていた。骨折した後の処置がまずかったらしく、びつこを引いていたからだ。彼は抜け目ない男で、先見の明があり、無慈悲で、野心的だった。自分同様一か八かの命知らず数人を引き連れ、支配者の死によって混乱していた北部の小国の都を攻撃し、そこを占拠し、自ら王と名告った。

この男は、一年でアビシニアに接する領有権の曖昧な土地を支配下におくと、多くの暴徒を引き連れて南下を始めた。彼らは征服欲に狂い、キリスト教徒に対する憎悪に燃えていた。住民の間に驚愕と動揺が広がった。唯一この難局を救うことが期待できる男はマッケンジーだった。アレックは自分の影響下にあるアラブ人を集め、自分も含め全ての者の安全はこの「びつこ」の侵攻を阻止することにあると指摘した。が、予言者モハメッドの名の下、戦いの叫びは理性の呼び声を圧倒し、結局彼らアラブ人は一人残らずアレックの敵となった。一方、同盟関係にある原住民は信義に厚く、命がけの忠誠をアレックに示した。彼はこうした原住民とともに敵に立ち向かった。長く激しい戦闘が続いたが、勝敗の帰趨は不明だった。死傷者の数は双方とも甚大で、アレック自身重傷を負った。

幸いなことに雨期が近づき、「びつこのモハメッド」は、たとえ暫しにせよ、彼の進行を阻んだこの白人に深甚なる敬意を表し、自分の力の深く浸透した北部地域へ兵を戻した。アレックにはこの男が雨期が明け次第再び攻撃を開始するだろうと分かっていた。また、自分にはこの機敏で抜け目なく有能な敵によく耐えるだけの兵力のないことも分かっていた。今唯一できるのは、いったん海岸まで引き、英国に帰って、もう一度政府を説得してみることであった。もし政府が援助を断るようなら、今度はマキシム銃とそれを扱える人間を引き連れて戻って来るつもりだった。この地を離れることが負

け犬の逃走のように見えることは承知していた。しかしどうすることもできなかった。引かざるを得なかった。負傷のために歩くことはできなかったが、運ばせることはできた。彼は負けん気の強さから自分の幌馬車に火をかけると、強行軍で海岸まで引き返したのだった。

アレックの短い英国滞在も終わりに近づこうとしていた。もう一月足らずで、再びアフリカへ向けて出発することになっていた。今度こそこの仕事を終わらせるつもりだった。もし神の御加護で命を全うできるなら、楽園を荒野に変えてしまったあの忌まわしい奴隷交易を永久に根絶するつもりだった。

大聖堂の境内に入って、アレックは話すのを止めた。二人は立ち止まり、この堂々とした建造物を眺めた。周囲の芝がきれいに刈り込まれ、聖堂に穏やかさと一層の荘厳さを与えている。二人は身廊に入った。そこには厳粛な静けさが広がっていた。この何もない空間には一種名状しがたい感動を与えるものがある。魂が高みに引き揚げられてゆくように感じられ、卑しいもの、下劣なもの全てに軽蔑を覚える。飾らない美しさで真っ直ぐ天に向かって立ち並ぶゴシックの柱に囲まれていると、精神も高貴なものを求めたのだった。確かにここも、この三百年は、形式的で冷ややかな儀式の場でしかなかったかもしれない。しかし今なお、以前の、信仰がもっと輝いていた時代の雰囲気がある所に染みついていようだ。微かな香の薫りが柱にまとわりついている。甘く悲しげな匂いだ。金糸織りの祭服、刺繍入りの外法衣に身を包んだ司祭が、たくさんの僧侶を引き連れ、人影のない側廊を荘重に歩いてくる姿が目には浮かぶようだ。

ルーシーはここに来てよかったと思った。この場所の壮大な安らぎが、ブラックステーブルから歩いてくる間感じていたものにぴたり合っているように思われ、ここでは昂揚し、自分自身のちっぽけな心配事など取るに足らないものに感じられた。自分と今まで話していた男は歴史を作っているのだと気づき、その充実した人生、偉大な仕事に魅せられた。彼の言葉を通して輝くアフリカの熱い太陽に、ルーシーの目はくらくらした。原生林の恐ろしさ、果てしない湿地帯を歩く惨めさを実感した。そして、アレックの明晰なものの見方、やすやすと責任に耐えている姿、壮大な計画を思い、誇らしさを感じるのだった。ルーシーはアレックを見た。彼はルーシーの横に立ち、彼女を見つめている。ルーシーは思わず顔が火照るのを感じて俯いた。

どうしたわけか、ディック・ローマスとクロリー夫人には会えなかった。しかし二人とも残念には思わなかった。大聖堂を後に帰路についたとき、しばらく二人はどうでもいいようなことを話したが、アレックの舌はなめらかなになり、それを喜んでいる様子だった。自分に話すように他の人に話したことがないのだ、そうルーシーは本能的に感じ、奇妙にここをくすぐられた。

二人とも、ターカンベリーに向かって歩いていたときのような、熱を帯びた調子で会話を進めることはできそうもなく、話題は共通に知っている人間についての陽気な品定めといったものになった。アレックは激しい感情の持主で、愚かな人間をひどく嫌悪し、軽蔑している人間については愚弄するような調子で批評するのだったが、それがルーシーには可笑しかった。

彼はこの国の指導者たちと会ったときのことを、遠慮なく、からかうように語った。面白い話をするときには、わざと間延びしたようなスコットランド訛を用い、いつそう面白可笑しく聞こえるようにするのだった。

やがて二人は本について話しはじめた。アレックは、自分に読める本の量はごく限られているので、探険に持つていけるような、何度繰り返して読んでも飽きない本を選ばざるをえないと言った。「囚人のようなものですよ。シェイクスピアは暗記してしまいましたし、ボズウエルの『ジョンソン伝』なら、あなたが一行引用してくだされば次の行をすぐ言えます。」

しかしルーシーが驚いたのは、彼がギリシャの古典をこころから愛していることだった。それらが素晴らしいことは解つていても、所詮は大学の教授や高校の古典の教師以外読まないものだど漠然と思つていたから、それらを生きた作品として読む人間がいることが不思議だった。ギリシャの古典は、アレックにとって、靈感を与え、精神を鼓舞してくれるものだった。それを読むことで、自分の目的の正しさを確認し、人生を雄々しい見地から眺めることができるのだ。彼は音楽や美術にはあまり興味を持っていなかった。彼の美的欲求はすべて、ギリシャの詩人と歴史家に集中していた。ツキジデスは真に彼の支えとなるもので、この偉大なギリシャ人を駆り立てていたものが自分の中にもあるような気がした。この歴史家のことを語るとき、脈拍は速まり、頬は紅潮した。常にツキジデスを友として生きる者が卑しいことができるはずがない、彼はそう感じていた。しかし、それにもましてアレックが愛していたのはソフォクレスだった。ソフォクレスを繙き、そのギリシャ文字を見るだけでアレックの気持は高ぶるのだった。この悲劇詩人の一冊の本の中に、彼の必要とするもの、望むものすべてが、崇高とも言える力強さで描かれている。単純さと力強さ、高貴な人生、そして、美……。アレックは、ルーシーが古代ギリシャ語を知らないこと、感動を分かち合えないことを忘れ、突然

『アンチゴーン』の一節を詠唱しはじめた。朗々とした麗しい言葉が彼の唇から流れ出した。ルーシーには言葉の意味は理解できなかったが、響きの美しさは漠然と感じられ、彼の声がこんなに素敵だったことはないと思った。そこには、いままで聞いたことのない、独特のうっとりするような柔らかさがあった。言葉がこんなに優しい響きを持つとは……。

二人はコート・リーズ荘に到着した。館に通じる並木道を歩いていると、ディックが慌ててこちらに向かって走ってくる。二人は手を振ったが、ディックは応えなかった。近づいたとき、ディックの顔が蒼褪め、心配そうな表情をしているのが分かった。

「やれやれ、やっと帰ってきた！ いったいどうなってしまったのかと思ったよ。」

「どうかしたのかね？」

この法廷弁護士にいつものふざけた調子はまったくなかった。彼はルーシーの方を向いた。

「ボビー・ボールガーが来ています。あなたに会いたいそうです。すぐ来てください。」

ルーシーはディックを素早く見た。いったい何があったのだろうかとうと不安を感じながら、ルーシーはディックに続いて応接間に入った。

ロバート・ボールガーとクロリー夫人が暖炉の脇に立っていた。黙っているが、かなり興奮しているのは明らかで、今まで自分のことを話していたにちがいないとルーシーは思った。クロリー夫人が衝動的にルーシーの手を取り、キスをした。ルーシーが真っ先に考えたことは、弟に何かあったのではないかということだった。ケルシー夫人が学費をたっぷり与えてくれているので、弟には狩をするくらい余裕はあるのだが、その最中に何か恐ろしい事故が起こったのかもしれない。

「ジョージに何かあったの？」恐怖に喘ぐように尋ねた。

「いや。」ボールガーが答えた。

救われたという思いで、ルーシーの頬に血の気が戻った。

「ああよかった……」つぶやくように言った。「心配したわ。」

ルーシーはボールガーに微笑みかけながら、よく来てくれましたと、あらためて手を差し出した。何があったにせよ、結局そんなに恐れるほどのことではないだろう。

ルーシーの伯父、サー・ジョージ・ボールガーは長い間ボールガー・アンド・ケルシー商会の経営者の一人だった。彼は四半世紀のあいだ国会議員を務め、所属する政党のために勤勉忠実に投票を繰

り返した後、ヴィクトリア女王在位五十周年記念祝典のおり准男爵の位を賜った人で、富裕な商人の典型だった。商売に関しては先見の明があつたし、できる限りいろいろな面で地元のために尽くすことを誇りとしていた。最後は脳卒中で斃れたのだが、それは所有する或る土地を公園として国に寄贈するための開園式を行なっている最中のことだった。その父の跡をロバートが継ぎ、以前は一個人商會にすぎなかったものが今では株式会社で成長していた。だから、ロバート所有の自社株の数は父親の時よりも多かつたものの、会社における彼の責任は遙かに軽かつた。マンチェスターの本社はサー・アルフレッド・ケルシーの死亡時に迎えられる共同経営者が管理し、一方、父によつて実務家になるよう育てられたロバートはロンドン支社を任されていた。商人魂は血筋なのだろう、彼は称讃すべきエネルギーをもつてその仕事に取り組んでいたし、抜け目なさも具えていたから、ゆくゆくは父親と同じような優れた経営者になるのは明らかだった。歳はルーシーとほぼ同じだったが、金髪で、きれいに髭を剃っているため、ずっと若く見えた。仕立てのよい服をきちんと着て狩猟やゴルフの話に興じている姿を見たら、彼が毎朝十時には出社し、同業の誰にも劣らず熱心に商売に精出しているとはとても想像できなかつたろう。

ルーシーはボビーのことが気に入つてはいたが、いかにも世俗的なものの見方をいくぶん軽蔑もしていた。彼は読書に関心がなかつた。興味を引くものといえば喜劇だけだった。ルーシーはいつも彼を楽しそうにからかい、真面目に扱わなかつた。しかし、二人の関係が軽い友情を越えないようにしておくことは、なかなか骨の折れることだった。というのも、彼が十八の時から自分に恋していることを知つていたからだ。確かに悪い気はしなかつたが、ルーシーは彼に対して長い付き合いから

生まれる従妹としての感情以上のものは抱かなかつた。それに、自分たちが似合ひでないことにも気づいていた。ボビーがこれまでプロポーズした回数は十回ではきかず、ルーシーはその勤勉な申込みから自分を守るために様々な工夫をしなければならなかつた。愛していないと言つたところで何の役にも立たなかつた。ボビーは、どんな条件でもいいから、喜んでルーシーが決めた条件で結婚すると言つた。友人、親類は皆、彼の申し出を受け入れるようと熱心に勧めた。ケルシー夫人はルーシーの理性に訴えた。彼ならあなたも子供の時からずっと知つていて、完全に信用できるでしょう。一年に一万ポンドの収入があつて、正直者で、性格も優しいわ。父はこの縁組みに、慢性となつている経済的苦境からの救済の道を見出し、是非この子と結婚すべきだと説いた。弟ジョージも、従兄のことが大好きだったから口を挟んできた。ボビーが最初にプロポーズしたのは彼が二十一の時だった。次はルーシーが二十一になつた時で、ジョージがオックスフォードに進学し、父が破産し、ハムリンズ・パールが売り払われた年だった。館の売却が避けられないと判つたとき、ボビーはそれを買つてくれるよう父親に頼んだ。その館の所有者となることでルーシーの気持が自分のほうに傾くのではないかと期待したのだ。しかし、初代准男爵は根っからの商人だったから、儲からないと判つているものにお涙頂戴式の理由から投資するようなことはしなかつた。ボビーが最後にプロポーズしたのは爵位と莫大な資産を継いだ時だった。ルーシーも彼の人間としての良さとこの縁組みの利点は認めていたものの、彼を愛しているというところまではどうしてもいかなかつた。それに、父や弟の面倒を見るために必要な行動の自由を制限されるのは厭だった。クローリー夫人の、自分が手引きしてやればロバート・ポールガーは大人物になれるという言葉も、ルーシーのこころを動かすことはなかつた。

しかしボビーは従妹と結婚することを切望していた。それは彼にとって人生最大の関心事で、自分の忍耐が最終的にはあらゆる障害を乗り越えるだろうと期待し、喜んでその時を待つつもりでいた。

最初の不安が治まったときルーシーの頭に浮かんだのは、ボビーが来たのはまたあの永遠の問いかけをするためではないかということだった。しかし彼の目に浮かんでいる心配そうな表情を見て、それはないと確信した。いつもは陽気で子供っぽい顔が、今日はいかにも真面目、深刻だ。クロリー夫人は椅子に身を投げると顔を背けてしまった。

「ルーシー、話さなくてはならないことがあるんだけど……悪い知らせなんだ。」

ボビーが一所懸命努力して話そうとしていることは明らかだった。声を落ち着かせようとするために、かえって声がうわずっている。

「私はいない方が好いようですね？」アレックが訊いた。彼はルーシーに続いて応接間に入ってきていた。

ルーシーは彼の方を見た。問題が何であれ、彼がいてくれた方がそれに耐えられそうな気がする。

「ボビー、二人きりのほうが好いの？」

「もうディックさんとクロリー夫人には話したから……。」

「それで、いったい何なの？」

ボビーはディックの方に訴えるような視線を送った。この怖ろしいニュースを切り出すことは彼には辛くてできなかった。ルーシーに苦痛を与える勇気がなかった。しかし急いでこの田舎に来たのは、自分の口から伝えることで少しでも打撃を和らげるためではなかったか。電報を打つ気にはなれな

った。電報は冷酷無情すぎる。ボビーの普段は愛想の良い口元が動揺で引き攣るのを見て、ディックが前に進み出た。

「お父さまが詐欺罪で逮捕されたのです。」ディックの声は重々しかった。

しばらく誰も口をきかなかった。クロリー夫人にはこの沈黙は耐え難いもので、イギリス人の鈍感さを内心強く罵った。夫人はルーシーを見ていられなかったが、男たちは皆同情あふれた顔で彼女を見つめている。なぜルーシーは気を失わないのかしら、と夫人は思った。ルーシーは心臓が鉄の手で締め上げられ、血が搾り取られていくように感じ、気が狂いそうになるのをどうにか抑えていた。

「ありません。」やっとルーシーが声を出した。静かな声だった。

「昨夜逮捕されて、今朝ボー通りの警察裁判所に連行されました。一週間の拘留ということですよ。」

ルーシーは目に涙が溢れてくるのを感じたが、なんとかそれを押しとどめた。彼女は落ち着きを取り戻し、

「わざわざ伝えに来てくれてありがとう。」と穏やかな口調でボールガーに言った。

「ただし判事が五千ポンドで保釈を認めてくれてね。アリス叔母さんと二人でもう手続きしたよ。」

「じゃ、今は伯母さんのところにいるのね。」

「いや、お父さんはどうしても厭だっておっしゃってね。シャフツベリー通りの自分のアパートに帰られた。」

ルーシーはこの世で一番大切な弟のことを考え、こころが沈んだ。

「ジョージは知っているの？」

「いや、まだ。」

ディックはルーシーがほっとするのを見て、彼女が何を考えているのか理解した。

「じゃ、すぐに知らせなくては。」彼は言った。「おそらく新聞で何か見るでしょう。至急ロンドンに来るように電報を打ちましょう。」

「きつと、すぐに父が、すべては間違いだつたって明らかにしてくれれます。」

ルーシーの厳しい眼差しにボビーは困り果て、真実を言う勇気がでてこなかった。クローリー夫人が泣き始めた。

「ルーシーさん、あなたはよく分かっているらしいやらない。」ディックが言った。「残念ながら、これはとても重大な犯罪なのです。お父さまは裁判にかけられるでしょう。」

「でも、あなただつてご存じでしょう、父が法律に反するようなことができるはずないって。性格が弱くて、軽率なところはありますが、それだけです。月旅行をしようなんて考えないように、何か悪いことをしようなんて考える人ではありません。もし仕事上の無知から、なにか専門的なことで法律を犯したとしても、決して意図的なものじゃなかったって、すぐ明らかになるはずです。」

「いずれにせよ、中央刑事裁判所オールド・ベイリで裁かれることになるでしょう。」ディックの口調は重苦しいものだった。

ルーシーには事の重大性がまったく解っていない、ディックはそう思った。最初の驚きと恐怖が消えて、ルーシーは大したことではないと考えたがっているようだ。ロバート・ポールガーは、これももう全てを話すしかないと思った。

「フレッド叔父さんはソーンダーズという男と一緒に、ヴァーノン・アンド・ローフォードという名のバケットショップを経営していた。二人は名前を変えて商売するしかなかったんだ。なぜって、叔父さんは破産宣告を受けてたし、ソーンダーズのほうは裁判所の罪状認否の書類にしかな本名は使われないような男だから。」

「ルーシーさん、バケットショップって何だかご存じですか。」とディックが尋ねた。

彼はルーシーの答を待たずに、バケットショップというのは俗語で非公認の株仲間商を表わし、その商売は多かれ少なかれインチキなのだと説明した。

「二人を訴えたのはサビドン夫人という人で、夫人が投資のために預けたお金、全部で八千ポンド以上を遊興費に使ってしまったと告訴したんです。」

いま明かされたこの真実を前にルーシーは怯んだ。アレックとディック・ローマスの深刻な顔つき、従兄の悲しそうな、心配そうな顔つきを見て怖ろしくなった。

「まさか……重大な事じゃないんでしょう？」ルーシーが早口に訊いた。

ロバートはどう答えてよいか分からなかったが、ディックが適切な忠告を挟んでくれた。

「悲観しないで、……希望を持ちましょう。とにかく、いま唯一できることは、一刻も早くロンドンに行つて、法律上何ができるかを探ることです。」

しかしルーシーは、父を一瞬たりとも疑う自分を赦せなかった。考えれば考えるほど馬鹿げていた。「わたし、確信しています。父が他人様のお金をわざと盗つたなんて、絶対信じません。それじゃ、本当に泥棒じゃありませんか。」ルーシーは無理にも笑つてみせた。

「何にせよ、保釈してもらえたということは大きい。弁護の手筈を整えるのが楽になります。」

二時間後、ルーシーはディック・ローマスとボビーに伴われてロンドンへ向かった。アレックは、自分が一緒にいても迷惑になるだけだろうと考え、クローリー夫人から時刻表を借りて、一時間程あとの汽車で発つことにした。アレックの出発する時間が来たとき、クローリー夫人が突然、自分も一緒に行くと言いだした。こんな具合に招待客がいなくなり、空っぽになったコート・リーズ荘に一人残ることに耐えられないと感じたのだ。それにルーシーのことも心配だったし、もし助けが必要なら是非そばにいてやりたかった。

ジョージに電報が送られ、夕刻にはケルシー夫人の家に到着するだろうということになった。ルーシーは何が起こったかを自分の口から弟に伝えたかった。しかし、父に会うのをその時まで待つていられず、汽車がロンドンに着くと、ディックを説き伏せてシャフツベリーへ馬車を向けてもらった。父は留守だった。アパートの中で待ちたかったが、管理人は鍵を持っておらず、父がいつ戻るかも知らなかった。ディックはほっとした。逮捕、保釈と慌しく驚愕と不安、そして安堵感を味わった後では、フレッド・アラトンが深酒をしていることは充分考えられる。ルーシーに悪酔いしている父親の姿は見せたくなかった。明朝早くうかがうというメモを置いて今日のところは引き上げましょう、と彼はルーシーを説得した。チャールズ通りにあるケルシー夫人の住居に着くと、ジョージからの電報が届いていて、明日の午後にならないとロンドンには来られないとのことだった。これはルーシーにとって、父と一人で会えるという意味で有難かった。

翌朝、メモしておいた時間に出かけてゆくと、父はルーシーを両腕に抱き、愛情のこもったキスをした。ルーシーはすぐに、父のいつもの快活さに負けてしまった。

「ごめん、二分しか一緒にいられないんだ。仕事がいっぱいあってね。それに十一時には弁護士と約束があるし……。」

ルーシーは言葉が出てこなかった。父にしがみつき、不安な暗い目で父を見た。しかしフレッド・アラトンは笑って、娘の手を軽くたたきながら、

「あまり深刻に考えることはないよ。」と明るく言った。「こういう些細なことは、実業家にはしょっちゅう起こることなんだ。この商売に付きものの危険つてやつだね。まあ、我慢しなくちゃならない。王様や女王様が大砲の弾を我慢しなくちゃならないようにね。」

「お父さん、みんなが言っていることは本当のことじゃない……そうよね？」

父を傷つけるような質問はしたくなかったのだが、つい言葉が出てしまった。父はルーシーから離れた。

「本当のこと？ ルーシー、それはどういふことかな。私が未亡人や孤児からお金を奪うような人間に見えるかね。そんなこと、するはずないじゃないか。」

「そう聞いてうれし……。」ルーシーは安堵のため息をもらした。

「みんなに脅かされたんだな？」

父の率直で愉しそうな表情を見てルーシーは顔を赤らめた。父との間には何か壁がある。この壁はもう何年も存在しているものだ。それに父の態度には、上手く説明できないが、何か自分を不安にさ

せるものがある。ルーシーはこの漠然とした感情を分析しようとは思わなかった。父の陽気ではあるが肝心なことは語ろうとしない態度の裏側に注意深く隠されているもの、それを見るのが怖かった。ルーシーは無理やり言葉を継いだ。

「お父さんが、ときどき、ちよつとした思いつきに夢中になることは分かっています。それで今度も、なんとというか……まぎらわしい立場に陥ったのではないかと心配したんです。」

「正直、人から後ろ指を指されるようなことは何もしていない。ただ、ソーンダーズのような男と関わりを持ったことは本当に迂闊だった。残念ながらソーンダーズは間違ひなく悪い奴だ。あいつが何を企んでいたかは分からない。しかし誓って言うが、私は少しでも恥じなければならぬようなことは何もしていない。絶対に、何もね。」

ルーシーは父の手をとった。愛らしい笑みが浮かんだ。

「お父さん、ありがとう、そう言ってくれて。気が楽になりました。これでジョージに何も心配することは無いって言えます。」

そのときディックが現れ、二人の会話は中断した。フレッド・アラトンはここから彼を歓迎した。「ちよつど好いところへ来てくれた。ルーシーを送ってくれるね。私は出かけなくちゃならん。でも、ジョージも来ると言うし、……そうだろう？　ひとつカールトンでお昼はどうか、二時つてことで。アリスにも来るように言ってくれ。みんな楽しく食事でもしようじゃないか。」

アラトンが今回の件をあまりにも軽く見ている様子に、ディックはびっくりしてしまった。自分の立場の危うさを意識していないし、掛けられた嫌疑に無頓着なようだ。ディックはこの招待を受けたくなかったのだが、アラトンは言い訳を聞き入れてくれなかった。友人を自分の周りに集めるのが好きなのだ。それに、今から弁護士事務所まで退屈な時間を過ごさなくてはならないとなれば、その後ちよつとばかり寛ぐことも必要かもしれない。

「さあ、行こうか。」アラトンが言った。「ぐずぐずしてはられない。」

彼はドアを開けた。ルーシーが先に出た。ディックにはアラトンが自分との話を避けているように思われた。しかし誰だつて金を借りている人間と同じ部屋にいたいわけがない。アラトンが話したくなさそうなのも、単に自分に二百ポンドの借りがあるためかもしれない。しかしディックは一つ二つ訊いておかなければならないことがあった。

「もう弁護士はお決めたのですか。」

「ディック、私が小僧っ子だとも思うのかね。そう、いちばん有能な弁護士を雇ったよ。テディー・ブレイクリー、……君も知っているだろう？」

「評判だけは。」ディックは素つ気なく答えた。「まあ、評判だけで充分でしょうが……。」

フレッド・アラトンは例のごとく率直に笑った。独特のとても魅力的な笑いだった。アラトンが言った男は悪徳弁護士との評判で、商法関係の疑わしい訴訟を専門にし、過去十五年間の恥ずべき裁判にはほとんど名を連ねていた。法外な弁護士料を取った顧客ともども監獄に入ったことのないのが不思議なくらいだった。

「ヨボヨボ、コチコチの顧問弁護士のところに行つても無駄だと思つてね。弁護のコツを知り抜いた男が欲しかったんだ。」

二人は階段を下りていった。ルーシーが下で待っていた。ディックは立ち止まり、振り向くと、アラトンに鋭い視線を送った。

「まさか、夜逃げしようなんてお考えじゃないでしょうね。」

アラトンは愉快そうな顔をして、ディックの肩に手を置いた。

「ディック、冗談は抜きだよ。ソーンダーズのことは分らんがね——あいつは胡散臭い奴だ——しかし私は大丈夫、堂々と切り抜けてみせるさ。起訴事實は根も葉もないものなんだからね。」

アラトンは昼食と一緒に取る件をもう一度確認すると、辻馬車キヤブに飛び乗った。ルーシーとディックはチャールズ通りに向かってゆつくりと歩き始めた。ディックは口数が少なかつた。フレッド・アラトンとはしばらく会っていなかったもので、昔のスマートさを取り戻していたことがディックには驚きだつた。アパートにあつた様々な調度品からは借家人の趣味の良さと同時に金回りの良さが見て取れたし、着ている服は新しく、高級店で仕立てられたことは明らかだつた。カールトンで食事をしようという誘いからも、当座の金に困っていることはありえない。彼の周りには、いわゆる金持ちだけが持つ雰囲気キョウキが漂よっていて、ディックは考えなくてはならないことがあるような気がした。

ケルシー夫人の住居すまいに着いたとき、ルーシーはディックをお茶に誘まねわなかつた。もうジョージが到着しているかもしれない。弟とは二人きりで話したかつた。二人は二時に再び会うことを確認した。握手をしながら、ルーシーは父が言ったことをディックに話した。

「ゆうべは寝られませんでしたわ。なんて莫迦ばかだつたんでしょう。わざとではないにしても、父がなにか軽率な、愚かなことをしてしまつたのではないかと考えるが頭から離はなれなかつたのです。でも、

何も問題はないと神にかけて誓ちかってくれたとき、突然肩の荷が下りたように感じました。もうまつたく心配していません。」

カールトンでの会食は楽しいものだつた。フレッド・アラトンは上機嫌そのもので、次から次へと面白い冗談を飛ばし、その陽気さにみんなが感染した。ルーシーは今回の事件をジョージにはできるだけ些細なものとして説明しておいた。いまルーシーはテーブルの反対側に坐まつた弟を見ながら、幸福と満足感を覚えていた。ときどき弟が自分の方を見て愛情あふれる笑みを唇くちびるに浮かべる。ほっそりして、なんてハンサムなんだろう。純真な青い目、端正な口元。光り輝く顔には率直で誠実な性格が滲にじみ出ている。ルーシーは誇ほらしかつた。そして、父親譲りのえも言われぬチャーミングな物腰に魅ひせられるのだつた。初めて会う人が父に魅ひせられてしまうのも無理はない。今晚は弟を独り占めしたくて、一緒にお芝居でも見に行かないかと誘いつた。ジョージは是非行きたいと言つた。というのも、彼はルーシーをここから崇拜おほまつしていたからだ。彼は誰かに守つてもらう必要性を感じていたが、姉にはそれができた。だから姉の側そばにいるときほど幸せを感じることはなかつた。自分のしていることを何から何まで姉に話したが、ルーシーが彼のここを高邁な野心で燃え上がらせると、どんなことでもできそうな気がするのだつた。

芝居見物に出発したとき、二人は可笑おかしいくらい浮き浮きしていた。ケルシー夫人は、楽しんでいらつしやい、とジョージの手にお札を二、三枚握にぎらせた。二人はカールトンで夕食をとつた後、ミュージカルコメディーを見に行つた。ルーシーはいつになく楽しんだ。弟が心底愉快そうに笑うからだ

——弟には楽しいものを楽しいと素直に喜べる力がある。そして最後はサヴォイでの夜食だった。食事の間、ルーシーは心配事をまったく忘れていた。ここ数年間の苦勞もすべてどこかへ消え、弟と一緒に、陽気に、気楽に今宵を楽しんでいた。ジョージは嬉しくて仕方なかった。姉がこんなにも優しく、こんなにも浮き浮きしているのは見たことがなかった。目には新しい輝きがあった。そして、これまでとどこが違うのかよく分からなかったが、笑い声の中に甘く柔らかな響きが聞こえるような気がして、不思議な喜びで全身が満たされるのだった。ルーシーも、なぜ世界が突然これまでになく充実して見えるのか、なぜ未来が優しく微笑みかけてくるのか分からなかった。自分が恋をしているとは考えもつかなかったのだ。

疲れ切って——けれど満ち足りた気持で——自分の部屋に戻ると、ルーシーは今宵の至福を神に感謝した。しかし、何年にもわたって続く辛い年月としつきの中で、これが神に至福を感謝できた最後の時だったのである。

数日後、アラトンは再び裁判所に出頭した。判事は、彼を公判に付すために、仮釈放の延長を認めなかった。アラトンは拘留所に移された。

それからの二週間、アレックは多くの時間をルーシーと過ごした。彼女の肩に重く押しかかる時間を紛らすために、一緒にハイド・パークをゆっくりと散歩し、仕事が許せば国立美術館へ誘った。歴史博物館へも連れていってくれた。そこで毛皮や羽を素材にしたアフリカの品々を見ながらアレックの話に耳を傾けていると、ルーシーの目の前に彼の旅した国が生き生きと浮かんでくるのだった。彼女は、絶えずこころを占めていることから気を逸そらそうとしてくれるアレックに感謝した。決して言葉を重ねて同情を表わすわけではないが、話すときの抑揚の中にいつもそれは感じとれた。アレックは素晴らしく忍耐強い人だった。

そして、とうとう、裁判の日がやってきた。

フレッド・アラトンが、ルーシーもジョージも中央刑事裁判所オールド・ベイリーには来ないようにと強く言っていたので、二人はケルシー夫人の家で判決を待った。ディックとロバート・ポールガーは証人として召喚されていた。ルーシーは不安な状態から一刻も早く解放されたくて、アレック・マッケンジーに裁判所に行ってもらい、判決が下され次第知らせられるよう頼んであった。

午前、時間の歩みは鉛の靴を履いているようだった。

昼食後クローリー夫人がやってきて、ケルシー夫人とともに居間に坐り、時計の針が回るのを見つめていた。もう何時判決が出されてもおかしくない時間だ。しばらくして執事が、スプラット氏が夫人にお会いしたく玄關におみえになっています、と知らせしてきた。氏はケルシー夫人が通う教会の参事司祭だった。気晴しになるかもしれないからお通ししたら、とクローリー夫人は勧めた。スプラット司祭の女性に対する宮廷風で活潑な態度は、普段ならばケルシー夫人のどんな悩みでも軽くしてくれるのだが、さすがに今日は慰めにならなかった。

「きつと一生後悔するわ。」ハンカチを目に当てながら夫人が言った。「一生自分を責め続けるでしょう。もしあたしがいなかったら、こんなことにはならなかったんだから。」

スプラット司祭もクローリー夫人も答えようがなく、ただ夫人を見つめていた。ケルシー夫人は体格の良い、親しみやすい人だったが、今日は、沈痛な状況に合わせたのだろう、黒い服を着て、悲しみのためか、いつもより話がぐどくなっていた。

「かわいそうなフレッド。ある時あたしに会いに来て、今すぐどうしても八千ポンドいると言ったの。共同経営者にだまされたそうで、生きるか死ぬかの問題だつて。でも、あんまりにも大きな額だったし、それまでもフレッドにはたくさんお金を貸してあったでしょう。それに、なんと言っても、ルーシーとジョージのことを考えなくちゃならなかったし。ルーシーもジョージもあたし以外に頼る人がいないんですもの。それで貸すのを断ってしまった……。ああ、あの時貸してあげられるだけ貸しておけば……。こんなひどいことになるくらいなら……。」

「ケルシーさま、あまりお氣になさらないで。」クローリー夫人が言った。「すぐに何もかも解決しますわ。」

「現在でこそアラトン氏とわたくしの道は分かれておりますが、」スプラット司祭が言った。「昔はよくお会いしたものです。今回の不幸な出来事をお聞きしてどんなに心を痛めたことか、口では申し上げられません。」

「あの人は本当に運のない人なの。今度のことが良い教訓になってくれることを祈るだけ。ああ、考えるだけでも怖ろしい。妹の夫が被告人席に立たされているなんて。」

「お考えにならないことです。きつと何もかもうまくいきます。もう一時間もすれば、きつとまたあなたの方のもとへお帰りになります。」そう言うと、司祭は立ち上がり、ケルシー夫人と握手した。

「来てくださってありがとうございます。」

司祭は次にクローリー夫人の方を向いた。彼はこの夫人が気に入っていた。アメリカ人だし、金持ちだし、おまけに未亡人ときている。

「わたくしからも感謝申しあげます。」別れの握手をしながら夫人がつぶやいた。「司祭さまというのはいつも人々を助け、その不幸を背負ってくださいるのですね。」

スプラット司祭は微笑みながら、いつか自分で使えそうだと思ひ、この言葉を心に留めた。

「ルーシーはどこに？」司祭が出てゆくと、クローリー夫人が尋ねた。

ケルシー夫人は手を肩よりも上に挙げ、感情を素直に表に出す人が自制心の強い人にもいつも抱く、半ば驚嘆、半ば苛立ちの表情を見せた。

「部屋で本を読んでいるわ、朝からずうつと。どうして本なんか読んでいられるのか、分からない。あ

たしも読もうとしてみた。でも、だめ。文字が目の前でふらふら揺れてしまうの。あの子が冷静でいるのを見ると、あたし、気が狂いそう。」

二人はこの件が解決した後のことを話し始めた。ケルシー夫人はかなりの金額をルーシーの自由になるようにしてあったのだが、この怖ろしい試練が終わったら、子供たちは、それを使って、南フランスの何処かゆつくり休めそうな所へ父親を連れてゆくことになっていた。

「あなたがいらつしやらなかつたら、二人はどうなっていたことでしょう。あなたは本当に天使のような方ですわ。」

「とんでもない。」ケルシー夫人は少しだけ笑みを浮かべた。「あたしにはあの子たちしかこの世に親類はいないのよ。ボビーを除いたらね。でもボビーには充分すぎるほど財産がある。だから、あたし、ルーシーとジョージを本当の子供みたいに思ってるの。二人を幸せに、何不自由なくさせてあげられなかつたら、あたしのお金なんてなんの価値もないわ。」

クロリー夫人はディックの推測——ケルシー夫人はかつてフレッド・アラトンを愛していたという言葉——を思い出した。はたして今でもその気持が残っているのかしら、残っているとすれば、どのくらい？ そう思うと、クロリー夫人はこの親切無私な人に大きな憐れみを感じた。通りに面したドアが閉まる音がして、ケルシー夫人がハツとして立ち上がった。しかし、入ってきたのはジョージだった。

「まあ、ジョージ、どこへ行ってたの？ なぜお昼御飯を食べに来なかつたの？」

ジョージは蒼褪め、目が落ち窪んでいた。この二週間の心労が大分堪えていることは明白だったし、神経の高ぶりにほとんど耐えられない様子だった。

「なにも食べる気にならないんです。この忌々しい時間が早く過ぎてくれるようになって、歩き回っていたんです。裁判所に行かないなんて父さんと約束するんじゃないやなかつた。今の宙ぶらりんの状態に比べたら、どんな状態だつてマシです。父さんと弁護士が昼食に行くところに出会いましたが、弁護士は大丈夫だつて言っていました。でも……」

「もちろん大丈夫ですよ。お父さんが有罪になるなんて、あなた、思わないでしよう？」

「父さんがあんなことをしたなんて絶対信じません。」ジョージは苛々していた。「でも、心配で心配でたまらないんです。新聞を見ましたか。ひどいですよ。大見出しで『地方郷土、中央刑事裁判所に』だとか『いかさま仲介屋とつながり』だとか出てます。」

ジョージは悍しさに身震いした。

「ああ、いやだ、いやだ。」彼は叫んだ。

ケルシー夫人が再び泣き始めた。クロリー夫人はどう慰めたらよいのか分からず、黙って坐っているしかなかった。ジョージは興奮して部屋の中を行ったり来たりしている。

「でも、あたしには分かっています、あの人は無実だって。」ケルシー夫人が呻くように言った。

「有罪だろうが無罪だろうが、父さんのおかげで僕はもう破滅です。こんなことがあった後じゃ、もうオックスフォードへは戻れません。ああ、いったい僕はこの先どうなるんだろう。僕らの名誉は丸潰れだ。父さんはなぜ……、なぜ……」

「ああ、ジョージ、やめて。」ケルシー夫人が言った。

しかし、ジョージは、聞き分けのない子供のようには、残酷な事実を知らされて以来ここに蟠わたかまっていた苦々しい言葉を抑えておくことができなかった。

「自分のお金を、一文残らず、くだらないことに費やして、……僕ら二人を乞食みたいにして、あなたの慈悲にすがって生きなくちゃならないようにした、……それだけじゃ、まだ充分じゃないっていうのか。僕ならそれで充分だと思う。なにも、いかさま商法に首を突っ込んで刑務所に入らなくて。」

「ジョージ、お父さんのことをそんなふうに言うもんじゃないわ！」

ジョージは啜すすり泣きを始め、挑むような目でケルシー夫人を見た。しかしそのとき馬車が近づく音がした。彼はビクツとしてバルコニーへ走った。

「ディック・ローマスさんとボビーさんだ。きつと結果を知らせに来たんだ。」

ジョージは走っていつてドアを開けた。二人が外階段を上がってきた。

「それで？」彼は叫んだ。「それで？」

「まだ判決は出ていないんだ。」ロバート・ボールガーが言った。「判事が陪審員に事件の概略、要点をもう一度説明しようというとき出てきたんだ。」

「馬鹿！　なんで！」突然の怒りに駆かられてジョージが叫んだ。

「まあ、落ち着いて。」ディックが言った。

「どうして残っていなかったの？」ケルシー夫人が呻くように尋ねた。

「できなかったのです。」ディックが答えた。「あまりにもひどくて。」

「裁判はどんなふうに進んだの？」

「それが何が何だかさっぱり……。頭がくらくらして、自分が古いぼれの、ヒステリックな人間だっ
てことが、よく分かりました。」

クローリー夫人がケルシー夫人に歩み寄ってキスをした。

「少し横になってお休みになられたらいかがですか。本当にお疲れでしょう。」

「ああ、頭痛がする。」とケルシー夫人が呻くように言った。

「マッケンジーさんが裁判が終わり次第来ると約束してくれました。でも、あと一時間は帰って来られないと思いますわ。」

「そうね、じゃ、横にならせてもらいましょう。」

ジョージは苛いら々を押さえておくことができずに、窓を開け、バルコニーに立って、知らせをもたらしてくれる馬車が早く来ないかと外を眺めていた。

「彼に話しかけてやってくれないか。かわいそうに。」とディックがロバート・ボールガーに向かつて言った。「元気づけてやってくれ。」

「ええ、もちろん。もうすぐ終わるといときに騒ぎ立てるのは馬鹿げてます。一時間もすればフレッド叔父さんはここに帰ってくるんですから。」

ディックはなにも答えずに彼を見ていた。ロバートがバルコニーに行ってしまうと、ディックは疲れきったように椅子に身を投げだした。

「もうこれ以上耐えられない。アラトンさんが惨めに被告人席に立っているのを見ているのがどんなに辛いことか、あなたには想像できないでしょう。まるで猟師に捕まった動物のようでした。顔は恐怖で灰色になり、一度眼が合いましたが……、あの眼の表情は決して忘れないでしょう。」

「アラトンさんなら立派に耐えられるだろうと思っただけです。」クローリー夫人が言った。

「ねえ、あの人はこれまで現実というものをまともに見ようとしたことがないんです。自分が告訴された犯罪の重みがまったく分かっていなかったようで、判事が保釈期間の延長を認めなかったときでさえ、それがどんな意味を持つのか考えず、相変わらず自信満々でした。今日になって初めて、事実関係がすべて明らかにされて、やっと理解したようでした。ああ、次々に明らかにされた証拠、証言をあなたもお聞きになったら！ それから、あの二人が互いに罪をなすりつけようとする見苦しい姿をご覧になったら！」

クローリー夫人の顔に恐怖の表情が走った。

「まさか、アラトンさんが有罪だなんてお考えじゃ？」喘ぐように言った。

ディックは夫人をじっと見ていたが、なにも答えなかった。

「でも、ルーシーはお父さんが無罪放免になると信じていますわ。」

「でしようか？」

「一体全体、どういう意味？」

ディックは肩をすくめた。

「でも、アラトンさんが有罪だなんてはまずありません。」夫人が叫んだ。「ありえないことですわ。」

ディックは心を占めている恐ろしい考えを振り払おうと努めた。

「ええ、そうです。私も同じ気持です。いろいろと欠点はありますが、アラトンさんがあんな恥ずべき犯罪をおかしたはずがない。あなたは会ったことがないから、アラトンさんのことをご存じない。

しかし私は二十年も親しく付き合ってきた。アラトンさんがあの惨めな婦人から有り金残らず騙し取ったなんてことはありえない。それは婦人に飢え死しろということなんです。そんな冷酷無慈悲になれるはずがない。」

「ああ、そう言っていたらうれしいわ。」

しばらく二人は何も言わなかった。バルコニーからジョージが早口で話す声が聞こえてきたが、何を言っているのかは分からなかった。

「いたたまれなかったのです、裁判所にとどまって、あの不幸な人が苦しむ姿を見ているのが。アラトンさんとは数え切れないくらい一緒に食事をしましたし、お宅に泊めてもらったこともある。馬にも乗せていただいた。ああ、なんて酷いことに！」

ディックは苛立たしそうに立ち上がると、部屋の中を行きつ戻りつしはじめた。

「もう終わっているはずなんだ。なぜアレックは来ないんだ。判決が出次第、急いで来ると言っていたのに。」

「こんな宙ぶらりんの状態、いやだわ。」

ディックは立ち止まると、この小柄なアメリカ女性の方を向いたが、目は夫人を見ていなかった。

「生まれつき道徳観念を持っていない人間がいるんだ。赤と緑の区別ができない色盲の人間と同じで、

善と悪との区別ができないんだ。」

「なぜそんなことおっしゃるの？」

ディックは答えなかった。夫人は立ち上がり、不安そうに彼に近寄った。

「ローマスさま、耐えられません。教えてください、あなたはどう思っているの？ アラトンさんは有罪なんですか？」

ディックは手のひらで目を掩った。

「証拠はひどいものでした。」

そのときジョージが部屋に飛び込んできた。

「アレックさんだ。辻馬車が来る。」

「ああ、よかった。」クローリー夫人が叫んだ。「こんな状態がもうこれ以上続いたら、気が狂うところだった。」

ジョージがドアの方へ急いだ。

「ミラーに言わなくちゃ。誰も入れるなって言ってるから。」

彼が手摺ベニスターに寄りかかると、玄関のベルが鳴った。

「ミラー、ミラー、マッケンジーさんをお通ししてくれ。」

「かしこまりました。」執事が答えた。

ルーシーも辻馬車が近づく音を聞いていたので、居間に入ってきた。ケルシー夫人も一緒だったが、夫人はすっかり取り乱し、嘔り泣いていた。ルーシーは顔がすこし蒼褪オサめていること以外、まったく

落ち着いて見えた。彼女はディック、次いでクローリー夫人と握手した。

「お出でいただいてありがとうございます。」

「ルーシー、かわいそうに。」クローリー夫人は涙声だった。

ルーシーは気丈に微笑んだ。

「もうすべて終わりましたわ。」

アレックが入ってきた。ルーシーは結果を知りたくてたまらないかのように彼に近づいた。

「それで？ あなたが父を連れてきてくださるものと期待していたのですが。父はいつ戻るんですよ？」

ルーシーは言い淀んだ。アレックの表情を見て息を呑んだ。彼女の頬は、先ほどまでも青白かったが、いまや死人のようだった。

「どうでしたの？」

「すべてうまくいったんでしょ？」ジョージが叫んだ。

ルーシーは弟を落ち着かせようと、彼の腕に手を置いた。アレックは言葉が見つからないようだった。恐ろしい沈黙が続いた。しかし、アレックが何を言うかは誰も判っていた。

「残念ながら、心の準備をしていたただかなくてはなりません。辛い知らせです。」

「父はどこに？」ルーシーが叫んだ。「父はどこ？ どうして連れてきてくださらなかったの？」

恐ろしい事実が判り始めるにつれ、自制心を失いそうになるのを、ルーシーは必死に堪こらえた。アレックがそれ以上にも言ってくれないので、自分の方から質問せざるをえなかった。

「判決がどうだったのか、まだおっしゃっていませんわ。」自分の声が低く掠かすれていることにルーシーは気がついた。

「有罪です。」

頬に血の気が戻り、目は怒りに燃えた。

「でも、ありません。父は無実です。父は、やっていないと誓ってくれました。何かひどい間違いがあるに違いありません。」

「私もそうであってほしいと思っています、心から。」

「あなたは、父が有罪だとはお思いにならないでしょう？」ルーシーは叫んだ。

アレックは答えなかった。しばらく二人はお互いを見つめていた。

「刑はどんな？」ルーシーが尋ねた。

「判事はお父さまに対してきわめて厳しく、判決の言い渡しに際してかなりきついことを述べました。」

「どんなことを？ 教えてください。」

「どうして自分を苦しめたがるのですか。」

「知りたいんです。」

「判事は、お父さまが紳士の身分だから、なお一層この犯罪が憎むべきものだと考えているようでした。それに、あの婦人から金を騙し取ったやり方がやり方だから、どんな刑罰でも厳しすぎることはないと言っていました。判決は、強制労働を伴う七年の懲役です。」

ジョージは、ああと叫ぶと椅子に沈み込み、泣き出してしまった。ルーシーは弟の肩に手を置いて、

「泣かないで。」と言った。「耐えなくてはいけない。勇気を出して、さあ。今こそ、これまで以上に勇気が必要なときなのよ。」

「ああ、僕にはとても耐えられない。」彼は呻くように言った。

ルーシーは屈かがんで、優しく弟にキスをした。

「さあ、勇気を出して、ジョージ。わたしのために、勇気を出して。」

しかし彼は自制できずに泣き続けた。痛ましい光景だった。ディックが腕をとってジョージを部屋から連れ出した。ルーシーはアレックの方を向いた。アレックは入ってきたときと同じ場所に立ち尽くしていた。

「一つお聞きしたいことがあります。わたしにとってこのうえなく辛いものであるとお考えになっても、ぜひ正直に答えてください。」

「ええ。」

「あなたは最初から最後まで傍聴して、裁判の一部始終をご承知のはずです。あなたも、父は有罪だと思いませんか？」

「私がどう考えるかは問題ではないでしょう。」

「お願い、教えて。」

アレックはしばし躊躇ためらっていたが、やがて沈痛な面持ちで答えた。

「もし私が陪審員だったとしても、残念ながら、彼らが下した評決以外のものは下せなかったでしょう。」

ルーシーは頭を垂れた。大粒の涙が頬を伝って落ちた。

7

翌朝、ルーシーはアレックから、今日会ってもらえないかという短い手紙をもらった。午後早い時間に行くつもりだが、できれば二人だけで会いたいと言う。ルーシーはケルシー夫人の書斎に坐ってアレックを待った。本を手に持っていたが読めなかった。やがて涙が流れてきた。あの恐ろしい知らせを聞いて以来ずっと、自制心を失うまいとできるだけの努力をしてきた。昨夜は悲しみに負けないよう拳を握りしめていた。ジョージのためにも父のためにも気持を強く持たなければ……。しかし今、その緊張はあまりに強いものとなり、誰もそばにいないこともあって、涙がどうしようもなく流れ始めたのだ。ルーシーはあえてそれを押さえようとしなかった。

父に面会することは許された。ルーシーとジョージは連れだって拘留所に行ったのだが、今、その短かった面会のことをルーシーは細々と思いついて出していた。何もかもがひどかった。心臓が破れるのではないかと感じられる面会だった。

昨夜は憤りに捉えられていた。裁判の記事をいくつかの新聞で読めば、父が有罪となつてしかるべきだということは疑いようもなかったし、ぞつとするほど卑劣な犯罪だった。金を騙し取った婦人に宛てて父が書いた手紙がいくつか法廷で読み上げられたのだが、その内容を思うと顔に血が上るのを

覚える。手紙はまったくの嘘八百、偽善的で恥知らずなものだった。ルーシーは、アレックにした質問と彼の答を思い出した。

しかし、父が有罪であることを納得するのに、実は、新聞もアレックの言葉も必要なかったのである。父を疑う自分を強く責めながらも、自己の存在の深いところで、ルーシーは初めから父の有罪を確信していた。確かに、父を疑っていることを自分自身に対しても認めようとはしなかった。言葉の端々に、考えていることの隅々に、父の無実を固く信じるルーシーの気持が現れていた。が、意識のどこか奥まったところには、いつも、身の毛のよだつような或る怖ろしいものが潜み、それが、実体を持たない、謎めいた影のようにここに取り付いていたのである。ロバート・ポールガーがコート・リーズ荘に父逮捕の知らせを運んできたとき初めて、ルーシーは、あたかも生きた手で背後から驚掴みにされるように、この恐怖に捕らえられた。次はシャフツベリー通りの父のアパートを訪れたときだった。そこでルーシーは、人の好い、ふざけた笑顔の裏側に竦むように隠れている恥ずべき人間を見たのだった。魅力的な物腰、子供たちに対する優しい愛情にもかかわらず、父が嘘つきで、ごろつきだということは分かっていた。ルーシーは父を憎んだ。

しかし、今朝父に面会すると、その顔にはディックが法廷で気づいたという「捕らえられた獲物」のような表情がまだ残っていて、この前会った時からのあまりの変化に、怒りは解けだし、憐れみだけを感じるのだった。ルーシーは自分を責めた。父が苦しんでいるとき、どうして薄情になれるのか。初めのうち、父は口を開くことができず、黙って、訴えるように二人の子供を代わる代わる見つめていた。そして、ジョージの顔に浮かんでいる、どうしようもなく惨めな気持を見てとったようだった。

ジョージは、父を見るのが恥ずかしいと思うのだろう、視線を逸らしていた。父は突然年老い、腰が曲がってしまったように見える。頬は寡れ、肌は死にかかった人のように灰色で、卑屈に縮こまろうとする態度がすでに表われ、早く人間世界から消えてしまいたいと考えているかのようだ。両腕に抱きしめてやれないのが辛かった。父はまったく取り乱し、啜り泣いていた。

「ルーシー、私を憎んでいないだろうね？」父は囁くように言った。

「憎むどころか、今ほどお父さまを愛したことはありません。」
これは本当の気持だった。ルーシーは良心の呵責に苛まれていた。この不幸を避けるために自分に来たかもしれないこと、やらずに済ませてしまったことは一体何だったのだろう、と苦々しい気持で考えていた。

「あんなこと、するつもりはなかったんだ。」父が途切れ途切れに言った。
ルーシーは父の疲れきった憐れな目を見た。その臉にキスしてやれないのが辛かった。

「時間さえもらえれば、金は全部返すつもりだったんだ。ずっと運がなくてね。私はおまえた二人には悪い父親だった。」

ルーシーは父に、八千ポンドはケルシー夫人が返済してくれることになったと告げた。この善意の人は、ルーシーがお願いする前にすでに、そのことを考えてくれていたのだった。何はともあれ、あの不幸な婦人が物乞いの生活をしなければならぬ心配はなかった。

「アリスはいつも本当に善い人だった。」アラトンが言った。今やルーシーだけが唯一の頼りであるかのように、彼は娘に縋りついていていた。「ルーシー、私がいなくなっても、私のことを忘れないでい

てくれるだろうね？」

「時間の許すかぎり会いに来ます。」

「長くはないと思う。早く死にたいよ。」

「そんなこと、お考えになつてはいけません。わたしのためにも、ジョージのためにも、お体を大切にしてください。わたしたち、お父さまをずっと愛しています。」

「こんなことになつて、ジョージは一体どうなるんだろう？」

「みんなで弟にできることを何か探してみます。ご心配なさらないで。」

ジョージは顔を赤らめた。恥と怒りで、言うべき言葉が見つからず、この忌まわしい場所から一刻も早く立ち去りたかった。看守が時間だと告げたとき、救われる思いがした。

「さよなら、ジョージ。」フレッド・アラトンが言った。

「さよなら。」

ジョージは不機嫌に視線を床に落としたままだった。息子が自分を憎んでいることが分かり、アラトンの表情が一層絶望的になった。彼の愛情は、決して深いものとはいえないにせよ、すべてこの息子に注がれていたのだ。ハンサムな息子を誇りにもしていた。それが今、息子はひたすら自分を避けようとしている。辛辣な言葉が口元まで出かかったが、その言葉を吐くには心はあまりに重く、代わりに、啜り泣くことしかできなかった。

「ルーシー、いろいろと迷惑をかけてすまない。」

「元氣を出して、お父さま。わたしたち、いつもお父さまのこと大切に思っています。」

フレッドは口元に笑みを浮かべようと努めた。ルーシーが「わたしたち」の中に弟を含めていることは確かだったが、実際には、「わたしたち」がルーシー一人を意味することもフレッドには分かっていた。子供たちは帰つていった。彼は振り向くと、暗い留置場へと戻った。

涙を流したことで、ルーシーはいくらか楽になった。泣くことで肉体は消耗し、心の悶えも少しは耐えやすくなつたように感じられた。今は未来のことを考えなくては……。アレック・マッケンジーがもうすぐ来る。なぜあの人は手紙をよこしたのか。何を言いに来るのだろう。何か問題でもあったのだろうか。ルーシーは父のこと、弟のことしか考えられなかった。彼女は涙を拭くと、大きく一息を吸い込み、いろいろと厄介な問題について順序立てて考え始めた。

アレックが来た。ルーシーは立ち上がり、落ち着いた態度で彼を迎えた。アレックはルーシーの魅力に圧倒され、しばらくは、黙つて彼女を見つめるばかりだった。人生の悲劇的局面において己の最良のものを示す女性がここにいる。魂の苦しみがこの人の美しさを一層高め、暗い眼差しは蒼褪めた顔に莊重とも言える哀愁を与える。この人は、怯むことなく、目を背けることなく、悲しみに立ち向かおうとしている。アレック自身、英雄的行為の何たるかを知っていたので、ルーシーが強い精神力の持主であることは容易に理解できた。彼は最近何度か『高地に立つダイアナ』の肖像画を観る機会を持ったのだが、クロリー夫人同様、彼もまたその絵の中に健康で優雅なルーシー・アラトンを見ていた。しかし今日のルーシーは何か悲嘆にくれる女王といった雰囲気だった。芯の芯までイギリス

的で、耐え難い悲しみを高い気位きゐをもって耐えているが、しかし、その品位ゆえにすべてが美に変容している。

「どうぞ赦してください、こんなふうは無理に会っていたいただいたこと。」アレックがゆつくりと語り始めた。「ただ、私の時間が限られていて、すぐにもお話ししておきたかったです。」

「来てくださってありがとうございます。」ルーシーは当惑していた。何をどう言ったらよいのかわからなかった。「いつでも喜んでお会いしたいと思っていますわ。」

アレックはじつとルーシーを見つめている。この何でもない言葉を心の中で反芻はんすうしているようだ。ルーシーは微笑んだ。

「この数週間あなたが示してくださったご親切に対して、感謝申し上げたいと思っております。本当によくしていただきました。いろいろなことに耐えなくてはならないときに、あれこれと助けていただいて……。」

「もっと何かしてさしあげられたら、……。」

突然、ルーシーの頭に、なぜアレックが今日来たのが閃ひらめいた。心臓の鼓動が胸を打つのを感ずる。これまで考えたことのないことだった。ルーシーは腰掛けると、アレックが話し出すのを待った。彼は立ったままだった。ところが何かに捉えられたとき、目立って動きの少なくなる人のようだ。

「二人だけで会っていただけじゃないかと手紙でお願いしたのは、あなたに申し上げたいことがあったからです。コート・リーズ荘に滞在したときからずっと申し上げたいと思っていました。私は、私はイギリスを去る身です——いつ戻って来られるかわからないし、ひよつとすると何かが起こるかもし

れない——だから、これを申し上げることは、あなたに不当な重荷を負わせることになるのではないかと思っていたのです。」

彼は息をついた。視線はルーシーの瞳の上に注がれたままだ。ルーシーはアレックが続けるのを待った。

「申し上げたかったのは、結婚していただけないかということですよ。」

ルーシーは深く息を吸った。緊張のなかにも落ち着いた表情だった。

「そう言うてくださる思い遣り、ここからあります。どうか誤解なさらないでいただきたいの。本当にうれしく思います。でも、できませんわ。」

「なぜ？」アレックが静かに訊いた。

「わたしは父の世話をしなくてはなりません。もし少しでも役に立つようなら、刑務所の近くに住もうと思っています。」

「私と結婚したからといって、そうしてはいけない理由はありませんが。」ルーシーは首を横に振った。

「何かに拘束されるわけにはまいりません。父が保釈されたら一緒に暮らさなくては、と思っっています。それに、あなたの家のような立派な家名を、わたしのような者が名告なつることはできません。それでは、いかにも、アラトンという穢けがれてしまった名前から逃げ隠れるようですわ。」

ルーシーはしばし躊躇ためらった。思っていることを口にするのは恥ずかしかったが、それでも、彼女は低く震える声で話し出した。

「あなたにはお解りいただけないかもしれませんが、わたしはアラトンという名と家系にとっても誇りを持っていました。何世紀の間、アラトンの家は正直で恥ずかしくない生活を送ってきました。イギリス国家を造る一助となってきたとも感じていました。それが今、まったくお恥ずかしい態になつてしまいました。ディック・ローマスさまなどは、わたしがアラトン家をあまりに誇りにするのでお笑いになっていましたわ。正直、馬鹿でした。わたしは階級といったものにはあまり注意を払ったことはありませんが、家というものは別だと思っていました。でも、父を見て解りました。父は、自分が卑しむべき恥ずかしいことをしたとはまったく考えていません。我が家の血筋の中には何か道徳的に腐つたところがあるに違いありません……。あなたとは結婚できませんわ。子供がわたしたちの血の中にある穢れたものを受け継いでしまいますもの。」

アレックはルーシーの言葉に耳を傾けていたが、このとき、彼女に近づくとその両肩に手を置いた。その落ち着いた態度、しつかりした声がルーシーのこころを鎮めてくれるようだった。

「私の妻になってくだされば、あなたがお父さまとジョージ君を助けるのも容易になると思うのですが……。失礼ながら、現在のあなたの立場は非常に難しいものです。ぜひ私にあなたを助ける喜びを与えてもらえないでしょうか。」

「わたしたちのことは、わたしたちで解決しなくてはなりません。あなたにはとても感謝しています。でも、していただけることは何もありませんわ。」

「私はとても不器用で馬鹿な男ですので、言いたいことをどう言ったらいいのか分からないのですが、コート・リーズ荘に行った最初の日からあなたを愛してしまつたようなのです。その時はなにが起こ

つたのかよく分からなかった。何か新鮮な、不思議なものが自分の生活の中に入り込んできた、突然そんなふうに感じました。そして、日が経つにつれて、ますますあなたを愛するようになった。最後には、あなたがこころの全てを占めてしまうようになった。これまであなた以外の人を愛したことはない。これからもあなた以外の人を愛することはないでしょう。私はあなたという人をずっと探し続けてきたような気がする。……」

ルーシーは彼の目の表情に耐えられなくなって、視線を膝に落とした。ルーシーの睫が頬にえも言われぬ影を落としている。

「しかし私は、あのとき、あなたに何かを言う勇氣がなかった。たとえあなたが私のことを気に入ってくれていたとしても、自分がこの遠征に出かけようとしているのに、あなたを縛るのは狡いと思つたのです。しかし、やはり言わずにはいられない。あと一週間で私は出発します。あなたが私を愛してくれていることを知ったら、どんなに力と勇氣を持って出かけられることか……。ここからあなたを愛しています。」

ルーシーは顔を上げて彼を見た。目には涙が光っていたが、悲歎の涙ではなかった。

「今はあなたと結婚できません。あなたのためにならないでしょう。わたしはどうしても父の面倒を見なくてはなりません。」

アレックはルーシーの両肩に置いていた手を離し、一步退がった。

「お望みのようにするしかないでしょうね。」

「でも、わたしが感謝していいとお考えにならないで。あなたが愛していただくことを知っ

て、とても誇りに思います。おかげで気持が少し軽くなりました。あなたのお言葉がどんなに救いになったことか、お分かりいただけにくいですが。」

「あなたのお役に立ちたかった。しかしあなたはそうさせてくださらない。」

突然ある考えが頭に浮かび、ルーシーは思わずアツと小さく叫んだ。というのも、最も難しいと思われた問題を解決する方法が閃いたからである。

「していただけることがありますわ。ジョージと一緒に連れていってくださいませんか？」

「ジョージ君を？」

アレックはしばらく黙ってこの問題について考えていた。

「あなたなら弟を安心してお任せできます。あなたなら弟を立派な、男らしい人間にしてくださいでしょう。ああ、どうか、ぜひ弟にチャンスを与えてやってください。泥まみれになったアラトンの家名を回復する機会を与えてやってください。」

「あなたもお分かりでしょうが、弟さんは、空腹や喉の渇き、その他ありとあらゆる困難を経験しなくてはならないですよ。私が出かけようとしているのは、ピクニックではない。」

「弟がそうした困難を経験することは、かえって、わたしの望みなのです。遠征の目的は素晴らしいものですわ。いま弟は自信を失くしかけています。もし高貴な仕事に携わることが許されるなら、弟も自分を一人前の男と感ずることができるよう。」

「戦もかなりあると思いますよ。自分を待っている危険についてよく考えるのは馬鹿げたことです。しかし今回の遠征は以前にもまして危険なのです。勝つか、それとも負けて死ぬか、どちらか

なのです。」

「どんな危険でも、弟の祖先が進んで冒した危険より大きいということはありません。」

「負傷したり、殺されることだってありえるのですよ。」

ルーシーはちよつと躊躇った。次の言葉を言うとき唇はほとんど動かなかった。

「もし弟が勇敢な、男らしい死に方をするなら、それ以上望むものはありません。」

ルーシーの計り知れない勇氣にアレックは思わず微笑み、ますます彼女を誇りに思った。

「では、弟さんに、喜んで連れていくと伝えてやってください。」

「いま弟を呼んでもよろしくって？」

アレックは頷いた。ルーシーはベルを鳴らして召使を呼び、わたしが会いたがっているとジョージに告げるよう命じた。

ジョージが入ってきた。過去二週間の緊張と、父が有罪を宣告された精神的打撃は、ルーシー以上にその外見に表われていた。病人のように衰え、口元は不満げに垂れ下がり、ハンサムな顔に惨めな様子がありありと見てとれた。恥辱でノイローゼ気味のようだった。アレックは無限の憐れみを感じながら、この若者をじつと見ていた。その物腰は魅力的で、どこか情に訴えるものがあり、この逞しい男のこころを打った。この子はどんな性格なのだろう。彼の気持はすでにジョージに向かい、好きになりはじめていた。ルーシーの弟だったからである。

「ジョージ、マッケンジーさんがあなたを一緒にアフリカに連れていこうと言ってくださいるの。」ルーシーが熱を込めて言った。「行くでしょう。」

「どこへだって行きますよ。この忌々しい国から出られるんなら。」ジョージが物憂げに答えた。「僕が通りになると、みんなが僕のほうを見るように感じるんだ。そうして、みんなが言ってる、——ほら、あそこに例の詐欺師の息子がいる、七年の刑を受けた下司野郎の息子がいるってね。」ジョージは手のひらをハンカチで拭った。

「僕はどうなったって構いませんよ。もうオックスフォードには戻れないんだ。どうせ誰も口を利いてくれないだろうし。イギリスにいたって何もやれないんだ。ああ神さま、僕は死んでしまいたい。」

「ジョージ、そんなこと言うものじゃないわ。」

「姉さんはいいさ。女だから、どうだっていいんだ。姉さん、いま僕にびた一文だって貸してくれる人がいると思う？ いるわけない。いるわけないよ。」

「ジョージ、忘れるようにしなくちゃいけないわ。」ルーシーが優しく言った。

彼は無理にも冷静になろうとすると、アレックに挑むような笑い顔を向けた。

「僕に憐れみをかけてくださるそうで。とつても有難いことで。」

「決める前に知っておいてもらいたいのだが、随分と不自由な生活を忍ばなくてはならないだろう。辛く危険な仕事だよ。」

「でも、僕には他に選択の余地はないんでしょう？」ジョージが苦々しく答えた。

アレックは手を差し出した。めったに見られない穏やかな笑みが顔に浮かんでいる。

「じゃ、一緒に頑張ろう。いい友達になれると思うよ。」

「それに、ジョージ、あなたが帰ってくる時にはすべて終わっていると思うわ。ああ、わたしも男になりたい。男だったらあなたと一緒に行けるのに。わたしにもあなたのようなチャンスがあったらいいのに。ジョージ、あなたの前には無限の未来があるのよ。こんなに素晴らしい機会を与えられた人はいないと思うわ。わたしたちの希望はすべてあなたの中にあるの。どうかわたしが誇れるような人になってね。わたしが自分に自信を持てるかどうかは、あなた次第なの。どうか名を揚げて。わたしがもう一度、自分は正直で、強く、間違っていないと感ぜられるようにしてほしいの。」

ルーシーの声は感極まったように震えていた。ジョージは理解は早い青年で、顔を赤らめ、「ごめんなさい、自分勝手なことばかり言って。」と叫んだ。「自分のことしか考えられなかった。姉さんのことをちっとも考えられなかった。」

「いいのよ、わたしのことは。ただ、あなたに勇敢で、正直で、しっかりした人になってもらいたい。」

涙がジョージの目に溢れてきた。彼は姉の首に腕を廻すと、子供のように胸に顔を埋めた。

「姉さんと別れるのは辛い。」

「わたしのほうがもつと辛い。だって、あなたはこれから素晴らしい、男らしいことをするのに、わたしはただ待って眺めているだけなんですもの。でも、ジョージ、あなたにはアフリカに行つてほしいの。」言葉はだんだん声にならなくなってきた。ルーシーは囁くように言った。「忘れないでね、あなたのためだけではないのよ、わたしのためにも行くの。もしあなたが悪いこと、見苦しいことをすれば、わたしが辛いよ。」

「誓うよ、姉さんが僕を恥ずかしく思うようなことは決してしないって。」

ルーシーは弟にキスをすると微笑んだ。アレックは何も言わず二人を見ていた。胸がいつぱいだっ
た。

「さあ、あんまり感傷的になるのはやめましょう。マッケンジーさんがお笑いになるわ。」ルーシー
は輝く目でアレックを見た。「弟ともども、ここから感謝申し上げます。」

「残念ながら、すぐにも出発しなければなりません。ジョージ君には一週間で準備をしてもらわな
ければ。」

「必要なら、弟は二十四時間あれば準備できますわ。」

青年は気持を落ち着かせようと、窓辺に行つて煙草に火をつけた。

「もう出発まであなたにお目にかかる機会はほとんどないと思います。」アレックが言った。「やら
なくてはならないことがいろいろとあつて。週末にはランカシャーに行かなくてはなりませんし。」

「残念ですわ。」

「お気持は変わりませんか？」

ルーシーは首を横に振った。

「ごめんなさい。いまは完全な自由がどうしても必要なんです。」

「わたしがアフリカから戻ったときには？」

ルーシーは明るく微笑んだ。

「お帰りになってもまだわたしのことを気に掛けていてくださるなら、もう一度お尋ねになつて。」

「それで、答は？」

「変わっているかもしれせんわ。」

一週間後、アレック・マッケンジーとジョージ・アラトンはチャーリング・クロスから旅立っていた。二人はP&Oの汽船でマルセーユからアデンに向かい、そこでモンバサに行くドイツの船に乗り換えることになっていた。ケルシー夫人は悲歎のあまり甥の見送りに来られなかったが、ルーシーにはそれがかえって有難かった。ジョージと二人きりで駅まで行く機会が得られたからである。

駅にはすでにデイック・ローマスとクロリー夫人が来ていた。汽車が煙をあげて動き出したとき、ルーシーは二人から少し離れて立っていた。彼女はまったく動かなかった。手を振ろうともしなかった。顔にも表情らしい表情はなかった。クロリー夫人は思いきり泣きながら、ときどき可愛らしいハンカチで涙を拭いていた。ルーシーが夫人の方を向き、見送りに来てくれたことに対して礼を述べた。

「馬車でお宅まで送りますでしょうか。」夫人が涙声で言った。

「ありがとうございます、でも、よろしければ、辻馬車キヤブで帰ろうと思います。」ルーシーが静かに答えた。「デイックさんをよろしく願います。」

ルーシーはさよならも言わず、ゆっくりと歩き出した。

「もう、あなた方イギリス人ときたら、本当に腹立たしい。」クロリー夫人が叫んだ。「わたし、あの娘こと抱き合つて、プラットフォームで大いに泣きたかったのに。イギリス人には人情つてもものがないんだから。」

デイックは夫人の横を歩いていった。馬車のところにつくと、夫人は滔々とうとうと捲まくしたてた。

「ありがたいことに、わたしには感情があるし、感情を大っぴらに見せても気にならないの。今日泣いたのはわたしだけよね。泣くと分かっていたの。だからハンカチもちゃんと三枚用意していたのよ。ご覧になって。」夫人はバッグからハンカチを取り出すと、どうだ、と言わんばかりにデイックにそれを突きだした。「涙でぐちゃぐちゃですよ。」

「勝ち誇つたようなおっしゃりようですな。」デイックは笑った。

「あなた方つたら、まったく薄情なんだから。あの二人は、いつ帰つてこられるか分からない危険な旅に出かけるのよ。二度と会えないかもしれないのよ。それなのにあなた方ときたら、まるで二人がちよつとゴルフにでも出かけるように、さよならって言うだけなんですもの。『辛いわ、二人がいなくなったらどんなに寂しいでしょう』って言ったのはわたしだけ。ああ、大嫌い、このイギリス人の冷静さつて。わたしがアメリカに帰るときは、きつと誰も見送りにきてくれないでしょうね。もし誰か来てくれたとしても、ちよつと頷いて、『さよなら、元気でね』でおしまい。そうよ、九分九厘そくに違いないわ。」

「では、今度アメリカにお帰りの節には、ひとつ、私奴わたくしめがお見送り申し上げ、地べたに身を投げ齒くざしりし、号泣して進ぜましよう。」

「ええ、ぜひそうして。そうしてくだされば、わたし、リヴァプールまで泣き泣き行くことができますわ。頭はずきずき、気は滅入るでしょうけど、でも、幸せ！って感じられますもの。」

ディックはしばらく物思いに沈んでいた。

「クローリーさん、私たちは、本能的に、自分の感情をあからさまにすることに恐怖心を持っているんです。なぜかは分かりません。もしかすると訓練のたまものかもしれないし、たくましい祖先から受け継いだものかもしれない。でも、ともかく、自分の感情を人に知られるのを恥ずかしく思うんです。しかし、だからといって私たちの感情が他の国民よりも鈍いとは言えないんじゃないでしょうか。どうです、悲しいのにその感情を表に出すことを抑えている人には、何か美しいものがあると思いませんか。私は今日のルーシーを素晴らしいと思う。プラットフォームを私たちのほうに向かって歩いてきたときの落ち着きの中には、称讃すべきものがありましたよ。」

「ナンセンス！」クローリー夫人が鋭く言った。「ルーシーがさめざめと泣きながら弟さんにしがみついて、誰かが二人を引き離さなくちゃならなかったら、わたし、あの人のこと、もっともっと好きになっていったと思うわ。」

「お気づきになりましたか、あの娘は私たちと握手をしないで去っていった。忘れていたんですな。まあ、小さなことかもしれない。しかしあれは、あの娘が悲しみでいっぱいだったということなんです。」

二人はノーフォーク通りにあるクローリー夫人の小さな家に着いた。夫人はディックに少し休んでいくよう誘った。

「お坐りになって。新聞でもお読みになっていて。わたし、ちょっとお化粧を直してきますから。」ディックは肘掛椅子に腰掛けた。恰幅のいい執事がカクテルを作るのに必要なもの一式を持って入ってきたとき、ディックはクローリー夫人という魅力あふれる女性に感謝した。夫人は博物館の標本でも集めるように、英国風なものを集めていた。応接間は精緻な模様入りのチッペンデルの家具で統一されている。部屋と申し分なく調和した更紗木綿のカーテンが垂れ下がる窓、サー・ジョシユアが描いた貴婦人たちの銅版画の掛かった壁。暖炉にはロースタフトで焼かれた磁器のタイルが嵌め込まれ、銀のテーブルには古いイギリスのスプーン・セットが置かれている。執事の選び方がまた見事だった。この家の雰囲気はぴったりのだけでなく、勿体ぶった態度といい、決して笑わないところといい、まさに英国の執事はかくあるべしといえる男だった。夫人はこの執事を一つの飾りのように考え、随分と無礼に扱っていたのだが、奇妙なことに、それがこの鈍くて単純な執事の気持を捉え、彼は夫人にすっかり参ってしまったようだった。執事は夫人を未開の国から来た変人と見なし、保護者のように夫人を気遣っていた。が、それがまた夫人を喜ばせ、感動させるのだった。小さいけれどなんて気持のいい部屋なんだろう。ディックはそんなことを考えていた。

クローリー夫人が化粧直しにたっぷり時間をかけたあと部屋に戻ったとき、ディックはこれ以上ないほど上機嫌だった。夫人は二つのグラスをちらっと見た。

「あなたって本当に好いかたね。わたしが下りてくるのを、カクテルを作って待っていてくださるんですもの。」

「奥様、リチャード・ローマスは礼儀作法の鑑でございます。」彼は仰々しく答えた。「ところで、

この鑑、卑しいところがありました、人に隠れて朝一杯。夜ともなれば、苦しい襟飾りはご勘弁、スリッパ履いて、口にはパイプ、手に結構な本など持って一人優雅にハイボール。げに望まじきことではございませぬか。とは申せ、食前酒とくれば、あとは当然、丁々発止のやりとりで……」

「絶好調のようじゃありませんこと？」クローリー夫人が言った。

「まさに左様で。何故お尋ねに？」

「昨日の新聞で見たんですけど、お医者様があなたに、残りの冬の間は外国へ行って養生なさるよう
に言ったそうじゃありませんか。」

「二ギニーほど医者に渡して、診断書は私が自分で書いたんです。この前あなたに説明したこと憶えていらっしやるでしょう？ いつか公務を引退して私的な生活に入りたいという……。」

「ええ。でも絶対反対ですけど。」

「さて、私が何の説明もせずに義務を放棄したとします。すると、きっとみんなは私が気が狂ったと
考えて、精神病院に閉じこめようとするでしょう。そこで健康上の理由を作り上げたんです。これで
全てはすんなり行く。国会の残りの会期は相棒が代わりを務めてくれることになっています。で、次
の総選挙では優秀なるロバート・ポール・君が、役立たずだった私に代わって立候補してくれると
いうわけです。」

「後になって悔やんだら？」

「若い頃には、私もロマンチックな熱に浮かされて、人生一回きり、全てやり直しがきかないものだ
と思っていました。でも、錯覚ですね。人生の好い点の一つは、やり直しのきかないことはほとんど

ないということです。大抵のことはやり直せる。平均的な人間の長い寿命を考えれば、心機一転、か
なり多くのことを試せるはずで、そうしようとする人間が人生に面白みを与えてくれるんじゃないの
かな。」

「賛成できません、あなたがそんなふうに軽々しく人生についてお話しなされること。」クローリー夫
人が厳しい口調で言った。「わたしには、人生というのはとても厳粛で、難しいものに思えます。」

「それは道徳家たちの幻想ですよ。人生なんて、畢竟自分で作ってゆくものにすぎません。で、私の
は、まったく重みのない、単純なものだということでした。」

クローリー夫人は何か考えるようにディックを見た。

「なぜ、あなた、結婚なさらないの。」

「答は簡単。私には当意即妙の会話能力が備わっているからです。若い頃発見したことなんです、
男が結婚を申込むのは、結婚したいからじゃない。ある場面で、何を話題にしたらいいのか途方に暮
れてしまうからなんです。」

「由々しき発見ですこと。」夫人は笑った。

「そのことに気がついたんで、すぐに私は、おしゃべりの能力の開発に取りかかりました。まあ、私
に唯一できそうなことといったら、ほんのちよつとしたヒントで、機転を利かして、その場に最もふ
さわしい話題を提供することじゃないかと思っただけです。そこで、オックスフォードの最後の一年間、
かなりの時間をその道の大家を研究することについてやりましたよ。」

「取り立てて才気煥発だと思ったことはございませぬけど……。」眉を上げながらクローリー夫人が

つぶやいた。

「私は自分の才気をひけらかそうとしたことはありません。ただ自分を守るためにこの能力を使ってきました。自慢じゃありませんが、ちよつとした無駄話が必要なとき、それに不足したことはありませんね。世の中には、自由貿易について天真爛漫に自説を開陳できる可愛らしい十七歳がいるかと思えば、高尚な哲学を分かりやすく解きほぐそうと目を窪ませて四苦八苦している三十路の婦人もいます。」

「高尚な哲学について誰かが話し始めたなら、わたし、まちがいはなく顔が赤らむわ。」

「年齢不詳、跳ねっ返りの未亡人がいましたが、私が懇切丁寧に王政復古期の劇作家について論じましたところ、頭を抱えて引き下がりました。あるいは、宗教心篤い真面目くさったオールド・ミスを撃退するには、しばしば、中央アフリカにおける伝道師たちの苦勞とその結果を詳細に語る手を使いました。ある時、高貴にして資産豊かな未亡人が、私に結婚の意志があるかとおっしゃいますので、ブリタニカ百科事典の或る項目を突きつけたところ、吃驚仰天。また、アメリカ人女性で、離婚された方がいらつしやつたのですが、マッキンリー大統領の関税政策について幾つかの事実を、その貝殻のように可愛らしいお耳に入れたところ、気を失ってしまいました。私の真面目な努力といえはこのくらいですか。あとは一々お話しするには及ばないと思えますが、意味ありげな流し目を警句で逃れたり、思わしげな嘆息を無視するのに適当な詩を引用したり、——そうしたことは数え出したら切りがありません。」

「あなたのおっしゃること、一言だって信じません。」クローリー夫人がやり返した。「あなたが結婚しなかった理由は単純明快、誰もあなたの申込みを受けてくれなかったからよ。そうに違いないわ。」

「どうか正当なる御評価をお願いしたいものです。あなたと十日間付き合つて、あなた所有のペンシルヴァニアの炭坑に目が眩み、身も心もあなたに捧げたいと申し出なかった男は私だけではありませんかな。」

「このことと炭坑とはまったく関係ないと思えますわ。」クローリー夫人が答えた。「結婚を申込むのはわたくし個人の人間性に惹かれたためであつて、それ以外のものではないと思えますけど?」

ディックは時計を見た。カクテルのおかげで食欲が湧いてきたので、クローリー夫人を昼食に誘つた。二人は、陽気に、洒落たレストランへと向かった。アレックとジョージが未知の世界へ急いでいることも、ルーシーが部屋に一人閉じ籠もり惨めな思いに沈んでいることも考えていなかった。

ルーシーにとっては物憂い日々の始まりだった。ディックはナポリに出かけてしまい、新たに手に入れた無為の生活を愉しんでいるらしく、手紙もよこさなかった。クローリー夫人はエジプトに行くうと決めていたのだが、妹が病氣だということでアメリカへ呼び戻された。ケルシー夫人は北国の冬は自分には厳しすぎるとニスへ避難した。一緒に来ないかとの夫人の誘いをルーシーは断つたのだ。行けば父に会えなくなるということもあつたが、イギリスを離れることに耐えられなかったのだ。父が恥ずかしい労働に従事させられているとき、リヴィエラに集まってくる陽気な人々の仲間に加わる気にはとてもなれなかった。父の辛い状況に比べたら、現在の自分の生活自体恵まれすぎてい

て何かうしろめたく感じられる。自分がいま暮らしている心地よい部屋と、上品で洗練された調度品を見ていると、おのずと父が閉じ込められている監獄のむきだしの壁が頭に浮かんでくる。……ルーシーは一人でいられることを有難いと感じた。

ルーシーは誰とも会わず、孤独のうちに毎日を過ごし、こころの平安を手に入れようと努めた。犬を連れて公園を長い時間散歩したり、美術館で多くの時を過ごしたりした。それが自分にどんな作用をおよぼすのか深くは考えなかったが、やがて、美しいものが持つ、人のこころを癒す力を漠然と感じ始めた。ルーシーはよく国立美術館の或る素晴らしい絵の前に腰掛けた。すると魂は、その絵を見る喜びとともに、静かな救いで満たされる。ときには、パルテノンペルテイメントの切妻壁を飾っていたあの堂々たる彫刻を見に行った。すると涙が溢れそうになり、これらの慈悲深く静謐せいひつな彫刻を与えてくれた神々に感謝の念を覚えるのだった。音楽はあまり聴きに行かなかった。音楽を聴くと感情を抑えておくことができなくなるからだ。交響楽の大音響、『トリストラン』の悲痛な終曲、そうしたものを聴くと、平静であるうとするせつかくの努力が無駄になり、家に帰り着いた途端ベッドに泣き崩れてしまうのだった。

ルーシーが最も安らぎを見出したものは読書だった。アレックの語った多くのことがぼんやりと思い出され、彼に深い影響を与えたりシヤの作家たちを読み始めた。エウリピデスの英訳を見つけたが、そこには原文の香りが漂っているように思われる。また、この古く美しい悲劇の中に現在の自分の気持に対する答があるような気がする。疑いと、絶望と、自然への愛が、この偉大な詩人の中で複雑に交じり合い、現代の作家には無い何かをルーシーに語りかけてきた。そして、人間は畢竟運命ひつぎょう

操り人形にすぎぬとも言っているような、登場人物たちの哀切きわまりない行為を知るにつれ、自分自身の悲しみが和らいでゆくのを感ずるのだった。なぜかは分からなかったし、またそれを論理的に究明しようとも思わなかったが、ルーシーはほとんど無意識のうちに考えるようになった——神々が投げつける石も矢も、受ける側に諦念と勇気があれば、美しいものに変わり得るのだ、と。人生において取り返しのつかないものはない。ただ自分の弱さだけが取り返しがつかないのだ。恥辱、悲運、窮乏の中にあっても、高潔な人生を送ることはできる。酷ひどい運命に翻弄ひんりやうされ、一敗地に塗まみれた人間でも、自分を打ちのめした目に見えない残酷な力を乗り越え、より良き人間として復活することは可能なのではなからうか。

このように、ルーシーは重くこころに伸のしかかる耐えがたい恥辱と戦っていた。幼少時代を過ごし、たあのハンプシャーの美しく清らかな田園風景、アラトン家の今は亡き人々の思い出、そうしたもののゆえに、ルーシーはこれまで理不尽なほど自分の家柄に誇りを持っていたのだが、その反動とでもいおうか、この頃は、もしかすると自分の中に、そして弟の中にも、父と同じ退廃的性向があるのではないかと恐れるのだった。自分は、今はただ、神々が嬉々として与えてくる様々な苦しみを抑おさぶことしかできない。でも、ジョージは男だ。ジョージならやってくれるだろう。ルーシーの期待はもっぱら弟にかかっていた。しかし、時として、どうしようもない不安に襲われることもあった。もしジョージが期待を裏切ったら？ そう考えたときの苦悶は耐え難いものであり、ルーシーはこの忌まわしい考えを追い払おうと、わが目を手で覆うのだった。弟は父親譲りでハンサムだし、人当たりも良い。父と同じ率直な笑いと逆らいがたい魅力を持っている、……が、もしそれが父親のような不実な人間、

弱い人間の前兆にすぎないのなら？ またも悪魔が耳もとで囁く。確かに、ルーシーはこれまで何度か、自分の忌み嫌うことを弟がするのを見まいとして目を背けたことがあった。でも、それは弟がまだ若いからだ。ルーシーは、こころの中でこのように惨めな葛藤を繰り返していることを、弟に気づかれないよう注意を払ってきた。弟は無鉄砲で好い加減な人間かもしれないなどと、なぜ疑うのか。疑ってはならない。疑えるはずがない。もし弟が何か非道いことをするようなら、希望はすべて絶たれてしまう。そればかりか、自分自身を信じることもすらできなくなってしまうだろう。

父に手紙を出すことが許されたとき、ルーシーはできるだけ父を励ます文面となるよう努めた。再び父のそばで暮らせるようになるまでには、まだ五年以上の歳月が過ぎ去って行かなくてはならない、そう考えるとペンが鈍るのだったが、自分が気落ちしているわけにはいかなかった。父に勇気を与えなくては……。父に対する愛情がいささかなりとも弱まっていけないこと、それを当てにしてくれて大丈夫だということも分かってもらいたかった。やがて返事が届いた。慣れない食事と環境の変化が身にこたえ、入獄して数週間身体をこわし、療養棟に入れられたとのことだった。父がしばらくの間強制労働をしなくてすむことを知ってルーシーは有難く思った。刑務所内の病院とはいえ、鉄格子の中に比べたら少しは住びしく感じないですむのではなからうか。

ジョージから手紙が来た。アレックからも。アレックの手紙は短いもので、紅海の旅の様子、モンバサへの到着が記されていた。無愛想でぎこちなく、ルーシーへの愛を述べることもなければ、イギリスに戻ったら求婚を受け入れるとほとんど約束したに等しいルーシーの言葉にも触れず、書き出しも儀礼的ならば、結びも通り一遍のものだった。ジョージは明らかに元気いっぱい、いつものよう

に子供っぽく、思いつくままに、とりとめのないことを書いていた。若者言葉で埋め尽くされた手紙にはルーシーの知りたい彼の近況は何も書かれておらず、いまからアフリカの奥地へ危険な遠征に出かけようとする者がその入り口であるモンバサから出したというよりも、サッカーを観戦した学生がその夜オックスフォードから出したような手紙だった。しかし、この二人の手紙をルーシーは繰り返し繰り返し読んだ。本当にそっけない手紙だった。ジュリア・クローリーさんが見たらきつと腹を立てるだろう、そう思うと笑みがこぼれた。

アレックの語ったことを思い出しながら、ルーシーは弟の目の前に最初に現れるアフリカの光景を頭に描いてみた。空想の中でルーシーは弟と二人並んで港に近づく船の欄干に凭れかかっていた。海の蒼はこれまでに見たことのないような蒼で、空は銅のお椀を伏せたようだ。まず海岸線が視界に低く入ってくる。海岸には藪草が生い繁り、それがずっと先まで広がっている。波が岩礁にあたって砕ける。やがてモンバサ島がはつきりとその姿を表わし、その昔入港してくる船を見下ろしていた砲台の跡も見えてくる。砲台と珊瑚礁の岸壁とに挟まれた開墾地には、白い屋根と大きなベランダをもつ家々が建っている。湾の対岸には風変わりな憂鬱な風情の棕櫚の木が鬱蒼と連なっている。水路が狭まってくると、船はポルトガル軍の砦跡の前を通る。最初に、勇敢にも、この長い道のりを船で旅してきたのはポルトガル人だったのだ。砦の次は防波堤のすぐ前まで建ち並ぶ白い家々だ。原住民の住む地域には草葺の粗末な小屋が寄り添うように連なり、波打ち際には小さな船が何艘もロープで繋がれている。栈橋はアフリカで暮らす人々であふれかえり、押し合いへし合い、何か大声で叫んでいる。上半身裸の者もいれば、奇妙な服を着た者もいる。スワヒリ族、海を越えてやってきたアラブ人、そ

して、奥地からやってきた何族か分からない人々も見える。

やがてまた何通かの手紙がジョージから届いたが、アレックからはその後便りはなかった。時間はゆっくりと流れていった。ケルシー夫人はリヴィエラから帰ってきた。ドイツもナポリから戻り、ロンドンの社交シーズンを満喫していた。彼は無為の生活をここから楽しんでいうので、定職を持たぬ者が幸せになれるはずがないと予言した人々が完全に間違っていたことを証明してみせていた。クローリー夫人も再びノーフォーク通りの家に落ちついた。夫人はアメリカにいる間、機会あるごとにルーシーに長い長い手紙を書き送っていて、ルーシーのほうも夫人に再会することをとても楽しみにしていた。この小柄なアメリカ女性は、ルーシーにとってほとんど唯一恥ずかしさを感じないで付き合える人だった。国籍が異なることから生じる一種の溝が二人の間にあることで、逆に、クローリー夫人には話しかけやすかったのだ。夫人の方もルーシーをとててもかわいがり、惜しみない同情を与えてくれた。総選挙が思いがけなく早く行なわれ、ドイツ・ローマスが喜んで明け渡した議席をロバート・ポールガーが継いだ。ボビーは相変わらず優しく、何かとルーシーの面倒を見てくれ、ルーシーもこころを打たれずにはいらなかった。彼は、ルーシーが父の有罪判決という打撃からおおむね立ち直ったと思われる頃合いを見計らって、再び、ぜひ結婚してほしいと手紙を送ってきた。彼が手紙という方法を用いてくれたことにルーシーは感謝した。というのも、手紙でなら、自分を大切に思ってくれるのはとても有難いが、申し出を受け入れることはできないと、面と向かって言うよりも優しく伝えられそうに思えるからだだった。

* * *

ルーシーには、ロンドンでの生活、テムズ川に面したケルシー夫人の邸やしきでの生活は夢にすぎないように思われた。自分は、いわば縁日の出し物で見られる白い布に映った影の人物にすぎず、自分のしていることはまったく意味のないことのように感じられ、気持は遠くアフリカの奥地にあった。ルーシーはひたすら、アレックとジョージが日々何をしているかに思いを馳せた。

二人は、今ごろはもう、鉄道や、白人が足跡を残したことが判る、文明の匂いのする地域からは遠く離れているに違いない。アレックの喜びがルーシーには自分の喜びのように感じられた。文明の痕跡を後にしたとき感じる身震いするような自立感、ここからは頼れるものは己の資質だけだと考えたとき沸き上がる自負心、……この計画が成功するも失敗するも、全ては自分にかかっているのだ。

ルーシーはしばしば、ベッドに横になり、東の空が白むのを眺めながら、自分がアフリカにいるような気持になるのだった。夜が明け始めると、たわわに実ったトウモロコシ畑の上に一陣の風が吹き渡るように、眠っていた者たちが活動を始める。ルーシーはアレックから詳しく話を聞いていたので、その時の様子を生き生きと目の前に浮かべることができた。頑丈な長靴ブーツを履いたアレックがベルトを締めながらテントから出てくるのが見える。半ズボンを穿き、日除け用のヘルメットを被り、肌は別れたときよりもさらに陽に焼けている。彼はキャラバン隊の隊長に荷物をまとめるよう命じる。それを合図にキャンプのいたるところで人々が慌あわただしく動きだす。荷役人夫は自分の持ち物を掴むと、それを折畳み式ベッドや料理用鍋と一緒に荷造りして、その上に腰掛け、食事をとる。朝食は焼トウモロコシか昨日の獲物の残り物だ。太陽が地平線から頭を出す頃、アレックが先頭に立って行軍を始める。先頭に立つのが彼の習慣なのだ。つぎに数名のアフリカ人兵士カが続く。雇われた現地人が集まって不

思議な歌をうたいだすと、先程までは人々でござつた返す生活の場であつたキャンプがいよいよ畳まれることになる。燻くすぶつていた火も太陽がすっかり姿を現わす頃には消え、人間の作り出す喧噪であふれていた森に静寂が戻る。やがてどこからともなく大きな昆虫が現れ、人の食べ残した滓かすを運び始める。小さな動物が忍び足で近づき、人間の貪欲な歯が食べ損ねた、骨に付いたわずかな肉を齧かむる。痩せたハイエナが辺りを窺うかがうように首を出し、あつという間に骨をくわえるとジャングルの中に姿を消す。秃鷹が悠然と舞い降り、ゆつたりと、最後に残つた腐肉を探して歩く。

それからルーシーは、長い帯となつた戦闘員や荷役人夫と一緒に、アレックの後に付いてゆく。低木や荆棘いばらをかき分けながら狭い小道を進む。高く伸びた葦あしのような草が頭上を覆う中を苦勞して進むとき、冷たい露が顔にかかる。ときには豊かな耕地とかなりの人口を持つ村に出くわす。ときには深い森に入る。ここでは巨大な木々に蔓つるが巻きつき、その静寂は、底知れぬ厚みをもつた落ち葉の上を歩く旅行者の足音によつても破られることはない。広大な沼地を横切るときには、怖ろしい熱病に罹かからないよう歩を早める。見渡す限りサボテンと荆棘だらけの叢林そうりんを行くこともある。英国の公園で見られるような素晴らしい樹木の生えた緑豊かな丘を登ることもある。流れの速い川の岸辺に沿つた獣道けものみちを辿ることもある。

昼になつて休憩の声がかかる。その時までには一行は途切れ途切れの長い帯になつている。病気の者、荷造りし直すために立ち止まつた者、体力のない者、あるいは怠け者が遅れている。が、最後には全員が揃そろう。誰一人取り残される者がないようにとの命令を受けて後尾を守つていた者が——ひよつとしたらそれがジョージの仕事かもしれない——間違ひなく全員いると報告する。真昼の暑い陽射

しの下で、火を起こし、昼食をとる。そしてまたすぐに行軍が始まり、今度は夕刻まで続く。

あらかじめ決めてあつたキャンプ地に到着すると、合図として数発の銃が撃たれる。するとすぐに近隣の現地人が、小麦などの穀物、ジャガイモ、鶏、ときには蜂蜜などを持って現れる。素早くテントが張られ、ベッドが準備される。確認のため荷が数えられ、一か所に積み上げられる。防御柵ゼリバを作るのが役目の者は、大きな枝を切り落とし、それを運んで囲いを組み立ててゆく。残りの者はそれぞれ小さな班に分かれ、思い思いに今夜の野営地を選ぶ。掘立て小屋を作るための材料を集めにゆく者がいる。水を汲みにゆく者がいる。鍋を置いて料理ができるように、大きな石と薪を集めにゆく者がいる。日没になると、班長が笛を吹き、全員揃そろつているかと叫ぶ。元気な声、陽気な声がそれに応える。班長はそれを隊長に報告し、明日の行軍についての指令を受ける。

アレックによれば、班長の笛に應える声で隊員が元気がどうか判るそうだ。狩りの獲物が豊富にあつたとき、あるいは一行が食料の乏しい地域から豊かな地域に入ったときには、まったく騒々しい声が聞こえる。それに対し、行軍が長く厳しかったとき、あるいは食料が支給され、これが最後の支給だ、これであと数日はやっぴいかなければならないと言われたときには、まばらな声が返ってくる。そんなとき、なかに勇敢な者がいて、おいら、腹が減つただよう、と叫ぶ声が聞こえることもあるそうだ。

アレックとジョージは他のイギリス人とともに坐つて夕食を始める。荷役人夫は、いくつかの小さなグループに分かれ、肉汁ボリッジの入つた大きな鍋を取り囲み、たわいもないお喋りに興じ、煙草を吹かし、狩猟にまつわる逸話などを披露している。やがて白人は床とこに就く。アレックは、一人焚き火の燃えさ

しを見つめ、物思いに沈む。夜の静寂が彼を取り囲み、思わず空を見上げると、アフリカの濃紺の空に無数の星が輝いている。ルーシーはベッドから離れ、開放された窓辺に立った。わたしもいま空を見ている。わたしの見ている星は、アレックの見える星と同じ星なのだ。他の人々が眠りに就いた後のこのひととき、一日の重荷から解放されて、あの方は個人的な思いに身を委ねることができののだ。そしてその思いとは、きつと、わたしへの思いなのだ。

アレックが英国を去って数ヶ月、その間にルーシーの愛は脹らんでいった。孤独な生活のなか、明るい希望を与えてくれるものが他になかったせいもあって、アレックへの愛が徐々にこころの大きな部分を占めるようになっていた。ルーシーは生来強い性格の持主で、何事も中途半端にしておくことができなかったから、この目眩くような情熱に思い切り身をまかせたのだが、それがかえって大きな安らぎを与えてくれることに気づいた。自分が今までとは違った人間になってゆくような気がした。こころのどこかで自分は誰かに頼ることを願っていたのだ。そしてやっと頼れる人を見つけた。これまで、ただ、父とジョージのために役立ちたい、二人には自分が必要なのだ、弱音を吐いてはいけない、自分が誰かを頼りにするようではいけないという気持で生きてきた。それが今は、アレックの愛に全身を委ねることがどんなに満ち足りたことであるかを感じていた。アレックという強靱な意志の持主の前では、いくら強がってみたくも及ばないのだから、自分は弱くなれる……。ルーシーは、実際によく分かっているわけではないアレックのことを夢中になって考えた。己の損得は何ら考慮せず、義のために、確固とした目的を持って戦おうとしているアレックのことを思う

と、誇らしさを感じ、同時に、彼に比べ自分は何とつまらない人間であるかと思うのだった。アレックに関する想い出は、どれもルーシーにとっては大切な宝物だった。彼の語った言葉を一つ一つ反芻し、二人で話した会話をなぞってみた。二人で歩いた場所を歩き、あのとときの空の様子、公園に咲いていた花を想い出した。二人で行った美術館を訪れ、彼がその前に佇んだ絵の前に佇んだ。苦しいこと、屈辱を感じることは相変わらずいくらもあつたが、ルーシーは幸せだった。いつさいのことを我慢できるようにしてくれる何かが生活の中に生まれていた。今はどんなに悲しいことでも耐えられるような気がする。あの方が愛してくれているのだから……。

久しぶりにアレックからの手紙がディックのもとに届いた。明らかにマッケンジーは手紙を書くのが不得手だった。もともと素直に自分を出すことが不得手なのだが、ペンを持つと恥ずかしさがどうしようもなく増すようで、およそ素っ気ない、気の利かない手紙だった。最も奥地にある商業中継地から出されたもので、いよいよこの遠征の目的地である、文明の光の届かない土地に出発するとき、書かれていた。僕自身に関しては今までのところ全て順調に運んでいる。他の白人も、時に熱病に苦しめられることはあるが、こちらの気候によく耐えている。一人だけマキナリーという名の厄介な男がいて、海岸に送り返した。(アレックはこの理由については何も書いていなかった。)僕は最後まで最後の準備に忙しい日々を送っている。すでに以前、この未開地域で一旗揚げようと、北東アフリカ交易商会という会社が設立され、認可も与えられていたのだが、土地の情勢がきわめて不安定なため、これまで企業としての活動ができないでいた。それが今回の計画を知り、力を貸してほしいと頼んだところ、喜んで受け入れ、各中継基地に働くイギリス人に僕の下で仕事をしようよとの指令を出し

てくれた。このため、僕の指揮下で行動する白人の数は十六となった。海岸地方から連れてきたスワヒリ族の訓練も終わり、銃も与えた。したがって現在武装した兵士の数は四百である。加えて今現地の各部族から兵を集めている。そのために、武器といったら槍しか持たない軍隊ではあっても、行動をとにもすると約束してくれた部族の酋長には、それぞれ異国風の大袈裟な階級名を与えている。

「びつこのモハメッド」の勢力は衰えかけている。というのは、僕がイギリスで三ヶ月を過ごしている間に彼はある病気に罹った——原住民は、妻の一人が魔法をかけたに違いないと言っている——すると息子の一人が、好機到来とばかり父親に反旗を翻し、要塞に立て籠った。死にぞこないのサルタンは息子に対し戦闘を開始したが、この力の分散のおかげで、こちらの立場は計り知れないほど強いものとなった。

ディックはルーシーに手紙を渡し、彼女がそれを読むのを見つめていた。

「ジョージ君については何も言っていないですね。」

「きつと、元気にやっているのですわ。」

アレックがあの子について何も書いていないのは奇妙なことだったが、ディックはそれ以上言わなかった。ともかくルーシーは満足しているようだ。今はそれが何よりなのだ。しかし彼はある不安のようなものを拭いきれなかった。ルーシーが、弟はアレックにアフリカへ連れていってもらおうと言ったとき、ディックは危惧の念を抱いたのだった。あの素直な青い目、あの腹藏のない笑い顔の裏側には、フレッド・アラトンと同じ薄っぺらな人間が隠れているのではあるまいか、——その疑いが頭を離れなかった。しかし、あの青年にはあれ以外に将来を拓く途はなかった。あのチャンスに賭けて

みるしかなかったのだ。

その後便りはまったくなくなった。アレックは、夜の静寂に消え入るように、アフリカの名も知らぬ国のなかへ消えてしまった。彼がどのようにやっているのか、誰にも分からなかった。首尾良く計画が進んでいるのか、それともうまくいっていないのか、その噂すらも海岸地域に届かなかった。事実上独立している地域と英国保護領とを区分する山岳地帯を越えた後、アレックとその一行の消息はぱったり途絶えてしまった。数ヶ月が過ぎたが何の情報もなかった。彼がモンバサに到着したときから数えて一年が経過していた。やがて、最後の手紙が届いたときから数えても一年が経った。想像できることは、ただ、あの岩だらけの山々の裏側で激しい戦闘が行われていること、新しい土地が踏査されていること、そして、奴隷商人たちが一歩ずつではあるが後退させられていることだった。この沈黙は好い知らせなのだ、そうディックは強いて自分に言い聞かせた。もし遠征隊が木っ端微塵に打ち負かされたのなら、きつと狂喜したアラブ人がその噂を国外にまで広め、噂はソマリランドを経て海岸地域に到達するか、あるいは商人によってザンジバルに届いているはずだ。ディックは外務省に頻繁に問い合わせたが、外務省も何の情報も持っていなかった。アレックの一行はまったくの暗闇に消えてしまった。

しかしルーシーは、心配もしていなければ、怖れてもいなかった。アレックに絶大な信頼を置き、彼の力、勇氣、そして彼の星を信じていた。この仕事を成し遂げるまでは戻らないとアレックは言ったのだ。だから、完全な勝利を収めるまでは何の便りも寄越さないことは予想していた。ルーシーは、

ほんの些細なことだが、彼のためにできることを一つだけすることができた。そのころ、北東アフリカ交易商会が長期にわたる音信不通に不安を感じ、痺れを切らして、この件につき国会で緊急質疑を行なってほしい、それが駄目なら新聞に記事を書くと圧力をかけ、何が何でも軍隊を派遣し、もしマッケンジーが苦況に陥っているならこれを救い、もしもう帰らぬ人となっているならその仇を討つようにと政府に迫った。しかしルーシーには、公の介入ほどアレックが怖れているものはないと分かっていた。もしこの企てがうまくいくとしたら、それができるのは自分だけなのだ、そうアレックは固く信じていたではないか。ルーシーは、ロバート・ボールガーとディック・ローマスに、二人の影響力を行使して、軍の派遣がなされることのないようにしてほしいと頼んだ。アレックが本当に必要としているのは、ただ、時間と、行動の自由なのだ。

このようにルーシーは、様々な夢と、言ってみれば虫のいい空想を抱いて毎日を送っていたのだが、突然、そうしたものは異なる性質の手紙が届けられ、日々の生活の単調さは破られた。パークハースト刑務所から通知が来たのである。フレッド・アラトンの健康状態思わしからざれば、当局は残る刑期の免除を決定、明後日午前八時釈放予定、とのことだった。ルーシーはほっとすべきなのか、悲しむべきなのか分からなかった。というのは、拷問とも感じられたであろう長い惨めな生活から父が解放されることは感謝するとしても、その自由は一に父が不治の病に罹っているがゆえに与えられたことは明白だったからだ。人の法をもってしては閉じ込められぬ自由を前にして、寛大な決定はなされ、フレッド・アラトンは愛する者のもとへ帰ることが許されたのだ。

ルーシーはすぐにライト島へおもむき、かつてハムリンズ・パールで仕えていた或る婦人の家に部屋を借りた。

真冬だった。刑務所の門で父を待つルーシーに、冷たい、霧のような雨がかかった。三年が経過していた。ルーシーは父を両腕に抱いてキスをした。胸がいっぱい言葉が出なかった。二人は待たせてあった馬車で家に向かった。

家にはルーシーの希望で父の好物が集められた朝食が用意されていた。フレッド・アラトンは物思いに沈んだように、テーブル・クロスを、食卓に飾られた花を、そして焼きたてのパンを見つめ、何も言わず首を振るだけだった。涙がゆっくりと頬を伝って落ちた。やがて彼はぐったりと椅子に腰を下ろした。ルーシーは、なんとか食事をとってもらおうと、台所からお茶を持ってきたが、父はそれもしりぞけ、寢れ、充血した目でルーシーを見ていた。

「花を取っておくれ。」つぶやくように言った。

今日初めての言葉だった。テーブルの中央に水仙を生けた花瓶があつて、ルーシーはそこから花を何本か取ると、素早く茎の水を切り、父に渡した。受け取る手がふるえていた。彼はそれを胸に押し当て、花に顔を埋めた。新たな涙が淡い黄色の花弁を濡らした。

ルーシーは父の首に腕を廻し、頬に自分の頬を寄せた。

「お父さん、泣かないで。」ルーシーは囁いた。「忘れるようにしなくては。」

父が疲れきった様子で椅子の背にもたれかかると、花が足元に落ちた。

「なぜ釈放されたか分かるだろう？」

ルーシーは問いには答えなくて、頬にキスをしながら、

「また一緒に暮らせるようになって、とてもうれしく思っています。」と、つぶやくように言った。

「もうすぐ死ぬからさ。」

「いいえ、そんなことあるはずありません。すぐにまたお元気になります。まだまだ何年も何年も生きて、幸せになっていただかなければ。」

彼はルーシーを探るような目つきで長い間見つめていた。再び話し出したとき、その声は怖ろしいほどに虚ろだった。

「生きることを望んでいると思うのかい？」

その響きの耐えがたいほどの痛ましさに、ルーシーは自分の声がふるえないですむようになるまで待たなければならなかった。

「わたしのためにも生きていただかなければ。」

「私を憎んでいないのかい？」

「憎んでいるどころか、いまほどお父さまを愛していると思ったことはありません。これからもずっと愛し続けますわ。」

「私が刑務所にいたんだから、おまえに結婚を申込んだ男なんていないだろうな。」

あまりに脈絡を欠いた問いかけに、ルーシーは言うべき言葉が見つからなかった。父は苦々しげに笑った。

「銃かなにかで自殺すべきだったんだ。そうすれば世間は私のことなど忘れてしまつて、おまえにもチャンスがあつたかもしれない……。どうしてボビーと結婚しなかつたんだい？」

「結婚したいと思つたことがありますもの。」

父は、疲れすぎているのだろう、一時にほんの少ししか話せないようで、いまは目を閉じていた。

眠ってしまったのだと思ひ、ルーシーは床に落ちた花を拾いはじめた。しかし彼は娘が何をしているかに気づき、

「私に持たせておいてくれないか。」と病気の子供が泣きつくように、声をふるわせながら言った。花をもう一度持たせようとすると、父はルーシーの手を取り、優しく撫でた。

「私にできることは、早くこの命を終わらせることだけだ。もうすぐだよ。誰も私を必要としていない。厄介者なんだ。刑務所から出してほしくなかった。ひっそり死なせてほしかった。」

ルーシーは深くため息をついた。いま横に坐っている、落ちぶれ、腰の曲がった人が自分の父だとはとても思えなかった。急に老け込んで、老人のように見えた。しかしまだ老人と呼ぶ年齢ではない。その姿には自然の摂理に反することから生まれる、ある得体の知れない悍ましさおぞがあった。躰は痩せ細り、手の震えが止まることはなかった。歯はほとんど抜け落ち、頬はこけ、口の中でもごもご言う言葉は聞き取りにくかった。目に輝きはなく、短い髪は真つ白だった。ときどき激しく咳き込むのだが、咳をすると心臓がひどく痛むらしく、見ているだけで辛かった。部屋は暖かいにもかかわらず、悪寒に身をふるわせ、音をたてて燃える暖炉の火にかぶさるように縮こまっていた。

呼びにやった医者が来てくれ、診察をしたが、肩をすくめるだけだった。「お気の毒ですが、どうしようもありませんな。心臓がすっかり弱っているし、全身が衰弱している。」

「快復の見込みはまったくないのでしょうか。」

「まあ、できることといたら、痛みを一時的に和らげることぐらいです。」

「それで、あとのくらい生きられるのでしょうか？」

「何とも言えません。明日お亡くなりになるかもしれないし、半年もつかもれない。」

こうした場面には何度も遭遇してきたこの老齢の医者は、ルーシーの悲しそうな様子に深く同情した。

「お父さんは生きることを望んでいないようですな。死がお父さんを解放してくれるなら、それも、或る種、慈悲かもしれない。」

ルーシーはこの見解に言葉を返すことなく父の寝ている部屋に戻ったが、言うべき言葉が見つからなかった。父は医者がどんなことを言ったのかにまったく無関心で、尋ねもしなかった。ケルシー夫人が、家具付きとはいえ不自由な貸間にルーシー親子が暮らすことに耐えられず、手紙で、チャールズ通りにある自分の家を使ってくれと言ってきた。クローリー夫人も、もし二人だけで静かに暮らしたいならコート・リーズ荘を好きなように使っていいと言ってくれた。ルーシーは数日のあいだ、父が健康を回復するかどうか見守っていたが、何の変化も見られないことから、なんらかの決断をしなければならぬだろうと考え、父に、二人から親切な申し出のあったことを話してみた。しかし父は、どちらの申し出に対しても、受けるとも受けないとも言わなかった。

「では、ここに留とどまっていらっしやりたいのですか。」

彼は暖炉の火を見つめたきり、何も答えなかった。ルーシーは、父には質問の意味が分かっているのだと思った。というのは、父がとりとめのないことを考えているように見えることがしばしばあったからである。ルーシーが同じ質問を繰り返そうとしたとき、父が、

「ハムリンズ・パールーに戻りたい。」と言った。

ルーシーは啞然として父を見つめた。哀れな姿だった。狼狽していることを気取られないようにす

るのが精一杯だった。父は忘れてしまったのだろうか。先祖代々の屋敷がまだ自分のものだと思っ
ているようだし、それを手放すにいたった経緯についてはすっかり記憶にないようだ。ならば、どうし
て自分の口からそのことを言えよう？

「自分の家で死にたいんだ。」父が口籠るように言った。

ルーシーは動揺し、困惑した。何か答えなくてはならない。父の願いを叶えることは不可能だった。
しかし、あからさまな事実を告げるのはあまりに酷だ。

「あそこは、いま、他人が住んでいるんです。」

「そうかね。」父は無頓着に言った。

彼はあいかわらず暖炉の火を見つめていた。怖ろしい沈黙だった。

「いつなら戻れるのかな、」父の声が沈黙を破った。「早く戻りたいんだが。」

ルーシーは躊躇った。

「館ではなくて、荘園のなかの小さな家をどこか借りることにしたいと思います。」

「それでいいよ。」

父はすべてを当然のことと受け入れているようだった。明らかに、ハムリンズ・パールを手放さ
なければならなかったあの悲しい顛末についてはすっかり忘れていた。にもかかわらず、奇妙なこと
に、なぜ館に他人が住んでいるのか、なぜそこに住めないのかについては何の質問もしなかった。ル
ーシーは、愛してやまない場所を再び訪れることを考えると胸が痛んだ。激しい後悔の念をこれまで
どうにか押さえてこられたのは、ハムリンズ・パールーのことは考えないようにときつく自分を戒め、

断固としてそこに関するいっさいから目を背けてきたからである。それが今、実際そこへ行かなくて
はならない破目に陥ったのだ。古い傷口が開かれるだろう。しかし、父の希望を叶えないわけにはい
かない。ルーシーは必要な手配にとりかかった。古くからの知り合いで、数年前まで父に禄を与えら
れていた教区司祭なら好意に甘えることができるだろうと考え、手紙で、父が余命幾許もなく、もう
一度かつて自分の土地だったところを見たいと言っている、ついでには、いずれかの小別荘に部屋を見
つけてもらいたい、どんなに小さな部屋でも、どんなに粗末な部屋でも構わない、と頼んだ。司祭は
電報で返事をよこし、お父さま共々どうか自分の家に滞在していただきたい、コテージよりは寛げる
だろうし、自分は独り者ゆえ、この大きな司祭館には余分な部屋ならいくらでもある、と言ってくれ
た。ルーシーは司祭の優しさに深く感謝し、喜んでこの申し出を受けることにした。

翌日二人はソーレント海峡を渡り、短い旅をした。

この司祭はオックスフォード大学の学監をしていた人なのだが、フレッド・アラトンが、領地に隣
接する司祭館には学識ある者というアラトン家の伝統に則って、禄を与えたのだった。司祭がそこ
で暮らすようになってからもう何年も経過していた。痩せて、灰色の髪をした、穏やかな人物で、他
の村から隔絶されたようなこの村で、隠者のような生活を送っていた。司祭としての義務は几帳面に
果たしていたが、生活の大半は愛する読書にあてられ、めったに館を離れることはなかった。単調な
日々の生活が破られるのは、ときどき、どこかの古本市でまとめて買い求めた、かび臭く、分厚い本
の小包が届けられるときだけだった。彼の学識は多方面にわたり、人の知らないようなことをよく知
っていた。一人暮しからくる一風変わったところはあったが、とても優しく、親切なこころの持主で、

欲は無く、質素な生活を送っていた。

この家で――床から天井まで古い本で埋めつくされた部屋で――ルーシーは父と暮らすことになった。生まれ故郷に戻りたいという願いだけがフレッド・アラトンの命を支えていたのかもしれない。司祭館に落ち着くや、病状はさらに悪化した。ルーシーは日々看病に忙しく、この地に戻ったら襲われるのではあるまいかと心配していた後悔の念に身を浸している時間はなかった。一日の大半は父の部屋で過ごした。父が半ば昏睡状態のようにうたた寝をしていると、親切にも司祭が来て窓辺に坐り、低い声でルーシーに、ちよつと変わった、今は忘れられている作品を朗読してくれるのだった。

ある日、アラトンの病状がいつになく良いように見えた。ここ一週間、父は意識朦朧としていることが多く、とりとめのないことを口走り、ルーシーはいよいよ死が近づいたと考えていたのだが、この日は意識が不思議なほどしつかりしていた。父はベッドから出たいと言った。父の願いを挫くのはルーシーには忍びなかった。父は、よかつたら外へ行ってみたくも言った。よく晴れた、暖かな日だった。二月だったが、春がもうそこまで来ていると感じさせる陽気だった。庭の木陰には松雪草やクロッカスが生き生きと花を咲かせ、イタリアの絵画を見ているようで、この色とりどりの花の上に、あの十五世紀の画家ペルジーノの描いた優美な天使が降り立ったとしても不思議ではないような気がした。教区民を訪問するために使う小型馬車を司祭が所有していたので、三人はそれに乗って出かけることにした。

「沼地の方へ行ってみよう。」アラトンが言った。

三人は曲がりくねった道をゆつくりと進み、広々とした潟に來た。彼方には静かな海がきらきら輝いている。風はなかった。近くで草を食んでいた牛が首をもたげ、物憂げに尻尾を揺らし、蠅を追いかけている。ルーシーは心臓の鼓動が早くなるのを感じた。父も自分と同じように、この風景こそが自分の故郷にもっともふさわしい風景だと考えているのだ。広々とした沃野、美しい木々なら他の土地にもある。鬱蒼とした森や、ヒースの生茂った丘なら他にもある。しかし、この平坦な緑の沼地はアラトン家の故郷独特のものだった。ルーシーは父の手を取り、父の見つめる海の方角に目をやった。二人とも無言だった。やがてフレッド・アラトンの寡れた顔に穏やかな表情が浮かび、彼はため息をもらしたが、そのため息は必ずしも苦渋のためばかりではなかった。ルーシーは、この美しく広々とした土地がもはやアラトン家のものではないことを、父が知らないまままでいてくれるようにと祈っていた。

その夜、ルーシーは死がすぐそこに来ていることを直感した。フレッド・アラトンはいつにもまして口数が少なかった。出獄を許されて以来、日にせいぜい十数回しか言葉を発することはなかったし、ぼんやりした状態から醒めることはほとんどなかったのだが、今日に限っては、なぜかじつとしていられない様子で、ベッドに入ろうとしなかった。肘掛椅子に腰を下ろし、窓辺に運んでくれと言った。空には雲一つなく、月がまばゆいばかりに輝いていた。ハムリンズ・パールを取り囲んでいる古い榆の木がはつきりと見え、フレッド・アラトンの視線はその木々の上にそがれたまま動かなかった。ルーシーもまた榆の木を見つめ、悲しみのうちに、自分があんなにも愛していた庭、祖先が丹誠こめて育ててきた木々のことを考えていた。あの灰色の石でできた館、幸福な笑いがあふれていたいくつもの広々とした部屋のことを思い、胸がいっぱいになっていた。

突然、物音がして、ルーシーはそちらを見た。父の首が後ろに倒れ、父の息遣いは騒々しいほどに荒かった。ルーシーは司祭を呼んだ。

「どうとう最後の時が来たようです。」彼女は言った。

「医者連れてきましょうか。」

「無駄でしょう。」

柔らかなランプの光に照らされたフレッド・アラトンの顔は真つ青だった。司祭は跪くと、死者のための祈りを唱えはじめた。ルーシーは思わず身をふるわせた。農場で鶏がときの声をあげ、離れた場所から別の鶏が陽気にそれに答えた。ルーシーはこの善良このうえない司祭の肩に手を置き、

「すべて終わりましたわ。」と静かに言った。

彼女は身をかがめ、父の臉にキスをした。

一週間後、ルーシーは浜辺を散歩した。フレッド・アラトンは、三日前、自らがその名を穢した祖先の墓に埋葬された。寂しい葬儀だった。というのも、ルーシーは、現在イギリスにいる唯一の親類であるロバート・ボールガーに、葬儀には来ないでほしいと頼んだからである。参列者はルーシー一人だった。棺が墓穴に下ろされ、司祭は死者を弔う、悲しくも美しい聖書の一節を読み上げた。ルーシーは、しかし、悲しいという気持ちを感じなかった。父は安らかに眠っている。今はただ、父のあやまちと罪が早く忘れられることを祈るのみだ。そうなれば、ひよっとしたら、父を知る人々が、あの人はチャーミングな好人だった、賢くて思い遣りのある人だったと思いついてくれるかもしれない。

それがルーシーのささやかな願いだった。

ルーシーは翌日の朝司祭の家を後になんていうか。最後にもう一度この懐かしい土地を歩きたいと言ったとき、司祭は気持ちを汲んで、お供しましょうとはあえて申し出なかった。今、この愛してやまない風景のなかにいて、ルーシーの胸はいっぱいだった。が、同時に或る安らぎも感じていた。父が平和な眠りにについているという事実が影響したのだろう、ルーシーは諦念とでも言うべき新しい感情を経験しつつあった。

今、ルーシーのころは未来の中にあつた。胸には希望がわいていた。波打ち際に立ち、海を見つめていると、三年前、コート・リーズ荘に滞在していた折、ケントの海岸を洗う波を見ていた時のことを思い出す。あの時からなんと多くのことが起こったことだろう。なんと多くの悲しみに襲われたことだろう。しかし、そうした多くのことがあつたにもかかわらず、自分は今、あのとときよりも幸せだと感じる。あの遠い過去においては——ああ、本当に遠い遠い昔に思える——自分の生活の中には一条の光さえなかった。それが今、自分は、どんなに重く辛いことをも軽くしてくれる大きな愛に包まれている。

雲が垂れこめはじめ、水平線のあたりでは、空の灰色と海の灰色とが混ざり合っていた。ルーシーは熱い視線をその水平線の彼方に送った。あの水平線の彼方、未知のアフリカ、アレックとジョージが崇高な行為に携わっている土地に、自分の存在のすべてがあるようにルーシーには感じられた。二人からの連絡が途絶えてから随分と時間が経つ。この沈黙は一体何を意味するのだろうか。

「あの先を見ることができたら……。」ルーシーはつぶやいた。

ルーシーの想いは、この広い空間を突き抜け、アレックとジョージのもとへ遙かな旅に出ようとするのだが、道半ばにして断ち切れ、またこの海岸に戻ってくるのだった。二人がいま何をしているのか、ルーシーには知るよしもなかった。

もしも、ルーシーの愛が、彼らを隔てているこの果て知れぬ空間に橋を架けることができたとしたら、もしも、奇跡によって、ルーシーにいま二人がしていることが見えたとしたら、彼女はこれまでに目にしたどんな悲劇よりも大きな悲劇を目撃することになっていただろう。

暗い、いまにも嵐になりそうな夜だった。雨が降り続き、アレックのキャンプ地はどろどろにぬかるんでいた。海岸地域から連れてきた忠実なスワヒリ族の者たちは、寒い寒いと言いながら火を囲んでお喋りに興じ、歩哨はそれぞれの持ち場で身を震わせていた。人の気力を奪うような夜だった。こうした夜には、どんな大きな望みも、くだらない、虚しいものに思えてくる。アレックのテントの中は、雨が伝って流れ落ち、野鼠が我物顔で走り回っていた。強風の吹くたびに、丈夫な帆布は風を孕んで膨れ上がり、張り綱はヒューヒューと音を立てて揺れ、今にもすべてが吹き飛ばされるのではあるまいかと思われた。テントはいつにもまして物であふれていた。といっても、そこにあるのは蚊帳を吊ったアレックのベッドと折畳み式のテーブル、庭椅子が二脚、それに、アレックの貴重品を入れたいくつかのケースだけだった。床に敷かれた小さな防水布が、その上を歩くたびにピチャピチャと音をたてた。

椅子に腰掛け、テーブルの上に腕を組み、それに頭をのせて一人の男が眠っていた。銃が彼の前に置かれている。ウォーカーという、新たに北東アフリカ交易商会の最北の支社を任された若い男で、休暇で英国に戻った前任者に代わって一年前からアレックの遠征隊に加わっていた。太っていて丸顔、

剽軽な物腰の愉快な若者で、アフリカの中でも最も野蛮な地域でお目にかかるうとはまったく想像できない類の男だった。それに、ここでの生活も彼に不似合いなこと、この上なかった。二十一歳に達するとすぐに、彼はちよつとした資産を受け継いだのだが、それを次から次へと、気前よく、儲けにしないことに使ってしまった。そしてとうとう一文無しになってしまったとき、家族の友人で、たまたまこの商会の取締役を勤めていた人が今のポストを提供してくれ、餓死を逃れる途は他になく、有難く受け入れたのだった。しかしこの逆境も彼の明るい性格にはなんの影響も与えなかった。どんな厄介なことの中にあつても、いつも陽気で、過去の愚行を悔やむこともなければ、それに続きたいろいろな苦勞について愚痴をこぼすこともなかった。アレックはこの男がたいそう気に入つていた。自分が無口な人間だったので、ディック・ローマスやウォーカーのような口から先に生まれてきたとしか言いようのない人間といると、何かほつとするのだ。この若者の単純で素朴な人柄、アフリカとメイフェアとの違いに無邪気に驚いている姿に、アレックは楽しくなり、しばし苦勞を忘れるのだった。

アダムソンがテントに入ってきた。スコットランド人の医者で、すでに過去二回の遠征をアレックと共に経験し、彼とは固い友情で結ばれていた。出身はエンジンバラ、ゆつくりと引きずるように話し、茶目っ気あるユーモアの持主だ。躰は異様に大きく、白人の中でもずば抜けていて、その物腰は話し方同様ゆつたりと落ち着いている。

「やあ、」入ってくるなり彼は大声で叫んだ。

ウォーカーは銃声を聴いたかのようにびつくりして立ち上がり、本能的に銃を握んだ。

「大丈夫、大丈夫！」医者は手を挙げて笑った。「撃たんでくれ、私だよ。」

ウォーカーは銃を置いたが、顔はまだぼんやりしていた。

「意識朦朧つてこのようだな。」

太った、陽気な若者はやつと目が覚めたようで、短く笑った。

「一体なぜ起こしたんです？ いい夢を見てたのに。ハイ・ヒールとキュツと締まった足首、白いレースのスカートが風に揺れて、……」

「本当かい。そりゃア、そりゃア！」医者はおつとりと笑った。「それじゃ、君がけしからんことをしてかさないですむように、いいところで起こしてやったというわけだ。腕の傷を見ておこうと思つてね。」

「最高の見物でしたよ。」

「君の腕がかね？」医者は素っ気なかった。

「いえ、ピカデリーのスワン・アンド・エドガー店の前を歩いてた女ですよ。まったく、先生ときたら趣味も遊び心もない野蛮人なんだから。先生にはあのワクワク、ドキドキするような楽しみがお分かりにならない。あの素晴らしく上品で、うっとりするほど繊細優雅なスカート。その裾をもち上げるとこへいくまでの、不安と期待の入り交じった時間、深謀遠慮……。」

「ウォーカーくん、君はまったく不道徳な男だよ。」アダムソンが笑いながら、例のゆつくりと引きずるような口調で言った。

「でも今のような状況じゃ、まあ、甘ったれた怠け者を叱りつけることで満足しなくっちゃ。それに

今この瞬間は、むさ苦しいテントの簡易ベッドのほうが一蚊がブンブン飛んでたって——若くて美しい女性の誘惑より有難いし、たとえトロイのヘレンとよろしくやらせてくれると言われたって、夕飯を犠牲にするつもりにやなれませんか。」

「まったく、君の話を聞いていると、酸っぱいブドウの話の、あの狐のことを思い出すよ。」

ウォーカーは、図々しくも悠々と後ろ足で立ち、こちらを見つめている鼠めがけてブリキの皿を投げつけた。

「ナンセンス。われに心地よきベッドと充分なる食事、一箱の煙草を与えよ、ですよ。そうしてくれりや、美少女アマリスだって糞食らえですよ。」

アダムソン医師は声を出さずに笑った。現在自分たちが置かれた困難な状況と、ウォーカーの軽薄愉快な話との対照の中に、一種不気味なユーモアを見出したのである。

「さて、傷の具合を見ようじゃないか。」彼は話を仕事のことに戻した。「まだずきずきするかね。」

「なに、心配していただくほどの傷じゃありません。明日になりやきつと治ってますよ。明日もきつと雨になると同じくらいの確率でね。」

「それでも包帯は替えておいたほうがよからう。」

ウォーカーは上着を脱ぎ、袖を捲り上げた。医者は包帯を取り去り、大きく生々しい傷口を見た後、新しい包帯に取り替え始めた。

「順調に治っているようだ。」医者がつぶやいた。「不思議なもんだ、何もかもがうまくいかないというのに、傷は着実に治っていく。」

「たいそうお疲れのようですね。」医者が包帯の端を器用に切るのを眺めながらウォーカーが言った。

「いまにも倒れそうだよ。しかしベッドに入る前にやらなくちゃならんことがゴマンとあってね。」

「考えてみると面白いんですが、僕は、アフリカに来ることになったとき、きつと随分と愉快な生活が待っているにちがいないと思った。やらなくちゃならないことは特になくて、狩でもしてりゃいいんじゃないか、なんてね。」

「君だって、まさかピクニックに行くようなものだとは思わなかっただろう？　しかし、誰もここまでするで大変なことになるとは予想しなかったと思うよ。」

ウォーカーは空いているほうの手を医者の腕の上に置いた。

「先生、もしイギリスに帰れたら、今度は、頓馬にも冒険心なんてものに誘われるような馬鹿なことはしないで、何か安全で無難な仕事を探しますよ。ワインのセールスマンか保険の勧誘員にでもなって、ひっそり人生を送りますよ。」

「ここへ来ると誰でもそんなことを言うものさ。ところがいざ帰ってみると、駄目だね。ジャングルや大平原、焼けつく太陽や、うるさい蚊でさえも頭にこびりついて離れない。それで気がついてみると、船の予約を済ませていて、またこの神様に見捨てられた大陸に来てしまうというわけさ。」

しばらく二人とも何も言わなかった。ウォーカーが沈黙を破ったが、今までの話題とはまったく関係ない話だった。

「先生、ランプステークのこと、考えたことありますか。」

医者はぼかんとウォーカーを見つめていた。ウォーカーが笑いながら続けた。

「ときどき、あんまり暑くって頭のとっぺんが熔けちゃうんじゃないかと思うようなところを歩いているときや、考えられないほどひどい朝食をとつてるとき、ランプステーキの幻影が見えるんです。」

「両手を使わないで片方の手だけで説明してくれると、包帯を巻きやすいんだがね。」

「クラブの食堂が見えるんです。僕は窓際の小さなテーブルに就いて、ピカデリーの賑わいを眺めている。テーブルクロスは染み一つないし、調度品は何から何までピッカピカ。使用人が媚びるようにランプステーキを持つてくる。完璧に焼き上げられて、とつても柔らかくって、口の中でとろけちゃいそうなんです。その男は、ステーキの横にパリパリとしたフライドポテトも置いていく。香りが漂ってきませんか？ つぎに制服を着た給仕が白鐵でできた大ジョッキを持ってきて、なみなみと——いいですか——なみなみどビールをついでいく。あの泡だち……」

「いや、まったく、君のおかげでこの旅がどんなに愉快なものになったことか。」

「よく僕は、耐えがたき空腹を和らげるべく然さりげない警句を考えてみたり、忍びがたき喉の渇きを誤魔化すべく都々逸をひねってみたりするんです。」

ウォーカーは自分のこの科白が気に入って、将来もう一度使つてやろうと記憶に留めた。医者はずよつと間をおいた後、真面目な顔でウォーカーを見た。

「昨夜で君は冗談を言い尽くしたと思つていたよ。私はキニーネを使い尽くしたわけだがね。」

「僕は進退きわまつたつてわけですね。」

「マッケンジーと遠征するのはこれで三回目になるが、正直言つて、今ほど、すべて終わったと感じたことはなかったな。」

ウォーカーは、ちよつとくらい哲学的思索に耽つても許されるだろうと考えた。

「先生、死というのは面白いもんですね。死にそうにないとき死について考えると、怖ろしくて足がもぞもぞしてくるくせに、いざ死と向きあつてしまうと、あんまりにも当然に思えて、恐がることを忘れてしまうんですね。」

実際、いま生きていることは奇跡としか言いようがなかった。危うく死をまぬがれたからか、皆奇妙に軽やかな気分になつていた。彼らは、文字通り背水の陣で戦い、ぎりぎりの状況の中で、おのおのその人間性を曝け出したのだった。ほんの数時間前まで状況が状況だっただけに、いま初めておとずれた安堵感に浸りながら、彼らは本能的に、たわいない言葉のやりとりの中に慰めを求めていた。しかしアダムソン医師は真面目な人で、話し始めたことを中途半端に終えるのを潔しとしなかった。「もしアラブ人が躊躇しないで、あと十分も攻撃を続けていたら、我々は文句なしに全滅していただろうな。」

「マッケンジーもなかなかだったじゃないですか。」

指揮官に対する称讃の念をこんなふうになく表わしたのは、やはりウォーカーもイギリス人、彼の中に人を絶讃することにたいする恥じらいがあつたからである。

「まあ、そうだな。」アダムソンも素っ気なく答えた。「私の印象では、マッケンジーは、我々ももう駄目だと考えていたようだ。」

「なぜそう思うんです？」

「分かると思うが、私はマッケンジーのことはよく知っている。彼は、物事が順調に運んで全てうま

くいつているときには、ちょっと苛々する傾向がある。そんなときには無口になって、誰かが彼の氣に入らないことをしない限りほとんど口をきかない。」

「ただし、誰かが氣に入らないことでもしよものなら、猛烈に叱りつけるんですよ。」ウォーカーはここから同意した。そして、アレックが一度ならず彼に、凶に乗ってはいけない、自分はまったく取るに足らない者だという意識を常に持つように、と言っていたことを思い出した。「アフリカ人が彼のことを雷鳴サンダー・アンド・ライトニングと雷光と呼ぶのも、まんざら理由がないわけじゃない。」

「ところが事態が逼迫してくると、彼は猛烈に元氣になってくる。状況が悪ければ悪いほど、陽氣になってくる。」

「わかる、わかる。僕らが、腹はペコペコ、喉はカラカラ、躰は汗でグシヨグシヨ、もういいかげんその場に横になって死んじまいたいと思うようなとき、マッケンジーは、それこそ上機嫌このうえない。まったくイヤミな性格！僕は、自分が不機嫌なときは、他のみんなも不機嫌であってほしいな。」

「彼はここ三日間ずっと、浮かれているんじゃないかと思うくらい陽氣だろう？ 昨日など、黒人たちと冗談を言い合っていたよ。」

「スコッチ・ジョークつてやつですよ。アフリカの言葉を使つて言うと、きっと面白さが倍增するんじゃないですか？」

「あんなに明るいマッケンジーはこれまで見たことがない。」医者はウォーカーが茶々を入れるのを無視して続けた。「で、思ったね。隊長は、我々が最悪の状況下にあると考えていると。」

ウォーカーが氣怠そうに立ち上がり、躰を伸ばした。

「やれやれ終わった。僕らはここ三日間誰も寝てませんからね。今度いったん寝かせてもらえたら、一週間は起きるつもりありませんよ。」

「私は他の患者を見に行かなくてはならん。パーキンズの熱の具合が今回は芳しくないんだ。ちょっと前にもひどく譫言を言っていた。」

「ごめんなさい、うっかり忘れてました。」

アフリカでは人間性が変わる。ウォーカーも、ここでは、自分が幸せだと感じる時には、それを稀有なことだと考え、それゆえ、機会があれば喜んで冗談を言い、軽口をたたいた。だから、つい昨日一人の白人が殺され、もう一人が頭に銃弾を受けて意識不明でベッドに横たわっていることを危うく忘れかけていた。二十人近い原住民が死に、他の者たちも、文字通り危機一髪難を逃れたのだった。「リチャードソンもかわいそうに。」ウォーカーが言った。

「彼なしではやっていけないのにな。」医者はゆつくりと応えた。「運命の女神は、どうも選ぶべき男を間違えるようだ。」

ウォーカーの視線がこの筋骨たくましい医者に向けられ、その顔が一瞬曇った。アダムソンが誰のことを言っているのが解り、ウォーカーは肩をすくめた。しかし医者はかまわず続けた。

「誰かを失わなくちゃならなかったのなら、リチャードソンを殺した弾が、あのアラトンの小僧に当たって来てくれたら、どんなに良かったことかと思うよ。」

「彼なら大した痛手じゃなかったでしょうね。」少し間を置いてウォーカーが言った。

「マッケンジーはあの若僧に対して辛抱強すぎる。もし私だったら、あのマキナリーを追い払ったとき、一緒に海岸へ送り返していただろうよ。」

ウォーカーが何も言わないので、医者は続けて一つの教訓を述べた。

「人間の中には生まれつき根性の曲がった奴がいて、それを真つ直ぐにするチャンスをいくら与えてやっても駄目、どうしようもない、そういう奴がいるんだ。もう、そういう奴は勝手にくたばらせるしかない。」

その時、アレック・マッケンジーが入ってきた。水滴が雨合羽マツケンツツシユからしたたり落ちている。アレックは合羽を脱ぎながら、ウォーカーと医者の姿を見て表情を輝かせた。アダムソンは古くからの友人で、彼になら常に安心して頼ることができることと分かっていた。

「外で歩哨をしてくれている連中を見て廻っていたんだ。」

こんな些細な情報を自分の口から伝えることはマッケンジーにしては珍しいことだったので、アダムソン医師は顔を上げて彼を見た。

「何事もなかったかね？」 医者が訊いた。

「うん。」

アレックは医者を見つめている。アダムソンにどこか妙なところがあるとしても考えているような表情だ。医者はアレックのことは十分に分かっていたから、何か重大なことが起こったのだとすぐ察しがついたが、急せかしても無駄だということも重々承知していたので、あえて訊かなかった。やがてアレックが、

「今、ミンダビが送ってよこした現地人の使者に会ってきた。」と言った。

「何か重要なことでも？」

「ああ。」

アレックの答えはあまりにぶつきらぼうで、医者はそれ以上尋ねることができなかった。アレックはウォーカーのほうを向き、

「どうだね、腕の具合は。」と訊いた。

「なんてことありませんよ。だだの掠り傷かきです。」

「軽く見すぎないほうがいい。ここではほんのちよつとした傷でも大変なことになることがあるからね。」

「一日か二日でよくなると思うよ。」 医者が言った。

アレックは椅子に腰掛け、しばらく何も言わなかった。何か熱心に考えながら顎髭あごに指を通している。その髭は縛もれあい、イギリスにいたときに比べ、はるかに長くなっていった。

「他の連中の具合はどうかね？」アレックが突然アダムソンの方に顔を向けて尋ねた。

「トンプソンは明日の朝まではもたないと思う。」

「さつき彼のところへ行ってきた。」

トンプソンというのは昨日頭を撃たれ、以来意識を回復していない男だった。一攫千金いっかくを夢見た金鉱探しの老人だったが、今は奴隷交易を一掃するための遠征に身を投じていた。

「パーキンズはあと一週間はベッドから出られないだろうな、まあ当然だが……。それに黒人の中に

もかなりひどくやられた者がいる。敵は忌々しいことに爆弾を持っている。」

「アフリカ人で助かりそうにない者はいるのかな。」

「いや、大丈夫だろう。かなり重傷の者が二人いるが、ゆっくり休めば何とかかなと思う。」

「わかった。」アレックの返事は簡潔だった。

彼はテーブルをじつと見つめ、無意識に、その上に置いてあるウォーカーの銃を指で撫でていた。「あのう、最近何か食べましたか？」しばらくしてウォーカーが尋ねた。

アレックは瞑想から醒めて、首を振り、ウォーカーを見ると明るく笑った。彼には珍しいことで、努めて快活に振舞おうとしているのは明らかだった。

「そうだ、すっかり忘れてた。最後に何か食べたのはいつだったかな。あの忌々しいアラブの連中ときたら、ちつとも休ませてくれないんでね。」

「どうせ今日も何も食べなかったんでしょう？ ひどく腹へこなんじゃないんですか？」

「君にそう言われて、腹が減ってきたよ。」アレックが陽気に答えた。「それに喉も渴いた。冷たいビールを飲ましてもらえるなら、象牙と交換したっていいな。」

「いやあ、残念です。生温い水しかありません。」ウォーカーが笑いながら元気よく答えた。

「何かうまいものを持ってくるように、ちよつと給仕に言ってくるよ。」と医者と言った。「君が何も食べる気がしないのは、あんな腐ったような肉を食べたせいさ。」

「厳しいお医者さんだな。」アレックが愉快そうに目を輝かせた。「あんなもので腹の調子が悪くなるなんてことはないさ。それどころか、この頃はあの味にやみつきになってね、なかなか捨てたもん

じゃない。」

しかし、アダムソンが給仕を呼びに行こうとすると、アレックは彼を引きとめた。

「いいよ、行かなくて。かわいそうに、あの給仕だったくてたくなんだ。呼ばれるまで眠っていていと彼には言ったんだ。私なら少し食べればそれで充分。自分で何か探してみるさ。」

アレックはあたりを物色し、やがて肉の缶詰と航海用ビスケットを見つけた。戦闘の間は獲物を探しにゆく余裕はなく、食料庫に、品数は勿論のこと、豊富に食料が揃っているわけがなかった。アレックは探し出したものをテーブルに置き、腰掛けて食べ始めた。ウォーカーがアレックを見て、

「美味いでしょう。」と皮肉っぽく言った。

「最高だよ！」

「あなたがこの人間とうまくやっていけるのも不思議じゃないですね。あなたには原始的、野蛮人的本能がある。要は腹に溜まりさえすりやいいという、なさない、動物的な理由でしか食事をしない。食事が一種素晴らしい芸術だなんてことは、これっぽちもお分かりじゃないですよね。」

「この肉はちよつと黴臭くなっているな。」アレックが軽くやり返した。

そう言いながらアレックはいかにも旨そうに食事を続けたのだが、突然彼の脳裏にディックの顔が浮かんだ。きつと今ごろはご自慢のカールトンで、ささやかながら心地よい夕食の席に着こうとしているのだろう。すると今度はピカデリーの夜の雑踏が思い出された。流れるように行き来する軽装馬車や乗合馬車、人で賑わう歩道、街灯の楽しい輝き……。

「明日みんなに分ける食料をどうしたらいいのか判らないんですが。」ウォーカーと言った。「どつ

かから穀物を調達できなけりや、かなり困ったことになると思います。」
アレックは皿を押しやった。

「私なら明日の夕食についての心配はしないがね。」彼は低い声で笑った。

「なぜです？」ウォーカーが尋ねた。

「なぜって、私の考えでは、十中八九、我々は全員明日の太陽が昇る前に息絶えてしまっているからさ。」

医者とウォーカーは黙ってアレックを見た。外では風が薄気味悪く唸りをあげ、横殴りの雨が激しくテントを叩いている。

「マッケンジーさん、またちよつとした冗談ってやつですか。」ウォーカーがようやく言った。

「私が冗談が下手なのは、君だってよく知っているだろう？」

「それで今度は何がまずいんだね？」医者が早口に言った。

アレックは彼を見て、くすくすつと笑った。

「君たち二人とも、今夜はベッドには寝られないよ。蚊にとつてはまたまた残念な夜になるわけだ。キャンプを畳んで、一時間後に出発する。」

「今日みたいな一日を過ごした後としちゃア、ちよつと酷いんじゃないやありません？」ウォーカーが言った。「みんな疲れきってて、一マイルだって歩けませんよ。」

「二時間は休んだことになる。」

アダムソンが大儀そうに立ち上がり、かなりの間考え込んでいたが、やがて、

「怪我をしている者のなかには動かせない者もいる。」と言った。

「動かすしかない。」

「命は保証できないぞ。」

「賭けてみるしかない。とにかく思い切ってやってみるしかないのだ。負傷者をここに残していくことはできない。」

「いやあ、大変な騒ぎになるでしょうね。」ウォーカーが言った。

「そうだろうな。」

「あなたといると、人生退屈だなんて不平を言ってる暇はありませんね。」ウォーカーがにこりともせず言った。「で、今度は何をしようっていうんです？」

「さしあたり一服することにしよう。」

アレックは意味不明の笑顔を浮かべると、ポケットからパイプを取りだし、残っていた灰を払うためにそれを靴の踵かかとにコツ、コツと打ちつけると、葉を詰め、火をつけた。医者とウォーカーはアレックの言ったことを彼らなりに理解しようとしていた。最初に口を切ったのはウォーカーだった。

「あなたの最近の陽気な態度から見て、僕らがかなり張りつめた状況にいるんだろうとは思ってました。」

「ピンと張りつめているよ、ウォーカー君。君の持っているどんなブランド品の長靴ブーツの皮よりもね。」

ウォーカーは居心地悪そうに椅子の上で躰を動かした。もはや眠気はまったく感じなかった。背筋

に寒気が走った。

「で、うまくいく望みはあるんですか？」彼は言った。

アレックが答えるまでに非常識なほど長い時間が経ったようにウォーカーには思われた。

「望みというのは、いつでもあるものさ。」

「またちよつとばかり戦闘をやらかすことになるんでしょね？」

「そうだろうな。」

ウォーカーは声を出して欠伸をした。

「じゃ、いずれにせよ、少しは慰めもあるわけだ。自分が今晚眠らせてもらえないなら、誰かさんも眠らせてあげたくはないですからね。」

アレックは我が意を得たりという表情でウォーカーを見た。こうした気の持ちようはアレックの特に喜ぶものだった。再び話し始めたとき、アレックの声音には人を惹きつける独特の響きがあった。部下や同僚に対して彼が巧まざる影響力を持っているのは、一つにはこの声のせいなのだ。この声を聞くと、自然に、彼を信じられる気がしてくる。死ぬと分かっていることも喜んで彼に従って行きたくなる。口数は少なく、およそ愛想のない話し方だし、こころを打ち明けることはほとんどないのだが、彼にそのめつたにないことを——それもあの声で——してもらったとき、聞いている方としては、不思議なこと感謝の念すら覚え、恩に報いなければ、と思うのだ。

「もう少しうまくいけば、この仕事もほぼ終わりということになり、アフリカのこの地域での奴隷交易は、これ以降なくなるはずだ。」

「で、うまくいかなかったら？」

「そうだな、残念ながら、君の才気煥発、丁々発止の談話も、もはやメイフェアのティー・パーティーでは聞かれなくなるといふことかな。」

ウォーカーは俯いて地面を見ていた。何か自分自身にとつても思いがけない考えが脳裏を横切っているようだった。彼が肩をすくめながら再び顔を上げたとき、その眼には奇妙な輝きがあった。

「まあ、考えてみれば、僕の人生もそんなに悪いもんじゃなかった。」彼はゆつくりと言った。「ちよつとばかり恋もしたし、よく働き、よく遊んだ。まあまあ音楽も聴かせてもらったし、なかなかの絵も見せてもらった。それにたいそう立派な本も読ませてもらった。だから、死ぬ前にあの糞つたれの悪党どもをもう何人かやつつけられれば、まあ、文句を言うこともないでしょう。」

アレックは微笑んだ。が、何も言わなかった。沈黙が続いた。ウォーカーの言葉を聞いて、アレックは現在のこの苦境をもたらした原因を思い出さざるを得なかった。思い出し、唇をキュッと結び、眉間に深い皺をよせた。

「さて、患者をいつ出発させてもいいように用意するでしょうか。」医者が言った。「できるだけのことですが、耐えられるかどうか……。後は神様に祈るのみだ。」

「パーキンズはどうだね？」

「分らん。讚美歌でも歌って、なんとか鎮めておくしかないだろう。」

「キャンプを畳むことについては言う必要はないからな。出発の十五分前までは誰にも知らせるらない。」

「しかし、それじゃ、時間が足りないだろう。」
「どんな場合でもすぐ出発できるように訓練してきたつもりだ。」アレックの調子には反駁を許さないものがあつた。

医者が振り向き、テントから出ようとしたそのとき、ジョージ・アラトンが現れた。

ジョージ・アラトンはイギリスを離れたときと比べ随分と変わっていた。アフリカの気候に順応できないうでいることは明らかで、肉は削げ落ち、顔は黄ばんでいる。表情にも変化があつた。口元は不満げに歪み、きよろきよろと落ち着かない視線には、どこか狡賢ずるがしそうところが表われている。かつての端正な顔立ちは、今は見る影もなかった。

「入ってもいいですか？」ジョージが言った。

「入りなさい。」と答えたアレックは、医者の方を向くと、「もうちょっとしてもらえないかね。」と言つた。

「いいとも。」

アダムソンはその場に立ち止まり、テントの出入り口となっている垂れ幕を背にした。アレックが顔を上げ、

「私が君と話したがっているとセリムは言わなかったかな？」とジョージに尋ねた。

「だから来たんです。」ジョージが答えた。

「それにしては随分時間が掛かったじゃないか。」

「ねえ、ブランデーを一杯もらえませんか。くたくたなんです。」
「ブランデーは残っていない。」アレックが答えた。
「お医者さんなら少しは持つてるんじゃないですか。」
「いいや。」

長い間^まがあった。アダムソンとウォーカーには何が問題なのか解らなかったが、何か大変なことがもちあがっていることは理解できた。アレックがこんなに冷たかったことはいまだかつてない。長年彼のことを知っているアダムソン医師には、アレックが激怒しているのが判った。アレックは再び顔を上げると、時間をかけてジョージを見ていた。

「トウルカナ族の女の死について何か知っていないか。」だしぬけにアレックが訊いた。

ジョージはすぐには答えなかった。

「いいえ。どうして僕が知ってるんです？」ようやくジョージが答えた。

「さあ、言いなさい。何か知っているはずだ。この前の火曜日、君はキャンプに入ってくるなり、トウルカナ族がとても興奮していると言った。」

「ああ、思い出しました。」ジョージが不承々々認めた。

「それで？」

「はっきり憶えてないんです。あの女は、たしか……撃たれたんですよ？ 誰か駐屯地の若い男があの女といちやついてて、そのうち撃つたらしい。」

「君は、それが誰かを見つけたそうとはしなかったのか？」

「時間がなかったんです。」ジョージは脹れっ面^{はぶら}になっていた。「ここ三日間、僕らはへとへとになるまで働きづめに働いてましたからね。」

「誰か疑わしい者はいないのか。」

「いませんね。」

「ちよつと考えてみなさい。」

「まあ、やったとしたらあの男、海岸から連れてきたあの図体のでかい男、片方の耳がないあのスワヒリ族の悪党くらいかな？」

「なぜそう思うのだ。」

「あいつはとんでもない迷惑ばかりかけてきたし、それにいつも女の尻ばかり追い廻してましたから。」

アレックは目をジョージから逸^そらさなかった。ウォーカーはつぎに何が起こるかを予想し、視線を地面に落とした。

「聞いたら驚くだろうが、あの女は発見されたとき、まだ息があったのだ。」

ジョージは躰も動かさなければ表情も変えなかったが、もうこれ以上瘦^こけようもないと思われた頬が一層落ちくぼんだように見えた。恐怖で身じろぎできなかつたのだ。

「女は発見されてから一時間ほどは生きていたのだ。」

しばらく沈黙があった。ジョージは、自分の心臓の激しい鼓動にこの三人の男たちが聞き耳を立てているような気がした。

「何か言ったんですか。」

「君が撃ったとね。」

「くだらない！ 嘘に決まっていますよ。」

「どうやら女といちやついていたのは、君のようだ。なぜ喧嘩になったのかは分からない。君は拳銃を取りだすと、まっすぐに狙いを定めて撃ったのだ。」

ジョージは笑った。

「そういう馬鹿げた嘘をつくところは、いかにも下等な黒人らしい。僕の言葉よりあいつらの言葉を信じるんですか。なんてったって、僕の言葉のほうが数段あてになると思うんですがね。」

アレックは黙ってポケットから薬莢を取り出した。拳銃にしか使えない弾の薬莢だった。

「これが女が倒れていた場所から二ヤードのところに落ちていたそうだ。先ほど私のところへ届けられた。」

「それで何が判るといいます？ 僕にはよく解らない。」

「君にも解っているはずだ。アフリカ人で拳銃を持っている者はいない。一人二人の召使を除けば、我々白人以外で拳銃を持っている者はいないのだ。」

ジョージはポケットからハンカチを取りだすと、顔を拭った。喉がカラカラに渴いて、息をするのも苦しかった。

「君の拳銃を見せてくれないか。」アレックが静かに言った。

「持ってないんです。今日の午後、陣地を出て敵に向かっていったとき失くしてしまったんです。あ

なたに言わなかったのは、きっと怒られるだろうと思って……。」

「君が拳銃を磨いているのを見かけてから、まだ一時間も経っていないがね。」低く、抑揚を抑えた声だった。

ジョージは拗ねて肩をすくめた。

「じゃ、多分テントにあるんでしょう。見てきます。」

「待て。ここにいなさい。」アレックが鋭く言った。

「ねえ、僕は、犬みたいに、ああしろ、こうしろと言われるつもりはありませんね。あなたには、そんなふうに命令する権利はないはずだ。僕は自分の意志でここへ来たんだ。だから、ニグロみたいに扱われるのは真平だ。」

「君がその尻のポケットに手をやれば、きっと拳銃が見つかると思うんだが。」

「あなたに渡すつもりはない。」ジョージの唇は恐怖で真っ青だった。

「私に取ってもらいたいのかね。」

二人はしばらく睨みあっていた。やがてジョージがゆっくりと手を尻のポケットに運び、銃を取り出した。が、突然、彼は衝動に駆られ、腕を伸ばすと、アレックに狙いを定め、発射した。ウォーカ―はジョージの近くに立っていたのだが、この動きを見るや、本能的に、ちょうど引き金を引こうとしたジョージの手を叩いた。アダムソン医師もすぐに飛びかかり、腰に腕を廻すと、ジョージを仰向けに倒した。拳銃が手から落ちた。アレックは微動だにしなかった。

「放せ、ちくしょう。」ジョージが金切り声をあげた。

「押さえておく必要はない。」アレックが言った。

アレックの命令に従うことは二人にとつては第二の本能のようなもので、二人ともすぐにジョージから手を離れた。ジョージは縮こまるように椅子に坐り込んだ。ウォーカーが腰を屈めて拳銃を拾うと、それをアレックに渡した。無言で、アレックは届けられた薬莢を弾倉に入れた。

「見なさい。ぴったり合う。正直に言ってしまったほうが良くはないかね？」

ジョージは怯えきつていた。やがて、啜り泣きながら、

「そう、僕が撃ったんだ。」と途切れ途切れに言い始めた。「あの女があんまり騒ぎたてたんで……、魔が差したんだ。悲鳴を聞いて、血を見るまで、自分がなにをしたのか分からなかった。」

彼は薬莢を捨てるなどという馬鹿なことをした自分に腹が立った。あときは、とにかく弾倉一杯にしておくことしか思いつかなかったのだ。

「憶えているかね？ 二ヶ月前、現地人を殺した男を近くの木で縛り首にしたこと。」

ジョージは恐怖で飛び上がった。

「まさか僕を縛り首にするなんて、そんなことしないでしょ？」

どうか慈悲が示されますように、と彼はこころの中で必死に祈った。そして、こんなところへ来てしまったことに苦々しい怒りを覚えた。

「怖がることはない。」アレックが冷やかな調子でいった。「君を縛り首にしたら、アフリカ人の白人に対する尊敬の念は失われてしまう。なんであれ、私はそのようなことをするつもりはない。」

「あのと半分酔ってたんです。酒がさせたことで、僕に責任はない。」

「どちらにせよ、結果として、あの種族全員が我々の敵にまわったということだ。」

トゥルカナ族の酋長はアレックの友人で、この薬莢を届けたのはその酋長だった。アレックにとつてはまさに青天の霹靂だった。というのも、トゥルカナ族はもともと頼りになる友軍であり、その忠誠心には常に絶対の信頼を置いてきたからである。しかし酋長は言った——こうなった以上若い連中を押さえておくことはできない、もう自分たちを当てにしたら困る、そればかりか若い連中は公然とアレックの軍を攻撃するよう主張してくるだろう、すでに彼らは近隣の種族の中にアレックへの不満を掻き立てようと動き始めている、アラブ人との接触も始めた、と。アレックにとつては、不都合といえば不都合きわまりないタイミングだった。今まさに最後の山場にさしかかったところで、もう少しですべてがうまく片付こうとしている矢先だった。しかしこの事件のお蔭で三年間の努力が無に帰することになるかもしれないのだ。アラブ人はこの好機をとらえ、突如反撃に出てきた。まったく予期せぬこの攻撃に、アレックの軍はほとんど壊滅状態、我が身を守るのが精一杯だった。

アレックが俯き、視線を地面に落とすのをジョージは見つめていた。

「すべて僕が悪いんです。」ジョージがつぶやいた。

アレックはその言葉に直接には答えなかった。

「明日になれば現地人は当然奴隷商人のほうに寝返るものと覚悟しなければならぬだろう。そんなれば文字通り四面楚歌、何千という敵を相手に持ち堪えることはできない。援軍を送るようにと、ラトゥカ族のところへロジャーズとデアイコンを使者として行かせたが、間に合うかどうか……。」

「もし駄目だったら？」

アレックは肩をすくめただけで何も言わなかった。ジョージの息遣いはますます早くなり、啜り泣きが嗚咽おえろとなった。

「アレックさん、それで、僕をどうしようというんです？」

マッケンジーは、現在の重大な状況に思いを運めぐらしているのだろう、テントの中を歩きつ戻りつし始めた。しかし、やがて歩みを止めると、ウォーカーを見て、

「君には支度があるんじゃないかな？」と言った。

ウォーカーは立ち上がり、

「では、失礼します。」と、かすかに笑みを浮かべて答えた。

ウォーカーはこの場を離れることができて嬉しかった。この青年の惨めみぢたらしい姿を恥ずかしくて見ていられたかったのだ。ウォーカー自身、根っからの正直者、厚い忠誠心を持った男だったから、わずかな悪徳にも肉体的嫌悪を覚え、そうしたものに会ったときには、まるで忌まわしい潰瘍かたよでも目にしたかのように、すぐに顔を背けるのだった。アダムソン医師も、自分も居ないほうがよからうと考え、もし今晚出発するのなら患者のために準備をしなくてはならない、ぐずぐずしている暇はない、と呟つぶやきながら、ウォーカーに続いてテントを出ていった。ジョージはアレックと二人きりになれて、前よりは楽に呼吸ができるようになった。

「さっきはあんな馬鹿なことをして、本当に申し訳ありません。」ジョージが言った。「あなたに当たらなくてよかった。」

「なんでもないさ。」アレックは微笑んだ。「すっかり忘れていたよ。」

「頭がどうかしてたんです。自分がなにをしているのか分からなかった。」

「気にすることは無い。アフリカでは、どんなにしつかりした人間でも精神のバランスを失いがちなものだ。」

アレックは再びパイプに煙草を詰めると、火をつけ、大きく吸い込んだ。湿った空気のなかに紫煙が広がった。つぎに語りだしたとき、アレックの口調は柔らかなものになっていた。

「君は知っているかね、私はここへ来る前に、君のお姉さんに結婚を申し込んだんだ。」

ジョージは答えなかった。彼は嗚咽をなんとか抑えようとした。この世で一番愛する人、自分が立派な男になることを願ひ、ここからそう信じてくれていた姉のことを思い出し、心臓は張り裂けんばかりだった。

「お姉さんが、君をアフリカに連れて行ってほしいと頼んだ。お姉さんは君に……、」アレックは言いたいことがうまく表現できなかった。「……お父さんに起こったことを世間の人々が忘れてくれるようなことを、君にしてほしいと願っていた。お姉さんはアトトン家をとて誇りにしている。その誇りにしている家名が……なんと言うか……泥まみれになったと感じて、君にその輝きを取り戻してほしいと願ったんだ。アトトン家の栄光、それがお姉さんのもつとも心にかけていることだ。それは君に対する愛情に勝るとも劣らないだろう。これまでのところ、その希望が叶えられているとは思えないが……、どうかな？」

「こんな生活が僕に向いてないのは、姉さんだって分かってたはずですよ。」ジョージが苦々しげに答えた。

「君がまだまだ精神的に弱く、優柔不断だということはすぐに分かったが、君に気骨といったものを与えてやるのではないかと思ってきた。お姉さんのために、なんとか立派な若者にしてあげたいと思った。言うことを聞いていないと、なかなか良いことを考えていると思う。しかし君にはそれをやり遂げる強さがない。」アレックは、それまではパイプから立ち上る煙を眺めながら話していたのだが、ここに来て、ジョージの顔をまともに見た。「もしお説教のように聞こえたら、赦してくれたまえ。」

「誰に何を言われるか、まだ気になるとお思いで？」

アレックはきわめて重々しい調子で話し続けたが、そこになにがしかの優しさが感じられないわけではなかった。

「やがて君は酒に溺れるようになった。溺れてはいけない、この土地では誰も酒の魔力に耐えられないのだ、そう君に言ったところ、君も、もう二度と酒には手を出さないと名譽にかけて誓ってくれた。」

「ええ、でもすぐ破った。自分が押さえられなかった。酒の魅力が強すぎたんです。」

「それから、ヌミアスの駐屯地に到着して、私が熱を出して寝込んだとき、君はマキナリーと、これ幸いとばかり原住民の女に面倒なことをしてかしたね。君にも分かっていたはずだが、ああしたことは私がつとも我慢できないことなのだ。私は、道徳がどうの、ということを行っているのではない。こうしたことに関しては、基本的には誰でも自分の好きなように振舞ってかまわないと思う。しかし、私にははっきり分かっているのだが、現地人ともめごとを起こす原因の最たるものが女の問題なのだ。

だから私はこの点に関して厳格な決まりを設けているのだ。もし問題を起こした者がスワヒリ族なら鞭打ち、もし白人なら海岸へ送還とね。君にもそうすべきだったのだ。しかしそれではお姉さんを落胆させることになる。」

「あれはマキナリーが悪いんです。」

「私も責任は主にマキナリーにあると考えた。それで彼だけを送り返したのだ。そして君にはもう一度チャンスを与えようと思った。そこで思いついたのは、何か責任ある仕事を与えることがかえって君のために良いのかもしれないということだった。だから、海岸に通じる道路を守る衛兵の詰所を作らなければならなかったとき、君にその建設の責任者になってもらって、食料、資材の大半を預けたのだ。そのあと何が起こったかはあらためて言う必要もないだろう。」

ジョージは言い訳のしようもなく、拗ねたように視線を床に落としたまま黙っていた。あのとときのアレックの怒りを思い出し、苛立つような腹立たしさを感じていた。アレックがあんなに怒り心頭に発した姿をあれ以前もあれ以後も見たいことはなかったし、自分を殴り倒したいのを必死に堪えているのははっきり分かったのだ。アレックもあの時のことを思い出したようで、その声は再びきつく冷たいものになった。

「私の達した結論は、結局君は救いようがないということだ。君は性根がとことん腐っている、私はそう思えた。」

「父のように、ですね。」皮肉っぽい笑みを浮かべ、ジョージがせせら笑うように言った。

「君の言うことは一言も信じられない。君は、根っからの怠け者で自分勝手な人間だ。さらに君は、

いやらしいほど、忌まわしいほど残忍な男だ。かわいそうに、君と一緒に残した男たちに対して君が行なった、残酷な、悪魔のような行為のことを聞いたとき、私は呆れかえってしまったよ。もし私がちょうど好い時に戻らなかつたら、アフリカ人たちは、怒りにまかせて君を殺し、何もかも略奪してどこかへ消えてしまっていたことだろう。」

「もしそうなら、さぞ困ったことだったでしょうね。」

「君の言いたいのはそれだけかね？」

「あなたはいつだって、僕の言うことより黒人の言うことを信じる。」

「彼らの言うことを信じないわけにはいかないね、あの血だらけ、傷だらけの背中を見せられて、君の気に入るように料理を作らなかつたといつて君が鞭打たせたのだ、と聞いてはね。」

「ちよつとカツとなつてやつただけですよ。人間、逆上のぼせたときやつたことに対して責任はとれないでしょう。」

「あの時はもう、君を海岸に送り返すには遅すぎた。君の面倒を見続けるしかなかった。そしてとうとう今、最後の時が来たのだ。君があの子を殺したことで、我々は皆、掛け値なしに窮地に陥っている。すでにリチャードソンとトンプソン、それに二十人の現地人を失ったが、これも君のおかげだ。我々はすでに崩壊寸前だと言つてもいい。そして、我々が殺されれば、最後まで忠誠を尽くしてくれた種族が明日にも攻撃され、村は焼き払われるだろう。男も女も、子供たちも、刃やいばにかけられるか、奴隷として売り払われるだろう。」

ジョージにも、やつと、自分が陥った奈落が理解できたようだった。アレックに対する腹立ちが、

今、絶望へと変化した。

「で、どうするつもりなんです？」

「海岸から遙かに隔たったこの地では、私が法律にならなくてはならない。」

「まさか僕を殺すんじや？」

「いや。」アレックは軽蔑するように言った。

アレックはジョージのすぐ近くに位置するように、キャンプ用の小さなテーブルに腰掛けた。

「君はお姉さんのことが好きかね？」彼は優しく訊いた。

ジョージはまた啜り泣きを始めた。

「知ってるくせに。」彼の声は憐れを誘うものだった。「どうして姉さんのことを思い出させるんです？ 僕はすべてを滅茶苦茶にしてみました。僕なんかいいほうがいいんだ。でも、もしこのまま僕が死んだら……そんなことになったら、姉さんはさぞ苦しむでしょう。僕が立派なことをするだろうって、あんなに期待してたんだから。」

ジョージは手で顔を覆うと、悲歎のあまり、張り裂けんばかりに泣きだした。アレックは不思議にこころを打たれ、ジョージの肩に手を置くこと、

「まあ、聞きなさい。」と言った。「すでに私はデイコンとロジャーズを送つて、ラトウカ族にできるだけ多くの援軍を派遣するようにと要請した。もしも我々が明日この難局を切り抜けることができるなら、アラブ人に致命的な打撃を与えられるだろう。しかし、そのためには、今アラブ人が占拠している川の浅瀬を奪わなくてはならない。我々の唯一の望みは、原住民がアラブ人に加わる前の今

夜、彼らを襲い、そこを奪い取ることだ。兵の数は圧倒的にむこうが多い。しかし、もし不意を衝くことができれば、かなりの打撃を与えられるはずだ。そして、浅瀬を確保すれば、ロジャーズとディーンがラトゥカ族とともにそこを渡って我々のもとに来られるのだ。我々はリチャードソン、トンブソンを失った。パーキンズは熱で倒れている。ということは、現在白人はウォーカーとアダムソン医師、コンダミン、メイソン、それに君と私ということになる。白人以外ではスワヒリ族は信用できる。彼らは私が全面的に信頼を置いている唯一の部族なのだ。さて、私は今から浅瀬に向かって真っ直ぐに進撃を始める。アラブ人は我々を分断しようとするだろう。私は闇に乗じて、スワヒリ族と残りの白人だけを連れて一行から抜けだし、以前見つけておいた近道を通ってアラブ人の背後に廻る。我々が浅瀬に到達できれば、彼らも陣を崩してでも攻撃してくるだろう。そこで一気に敵に襲いかかるつもりだ。解るかね？」

ジョージは頷いたが、アレックが一体なにを言おうとしているのかは理解できなかった。アレックの言葉は、どこか遠いところから聞こえてくる音のように、漠然と彼の耳に届くだけだった。

「隊列の先頭に立ってトゥルカナ族を率いてくれる白人が一人必要なのだ。ただ、その男はもともと危険な役割を担うことになる。私が自分でやってもいいのだが、スワヒリ族は私が指揮しないと戦ってくれない……。その役をやってくれないかね？」

ジョージは頭に血が上るのを覚え、耳鳴りがした。

「僕が？」

「しように思えば、君に命令することもできるのだが、この任務は非常に危険で、私は誰に対しても

無理強いはしたくない。君が断るなら、全員を集め、誰か志願してくれる者を募るしかない。」

ジョージは答えなかった。

「この役目はほとんど確実に死を意味する。そのことを隠そうとは思わない。しかし他に我々が救われる途はないのだ。アラブ人が襲ってきて、我々が付いて来ないことがトゥルカナ族に判った瞬間、君が勇気を奮うことができれば、すべてうまくいくかもしれない。ことよつたら生き延びることもできるかもしれない。そうなつたら、ここで起こったことはいっさい口外しないと約束しよう。」

ジョージは飛び上がるように椅子から立ち上がった。口元にはかつてのあの素直な笑いが戻っていた。

「いいでしょう。やりましょう！ それに、僕にチャンスを与えてくださったこと、ここから感謝します。」

アレックは手を差しだし、安堵のため息をもらした。

「ありがとう、引き受けてくれて。なにごとが起ころうとも、君は人生の中で一つの勇敢な行為をなしたことになる。」

ジョージは顔を赤らめた。言いたいことがあったが躊躇っていた。

「ぜひ一つお願いしたいことがあるんですが、……」やつとのことと彼が言った。

アレックはジョージが続けるのを待った。

「僕がこちらでかした、とんでもないへまについては、姉さんに内緒にしておいてほしいんです。

姉さんには、僕がしたのは、姉さんが僕にしてほしいと願っていたことだけだと思っていてほしいんです。」

「よく分かるよ。」アレックが優しく答えた。

「どうか名譽にかけて誓ってほしいんです。もし僕が死んでも、なぜこんな死に方をする羽目になったか、みんなに判ってしまうようなことは絶対言わないって。」

アレックは黙ってジョージを見つめていた。場合によっては真実をすべて語らなければならぬ時がくるかもしれない、——その考えが脳裏をかすめた。ジョージは動揺していた。アレックが答えを躊躇ためらっている理由が解ったようだ。

「僕に何かを頼む資格なんてない。あなたはもう身に余るほどのことをしてくださっています。でも、これはルーシー姉さんのためなんです。どうか僕を見捨てないでください。」

アレックはその場にじつと立ち尽くしていたが、やがてゆっくりと嘔みしめるように言った。

「名譽にかけて誓おう。いかなることが起ころうとも、また私がいかなる立場に立たされようとも、君がいかなる点においても、またいかなる時にも、正直で、勇敢で、高潔であったことをお姉さんが少しでも疑うような言葉は、一言たりとも私の口から漏れることはない、と。君がこちらで行なったことの責任は、すべて私が引き受ける。」

「本当にありがとうございます。」

アレックはやつと躰を動かした。ジョージとの張り詰めた遣り取りが、ほとんど耐え難いものとなっていたのだ。アレックの口調は再び、明るい、きびきびしたものになった。

「もう言うことはないと思う。君も準備があるだろう。三十分後には出発だからね。さあ、君の銃だ。」アレックは目に悪戯いたずらっぽい表情を浮かべて続けた。「一発撃ってしまったことを忘れないように。補填ほてんしておいた方がいいな。」

「ええ、そうします。」

ジョージは頷いて、テントから出ていった。アレックの顔から、それまでの明るい表情が一瞬にして消えた。自分がジョージに何をしたらかを知れば、ルーシーは永遠に自分のもとを去っていくだろう。アレックにとって今はルーシーへの愛がこの世における唯一の生き甲斐だった。それをあのかだらな若者のために台無しにしてしまったのだ。自分がこの男に対して行った今行なった行為については、いかようにも解釈できるだろうし、釈明もできるだろう。どうしても本当のことを言っただけではない理由もない。しかし、たとえジョージに、是が非でも、と頼まれなかったとしても、アレックはこのことについて真実を言う気は毛頭なかった。ルーシーを悲しませ、少しでも辛い思いをさせるようなことは言えない——アレックの愛はそれほど深いものだった。どんなことが起ころうとも、ジョージは勇敢だった、崇高な任務を果たすために命を捧げたのだ、とルーシーには信じてもらわなければならぬ。アレックにはルーシーという女性がよく分かっていた。彼女にとっては、たとえ死は怖ろしいものであっても、人間としての尊厳を失うことに比べたら、まだ耐えられることなのだ。ルーシーがアラトン家の恥辱を強く意識していること、またそれを彼女自身の人間としての穢けがれのように感じていることをアレックは知っていたし、その穢れを拭ぬぐい去ってくれるものとして、弟にどれほどの期待をかけているか、分かりすぎるほど分かっていた。ああ、それにしても、その弟は父親と同じよう

に芯の芯まで腐っているのだ……。が、どうしてそんなことを彼女に言えよう。彼女に知られるくらいなら、どんな犠牲を払ってもかまわない。しかし、ジョージを死地に赴かせたのが自分だと知ったら、……ルーシーが自分を憎むのは当然だろう。そして、彼女の愛を失うことは、すべてを失うことなのだ。ルーシーは、愛はなくともやっつけていけるが、自尊心なくしては生きていけない人なのだ。アレックはジョージの頼みに返事をする前にこうしたことを考えたのだった。

ジョージには、もし胆きもを据えて行動すればうまく切り抜けることもできるかもしれないと話したが、はたして、ジョージは、悪党は悪党なりに、最後の美德——勇気を見せてくれるのだろうか？

アレック・マッケンジーの遠征の情報がようやく外部の世界に届いたのは、その六ヶ月後のことである。時を同じくして、ルーシーのもとにもアレックからの手紙が届いたが、そこにはジョージが戦死したことが記されてあった。あの嵐の夜は、ジョージにとってばかりでなく、あの明朗快活なウォーカーにとつても運命の夜だった。しかし二人の貴重な命を代償に、アレックの危険を顧みぬ大胆な計画は見事に成功したのだった。あの時、重い鉄槌てつゐがアラブ奴隷商人の上に振り下ろされ、それに続く一連の戦いによって、かの地における奴隷交易は終息に向かったのである。アレックの手紙は厳肅であると同時に優しさあふれるものだった。彼には手紙がルーシーに与える計り知れない悲しみが分かっていたし、どんな言葉もその悲しみを癒せないことも分かりすぎるほど分かっていた。彼にできる唯一の慰めは、ルーシーにとつて何より大切な弟の命が、立派に、大義のために捧げられたと伝えることだった。ジョージが、あれしか方法はなかったにせよ、一行すべてに災いを及ぼした罪深く愚かな行為を償った以上、それ以前の行為はすべて水に流そうとアレックはここに決めていた。自らを死に追いやったジョージの人間としての弱さは、これを忘れるしかない。ジョージがアフリカにおいても愛すべき魅力的な若者であったこと、常にルーシーを熱烈に愛していたことを、アレックはこ

ころを込めて書き綴った。

一月、そしてまた一月と時は経過していった。乾季が終わり雨季に入ったとき、ついにアレックは、戦いの目的は達成されたと宣言した。長い努力が報われたのである。このために費やした歳月、資金、そして尊い人命も無駄ではなかった。奴隷商人は英国全土より広いこの地から一掃された。これまではおのの独立状態にあった各部族の酋長との間に条約が締結され、彼らは英国の宗主権を受け入れた。残された段階は一つ、これまでこの地域を開発する権限を与えられていた東アフリカ商会の権益を英国政府が引き継ぎ、新たに征服した地域を大英帝国に併合することだった。アレックがいま携わっているのはこの仕事にはかならなかつた。彼は東アフリカ商会の理事の面々、そしてナイロビにいる会頭と接触を持った。

しかし、運命はアレックに勝利の喜びを長く味わうことを許したくないかのようなようだった。というのは、ナイロビに向かう途中アレックとアダムソン医師は黒水病に罹ってしまったのである。数週間アレックは生死の境をさまよった。彼の頑健な肉体もついに壊れるときがきたようで、アレック自身、死が近いことを覚悟した。東アフリカ商会から派遣されているコンダミンが一行の指揮を執ることになり、アレックの最後の指示を受けた。アレックはキャンプのベッドに横たわったままだった。忠実なスワヒリ族の少年が彼の側で蠅を追い払い、最後の時を待っていた。自分の計画したことがすべて成就されるのを見とどけられるなら、アレックは財産の全てを抛ったことだろう。が、それもどうやら叶わぬことのようなようだった。アレックのころを悩ませているのはただ一つ、彼が差し出したこの素晴らしい贈り物を英国政府がみすみす指の間から滑り落としてしまうのではあるまいかということ

だった。ようやく平和が訪れたこの地域を正式に領土とするには、今が絶好の機会なのだ。白人の威信は今やその頂点にあり、乗り越えるべき困難は何もない。彼はコンダミンがゆくゆくは東アフリカ商会の副会頭に任命されることを希望していたのだが、そのコンダミンに、このことの重要性をなんとしても政府の関係者に理解させるよう、くれぐれも頼んだ。副会頭の地位は本来ならばアレックに与えられるべきものなのだろうが、そうした地位に伴う公ゆえの様々な規制は彼の性に合わなかつたし、それに、すでに自分の役割は終わったのだ、意図したことが成就されるのであれば、自分の生死は大した問題ではない、そうアレックは思っていた。

つぎにアレックはルーシーのことを考えた。はたしてルーシーは自分のしたことを理解してくれるだろうか。彼女は自分のことを誇りにしてくれるだろう、自分の死を悼んでくれるだろう、そうアレックは確信していた。しかしルーシーが自分を愛しているとは考えていなかった。また、それを期待してもいかなかった。ルーシーを愛したことだけで彼は十分に満足していた。ただ、この多難な年月の中にあって彼女への思いが自分にとってどんなに大切なものであったかを、できれば会って伝えたい。自分にとって彼女がすべてだったこと、その思いがあったからこそ今度の計画を完遂できたこと、彼女が自分の人生にそれまで経験したことのない彩りを与えてくれたこと、それを心から感謝していること、そうしたことをもう一度会って伝えられないのが返す返すも無念だった。しかし、彼女に会えないということは、ジョージの死の秘密も自分とともに葬られるということなのだ。ウォーカーは戦死した。ジョージの死の謎に光を投げかけられるのは唯一人、アダムソンだが、彼が口を閉ざしていてくれることは確かだ。日一日体力を失いながら、アレックは、自分が死ぬのが結局一番好い

ことなのだと考えていた。

しかしコンダミンは自分たちの指揮官がこのように非業の死を遂げるのを黙って見ていられた。四年間この人は我々を導いてくれた。この人の価値を知っているのは行動を共にした者だけなのだ。浅い付き合いしかしていない人々は、厳しくて冷たい人だと言うかもしれない。口数の少ないことを不快に思い、厳格な態度に腹立たしさを感ずるかもしれない。しかし行動を共にした者には、この人の数々の卓越した長所がよく分かっている。しばらくでも一緒に暮らしてみれば、その人間としての大きさに、こころを動かされないでいることは不可能なのだ。現地人に対する影響力は比類ないものだが、それはアフリカ人がこの人の力量を正しく測り、まがい物でない、真正銘偉大な人物をそこに見出したからなのだ。勿論この人は白人の気持もすっかり掴んで離さない。誰に対しても、自分ならやりたくないと思うことを命じることはなかった。何か計画がうまくいかなかったときには、全責任を自ら負った。うまくいったときには、命令を実行した者たちを、この成功は君たちのおかげだと讃えた。勇気や忍耐を他の者に要求するときには、必ず、まず自らがそれを実行してみせた。寝食を共にしたことがある者なら誰でも、この人の正直で公正、寛容な人柄の前に、自らの人間としての卑小さを恥ずかしく思うのだった。この人は自分の満足よりも他人の満足を、それがどんなに卑しい者のそれであれ、優先させる無私のころを持っていた。病気に罹った者、負傷した者に対しては限らない優しさを示してくれた。

スワヒリ族は異様な静けさを保ったままで、普段は慌しく騒々しいキャンプが遺体安置所のようにだった。アレックの身の回りの世話をしている少年が、ご主人様は日ごとに弱っていると告げると、スワヒリ族は頬を濡らしておろおろとテントの周りを歩き回った。本当なら声をあげて泣きたかったのだが、アレックの安静を乱してはならないことは分かっていた。アレックを救う道は一つしかない、そうコンダミンには思われた。それは、強行軍で一刻も早く最寄りの中継基地にアレックを運ぶことだ。そこに行けば、伝道教会の医者が面倒をみてくれるだろうし、悲しいかな、このジャングルの中には欠けている様々な文明の利器、施設設備も整っている。

アレックを動かしたとき、彼に意識はなく、何か譫言を言っていた。そのため、幸いというべきか、アダムソン医師の死については知らせられなかった。アダムソンは三日前に亡くなっていた。この善良で逞しいスコットランド人も、ついにアフリカの気候に屈したのだった。彼にとっては三度目のアフリカ、……長い長い間、様々な危険に曝され、なんとかそれらを乗り越え、そしてまさにイギリスへの帰途の旅に出ようとしたその時、彼は病に倒れ、死んだのである。遺体は或る大木の根元に葬られた。ジャッカルに嗅ぎつけられないようにと地中深く沈められた遺体を前に、コンダミンがふるえる声で英語の祈祷書から死者を弔う一節を読みあげた。

アレックが衰弱しきった身体で長い強行軍を乗り切ったのは奇跡としか言いようがない。密生した藪の中をかすかに走る獣道、ごつごつした岩だらけの丘、水の枯れた河原を、アレックは担架に揺られて運ばれたのだった。じつと横たわるアレックの蒼褪め、瘦せ衰えた姿を見るたびに、コンダミンはこの人が今にも死ぬのではないかという何とも怖ろしい感情に襲われた。一行は太陽の昇る前に出発し、可能な限りの速度で可能な限りの距離を踏破し、気温が高くなると休憩した。そして、夕方になって幾分か涼しくなり、この疲れ果てた病人がわずかながら元気を取り戻すと、再び歩き始める

のだった。一行はいつ果てるかもしれぬ森をいくつもいくつも通り抜けた。そこでは巨大な木々の葉陰に、愛らしい優雅な草花が豊かに生い茂っていた。そしてその大木の幹と枝からは蔓植物が四方八方に伸び、まるで森の巨人同士を魔法の糸で結んでいるかのようだった。広い川の浅瀬を渡るときには、アレックが怪我をしないように細心の注意を払った。また、荒涼とした沼地を越えるときには、一歩進むごとに足が泥の中に埋まってゆくのがあった。だが、ついに、彼らは中継基地に到着した。アレックはまだ生きていた。

数週間、伝道教会の医師の真心こもった治療と彼の妻の優しさあふれる看護が、死の女神と格闘をくりひろげた結果、アレックは危機を脱した。アレックの回復は、しかし、なかなか思わしくは進まず、時に、完全に健康を取り戻すことはもはや不可能なのではあるまいかと思われることもあった。が、そうしたなか、アレックは精神が以前の活潑な状態に戻るとすぐに、気にかかっている様々な問題について指示を出すようになった。そしてやがて体力が精神の状態に見合うほどに回復すると、自分をナイロビに運ぶよう命じた。ナイロビでは関係者たちと接触し、とりわけ東アフリカ商会の会頭の影響力を利用して、煮え切らない英国政府に、彼が提供したこの貴重な贈り物を受け入れるようにと圧力をかけた。アレックは待った。不安と苛立ち、苦々しい絶望感の中で何ヶ月も待った。そしてとうとうすべてが終わった。有能なコンダミンは、アレックの望んだように副会頭に任命され、再び内陸へと旅立っていった。英国政府は、アレックが自分の持つそれこそありとあらゆるもの——技と機転、忍耐と勇氣——を使って野蛮な状態から解放した広大な地域を英国領だと宣言した。アレックの役割は終わった。彼はイギリスに帰れることになった。

彼の業績に世間の関心が集まっていた。アレックの切り抜けた様々な危険と、彼が直面した困難の数々が巷の話題をさらっていた。アレックは、帰途の船に乗る前に、新聞が自分への称讃で持ち切りなのを知った。多くの祝電が届いていた。その中には、ディック・ローマスからのもの、ロバート・ポールガーからのものもあった。ある二つの国の君主はモンバサの総領事を通じて彼に勲章を授けた。様々な国の様々な学会が彼に様々な学位、名誉ある称号を与えた。産業界の各種団体が彼の貢献に対して感謝の意を表わすことを決議した。いくつもの出版社が電報でアレックに彼の書く本の独占出版権を求めてきた。新聞社の特派員が船に乗る前の様子を取材に来た。アレックは、英国外務省の次官が或る座談会の席で彼のことをお世辞たらたら述べたと新聞で知ったとき、顔をしかめて笑った。英国がこんなに熱狂的に沸き返ったのは、スタンリーが後に『暗黒のアフリカ』にまとめた旅から帰ったとき以来のことだった。いよいよモンバサを離れる前夜、人々が彼のために晩餐会を開いてくれたのだが、出席者は争うように立ち上がり、彼を褒め称える演説をした。要するに、これまで長い間アレックの努力は、世間からは冷やかにあしらわれ、政府からは余計な御節介と見なされがちであったのだが、潮流は完全に逆転したのである。彼は今や国民的英雄への道を歩んでいた。

アレックは、未だに彼を悩ませている病気の回復には、ゆっくりと身体を休め、潮風に当たるのが好いだらうと考え、イギリスへの旅はすべて海路にすることに決めた。ジブラルタルにはディックからの手紙が届いていた。既にスエズで一通受け取っていたのだが、それはおもに祝福の言葉と、アレックが危険な病気から完全には回復していないことを心配する優しい言葉に埋め尽くされたもので、確かにそれはそれでこころ打たれるものではあったが、二通目ほどにはディックらしくなかった。

親愛なるアレック、

君がうまい具合にロンドンの社交シーズンに間に合うように戻って来ることになって嬉しいよ。おかげで、葉を使わずとも信仰だけで病気は治せるなんぞと言っている、例のクリスチャン・サイエンティストの連中の鼻をあかすことができるし、自由主義的新神学者が三文新聞のニューセオロジストのコーナーであれこれ言いたい放題言うこともなくなるだろう。というのも、このシーズンの主役は君だからさ。ひとつ、たてがみはしっかりと櫛で梳かして綺麗にカールさせ、香水も垂らしておいてくれたまえ。僕らの獅子王がもじやもじやの髪じゃ格好がつかないからね。尻尾の揺すり方も研究しておくこと。それに、なんとと言っても、吼え方と、吼えるタイミングをしっかりとものにしておいてくれ。僕らは君の姿を見た途端に、怖くて、嬉しくて、縮みあがることを楽しみにしているんだ。妙齢のご婦人の中には、すでに、君を前にして畏怖の念から失神する練習を始めた人もいると聞く。僕らは、君は英雄だという結論に達した。で、僕、すなわち君の卑しき小姓も、ご主人の七光り、この頃は矢鱈ちやほやされている。なんたって、この二十年、僕は君の知遇を得るといふ光榮に浴してきたんだからね。公爵夫人連が——ねえ、君、公爵夫人だよ！——雪のように白い額に皺の寄ったお歴々が（ただし、僕は例のフランスの八百屋じゃないが、三十を越えた公爵夫人なんて公爵夫人だとは思っていないがね）僕をお茶に誘う。君の無邪気な子供の頃の、たわいもない逸話を聞きたいからさ。僕もつい図に乗って、いいですよ、彼を——君のことだよ——お宅の昼食に連れて行きましょう、と約束してしまった。あのトンピンソンは——憶えているだろう、イートン校にいたとき

君が蹴りを入れた奴さ——ブラックウッド誌に君についてのちよつとした随想を書いてね、それによると、あの蹴りの痛みはあいつにとっては一生の思い出、宝物らしい。僕ら君の仲間はみんな君を誇りにしていて、まだ君について肝心要のことを知らない不幸な者たちに、ひとつそれを教えて進ぜようということになった。つまり、僕ら学友の励ましがなかったら、君の偉大な業績もどれひとつとしてありえなかつただろうということだがね。まあ、君もこちらに戻れば吃驚するだろうが、君が大英帝国のためにしたことに対して、どんなに多くの連中が感謝の気持を表わしたがっていることか。——どうやって表わすかって？ 夕食に招待するのさ。で、僕としては可笑しくてしょうがない。なぜって、君がどんなに無愛想な人間か知っているのは僕だけだからね。君は決して英雄なんてものじゃない。僕のような自分の世界だけにかまけている人間の、静かで満ち足りた生活を邪魔するために、どこかの王国を征服して喜んでる臍曲がりさ。

常に変わらぬ友情をこめて、

リチャード・ローマス

手紙を読んでアレックは笑った。そして思いついたのは、アレックがイギリスに帰るのを待って、彼を時の人に祭り上げようとする動きがありそうだとしたことだった。サウサンプトンの港には彼を取材しようと新聞記者が詰めかけていることだろう。アレックはそれを恐れた。彼はジブラルタルまではドイツの船で来たのだが、たまたま港にP&O所属のイギリスに向かう客船が停泊していた。これに乗ればイギリスに到着するのが一日早くなり、待ち構えている連中を避けることができる。大き

な荷物はドイツ船に残して、身の回りの品だけをボーイに荷造りさせると、アレックはぶらぶらと散歩がてらP&Oの事務所に行き、二時間後にはその船の乗客となっていた。

船が英仏海峡に入ったとき、アレックは逸る気持を抑えられなかった。彼を人間味のない男だと考えている人々が、いま千々に乱れる彼のところを垣間見ることができたならば、さぞ驚いたことだろう。乗客は一人として、この誰とも付き合おうとしない、陽に焼けた無口な男が、現在ヨーロッパ中の話題をさらっている探険家だとは思ってもよらなかった。ましてや、船の船先に佇み、目を凝らして英国本土が視界に入るのを待っている男のころの中に、言葉にならぬどんな思いが去来しているのか想像もなかった。アレックは、これまでも長く英国を離れていた後には、あの海に囲まれた故国への思いが知らず知らず増したものだ。そしてもう少しで再び故国を見られるのだと思うと、不覚にも目に涙が浮かんだものだ。英仏海峡の暗い海面も、それが母国の岸辺を洗っているのだと思えば、愛おしく思わないではいられなかった。強い西風までもが愛おしかった。この風こそイギリスの風なのだ。船乗りたちが安心して身を任せられる風……。彼はその風に顔を向け、こころ浮き立つ潮の香りを胸一杯吸い込んだ。アレックは、また、イギリスの海岸を特徴づけるあの白い崖のことを思うと、不思議な感動を覚えずにはいられなかった。英国籍の船舶と擦れちがうことがある。海外航路の不定期貨物船、風を帆一杯に孕ませて進む遅いブリガンティン船、そうした船に、彼は、かつてトラファルガーの海戦を戦った三層甲板船や、エリザベス朝の威風堂々としたガリオン船の姿を重ねた。そして、彼の精神的祖先とも言うべき今は亡き冒険家たちを、自分のことのように誇らしく思う

のだった。アレックは自分がイギリス人であることが誇らしかった。なぜならば、北回りでインドに至る航路を求め北米ラブラドル半島を探険したフロービッシュャー卿、スペイン無敵艦隊を撃ち破ったエフィンガム提督とドレーク提督（ドレーク卿は、また、英国人として初めて世界一周を果たした）、エリザベス朝の探険家で『世界の歴史』の著者ローリー卿、そしてあのトラファルガーの英雄ネルソン提督、彼らはいずれもイギリス人なのだ。

あんなにも小さな国から生まれたかくも偉大な帝国——古代ローマが地中海をその舞台とした帝国であるなら、この大英帝国は地球全体を舞台としているのだ。イギリスに対するアレックのこの誇らしい思いは、やがて、緑の牧草地や、細波をたてて流れる小川へと移っていった。今やもうこの思いを無理やり抑制する必要はなく、好きなだけ空想をたくましくできた。緑豊かな生け垣、堂々たる樫の木。道沿いに建つ、窓に素朴な花を飾った愛らしい別荘。散歩するのに御詠え向きの曲がりくねった小径……。アレックは今、イギリスの大気を胸一杯に吸い込み、昂揚した気分を味わっていた。スコットランド低地地方の、あの灰色の柔らかな霧に包まれた風景も気に入っていた。原野を歩いてゆくときのあのヒースの薫り……。つぎに、テムズ川。アレックの知る川の中でテムズ川ほど気持を慰めてくれる川はなかった。両岸に植えられた美しい木々、水の淀みの静けさ、川面に浮かぶ睡蓮のあいだを優雅に泳ぐ白鳥……。空想の翼はつづいてオックスフォードへと向かう。紫がかつた霞の中にそびえ立ついくつもの尖塔……。アレックはかつて学んだ学舎の庭に坐っていた。そこは昔ながらに念入りに手入れがなされ、数々の偉人たちの想い出に満ちている。そして、ロンドン。道を急ぐ人の群にもそれなりの美しさがある。多くの船が行き来するテムズ川の美しさ。何とも定義しがたい色

合いを持つ街路、あれがロンドンの色なのだ。イタリア製金欄プロアイト緞子のような金と紫の空の色……。今頃ピカデリー・サーカスでは花売り娘たちが噴水の周りに坐っていることだろう。花籠の中には、バラや水仙、チューリップなどがひしめき合い、その赤や黄の色模様が、周りの建物のくすんだ色、乗合馬車のけばけばしい色、陽は照っているが灰色がかった空の色と、競い合い、交じり合っていることだろう。

最後に彼はイギリスを発つたときの光景を思い起こした。あの時はジョージ・アラトンが一緒だった。そして今、アレックは一人だった。ジョージの死を知らせる手紙を書いて以来、ルーシーからはなんの便りもなかった。アレックにはルーシーの沈黙の意味が分かっていった。ジョージの死のことは考えるにつけ、なぜあの若い命が憐れにも浪費されなくてはならなかったのかと、アレックのこころは運命に対する苦々しさでいっぱいになるのだった。彼は思い出していた、ジョージの気持をなんとかして自分に惹きつけようと努めたこと、あの若者に好かれたいと願ったこと、そして、彼が唾棄すべき男だと判つたときの失望感……。あの明るい笑い声、素直な表情、魅力的な眼差し、あれは何の意味も持つていなかったのだ。彼は平気で嘘をつき、性根はひねくれ、意志薄弱だった。アレックは初めのうちは彼のそうした欠点を認めまいとした。ジョージのことをこんなふうで考えるのは自分が気難しいからだと自らの性格を責めた。そしてはやこれらの欠点を見過ぎすことができなくなつたときにも、なんとか矯正してやれないものかと熱心に努力してみたのだった。しかしアフリカという土地の持つ影響力は途方もなかった。これまでも多くの男がアフリカの気候のなかで正気を失うのをアレックは見てきた。明らかに自分たちよりも劣っているように見える原住民を前にしたときの、

白人としての計り知れぬ優越感——それが、灼熱の太陽や、広大な大地、文明世界からの隔絶感、そうした捉えがたい不思議な力と混じり合つて、精神のバランスを保つてゆくことを難しくしてしまうのだ。フランス人はこの病に新しい名前を考え出し、「フオリ・ダフリカの狂気」と呼んだ。男たちは自分力が備わっていると錯覚し、それまで人としての道を外れぬよう己を抑制していた力をすべて失っていくようだった。この危険を回避するには明晰な頭脳と強い道徳観が必要だったが、ジョージにはそのどちらも欠けていた。彼はアフリカに負けたのだ。羞恥心をなくしてしまった後は、もう彼を踏み留とどまらせるものは何もなかった。加えてジョージは酒を止められなかった。アレックがもつとも厳しく禁じていた、原住民の女との接触をもつたためにマキナリーが放逐されたとき、ジョージはもう酒は止めると言ったのだが、実際はますます酒に溺れるようになっていった。アレックはジョージに監督を任せたキャンプに帰つたときのことを思い出した。アフリカ人たちは今にも暴動を起こしそうな雰囲気で、持てるだけのものを手に持ってキャンプを離れようとしていた。にもかかわらずジョージは泥酔していたのである。アレックは、今思うと恥ずかしいのだが、あまりの怒りにあの時は自分を押しさえておくことができず、肩を掴むと、捕えた鼠を振り回すように思いざまジョージを揺さぶつた。ジョージを自らの手で殴り倒さないでいるのがやつとだった。

そして結局はあの最後の狂気、残忍な殺人事件が起きたのだ。アレックは今再び、ジョージの愚行が招いた、死と背中合わせだった日々を思い出していた。ジョージはあの浅瀬への進撃の中で戦死したのだった。最後まで勇気を示すことができず、惨めな死に様だった。アレックは頭を奇妙なふう後ろに反らすと、

「私のやったことは間違っていないかった。」とつぶやいた。

ジョージは死んでも当然なのだ、その死を歎き悲しむ価値もない男だったのだ。しかし、そうは分かっている、船がイギリスの海岸に近づくにつれ、アレックの気持は優しくなっていた。ジョージも、彼は彼なりに、この海岸線を愛していたことだろう。アレックは深くため息をついた。すべては運命だったのだ。ジョージはアラトン家の財産をあてにしていたに違いない。もしも彼がその資産を受け継いでいたなら、もしも父親があのような悲惨な死に方をしなかったならば、きっとジョージも充分幸せな人生——彼と同じような身分の人々とまったく異なることのない生活を送っていたことだろう。文明という名の掟の下では、たとえ性格が優柔不断だからといって、道を見失うこともなく、まともな地方郷士として——たぶん自己中心的で脆弱、取るに足らない人間だったろうが、だからといって他の郷士よりもずばぬけて悪いというわけではない——普通の紳士として通っていたことだろう。そして、この世を去るときには、愛すべき妻と可愛らしい子供たちがその死をここから悲しんでくれたことだろう。

今、彼はアフリカの名もない沼の岸边に横たわっている。埋葬もされず、傍らにその死を歎き悲しんでくれる人もないままに……。そしてアレックは、決して話さないと名譽にかけて誓ったジョージのアフリカでの物語を胸に、ルーシーに会わなくてはならないのだ。

アレックが最初に訪れたのはルーシーだった。彼がイギリスに到着したことを知る者は誰もいなかった。ペルメルに夏のあいだ借りたアパートで服を着替えると、アレックは徒歩でチャールズ通りへ向かった。運の好いことに小春日和のすがすがしい一日で、丘に向かうセント・ジェームズ通りをゆっくり歩きながら、アレックのこころは躍っていた。それぞれのクラブに行くのだから、大股で賑やかに丘を下ってくる洒落た服装をした若者の群が、馬車や電動自動車の中に魅力的な女性を認めるや、帽子を脱ぎ、色目を送る——それを見ているのも楽しかった。この広々とした街路には、なにか豊かな雰囲気があった。何も野蛮なものない洗練された文明、それが長い間アフリカの荒野だけを見つめてきたアレックの目には心地好かった。

神々も今日はアレックに味方しているようで、彼がチャールズ通りのケルシー夫人の邸に着くと、ルーシーは応接間の窓辺に坐り、本を読んでいるところだった。脇の花瓶に花が生けられている。最初にアレックの眼に入ったルーシーは、その花瓶一杯のバラを背にしていた。召使がアレックの名を告げたとき、ルーシーは驚きの叫びをあげて椅子から飛び上がり、興奮で顔を赤らめた。が、すぐに頬から血の気が退き、今度は異常なほど蒼褪めた。最後に会った時と比べ、肌は白く、痩せているこ

とにアレックは気づいた。しかし彼女は以前にもまして美しかった。

「こんなに早くお出でになるとは思いませんでした。」ルーシーは口籠った。

そしてなぜか涙が目に溢れた。彼女はもう一度腰掛けると、アレックから顔を背けた。心臓が痛いほどの鼓動を打ち始めた。

「赦して下さい。」ルーシーは微笑もうとした。「見苦しいところをお見せして。自分でも馬鹿だとは分かっているんですが……。」

ルーシーはここ数日を、アレックとの再会のことを考え、恐怖に近い苦しみの中で過ごしていた。そして今、まったく思いがけずアレックが現れたのだ。二人が最後に会ってから四年以上が経っていた。それはルーシーにとって不安と心労の年月だった。ルーシーは四年前とは自分の容姿が変わっていることを意識していた。恐る恐る覗きこむ鏡に映る顔は、蒼褪め、生気がなかった。自分ももうすぐ三十なのだ。目尻のあたりには小皺が目立つし、口元もいくぶん萎れている。ルーシーは自分の容貌を、情け容赦なく、客観的に見つめた。時の経過がもたらす衰頹を過小に評価することはなかった。そして自虐的とも言えるほど率直に、十年後の自分がどうなっているかを想像した。さらに痩せ、皺が深まり、高い頬骨が目立つようになった顔は、今よりもっと険しく見えることだろう。そう考えながらルーシーは落胆し自信を失ってゆくのがあった。もしかするとアレックはもう自分を愛していないのかもしれない。あの人の人生はとても充実し、苦しいことは多いけれど遣り甲斐のある仕事で満たされている。それにひきかえ、わたしの人生は待つことだけに費やされてきた。本当に、ただ待つことだけ……。この四年の間にルーシーがアレックをいっそう愛するようになったのは当然だった。し

かしアレックの自分に対する愛が、緊急を要する当面の関心事のために消えてしまっていたとしても、それもまた当然なのだ。それに、アレックに差し出せるようなものが今自分にあるだろうか……。鏡に映る姿が涙でぼやけ、ルーシーは鏡の前から離れたものだった。彼女がアレックとのこの再会を一途に待ち望んでいたとしても、一方で気の滅入るような不安を抱えていたこともまた確かなのだ。

だから今ルーシーは、その不安のあまり、友人としての礼にかなった態度を取れないでいた。そうした態度を取ることで、自分に対して何の負い目も持つ必要がないことを示すつもりだったのに……。ルーシーは不自然にならない程度に落ち着いて見えることを願った。自分のところはならんら動揺していない、そう思ってもらいたかった。しかし実際には、アレックを食い入るように見つめることしかできなかった。たとえその表情の中に幻滅の影を見たとしても悲しみの呻きを漏らしてはならない、と彼女は自分に言い聞かせた。アレックは、ルーシーに落ち着きを取り戻す時間を与えるためだろう、自ら語りだした。

「もし予定の船で来たら、新聞記者やらその他、ただ何となく私を出迎えに来たうんざりするような人間に会わなくてはならない、そう考えて、ジブラルタルで別の船に乗り換え、予定よりも一日早く着いたのです。」

ルーシーは少しは落ち着きを取り戻していた。そして、何も言わなかったが、アレックを一心に見つめ、彼の言葉を一語一句聞き漏らすまいと耳を傾けた。

アレックは赤銅色に焼けていた。病気をしたばかりのために痩せてはいたが、健康そうで、逞しく見えた。上品な、自信にあふれた態度は昔からルーシーを喜ばせたものだ。熟慮しながらの穏やかな

話し方もルーシーの好きなものだった。ときどき、かすかに、スコットランド出身であることを示す訛が交じる。

「まず最初にあなたを訪問しなければ、と思っていました。赦していただきたいのです、ジョージくんをあなたのもとに連れて来られなかったことを。」

ルーシーは驚きで息が止まりそうだった。そして、苦い自責の念とともに、アレックと再び会えた喜びの中で弟を忘れていたことに気づいた。ルーシーは恥ずかしかつた。弟が死んでからまだ一年半しか経っていない。惨い報せが届いてからは一年にすぎない。なのに今、こともあるうに今このとき、自分の愛にかまけて、他のことは何もかも忘れていたのだ。

ルーシーは俯いた。そして自分の着ているものを見た。それは確かに大切な人を失ったことを示すものではあつた。しかしその黒と白との半喪服は偽りのもの、お笑いぐさだったのだ。ルーシーのところに、アレックの手紙が届けられたときの刺すような痛みが閃光のように甦った。初めは、なにかの間違いにちがいない、自分の頬を流れる涙も忌まわしい夢の一部にちがいない、自分だけでも充分すぎるほど苦しんできたのに、運命がジョージにまで悪戯をすればあまりにも不当だ、それにジョージはまだ子供ではないか、そんな若者から人生の貴重な宝、命を奪ってしまうとは酷すぎる、ありえないことだ、と思われた。しかし、これは覆すことのできない事実なのだ。納得したとき、ルーシーの悲しみは押さええようのないものとなった。期待していたものが全て無に帰してしまつたのだ。彼女は絶望に身を任せるしかなかつた。ルーシーは弟を遠征に行かせたことを後悔した。しかも、それを思いつき、行くように計らつたのは自分なのだ。そう考えるとルーシーは悔やんでも悔やみきれず、

自らを激しく責めたてた。ジョージはきつと自分のことを恨みながら死んでいったにちがいない。父は死んだ。弟も死んだ。ルーシーは独りぼっちだった。そして、ルーシーにはアレックしかいなかった。だからルーシーは、うちひしがれた獣のように、アレックに向かい、愛を求め、保護を求めて泣き声をあげるのだつた。ルーシーの強さ、自ら誇りにしていた強さは消えていた。自分をまったく弱い人間、自分では何もすることのできない人間だと感じた。そしてアレックへの思いに胸を焦がした。それまでは、消えることなく燃え続ける一条の灯りであつた恋心が、弟の死を境に、一挙に激しく燃え上がる炎となつたのである。

しかし今、アレックの言葉によつてルーシーは弟のことを思いだし、こころを苛まれた。想い出の中の弟はいつもの陽気な弟だつた。フランネルのオープンシャツを着て、白い首筋には金色の産毛が光っている。パナマ帽もよく似合う。そしてあの楽しそうな青い眼、魅力的な笑顔。弟は誠実な英国紳士の典型だつた……。ルーシーは喉が詰まった。話し始めたとき彼女の声はふるえていた。

「前にも申しあげましたように、弟が勇敢な男として死んでいったのなら、それ以上求めることは何もありません。」

ルーシーの声はとても小さく低いものだったので、はつきりと聞き取れなかつたが、それでもアレックはその勇氣に感動し、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。ルーシーはほとんど囁くように続けた。「今となつては、アラトンの家はこんなふうにならぬに終わりを迎えるよう運命づけられていたのだらうと、わたしには思えます。ジョージが、祖先の人々が恥じなくてすむ死に方をしてくれたことを感謝しています。」

「あなたは勇気のある人だ。」

ルーシーはゆっくりと首を振った。

「いいえ、勇気ではありません。絶望ですわ。ときどき、父がどんなことをしたかを思うと、ジョージが死んでよかった、と思うことがあります。なぜって、少なくとも弟の最後は雄々しいものだったんですもの。大義のために、自分の義務を果たす中で死んでいったんですもの。もし弟の最後がわたしに恥ずかしい思いをさせるようなものだったら、人生は耐えられないものになっていたでしょう。」

アレックはルーシーを見つめていた。つぎに彼女がなにを言うか、アレックには予想できた。彼はそれを待った。

「あなたが弟のためにしてくださったことに、ここから感謝申し上げます。」声がふるえないようにと努めながらルーシーが言った。

「そんなふうに言っていたただかなくても……。本当にお気の毒です。」アレックは重々しく答えた。ルーシーはしばらく黙っていたが、やがて顔を上げると、アレックをじっと見つめた。ルーシーの声はいつもの落ち着いた調子を取り戻していた。

「ねえ、おっしゃってほしいの、弟は、アフリカで、わたしがしてほしいと望んだようなことをやってくれたんですよ？」

アレックは答を躊躇ったが、その躊躇いをルーシーに気づかれたような気がした。この問いがこんなにも早く発せられるとは予期していなかったのだ。彼は故意に嘘をつくことに良心の呵責は感じな

かったが、吐き気をもよおす水を飲まなければならないときのように、肉体的な嫌悪は感じた。

「ええ、そうだったと思います。」

「それがわたしにとつて唯一の慰めなんです。ジョージに与えられたほんの短い生涯の中で、下劣なこと、卑しむべきことは何もしなかった——あらゆる点で、高潔で、正直で、立派な行動をとつてくれたことが……。」

「ええ、弟さんはまさにそういう若者でした。」

「そして、死ぬときにも？」

アレックは喉に何かがかつかえているような気がした。この試練は予想していたよりも遥かに苦しいものだった。

「死の瞬間にも、怯えることはありませんでした。」

ルーシーは深く安堵のため息をついた。

「ああ神様！　ありがとうございます神様！　あなたの口から直接そうお聞きできて、本当に良かったです。ある意味で弟の勇気が、……とりわけ弟の死が、父の過ちを贖ってくれた、そんなふうに感じます。弟のおかげで、わたしたちアトソン家の人間が芯の芯まで腐っているわけではないことが証明され、自信を取り戻すことができました。これでもう一度世間に対してまともに顔を向けることができそうです。本当に弟に心から感謝しています。弟は、わたしの愛にも、世話を焼いたことにも、心配したことに、みんな、何百倍、何千倍にもして報いてくれました。」

「あなたにもたらしたものが悲しみばかりでなくてよかった。私のことを憎んでいらっしやるのでは

ないかと思っていました。」

ルーシーの頬が赤らんだ。眸には新しい輝きがあった。突然不幸という重荷が取り除かれたようだった。

「とんでもない、憎むだなんて。」

その時、馬車が玄関先に停まる音が聞こえた。

「アリス伯母さまだわ。外で昼食をとっていただきます。」

「では、私はお暇いじまさせてもらいます。許してください、今日はあなた以外の誰とも会いたくないのです。」

アレックが立ち上がったので、ルーシーは手を差し出した。アレックはそれを堅く握ると、

「お気持は変わっていませんか？」と訊いた。

「今はおっしゃらないで。」

ルーシーは顔を背けたが、眼には再び涙が溢れていた。ルーシーは笑おうとした。

「今は、……気持が動転どうてんしていて、涙もろくなっているの。きつと軽蔑けいべつなさるでしょうね。」

「また近々お目にかかることができますね？」アレックが言った。

旧約聖書ルツ記の言葉がルーシーのところに浮かんだ。「われにかくも情けをかけたまふとは、あつき心根をみせたまふは、いかなるゆゑあらむや。……そして胸がいっぱいになるのだった。ルーシーは微笑んだが、その笑顔は昔のようにとても魅力的なものだった。

アレックが去ったとき、ルーシーは長いため息をもらした。生活の中に新たな喜びが生まれ、世界

の美しいものすべてに胸を刺すような法悦を感じた。アレックがまだ自分を愛していることが分かったのだ。彼女は、坐まっていた椅子の脇にあるテーブルに近づくと、大きな花瓶に生けられた花に顔を埋め、陶然として、その馥郁ふいくたる香りを胸一杯に吸い込んだ。

気まぐれなイギリスの天気も今年だけはその評判を裏切り、五月は晴天の暖かな日が続いた。この春の天候のおかげか、ルーシーのころにも若々しさが戻ったようだった。新しい幸せに身を任せ、ルーシーは春という陽気な季節のなかで少女のように悦びを味わっていた。アレックはまだ何も明言しなかったが、彼の愛は確かなものに思われ、ルーシーは生来の勁さを優しさにかえて、その愛に浸っていた。彼があまりにも有名になってしまったことには少しばかり圧倒されたものの、同時にそれを誇らしく感じていた。多くの名士がアレックに敬意を表し、新聞は彼への讃辞で埋め尽くされていた。中にはルーシーを通してアレックに近づこうとする者もいたが、そうした人間から自分を守ってくれるアレックの姿がルーシーは嬉しかった。彼女は以前よりも頻繁に外出するようになった。アレック、ディック・ローマス、クロリー夫人と連れだってオペラに出かけ、たまには芝居も観に行った。カールトンでの素敵な晩餐会に出席し、サヴォイで愉しく夕食を摂ったりもした。こうした機会にアレックはほとんど喋らなかつた。ただ坐って他の人々の話を聞いているだけで充分楽しいようだった。ディック・ローマスと可愛らしいアメリカの婦人がのべつ幕無しにするくだらないお喋りを聞きながら、顔は平静さを装っているが眼は笑っている。そして、ルーシーはアレックを見つめてい

る。毎日、彼女はこの遅く、陽に焼けた表情の中に、興味深い、新しい発見をするのだった。どうかすると二人の目が合うことがある。そうしたとき二人は声を出さずに笑った。二人は幸せだった。

ある晩、ディックがみんな夕食をしようとして提案した。しかしあいにくアレックには公式の晩餐会があったし、ルーシーはケルシー夫人と芝居見物をする事になっていたので、ディックは皆の都合がつくまでと、ジュリア・クロリーを誘ってオペラに出かけた。男女同数のほうが好いだろうという事で、彼はロバート・ポールガーにも、しかしかの時間にサヴォイに来てほしいと連絡しておいた。オペラが引けた後、ディックはいったんアパートに戻り、薄くなった髪をなんとか見栄えよくしようと細心の注意を払って梳かしたうえで、レストランのロビーでクロリー夫人を待った。やがて夫人が現れたが、その可愛らしいことといったらなかつた。錦織の花模様ドレスはどことなく古いフランス絵画に見られる羊飼いの乙女を思わせるものだったし、ダイヤモンドの首飾り、宝石をちりばめた髪飾りを身につけたその姿は、優雅なお姫様が気まぐれに田舎の素朴な生活を楽しんでいるといった風情だった。

「まったく、なんて馬鹿な人が多いんでしょう。」ディックと一緒にいるや夫人が切りだした。「たった今、ある婦人にお目にかかったんですけど、その人、わたしにこう言うの。『確かあなた、アメリカへお戻りになるのよね。お帰りになったら是非わたしの妹を訪ねてくださいな。あなたにお会いできたらきつと喜ぶと思うわ』って。『ええ、よろこんで。ところでいったいどちらにお住まいで？』わたし、尋ねたの。すると、『オハイオ州ジョンズビルよ』ですって。それで、つい言っ

やったわ。『まあ、あきれた。わたしはニューヨークに住んでいますのよ。一体全体オハイオ州ジョーンズビルみたいなところとわたしがどんな関係があるっていうの？』って。」

「まあまあ、落ち着いて。」

「落ち着けですって。ブヨブヨしたお腹をして、フランクフルト・ソーセージみたいな肩をした女に、わたし、赤い顔をしたインデアンの隣で暮らしていると思われたのよ。アタマにきちやう。きつとあの人、汚れた下着ベチコートをつけているに違いないわ。」

「なんでまた？」

「イギリスの女性はみんなそうなんだから。」

「これはまた、なんと手厳しい！」

そのときケルシー夫人がルーシーと一緒に入ってくるのが見えた。そしてすぐにアレックとロバート・ボールガーもやって来た。一同はテーブルについた。

「わたし、アミーリアって大嫌い。」クローリー夫人が白い長手袋ゴンドレットを脇に置きながら力を込めて言った。

「あなたは素敵な女性に対してどうも偏見をお持ちのようだ。遺憾ですな。」デイックが答えた。

「アミーリアって、何から何まで嫌なものばかり。女としてああたりたくはありませんわ。太りすぎだし、足は長すぎるし、コルセットをしないなんて。それに昼間はいつもあの鍔つばの広い帽子を此見これよがしに被かぶって。それに、いかにも内気ですよって雰囲気で、言いたいことを言おうともしない。」

「誰、そのアミーリアさんって？」ボールガーが尋ねた。

「このローマスさまの許嫁いみなづけですわ。」クローリー夫人が挑発するような視線をデイックに送った。

「知らなかったわ、デイック、あなたが結婚するなんて。」ケルシー夫人が、何も知らされていないなかつたことに少しばかり傷ついた様子で言った。

「結婚なんてしませんよ。」デイックが答えた。「だいいち、まだアミーリアさんにお目にかかったことすらないんですから。アミーリアさんつてのは、私が結婚するならこんな人だろうってクローリーさんが考え出した、架空の女性なんです。」

「わたしはアミーリアのことはよく知っているんです。」クローリー夫人が続けた。「アミーリアは髻かむしをいっぱい髪に入れて、デイックさま、あなたのことを慕っていますわ。とっても素直でおとなしい娘。あなたのことを最高の人だと思っています。でも、わたしに、アミーリアに親切にしてほしくないなんておっしゃらないでね。」

「クローリーさん、心配はご無用。アミーリアさんもあなたのことを好くは思っていないでしょう。あの人の考えじゃ、あなたはちよっと明透あけすけにものを言い過ぎるし、あなたのアメリカ訛なまりも好みじゃない。ただ、あの人が準男爵の孫娘だということを忘れてもらっては困りますな。」

「わたし、フレミングに、絶対結婚しないでほしい女の例としてアミーリアをあげようと思っっていますの。絶好の警告になると思いませんか？ 『フレミング、もしあなたがああいう女性と結婚するんなら、あなたには一ペニーだって残してやらない、みんなペンシルヴァニア大学に寄付しちゃうから』って言うてやろうと思えますわ。」

「もしフレミングさんと幸運にも会えるようなことがあったら、ひとつ、蹴りを入れてあげましょう。」

きつと愉快なことでしょうな。」デイックが言った。「若い連中の中でも彼ほど忌々しい奴はいませんからね。」

「あなた、なんて馬鹿なの。ねえ、ローマスさま、フレミングならあなたを片手で持ち上げて、高さ十フィートの塀の向こうに投げ飛ばすことだってできますのよ。」

「フレミングくんというのは、なかなかのスポーツマンのようですね。」この二人がいったい何の話をしているのかさっぱり分からなかったが、ボビーが口を挟んだ。

「ええ、」クロリー夫人が答えた。「フレミングは三歳の時から馬に乗っていましたわ。どんな塀だって平氣の平左で飛び越えてしまいます。それにハーヴァード大学にいたときは水泳の選手だったし、射撃もとっても上手。ああ、マッケンジーさん、あなたにフレミングが鉄砲を撃つところをお見せしたいわ。本当にあんなに良い子はいませんのよ。」

「気障な奴ですよ。」デイックが言った。

「残念ながらあなたにはちよつと若すぎるわね。」クロリー夫人がルーシーを見て言った。「そうじゃなかったら、あなたと結婚させるのに。」

「クロリーさん、その人、あなたの弟さん？」ケルシー夫人が尋ねた。

「いいえ、わたしの息子ですのよ。」

「でもあなたには子供はいなかったはずじゃ？」老婦人は何だか煙に巻かれたようだった。

「ええ、おりませんわ。でも、もしいたとしたらフレミングがわたくしの息子なんです。」

「アリス伯母さま、このお二人のこと、気になさってはいけませんわ。」ルーシーが明るく笑いなが

ら言った。「いつも、アミーリアだ、フレミングだ、つて何時間でも議論していらつしやるんですから。二人ともこの世にいない人なのに。でも、お二人がそれこそ微に入り細に互つってお話になるし、あんまりにも熱をこめて議論なさるから、わたしも時々二人は実在の人物じゃないかと思ひ始めることがありますのよ。」

クロリー夫人は夕食の間、いかにも陽気に、軽率な調子で振舞っていたが、常識は充分に持ち合わせていた。パーティーがお開きになってデイックを自分の馬車で送る段になると、会食の間中ひっきりなしにお喋りは続けていても、見るべきものはしつかり見ていたことをデイックに示した。

「あなた、ボビーをこの夕食に呼ぶなんて、何かあの人に恨みでもあるの？」夫人が突然訊いた。

「とんでもない。でも一体なぜ？」

「フレミングがあなたの歳になったとき、あなたみたいな頓馬な人になっていないことを祈るわ。」

「アミーリアだったら、きつと、私のような陽気な中年の紳士に対して、もっとと礼儀をわきまえた言い方をすると思ひますがね。なんたって、夫にしたくなるだけの充分な財産を持っているんですから。」

「あなただって気づいたでしょ？ かわいそうに、ボビーったら嫉妬と悔しさですつかり参っていたわ。ルーシーはアレックに夢中で、ボビーには目もくれないんですもの。」

「一体全体何の話をしているのかな？」

クロリー夫人は彼を、ちよつと軽蔑したように、楽しそうに見た。

「あなた、本当に気がつかなかった？ ルーシーはマッケンジーさんを心底愛しているのよ。ボビー

がかわいそう。あの人、これまで何年もルーシーのためになんでもやってあげたのに。ルーシーがなにか頼めば、それこそ、もったいなくもやらせていただきますって態度で。いつも親切で、献身的で、本当に感じのいい人だわ。」

「こりや驚きましたな。ルーシーが誰かに恋い焦がれるような娘だとは思ってもみませんでした。かわいそうに、気の毒なことだ。」

「なぜ？」

「だって、アレックは結婚を夢見るような男じゃありませんからね。あいつはそういうタイプの男じゃない。」

「ナンセンス！　どんな殿方だって、いったん女のほうが結婚しようと思ったら、必ず結婚しますわ。」

「そんなこと言わないでください。怖ろしい。」

「あら、あなたが警戒なさることは少しもなくってよ。」クロローリー夫人が冷やかに答えた。「あなたから申し込まれても、わたし、お断りしますもの。」

「そう保証していただけると有難い。」ディックは笑って答えた。「でも、何にしても、あなたに結婚を申し込むなんて危険を冒す気は毛頭ありませんがね。」

「あらあら、あなたがその危険を回避するには、すぐどこかへ逃げ出すしかありませんわよ。」

「なぜ？」

「だって、どんなに頭の悪い人にだって、この四年間ずっと、あなたが何時わたしに結婚を申し込ん

でもおかしくなかったことは明らかなんですもの。」

「アミーリアを裏切ることとは絶対できませんね。」

「アミーリアがあなたを本当に愛しているとは思えませんけど？」

「愛しているとは言ってません。でも、喜んで私と結婚したいと思っていますよ。」

「あら、すいぶん自惚れていらつしやること。」

「全然。男つてのは、どんなに歳を取っていたって、どんなに醜男だつて、まあ、一般的に言つてどんなに望ましくない人間だつて、喜んで結婚してくれる魅力的な女性に事欠くことはないんです。なんとつて、結婚は今でも、まともな女性が生計を立てていく唯一まともな手段なんですから。」

「アミーリアの話はよろしませう。わたしについて話しましょうよ。」

「あなたにアミーリアの半分も面白があるとは思えませんね。」

「じゃ、明日の晩はわたしの代わりにアミーリアを芝居にお連れすることね。」

「まことに残念なことに、彼女、先約があるんです。」

「あら、お気の毒。でも、わたし、アミーリアの代役を務める気はこれっぽちもありませんことよ。」

「カールトンにすでに席も取つてあつて、申し分ない料理を注文済みだと聞いてもですか？」

「なにを注文なさつたの？」

「貝のポターージュ。」

クロローリー夫人はちよつと顔をしかめた。

「ノルマンディー風舌平目。」

夫人は肩をすくめた。

「それに、ワイルド・ダック鴨。」

「オレンジ・サラダ付き？」

「勿論。」

「それならまったく嫌なわけでもないけど……。」

「それに、デザートにはスフレを注文しておきましたよ。真ん中にアイスクリームののったやつをね。」

「やっぱり行かないわ。」

「なぜ？」

「あなたがわたしに優しくしてくれているとはとても思えないんですもの。」

「あなたは芝居通だと思っていましたけど、どうやら間違いのようですね。芝居に行く目的が結婚のためだと言うのなら……。」

「あら、わたくし、育ちは良いのよ。」夫人が取り澄まして答えたとき、馬車がデイクのアパートの前に止まった。

馬車を降りるデイクに夫人はうつとりするような笑顔を向けた。デイクが自分と結婚する気が大いにあることは分かっていたし、夫人もデイクを受け入れようという気になっていた。ただ、二人とも急ぐ気はなかった。二人は互いに相手を空想上の絶望から救ってやるために自分が折れてあげ

るのだという気持でいた。二人はこの恋をあくまで軽やかな気分のなかで成就したいと思っていた。

ホイツサンタイド

聖霊降臨祭の休暇が来て、友人たちはそれぞれ思い思いの場所に散っていった。アレックはスコツ

トランドの屋敷の様子を見た後ランカシャーで一週間の過ごすことになっていた。彼は大きな富をもたらしてくれる炭坑に常に関心を持ち、自分の指示を必要としている当面の問題について実地に検分してみたかったのだ。クロリー夫人はブラックステールに行った。夫人はまだそのコート・リーズを借りていた。デイクは自分が少しも若さを失っていないことを自らに証明すべくパリへと旅立って行った。しかし彼らはこの休日が終わったらすぐにまた会うことに決めてあった。というのは、半分世捨て人のような生活を止めるようルーシーを説得することにケルシー夫人がとうとう成功し、チャールズ通りの邸で舞踏会を開くことになっていたからである。これは夫人にとって数年ぶりに開く舞踏会だった。夫人は上流階級、名士というものに微笑ましいほど愛着を持っていて、アレックの参加がこの会に素晴らしい彩りを添えてくれるだろうと考えた。舞踏会までの間、ケルシー夫人はルーシーと一緒にテムズ川沿いの小さな小別荘コテージに出かけ、邸に戻ったのは舞踏会の二日前のことだった。この一週間は良くも悪くも胸騒ぎの絶えない一週間で、夫人は眠れない夜を何度も過ごした。ある時は招待客が誰も来てくれないのではないかと怖れ、またある時は客が来すぎて、食べ物、飲み物が足りなくなるのではないかと心配した。そして舞踏会の当日となった。

しかし、その日、アレック以外の誰も予想しなかった出来事が起こったのである。そのアレックにしても、イギリスに戻って以来ここはいつもルーシーへの愛で占められていたから、こうしたこと

が起こるかもしれないという考えは頭の中からすっかり抜け落ちていた。

ファーガス・マキナリー——三年前、恥ずべきことをしたのでアレックがキャンプから追放した男が、その恨みを晴らす方法を発見したのだ。

この件に関してのもっとも不安を抱いたのは、ニュースを最初に知ったケルシー夫人だった。いつものように朝食と一緒に二つの新聞が夫人の寝室に届けられ、コーヒーを注ぎながら、夫人はまずモーニング・ポスト紙の社交欄に漫然と目を通した。つぎにデイリー・メール紙に移ったが、突然夫人の眼差しは一点に捉えられた。そのページの一番目立つ場所で「ジョージ・アラトン氏の死」という見出しが夫人を見つめていた。それは一般的なコラムほどの長さの投書で、ファーガス・マキナリーという署名になっていた。それを讀んだケルシー夫人は驚き、狼狽した。はじめは何が書いてあるのか理解できなかった。そこでもう一度読み直してみたが、今度はその意味するところがはっきり分かって恐怖に捉えられた。投書はいっさい遠回しな表現なしに、断固とした調子で、アレック・マッケンジーが自分の命惜しさにジョージ・アラトンを死に赴かせたと非難してあった。背信、臆病という言葉が大胆に使われていた。事のあった正確な日時も記されていたし、原住民の証言も引用されていた。投書はマッケンジーの功労に対する報償、世を挙げての称讃を痛烈に皮肉っていた。そして最後はマッケンジーに、名誉毀損で訴えられるものなら訴えてみよ、という挑戦的な言葉で終わっていた。

ケルシー夫人には最初、すべては途方もなく馬鹿げたものに思われた。ひどい、なんてひどいことを……。しかしすぐに夫人はこの投書に言及した論説があるのを見つけ、何を信じて良いのか分からなくなってしまった。——一見したところ投書の主張にはかなりの根拠があるように思われる、もしこ

の内容が本当なら、国家を揺るがすと言ってもいいスキャンダルだ、マッケンジー氏は一刻も早くこの件につき釈明すべきである、といったことを論説委員は、ラテン語を含め大げさな言葉を交えて、かなり強い調子で述べていた。ケルシー夫人はどうしたら良いのか分からなかった。夫人は今晚の舞踏会のことを考えた。こんな記事が新聞に載ったのではパーティーの成功はおぼつかない。すぐ誰かに相談しなくては……。この催しがもし誰かに大きな影響を与えるとすれば、それはルーシーをおいて他にない。呼鈴を鳴らして女中を呼ぶと、ディック・ローマスさんに至急お出で願いたいと電話するよう命じた。女中の返事を待っている間にルーシーが階段を下りてくる音が聞こえたが、自分のところへ朝の挨拶をしに来るのだということを思い出し、慌ててデイリー・メール紙を隠した。

ルーシーは部屋に入ってきて夫人にキスをする時、
「今朝は何かニュースがありますか？」と訊いた。

「ないようね。」ケルシー夫人はそわそわと答えた。「モーニング・ポストしか来なかったのよ、……新聞配達を変えなくちゃいけないわね。」

ルーシーが新聞の話題を続けるのではないかと夫人はドキドキしながら次の言葉を待った。しかし、まあ当然のことではあるが、返答に困るようなことは何も言わなかった。ルーシーは今晚のパーティーの準備について話した後、いろいろとやっておかなくてはならないことがありますからと言って部屋を出ていった。ルーシーが出てゆくとすぐに女中が戻ってきて、ローマス氏は今ロンドンを離れていて夜にならなければ戻らないと告げた。気が狂いそうになって、夫人は甥のロバート・ポールガーとクロリー夫人に伝言を送った。ケルシー夫人はボビーのことを今でもルーシーの未来の夫と考え

ていたし、この小柄なアメリカ女性はルーシーにとって一番の友達であるからだ。二人にはすぐ連絡がついた。ポールガーはいつもどおりシテイーに行っていたが、ケルシー夫人の緊急の要請に応えて、すぐやってきた。

ポールガーはこの四年の間ほとんど何も変わっておらず、丸ぼちやの正直そうな顔は相変わらず少年のようだった。クロリー夫人は、彼を英国の俗物の典型のように思っていた。ルーシーに対する献身ゆえに好感は持っていたが、その神経の鈍感さには笑いを禁じえなかった。クロリー夫人はポールガーが到着したときすでにケルシー夫人の邸に来ていたのだが、このひどい投書のことは何も知らなかった。だからケルシー夫人は、もしかすると甥も知らないのではないかと考え、彼が部屋に入ってくる、デイリー・メール紙を手にして近づき、

「ボビー、これ見た？」と興奮して尋ねた。「一体どうしたらいいんでしょう。」

ポールガーは頷いて、

「で、ルーシーは何て言ってます？」と答えた。

「まだルーシーには見せてないの。嫌だけど嘘をついて、新聞屋が届け忘れたと言っているの。」

「しかしルーシーも知っておくべきでしょう。」彼は重々しく言った。

「今日は駄目。」ケルシー夫人が異議を唱えた。「ああ、なんて酷いことなの、よりによって今日こんなことが起こるなんて。新聞もどうして明日まで待ってくれなかったの。あの子もいろいろと辛い思いをして、やっと少しは幸せが戻ってきた矢先なのに、こんな恐ろしいことが……。」

「それで一体どうするつもりですか。」

「あたしに何ができて？」ケルシー夫人が絶望したように言った。「舞踏会を延期することはできないわ。ああ、あたしに勇気があれば……。マッケンジーさんに手紙を書いて、来ないでほしいと言えたら……。」

ボビーはちよつと苛立いらだったように体を動かした。叔母がこのくだらない舞踏会のことをくどくど述べるのが気に入らなかつたのだ。しかし、それはそれとして、彼は叔母を安心させようとした。

「マッケンジーのことを気遣う必要はないと思いますね。あえて顔を出すだけの勇気はないでしょう。」

「まさか、投書で言っていることが本当のことだなんて、そう思っていらっしゃるんじゃないでしょうね？」クロリー夫人が声を上げた。

ポールガーは彼女のほうに顔を向けると、

「あれ以上に説得力のあるものは読んだことありませんね。」と言った。

クロリー夫人はポールガーの顔をまともに見つめた。彼も夫人の視線から眼を逸そらそうとしなかった。

この三人の中で、ルーシーがアレック・マッケンジーを深く愛していることを知らないのは、ケルシー夫人だけだった。

「多分あなたはアレックに偏見をお持ちなのよ。」クロリー夫人が言った。

「あいつにどんな反駁ができるか、そのうち分かりますよ。」ポールガーの声は冷やかだった。「夕刊にはきつとあいつの見解が載るでしょう。今ロンドン中がこの話題で持ちきりなんですから、マッ

ケンジーだつてすぐに何かコメントしなくちゃならないでしょう。」

「あの投書に少しでも本当のことが書いてあるとはとても思えません。」クローリー夫人が言った。「みんな、どんな事情でジョージがアフリカに行くことになったか知っているはずです。この男が言っているように、マッケンジーさんが冷酷にジョージを犠牲にしたなんて、考えられません。」

「そのうち分かりますよ。」

「ボビー、あなた、昔からマッケンジーさんが嫌いだったわよね。」ケルシー夫人が言った。

「ええ。」彼はきつぱりと答えた。

「ああ、舞踏会を開こうなんて考えるんじゃないやなかった。」夫人が呻くように言った。

しかしながら、やがて二人はどうかケルシー夫人を落ち着かせることができた。あまり賢いことではないと判っていたが、二人は夫人の願いを聞き入れ、翌日までルーシーには何も知らせないでおくと約束した。夕刻にはディックがパリから戻ることになっている。彼なら何か良い知恵があるかもしれない。やつとのことでこの老婦人を宥めすかすことに成功したとき、ジュリアはアレックのことを考えた。いったい今どこにいるのだろう。すでに知っているのだろうか、自分の名前がこれまでもまして人々の口の上^{のほ}に上っていることを。

マッケンジーはランカシャーからロンドンに向かっていた。彼は新聞を読むことを習慣とする男ではなかったから、デイリー・メールを眼にしたのは実際偶然にすぎなかった。列車でたまたま乗り合わせた男が何種類かの新聞を持っていて、アレックにその一部を渡してくれた。アレックはそれを儀

礼的に受け取り、他のことを考えながら見るともなしにページを捲^{めく}っていた。そして突然、ケルシー夫人の視線を引きつけた見出しが彼の目にも飛び込んできたのである。アレックは投書を読んだ。そして論説を読んだ。しかし、このときのアレックの表情から、彼がこの記事に深い危惧の念を抱^{いだ}いたことを見抜ける者はいなかったであろう。アレックの顔は無表情のままだった。新聞を床に落とすと、アレックは考え始めた。やがて、新聞を貸してくれた、人の良さそうな男に向かつてこの投書を読んだかと尋ねた。

「ひどい話ですな。」男は言った。

アレックは黒い瞳でこの男をじっと見た。男は平均的な市民で、知性も充分ありそうだった。

「どう思いますか？」

「かわいそうな話ですな。マッケンジーというのは偉い男だと思っていた。しかしこうなった以上、銃で自殺でもするより他ないんじゃないですか。」

「この内容は本当だと思いませんか。」

「投書には充分説得力があると思いますな。」

アレックは返事ができなかった。会話を打ち切るために、彼は立ち上がり、廊下に出ると煙草に火を付け、車窓を駆け抜けてゆく緑の畑を眺めた。二時間、彼はそこに立ち尽くしていた。が、ついに肩をすくめ、席に戻った。その唇には嘲笑^{あざわら}うような表情が浮かんでいた。

男は頭を後ろに倒し、口をちよつと開けて眠っている。この男の意見がこの件に関しての大多数の意見なのだろうか？ 銃で自殺すべきだと本当に思っているのだろうか？

「自殺する姿が目には浮かぶ。」アレックはつぶやいた。

数時間の後、ケルシー夫人の舞踏会は最高潮に達していた。どこから見ても大成功だった。多くの人が来てくれ、皆愉しさを満喫しているようだった。とにかく表面的には今宵の楽しみを妨げるようなことはなにも起こっていなかった。デイリー・メール紙の例の投書も、客人にとっては格好の話の種類以上のものではなかった。

やがて参事司祭スプラットが喫煙室に入ってきた。こうした機会にはいつもそうなのだが、彼は微笑ましくも今夜の舞踏会の花、グレース・ヴィザードと腕を組んでいる。グレースというのはあのヴィザード夫人——礼節の鑑であり敬虔なローマ教会の信者——の姪である。スプラット司祭が部屋に入ると、そこにはクロリー夫人とロバート・ボールガーがすでに腰掛けていた。司祭は二人に丁寧に挨拶した。

「どうしても一服したくなりましてね。」彼は酒や煙草、その他ありとあらゆる飲み物、軽い食べ物の乗ったテーブルに近寄った。

「あなたがどうしても勧めてくださいるなら、わたしも一本いただくわ。」クロリー夫人がニコッと微笑み、白い美しい歯を輝かせた。

「勧めないでください。」とボビーが口を挟んだ。「もう六本も吸ったんですよ。これ以上吸ったら、そのうち気分が悪いと言いだすのは目に見えてるんですから。」

「じゃあ、お勧めはなかったという事で。でも煙草はいただくわ。」

司祭は慇懃に煙草を箱ごと夫人に差し出し、軽く笑って、

「……私の主義には反するのですが。」と言いながら、夫人の煙草に火を付けた。

「でも、主義に背いて悪いことをする時のあの心地よい興奮がなかったら、主義なんて、どんな役に立つのかしら？」

この言葉が夫人の口から発せられるか発せられないうちに、ディックとケルシー夫人が部屋に入ってきた。

「いやあ、クローリーさん、あなたの警句エピグラムには劇作家も顔負けですな。」ディックが言った。「そうした粋いきなことをおっしゃるのが趣味なんですか、それとも必要に迫られて？」

ディックがパーティー会場に到着したのはかなり遅く、クローリー夫人が彼と顔を合わせるのは聖霊降臨祭ホリソルト、サンで皆がそれぞれの休暇に出掛けて以来のことだった。ディックは自らウイスキーにソーダを入れて掻き混ぜた。

「舞踏会ほど耐えがたいものがあるでしょうか。」ディックがハイボールを満足そうに啜すすりながら考え深げに言った。

「まあ、ざつくばらんと言って、ないわね。」ケルシー夫人が答えたが、その顔には安堵の笑みがあった。というのも、つい先程あの忌まわしいニュースをディックの耳に入れたところ、彼が例によっ

てそれを真面目に受け取らなかったからである。「でもそれを口に出すのは随分と失礼じゃなくって？」

「でもあなたのお宅の舞踏会は別です。なぜって、煙草は吸いたいただけ吸えるし、御婦人フテアーセツクスと呼ばれている方々からは離れていられますから。」

クローリー夫人はこの言葉は自分に向けられたものと感じ、すかさず、

「ローマ스さま、あなたに言わせれば、わたしたち女性は過大に扱われているというわけね。」と、ちよつと不満げに口を挟んだ。

「まあ、有体ありていに言えば、この世界、なにも女性にパリ仕立てのドレスを着せる機会を与えるためのみ創られたわけでもありませんまい。」

「そうおっしゃっていただいて嬉しいわ。」

「どうして？」ディックは警戒しながら尋ねた。

「わたしたち女性は、女神のように崇め奉あがたてまつられることにひどく退屈しているんです。何百年も殿方は、愚かにも、わたしたちを台座の上に祭り上げて、自分たちはスカートスカートの縁へりに触れる価値さえない、なんて宣のたまってききましたが、そんな退屈なことってあって？」

「いやあ、まいった。あなたは賢い方だ。いつもこころにもないことをおっしゃる。」

「あなたはいつも不躱ぶしつけだわ。」

「行儀の悪さが流行遅れとなってしまった昨今では、気の利いた奴だという評判を頂戴するには不躱が一番手っ取り早い方法なんです。」

スプラット司祭はディックを嫌っていた。喋りすぎるからだ。だが幸いなことに話題を変えることは容易かった。

「ローマス氏と違って私は舞踏会を大いに愉しむものです。」彼はケルシー夫人に向かって言った。「私の趣味は純粹なものでして、舞踏会ではダンスそのものを愉しませていただきます。私としては、ケルシー夫人、あなたさまも他の客人同様今宵を大いに満喫なさっているものとお慶び申し上げます。」

「あたしが？」ケルシー夫人が叫んだ。「あたし、一日中悶え苦しんでいるのよ。」

皆、夫人が何のことを言っているのか分かっていて、ボールガーはこの機会をとらえてディックに話しかけた。

「多分あなたもデイリー・メールの朝刊をご覧になったでしょ？」

「僕は八月以外は新聞を読まないことにしているんだ。」ディックは素っ気なかった。

「何も読みたいような記事がない時に？」クローリー夫人が訊いた。

「憚りながら、私は海蛇を熱心に研究しているんです。それにグースベリーの木の研究もね。」

「あの男、蹴っ飛ばしてやりたい。」ボビーが憤然として言った。

ディックは笑った。

「ねえ、君、アレックは頑丈なスコットランド人だよ。それに君より大きいときてる。僕に忠告させてもらえるなら、そんなことしないほうがいいんじゃないかな。」

「勿論この件について全てお聞きになったんでしょね？」スプラット司祭が言った。

「たった今パリから戻ったところで、ケルシー夫人にお聞きするまでは何も知らなかったんですよ。」

「それで、どう考えます？」

「どうもこうも、なにも考えませんね。僕には、あの投書の中に真実は一つとして無いと分かっている。モンバサに戻って以来アレックは、個人的にも、公の場でも、何らかの意見を言う資格のある者みんなから称讃されっぱなしだった。しかし勿論それが永久に続くはずがない。反動があるのは当然ですよ。」

「このマキナリーって男のこと、なにか知ってますか？」ボールガーが訊いた。

「これが、たまたま知ってるんだな。モンバサで半分飢え死しかかっていたところをアレックが見つけた、他に理由はない、唯かわいそうだからって連れてってやった男だ。くだらん悪党で、結局送り返されたがね。」

「僕には、この男の言ってることは、何から何まで充分証拠が揃ってるように思えますがね。」ボビーが言い返した。

ディックはさも軽蔑したように肩をすくめた。

「すでにケルシー夫人にはご説明したことだが、探險家が帰国すれば必ず中傷するようなことを言う奴が出てくるものさ。熱帯のジャングルじゃ、子供を扱うみたいに、『優しく、優しく』なんてのは通用しない。そのことを忘れちまって、ちよつとでも手荒な手段を使つたと耳にすると、大袈裟に騒ぎ立てる。アレックのようにみんなに尊敬されるようになると、なおさらね。」

「要点から外れてるように思いますが……。」ボールガーが苛々した調子で言った。「マッケンジーは、かわいそうに、ジョージをひどい罫にかけたんですよ。自分の汚らわしい命を長らえさせるためにね。」

「ルーシーがかわいそう。」ケルシー夫人が呻くように言った。「最初にお父さんを亡くして……、」「まさかアラトン氏が亡くなられたことを大きな不幸だとお考えになっていらつしやるんじゃないでしょうか？」ディックが夫人の言葉を遮った。「あの方がお亡くなりになったことは、悲しいことではあっても、ルーシーにとってはよかったんだということ。私たちの意見は一致していたはずですが……。」

「僕は今日夕飯をあいつと一緒にとる約束をしてただけで、」二人の言葉が無視してボビーが苦々しげに続けた。「電報を打って、頭痛がするから行けないと言っちゃった。」

「あなたがここにいるのを見たら、マッケンジーさん、どう思うかしら？」ケルシー夫人が言った。「思いたいように思わせとけばいいでしょう。」

スプラット司祭はそろそろ自分が何か決定的な言葉を差し挟むべき時だろうと考えた。彼はそういうことを言うのが好きな男だった。にこやかに手を揉み合わせながら、

「この件に関しては、私としては全面的に我が友ボビー君の意見に賛成と言わざるを得ません。」と始めた。「私も件の投書を細心の注意を払って読んでみましたが、欠けているもの、マッケンジー氏の逃げ道となるようなものは何一つとして見つかりませんでした。氏が何か明確な反証をあげてくれるまでは、残念ながら氏は殺人犯以外の何者でもないと考えざるをえません。こうした事に関しては、

私たちは勇気を持って自分の意見を述べるべきではないでしょうか。夕方、ピカデリーで氏の姿を見かけましたが、無視いたしました。かように重大な告発がなされているとき、その当人とにこやかに握手をする気には到底なれません。」

「ああ本当に、どうか、今日はマッケンジーさんが来ないことを祈るわ。」ケルシー夫人が言った。司祭は時計に目をやると、夫人に向かって勇気づけるような笑顔を送った。

「ご安心なさって大丈夫だと思います。もう夜も大分更けてまいりましたし……。」

「ルーシーはこの件について何も知らないとおっしゃいましたね？」ディックが訊いた。

「ええ。」ケルシー夫人が答えた。「今晚のパーティーを台無しにしたくなかったの。ルーシーにこころゆくまで楽しんでほしかったの。」

ディックは再び肩をすくめた。どうして皆の共通の話題になっていることがルーシーの耳にだけは届かないで済むと考えられるのか、彼は理解に苦しんだ。ケルシー夫人の発言の後しばらく沈黙が続いたが、その沈黙の中、ルーシーその人が現われた。彼女は洒落た服装をした青年を連れていた。ルーシーはその青年に笑顔を向けると、

「ここであなただにびつたりのパートナーが見つかると思いましたが。」と言った。

青年はグレース・ヴィザードに近づく、すぐにも始まるうとしているワルツと一緒に踊っていた。だきたいと、グレースを連れて部屋を出ていった。ルーシーは椅子に坐っているケルシー夫人に歩み寄り、その椅子の背に手を置いた。

「伯母さま、お疲れになつて？」ルーシーが優しく尋ねた。

「ええ、でも食事までは休めそうよ。もう誰もお出でにならないでしょう。」

「マッケンジーさんをお忘れになったの？」

ケルシー夫人はビクツとして顔を上げた。が、何も答えなかった。ルーシーは夫人の肩に優しく手を置くと、

「伯母さま、今朝伯母さまが新聞を隠してくださいださったこと、とても嬉しく思います。」と言った。

「でも、あまり賢いことだとは思えませんが？」

「あなた、あの投書、見たの？」ケルシー夫人が驚いて声を高めた。「明日まで見せたくなかったのに……。」

「マッケンジーさんは、ご自分とジョージについてどんなことが言われているのか、わたしも知っておくべきだと——当然ですが——そうお考えになって、あの新聞をわたしのもとへ送ってくださいなんです。夕方届きましたわ。」

「手紙か何か、一緒に入っていましたか？」ディックが尋ねた。

「いいえ、わたしも読んでおくべきだろうというメモだけ。」

誰も口を開こうとしなかった。ルーシーは全員の顔を見まわした。頬は真っ青だったが、態度は落ち着いていた。ルーシーはロバート・ポールガーを真剣な面持ちで見つめ、彼が言うに違いないことを言い出すのを待っていた。それをボビーが言ったらすぐに、今アレックに対して浴びせられている非難が自分にはまったく信じられないものだということを表明するつもりでいた。しかし彼は何も言わなかった。予想した挑発がないので、ルーシーはやむをえず自ら皆を怒らせることを言わざるをえ

なかった。

「わたしはマッケンジーさんを信じています。その信頼を裏切るはずがないことをあえてわたしに納得させる必要はない、そうマッケンジーさんはお考えなんです。」

「ということは、君はあの投書を読んでも何の疑いも持たないってことかい？」ポールガーが言った。「悪いことをして追放された、卑しい人の言うことを、それもまだ何も証明されていないのに、どうして信じなくてはいけないんです？」

「僕には、あれ以上説得力のあるものはこれまで読んだことがないしと言えない。」

「たとえマッケンジーさんがご自分の口から告白なさったとしても、わたしにはあの方があそこに書かれたような行爲をしたとは信じられません。」

ボビーは肩をすくめた。邪険な言葉が喉まで出かかったが、なんとか押さえた。しかしルーシーは彼の考えを読んだように、顔を真っ赤にした。

「あなた方が、悪いほうへ、悪いほうへと考えたがるのは恥ずかしいことだと思えます。」ルーシーは怒りを抑えようとしたが、声がふるえるのはどうしようもなかった。「なんてけちくさい、卑しいところ！ あなた方が足元にも及ばない方なのよ。それなのに、あるいはそのためにもかもしれないけれど、今回のことがあの方に泥を塗る好い機会だと喜んでいて。あの方に弁明の機会を与えようともしない。」

ボビーの顔が蒼褪めた。ルーシーが彼に向かってこんな口のききかたをするのは、これまでになかった。ボビーのところに怒りの炎が燃え上がった。それは酬われぬ愛と混じりあった炎だった。

彼はなんとか自分を落ち着かせようとしばらく間を取った。

「どうやら君は知らないようだけど、新聞記者があいつのところへインタヴューに行ったんだ。でもあいつはコメントするのを拒否したそうだ。」

「あの方はこれまでもインタヴューにはいつさい応じませんでした。なぜ今回に限ってその習慣を破らなくてはいけないんです？」

ボビーは言い返そうとしたが、ケルシー夫人の顔に突然浮かんだ狼狽の表情を見て、言うのを止めた。振り向くと、ドアのところにもマッケンジーが立っている。マッケンジーは笑みを浮かべて前に進み出ると、手を差し出しながらケルシー夫人に話しかけた。

「この部屋に来ればお目にかかれると思いました。」

マッケンジーは落ち着きはらっていた。寛いで、どこか面白がっているような表情を浮かべて、部屋を見廻している。部屋に或る種の気まづさが流れた。ケルシー夫人はマッケンジーと握手はしたものの、何を言ったらいいのか途方に暮れていた。

「こんばんわ。」夫人は口ごもった。「今あなたのお話をしていましたのよ。」

「本当？」

夫人はマッケンジーの眼に浮かんだ笑いを見て、かすかに残っていた落ち着きも完全に失ってしまった。夫人の顔が真っ赤になった。

「夜も随分と更けたでしょう、もうあなたはお出でにならないのかと心配していました。お見えにならないかったらとても残念なことねって。」

「そうおっしゃっていただいて嬉しく思います。トラヴェラーズ倶楽部に寄って、私の人間性について色々な評価を読んでいたので。」

ケルシー夫人の人の良さそうな顔に警戒の色が走った。

「ああ、そう言えば新聞にあなたのことが何か載っているとか……。」

「山と載っています。世間の人が私にこんなにも関心を持っていてくれたとは、思ってもみませんでした。」

「何にしても、今晚お出でいただいて嬉しいわ。」この善良な夫人は幾分落ち着きを取り戻し、笑顔で言った。「でも、きつとダンスなんてお好きじゃないんでしょうね？」

「とんでもありません、とても興味を持っています。思い出しますが、アフリカの或る王様が私のために踊りの集いを開いてくれたことがあります。四千人の兵士が戦いのメイキャップをして踊るんです。それはそれは素晴らしく印象的な踊りでした。」

「ねえ、君、」デリックがくすくす笑いながら言った。「もしメイキャップに興味があるんなら、何もそんなに遠くまで行かなくて、メイフェアにいればいくらかでも見られるさ。」

デリックはこの場の状況が面白かった。アレックの態度はなんとも興味深い。デリックはアレックのことをよく知っていたから、この控えめではあるが陽気な態度が完全に意図的なものであることは充分に判っていた。しかしこの先どちらの方向へ話を持っていくかとしているのか、この態度からは判断できなかった。と同時に、今日のアレックにはいつも以上に近づきたいところがあった。こちらからあれこれ質問したりしないほうが賢明だろうということは誰の目にも明らかだった。が、デ

ックはそんなことは気にしなかった。彼は機会が見つかりしだい、この件についてアレックと話をす
るつもりでいた。

アレックの穏やかな視線がロバート・ボールガーに向けられた。

「やあ、ボビー坊やじゃないか。頭痛じゃなかったのかね？」

甥が夕食の約束を破棄したことを思い出し、ケルシー夫人が仲裁に入った。

「ボビー、だいじようぶ？ とつても疲れているように見えるけど……。」

「こんなに夜遅くまで起きていちゃいけないな。」アレックがいかにも愉しそうに言った。「君の
年頃の子は、ぐっすり、たくさん寝なくっちゃ。」

「心配してくださいさるとはご親切なことで。」ボールガーは苛立っていた。「頭痛はすっかり治りまし
た。」

「それは良かった。何を飲んだのかな——フェナセチンかな？」

「夕食を食べたら自然に治りました。」ボビーは冷やかに答えた。自分が笑われているのは分かって
いたが、この厄介な局面をうまく切り抜けることができなかった。

「そこで、若くて美しいお嬢さん方のお相手をしようと、ケルシー夫人の舞踏会に参上したってわけ
だ？ お嬢さん方を落胆させまいとするところなんぞ、なかなか見上げたものだ。」

そう言うからアレックはルーシーの方に顔を向けた。二人はお互いの眼を見つめた。

「夕方、新聞が届いたと思いますが……。」

「ありがとうございます。」

しばらく沈黙があった。部屋にいた人々は一様に、この静けさのなかに厳肅とでも言うほかないも
のを感じていた。スプラット司祭は、もしかするとこのまま気まずい雰囲気になってしまいかもしれ
ない、なんとか状況を変えるために一座の注目を自分に集めようと思っただけだが、彼でさえもこの沈黙を
破るには相当の勇気が必要だった。司祭は前に進み出るとルーシーに腕を差し出した。

「つぎは私のお気に入りのダンスだったはず、私と踊っていただけですか？」

司祭は、邸に来る前にアレックを無視したように、今も彼のことはまったく無視しようとしていた。
アレックが司祭を見た。

「夕方、ピカデリーにいましたね。若い羚羊ガゼルみたいなのに、なにか大あわての様子でしたが……。」

「私はあなたの姿は見かけませんでした……。」司祭は冷淡に答えた。

「すれちがったとき、ショーウィンドーを熱心に覗のぞいていましたよ。まあ、それはそれとして、こん
ばんわ。」

アレックは手を差し出した。司祭は握手するのをちよつと躊躇ためらっていたが、アレックが自分を見つ
め続けるのでやむをえず手を差し出した。

「こんばんわ。」司祭は答えた。

彼にはディックがくすくす笑っているのが聞こえた。聞こえたと言うよりも、感じられたと言った
ほうが正確かもしれない。顔を赤くして、彼はもう一度ルーシーに腕を差し出した。

「マッケンジーさん、あなたは踊らないの？」ケルシー夫人がこの気まずい状況を何とかしたいと思
って言った。

「もしよろしかったら、ここに残ってディックと一服しようと思います。ご存じのように私はダンスが苦手です。」

アレックはディックに望んでいる機会を与えてやろうとしているようだった。他の人間が出ていってしまうと、この陽気で小柄な男はさっそくアレックに質問を浴びせ始めた。

「君にも分かっているんだろう？——君が今夜ここに姿を現わさないだけのたしなみを持っていくれますようにって、みんな神様にお願ひしていたんだ。」

「白状すると、そんなことだろうと思っていたよ。」アレックは笑った。「来ないほうがよかったんだろう。ただ、僕はどうしてもアラトンさんに会いたかったんだ。」

「例のマキナリーという男、どうやら事態を不愉快なものにしてやろうという魂胆のようだな。」

「僕がしくじったんだ。な、そうじゃないかい？」弱々しい笑いを浮かべてアレックが言った。「あいつが用無しになったとき、川に投げ込んでおくべきだったんだ。」

「で、これからどうするつもりだ？」

「何も。」

ディックはアレックをまじまじと見た。

「じゃ、みんなが君に泥を投げつけるのを我慢しているというのかい？」

「連中がそうしたいならね。」

「でも、なあアレック、ただ黙って坐っていて、それで何の意味があるというんだ？」

アレックは落ち着いた表情でディックを見た。

「もし僕の考えていることを世間に向かって言うつもりがあるなら、今日の夕方インタヴューに来た連中を追い返したりはしてほしくないだろうね。」

「アレック、僕らはもう二十年の付き合いだよ。」

「それならなおさら、僕がこのことについて君にも話さないということは、それなりの理由があるからだって、分かってくれるだろう？」

ディックは興奮して、飛び上がるように立ち上がった。

「でも、しかしアレック、当然何らかの釈明があつてしかるべきだ。こんなひどい批難を黙って見過ごすことはできない。それに、関係しているのがトムだ、ジョンだ、ハリーだといった、どうでもいい人間ならともかく、ルーシーの弟なんだよ。何か言わなくちゃいけないだろう。」

「自分がしたくないと思つていふことをしなくちゃならないとは、考えたことないね。」

ディックは椅子に坐り込んだ。アレックがこんなふうに話すときには、どんなことをしても気を変えさせることはできない、それは充分わかつていた。全てがまったく予想外だった。ディックは何をどう言つたらいいのか困り果てた。彼はこの事態を引き起こした当の投書はまだ読んでおらず、ケルシー夫人が話してくれたことしか知らなかった。投書を仔細に読んでみれば、アレックのこの態度も宜なるかなと納得できる、いくつかの事実が明らかになるかもしれないという希望は持っていたが、しかし今のところ、何から何まで五里霧中だった。

「なあアレック、ルーシーは君を心底愛しているんだ。そのことを考えたことがあるかい？」
アレックは答えなかった。体はピクリとも動かなかつたし、表情も変わらなかつた。

「このことでルーシーの君に対する愛が失われるようなことになったら、どうするんだ。」
「犠牲は覚悟のうえだ。」アレックの声は冷やかなものだった。

アレックが椅子から立ち上がり、ディックは彼がこれ以上この件について話したくないのだと判った。しばしの沈黙があった。と、そこへルーシーが入ってきた。

「お相手のいないお嬢様に、司祭さまをお渡ししてきましたわ。」かすかに笑みを浮かべてルーシーが言った。「どうしてもあなたと二人きりでお話がしたいと思っていましたの。」

「じゃあ、僕は退散しましょう。」ディックが言った。

彼が部屋から出るのを待って、ルーシーは上気した面持ちでアレックに語りかけた。

「お出でくださって本当にありがとうございます。とてもお会いしたかったの。」

「みんなが私についてひどいことを言っていますからね。」

「わたしには隠そうとしていたの。」

「ああした浅ましいことを人間が言えるものとは思ってもみませんでした。」アレックが重苦しい調子で言った。

今回の件でアレックが苦しんでいるのは、自分は世間の評判には無関心でいられると信じていたのが実は誤りであったと判ったからである。人からの称讃、お世辞を気にしないているのは容易い、しかし人からの非難、酷評を気にしないているのはそれほど容易いことではない、そのことを身をもって知ったからである。彼はそんな自分に対して苦々しさを感じていた。

アレックは手を取るとルーシーをソファアに導いた。

「どうしても今申し上げておきたいことがあるのです。」

ルーシーは黙って彼の方を見ていた。

「私は、今私に向けてられている非難に対して、いっさい弁明しないと決めたのです。」

ルーシーが顔をちよつと上げ、二人の目が合った。

「名譽にかけて言えますが、私は後悔するようなことは何もしていない。ジョージ君に関して私がしたことも、誓って、正しいことだった。もしすべてをもう一度やらなくてはならないとしても、まったく同じ事をするでしょう。」

ルーシーが答えるまでに長い間があった。

「ほんのちよつとのあいだでもあなたを疑ったことはありません。」やつとのことで彼女は言った。

「そのことだけが気がかりだったのです。」彼は俯いた。つぎに話し始めたとき、その声には何かはにかんでいるような響きがあった。

「今日が初めてです、自分は信頼されているのだという保証が欲しいと思ったのは。しかしそれを欲しがる自分が恥ずかしい。」

「ご自分に対して厳しくしすぎてはいけませんわ。」ルーシーがいたわるように言った。「あなたは優しいお気持を表に出すことを怖れすぎると思います。」

アレックはルーシーの言ったことをじつと考えているようだった。アレックがこんなに深刻な表情になるのを見たことはなかった。

「心を強く保ってられる唯一の方法は、自分の中の弱さに絶対屈しないことです、絶対に。強さと

は習慣にすぎないのです。あなたも強くあつてほしい。どうか、どんなことを耳にしても決して私のことを疑わないでください。」

「わたしは弟をあなたにお委まかせしたのです。申し上げましたように、もし弟が勇敢に、男らしく死んだのであれば、それ以上何も望むものはありません。そしてあなたは、弟はどのように死んだとおっしゃってくださいました。」

「私はいつもあなたのことを考えていた。私のしたことは全て、あなたのためにしたのです。アフリカでのこの四年間、どんな些細な行為も全てあなたを愛していればこそしたことなのです。」

彼が愛について語ったのは帰国して以来初めてのことだった。ルーシーは深く俯いた。

「憶えていらっしゃいますか？——アフリカに発つ前にあなたにうかがったこと。あの時あなたは私の申し出を断つた。しかし私が戻つた時には答は変わっているかもしれないとおっしゃった。」

「ええ。」

「その希望があつたから、どんな困難にも、どんな危険にも立ち向かうことができたのです。しかしいざイギリスに戻ってみると、私にはすぐに答をうかがう勇気がなかった。もしもう一度断られたら、と恐れたのです。それに、あなたを漠然とした約束で縛っていると思つてほしくなかった。しかし毎にあなたに対する愛は強くなつていった。」

「分かつていました。それに、愛していただくことをとても嬉しく思つておりましたわ。」

「昨日までだったら、あなたに名誉、名声を差し出すことができた。人々が私に与えてよこす名誉も名声も、それをあなたの足下に置くことができると思えばこそ多少の意味があつた。ああ、しかし今、

あなたに何を差し出すことができるでしょうか？」

「いつまでもわたしを愛してください。今わたしにはあなたしかいないんですもの。」

「私の無実を信じてくださるのですね？」

「でも、どうして何も反論なさらないの？」

「あなたにも何も言えないのです。」

二人とも黙り込んでしまった。やがてアレックがその沈黙を破つた。

「しかし多分あなたになら、他の人々と違って、私の言うことを信じてもらえるのではないかと思うのです。あなたは私があなたを愛していることをご存じだし、例の男が非難しているような憎むべき行為を私がするはずがない、そのことを分かつてくださるのではないかと……。」

「あんなこと、絶対に信じません。全てをご自分の胸むねに留めておこうとする理由が何なのか分かりませんが、でもあなたを信じています。きっとその理由は充分納得のゆくものなのでしょう。あなたがお話になれないとおっしゃる以上、何かとても重大なことがあるからに違いありません。……あなたが愛しています、アレック、ここから……。もし、あなたの妻になれとおっしゃるなら……。とても誇りに、光栄に思います。」

アレックはルーシーを腕に抱き、接吻くちづけをした。ルーシーの目に涙が浮かんできた。幸せの涙だった。何も考えたくなかった。ただ彼の逞しい腕うでに身を任せていたかった。

パーティーが無事に終つてほしいというケルシー夫人のころからの願いも、気の毒なことに、結局叶えられなかった。ロバート・ボールガーはルーシーの言ったことに我慢ならず、ひどく苛立^{いらだ}つていた。ルーシーは、ロバートの気をさらに狂わせようとするかのように、ことさらに不謹慎に振舞つた。彼女は世間の人々——今日の場合はケルシー夫人の厚いもてなしを受けている二百人ばかりによって代表されるのだが——に向かつて、投書事件にもつとも深い関わりをもつ者である自分が、噂をまったく信じていないことを明らかにするために、当のアレックに、ぜひ一緒に踊りましようとして申し出た。アレックは、いま人々が抱^{いだ}いているにちがいない感情を逆撫^{さか}でするのは賢明ではないと、ルーシーに思い留^{とど}まらせようとしたのだが、彼女の火と燃える決意にはついに逆らえなかった。その時ディックとクロリー夫人も組みになつて踊つていた。二人の眼に非難の色を見たルーシーは、なおさらのこゝと情熱的に、此見^{こゝ}よがしに踊つた。ポビーが自分を見つめているのにも気づいていたが、その顔に青黒い怒りの表情が浮かぶのを見たときには、挑戦的に頭を後ろに反^そらした。

時が経つにつれ客はだんだんと帰つてゆき、午前三時ともなるとほとんどいなくなつた。アレックは、ルーシーに最後まで残つてほしいと頼まれて、ディックと喫煙室に引込んでいた。やがて

そこにボールガーが入つてきた。彼はマリNZとカーベリーという友人と一緒に来たが、アレックはこの二人とはあまり馴染みでなかつた。ボールガーはどうしてもアレックから何らかの説明を引き出すつもりで、わざわざこの二人を連れてきたのである。しかし二人はそんなことはつゆ知らなかつた。ボールガーはアレックをちらつと見ると、そのまま煙草や飲み物がのつたテーブルに進んだ。

「ポビー、ここなら煙草を吸つてかまわないんだよな？」アレックがいることにちよつと戸惑いを覚えた友人が、この場が気まずい雰囲気にならないようにと、訊くまでもないことを訊いた。

「勿論さ。ディックさんのご意見じゃ、この部屋はそのために特に用意されてるつてことだよ。」

「ケルシー夫人は見事に主人役をおつとめだ、そう思わないかね。」ディックが陽気に言った。

彼はシガレット・ケースを取り出し、アレックに一本勧めた。アレックは受け取りながら、

「ポビー坊や、マッチを取つてくれないか、良い子だから。」とぞんざいに言った。

アレックに背を向けていたボールガーはこの頼みを無視した。彼はウイスキーをグラスに注ぐと、それを手に持ち、どのくらい入つたかをわざとらしく眺めていた。アレックは苦笑いを浮かべ、

「ポビー、マッチを投げてくれ。」と繰り返した。

その時ケルシー夫人の執事が盆を持って入つてきて、汚れたグラスを片付けはじめた。ボールガーはアレックに背を向けたまま執事のほうを見た。

「ミラー。」

「なんでごさいましょう。」

「マッケンジー氏が何かお求めだ。」

「は。い。」

「すまんが、マッチをもらえるかね？」アレックが言った。

「かしこまりました。」

執事は盆の上にマッチを置くと、それをアレックのところへ持っていった。アレックは煙草に火をつけた。

「どうもありがとう。」

執事が部屋を出てゆくまで誰も口を利かなかった。アレックは煙草の煙で輪を作り、それが漂ってゆくの眺めている。執事が出ていってしまうと、彼はゆつくりとボールガールのほうに躰を向けた。

「ボビー、君にはいろいろと好い点があるが、どうやら僕の留守中、その好い点に行儀の良さを付け加えることはできなかったようだな。」

ボールガーは振り向くとアレックをにらんだ。

「何か必要なものがあるんなら、召使におっしゃればいいでしょう。」

「そんなけちくさいこと言うなよ。」アレックが上機嫌に笑いながら言った。

このアレックの人を食ったような態度がボールガーの最後の自制心を奪った。彼は怒って、大股でアレックに近寄った。

「何だ、その言い方は。殴り倒すぞ！」

アレックはその時ソファアの上に横になっていたが、まったく動じる様子ではなかった。

「それはできないだろう、僕はもう仰向けになっているんだから。」彼が冷静に答えた。

ボールガーは拳を握りしめた。怒りで息遣いが荒くなっている。

「いいか、マッケンジー、そんなふうには馬鹿にさせてはおかないからな。マキナリーの非難に対してどんな言い訳ができるのか、それを知りたいんだ。言ってみろ。」

「その質問をする権利のある人、またその答を要求できる人はアラトンさんだけだと思うがね。で、アラトンさんは僕にそんな質問はしなかった。」

「ルーシーの態度を理解するのは諦めた。僕がルーシーなら、あんたの顔を見ただけで虫酸むしずが走るところだ。……何だかんだ言ったって、僕にも知る権利がある。ジョージ・アラトンは僕の従弟いとこなんだ。」

アレックはゆつくりとソファアから起き上がり、ボールガーと向かい合ったが、その顔つきは冷淡なもので、ボールガーを一層苛立たせるものだった。

「ジョージはそのことをあまり誇りにしていなかったな。」

「おまえは、卑劣極まりないやり方でジョージを死に追いやった、そう朝から非難されてるんだ。なのに、おまえは、何も自己弁護しようとしなない。」

「そのとおり。」

「新聞社が機会を与えてやっても、それを利用しようとしなない。」

「そのとおり。」

「一体どうするつもりなんだ。」

アレックはすでにディックからも同じ質問を受けていた。彼はディックにしたのと同じ答をした。

「何も。」

ボールガーはアレックをしばし睨みつけたあと、肩をすくめた。

「じゃあ、やっぱり結論は一つしかないってことだ。おまえを法廷に引きずり出すことはできそうもないが、少なくともこれだけは言っておく——僕がおまえのことをどうしようもない悪党だと思ってるってことはな。」

「僕らの間は終わったってことかな。」アレックは笑った。この若者の強がった言い方を楽しんでいようだった。「では、あなたのお手紙とお写真はお返ししたましようか？」

「僕は冗談を言ってるんじゃないぞ！」ボールガーが威嚇するように叫んだ。

「確かに君は冗談はあまり上手じゃない。僕はスコットランドの人間、君はイングランドの人間、イングランドの人間はユーモアのセンスがあると聞いていたが、妙なことに、いま君がどんなに滑稽に見えるか、僕には分かっているのに、君には分かっていない。」

「まあまあ、アレック、ボビーはまだほんの子供じゃないか。」ディックが諷めにかかった。彼はここまで仲裁に入ることができずにいたのだ。

ボールガーが怒った顔でディックのほうを見た。

「ディックさん、僕は自分のことは自分でちゃんとできます。口出ししないでくださいと有難いんですがね。」ボールガーは再びアレックに顔を向けた。「ルーシーが弟の死のことに無関心で、おまえと付き合い続けるって言うんなら、それはそれでルーシーの勝手、僕には関係ない。」

ディックが再び割って入った。

「ボビー、お願いだから騒ぎは起こさないでくれ。自分から物笑いの種になるようなことはしないでくれよ。」

「たのむから、ほっといてください。」

「君、ここが喧嘩にうってつけの場所だと思うのかい？」アレックはあくまで冷やかだった。「もし有名になりたいんなら、僕が倶楽部にいるときか、日曜の朝、礼拝を終えて教会から出てくるところを襲ったほうがよくはないかね。」

「おまえが今日ここに来たこと自体、まったく凶々しい、恥知らずなことなんだ。」ボビーが叫んだが、その声は興奮のあまりかすれていた。「おまえは、気の毒に、叔母さんやルーシーを盾に使ってるんだ。ルーシーがおまえの側についてる限り、この話を信じない奴も出てくるって知ってるからな。」

「君、僕がここに来たのは君と同じ理由からさ。招待されたんだ。」

「弁解の余地がないって認めるんだな。」

「すまんが僕は何も認めていないし、何も否定もしていない。」

「それじゃ納得がいかない。本当のことを知りたいんだ。本当のことを言わせてみせる。僕にはそれを知る権利があるんだ。」

「馬鹿なことを！」アレックが短く叫んだ。

「この野郎、言わせてみせる！」

激怒したボールガーがアレックに近づき、喉元を掴もうとしたが、逆に、アレックはボールガーの

腕を捻^{ひね}って仰向けに倒してしまった。

「馬鹿な奴だ。おまえの背骨を折ろうと思えば折ることもできるんだ。」低い、怒りに満ちた声だった。

憤怒の叫びをあげてボールガーがアレックに飛びかかろうとしたとき、ディックが彼を遮^{さへぎ}った。

「頼むから、ここで騒ぎは起こさないでくれ。それに、ボビー、喧嘩になれば君が怪我をする。君はアレックにくしゃくしゃにされたいのか。」ディックは予想外の成り行きに呆気にとられて立ち尽くしている二人の男のほうを向くと、「マリンズ、お願いだからボビーを連れ出してくれ。」と言った。

「放せ、ちくしょう！」ボールガーが叫んだ。

「ボビー、行こう。」マリンズが我に返って言った。

二人の友人がボールガーを部屋から連れだすと、ディックは大きくため息をついた。

「ケルシー夫人も気の毒に、」ディックは笑った。一段落ついて、情況の滑稽さが頭に浮かんだのだ。「明日になれば、ロンドンの半分の間人が、君とボビーが夫人の家で大立廻りをしたってことを話題にしているだろうからね。」

アレックはこわい顔でディックを睨^{にら}んだ。アレックはすぐに怒りが治まるような人間ではなかった。今まで無理に押さえていたものが、ここにきて押さえきれなくなっていた。

「何もあそこまであの坊やを怒らせなくてもよかったのに。」ディックが言った。

アレックは怒り心頭の様子で、ディックに背中を向けると、

「餓鬼どもめ！」と吐き出すように言った。「あの馬鹿どもの首根っこをへし折ってやりたいよ。」

「本当に優しい人柄をお持ちのことです。」ディックがやり返した。

アレックは部屋の中を行ったり来たりしはじめた。彼がこんなに興奮するのをディックはこれまで見たことがなかった。

「事態がひどく厄介なことになってきているのは確かだな。」ディックがさりげなく言った。

すると、アレックが一気にまくし立てた。

「あいつら、こつちが反吐^{へど}が出るくらい胡麻を挿^挿っておいて、今度は野良犬みたいに寄って集^{なが}って吠えたてる、まったく愚劣な奴らだ。ひとが働いて——御国^{おくに}のために身を粉^{こな}にして働いている間、イギリスでのほんんと安逸^{むかほほ}を貪^{むさ}っておいて……。有難いことさ。もうあいつらとは縁切りだ。アフリカのジャングルを進んでいくことが、ピカデリーを闊歩するのと同じくらい簡単だと思っていやアがる。どんな困難や危険があるか、想像できんのか。えっ、病気や飢えがどんなに苦しいか解らんのか。それを、ただメイフェアの晩餐会で主役になりたいからやったんだろうくらいにしか思っていない。」

「ちよっと不公平じゃないかな。」ディックが応じた。「絵の裏側も見てやらなくちゃ。君は今、裏切り行為という、きわめて卑劣なことをやったらと非難されている。君の友人たちは皆んな、それがとんでもない嘘だとすぐ証明してほしいと願っている。ところが君はなぜか解らないがそうしようとしてない。投書があったことを知っているような態度すら見せない。」

「これまでの人生を見てくれれば、あれが嘘だということとははつきりしている。」

「ひとつ思いなおして、新聞にコメントを送ったらどうかね、どんなのでもいいから。」

「何を言ってるんだ、阿呆^{あほう}！」

ディックの善意は、アレックのこの程度の悪態では何の影響も受けなかった。

「まあまあ、そう熱くならないで。」ディックは笑った。

アレックはディックの言葉にからかうような響きを感じ、我に返ったようだった。彼がなんとか冷静になろうと努力しているのがはっきり目に見えて、ディックは可笑しかった。やがてどうにか落ち着きを取り戻すと、アレックは努めて平静を装いながらディックの方を向き

「僕はそんなに興奮していたかね？」と訊いた。

ディックは微笑んで、

「まあ、こう言っちゃなんだが、さっきは君の口の中でバターが簡単に溶けただただらうよ。」と答えた。

「僕としてはあんなに冷静だったことはなかったつもりだが。」

「幸せ者だな。三十八度の熱があっても熱いと感じないんだから。」

アレックは笑って、ディックの腕を取ると、

「そろそろ帰るのが賢明のようだな、多分。」と言った。

「君は、見たところも素晴らしいが、その常識も素晴らしいよ。」とディックが生真面目に答えた。

二人はすでにケルシー夫人に別れの挨拶は済ませてあったから、玄関で持ち物を受け取ると、それぞれの帰途について考えた。ディックは家に着いてもベッドに入る気にはなれず、肘掛椅子に坐って、今夜のことについて考え始めた。あまりにもいろいろなことが一遍に起こったので、何をどうしたらいいのか考えてみようと思ったのだ。朝の明るい光が部屋に射し込んだとき、ディックは驚いた。

* * *

ケルシー夫人の苦悩は、しかし、まだ終わっていないかった。友人たちと別れたボビーが夫人のところに来て来て、下に行つてスープでも飲みませんかと言った。夫人は疲れきっていたから、ボビーの思いやりが嬉しかった。一階の部屋には外套コートを着た男が一人二人残っていて、連れの婦人を待っていた。玄関ホールは自分の馬車が庭先に横付けされるのを待つ人々でごった返している。誰の顔にも陽気なパーティの終わった後につきまものの気怠けだるさが漂っていた。テーブルの後ろに控える召使たちの臉まぶたは今にも閉じそうだ。ルーシーが親しい友人に別れの挨拶をしている。

ケルシー夫人はやれやれといった様子で熱いスープを啜すった。

「足が棒のよう。きっと今夜は疲れすぎて眠れないわ。」

「帰る前にルーシーと話がしたいんです。」出し抜けにボビーが言った。

「今晚？」夫人は戸惑ったように訊いた。

「ええ。そこで、叔母さんからルーシーに、ブドワール部屋に来てほしいと伝言してもらいたいんです。」

「ねえ、なにか問題なの？」

「ルーシーをこのまま放はなつとくわけにはいかない。本当にひどい。すぐにどうにかしなくちゃいけません。」

ケルシー夫人にはボビーの狙いがあるのか理解できた。彼のルーシーに対する愛がどんなに大きなものかは知っていたし、今晚ルーシーがアレック・マッケンジーと踊ったときの彼の怒りも目にしてきた。しかし夫人は事の成り行きにどう対処したらよいかまったく途方に暮れていた。夫人はカッ

プを置く」と、

「明日まで待てないの？」と不安そうに言った。

「すぐ決着を付けるべきです。」

「でも、賢いこととは思えないけれど……。あなただって分かっているでしょ？——ルーシーが自分のやることに干渉されるのが大嫌いだったこと。」

「どんなに嫌われても、じっと耐えてみせます。」彼は苦々しげに言った。

ケルシー夫人はどうしようもないといったふうにはボビーを見つめた。

「それで、あたしはどうすればいいの？」

「僕たちが話しているとき、その場においてほしいんです。」

彼は召使の方を向くと、アラトンさんにケルシー夫人の部屋まで来ていただきたいとの夫人の伝言を伝えるように命じた。そして夫人に腕を差しだし、二人は二階へ上がっていった。すぐにルーシーが現れた。

「伯母さま、わたしをお呼びになって？ わたしに話したいことがおありだと言われたんですけれど……。」

「僕がアリス叔母さんに頼んだんだ。僕からの願いじゃ来てくれないだろうと思ってね。」

ルーシーは眉を上げてボビーを見ると、明るく答えた。

「そんなことを……？ わたし、あなたとならいつでも喜んでお話ししますわ。」

「どうしても話しておきたいことがあってね。それにアリス叔母さんにも聞いてほしいと思ったん

だ。」

ルーシーはボビーの目をちらっと見た。彼はその視線に冷たく答えた。

「明日まで待てないほど大切なことなの？」

「とても大切なことだと思う。それにもう客もほとんど帰ったし。」

「では全身耳にしてお聴きしますわ。」ルーシーは軽く笑って応えた。

ポールガーはしばらく躊躇ためらっていたが、やがて神経を集中すると、自ら選択した試練に乗り出した。

「ルーシー、君にはこれまで何度も言ってきたことだが、僕はもう思い出せないくらい遠い昔から君を愛してる。」ボビーの顔は緊張で真っ赤だった。

「まさか、また結婚の申込みをするために、スープを飲む最後のチャンスをわたしから奪ったわけじゃないわよね？」

「ルーシー、僕は真面目に言ってるんだ。」

「でも、ねえ、あなたに真面目さは似合わないわ。」ルーシーはちよつとからかうように笑った。

「このあいだも君に結婚を申込んだ。マッケンジーがイギリスに戻るちよつと前だが……。」

ルーシーの瞳にポールガーをいたわるような表情が浮かび、それまでのふざけるような調子がその声から消えた。

「あなたって本当に善い人だと思うわ。わたしがあなたのことをときどき笑うからといって、あなたの愛情に感謝してないとは思わないでね。」

「ルーシー、ボビーがずっとあなたを愛していることは、あなただって知っているでしょう？」ケル

シー夫人が言った。

ルーシーはボビーに近寄ると、優しく彼の腕に手を置いた。

「ねえボビー、あなたの深い愛には言葉では言い表わせないほど感謝しています。それに、その愛に値するようなことを何もしてこなかったこともよく分かっています。お返しに何もしてあげられないことをとても申し訳なく思います。でも、人間って、自分の愛情を自分ではどうしようもできないのよね。わたしには、あなたが誰かあなたを大切にしてくれるお嬢さんと恋に落ちることを願うことしかできない。ああ、本当にここからそう願っているわ。どんなにあなたに幸せになってほしいと思っているか、あなたには分からないくらいよ。」

ポールガーは冷たく後ろに退^{さか}った。ルーシーの優しさにあふれた言葉が彼のこのころの琴線を掻き鳴らしたが、しかしその気持に負けるわけにはいかなかった。

「今問題なのは僕の幸せじゃない。マッケンジーが戻ったとき、なぜ僕に対する君の無関心な態度を変えられないのか、よく解った。」

彼はしばらく間をおくと、落ち着かない様子で咳払いをした。

「なぜそんなことを言う必要があるのか分からない。」ルーシーが低い声で言った。

「僕は身を引こうとした。君はいつも強さというものを高く評価してたから、マッケンジーに惹かれるのも無理はないと思った。彼と比べたら僕に勝ち目がないのは判った。ただ僕は、君がマッケンジーを心底愛しているわけじゃないと希望し続けていた。見込みがないのは判ったが……。」

「それから？」

「今朝の新聞に載ったあの投書、あれがなかったら、あえてもう一度君に何か言おうなんて考えなかった。でもあの投書がすべてを変えた。」

彼は再び間をおいた。冷静に見えるように努めてはいたが、心臓は激しい鼓動を打っていた。自分はこのころからルーシーを愛している。だから、今しようとしていることは明らかに自分の義務なのだ。

「もう一度お願いする、僕の妻になってほしい。」

「どういうことか分からない。」

「君がマッケンジーと結婚することは、もうできない。」

ルーシーは頭を後ろに反らせた。顔が蒼^{あお}褪^{おぼ}めている。

「あなたにそんなふうにする権利はないはずよ。わたしの好意につけ込みすぎじゃない？」

「僕には言う権利があると思うね。まず第一に、僕が君にとって唯一人の親類であること、それに、僕は君を愛してる。」

ケルシー夫人が何か言いたそうだった。二人は夫人の方を向いた。

「ルーシー、ボビーの言うことをちゃんと聞いてあげなくちゃ。あたしももう老^{おい}先^{さき}長いことないし、もうじき、あなた、この世で一人ぼっちになってしまふのよ。」

夫人の善意あふれる優しい言葉が二人の興奮した気持を和らげ、二人のやりとりは穏やかなものになった。

「ルーシー、僕は良い夫になるよう精一杯努力する。」ボビーの声は真剣だった。「僕を好きになってくれとは言わない。ただ君のために尽くしたいんだ。」

「わたしにできるのは、とても感謝していますと繰り返すことだけ。でもあなたとは結婚できない。絶対ありえないわ。」

ボビーの顔が曇り、黙り込んでしまった。

「この先もマッケンジーと付き合っていくつもりなのかい？」ようやくのこと彼が言った。

「あなたにそんな質問をする権利はないわ。」

「あの投書について、偏見を持たない人たちの意見を訊いてみるといい。みんな僕と同じことを言うはずだよ。あのひどい犯罪的行為に関して、あの男に罪があることに疑いの余地はないってね。」

「みなさんが何を言おうと気にしません。わたしには分かっています、あの方があんな卑劣なことをしたのははずがないって。」

「でも、しかし、ルーシー、忘れたのかい、あの男が殺したのは君の弟なんだよ！」ボビーが熱くなつて叫んだ。「いま国中の人間があつた男に腹を立ててるんだ。なのに君はまったく平気で……」

「ああ、ボビー、どうしてそんなこと言うの？」突然、こころのもっとも深いところにある感情を刺激され、ルーシーは泣きはじめた。「どうしてそんなに残酷になれるの？」

ボビーがルーシーに近づき、二人はお互いの顔をまともに見た。ボビーは押さえきれぬ怒りから早口でまくし立てた。

「いやしくもジョージのことを愛しているんなら、ジョージを死に追いやった男を罰したいと思つて当然だろう。少なくとも相変わらずあの男の……」ルーシーの目に浮かんだ苦悶の表情を見てボビーは言い淀み、出かかった言葉を押さえた。「あの男の……一番の友人でいることはできないはずだ。」

それにジョージをアフリカに行かせたのは君じゃないか。なら、ジョージの死に何らかの関心を持つのは姉として最低限の義務だろう。」

ルーシーは忌まわしいものを見たくないかのように手で目を覆った。

「ああ、なぜわたしを苦しめるの？」ルーシーの声は憐れを誘うものだった。「あの方は無実よ。」

「あの男は誰に訊かれても何も答えようとしない。僕もやってみたが何の結果も得られなかった。それで最後には喧嘩腰になってしまった。でも君にならあつた男も本当のことを言うかもしれない。君が単刀直入に訊けばだが……。」

「そんなことできない。」

「なぜ？」

「マッケンジーさんがこれだけ沈黙を守っているのは、ちょっと奇妙じゃなくって？」ケルシー夫人が言った。「何も恥ずかしいことがないんなら、あつまで隠すことはないと思つておわよ。」

「伯母さまもあの投書を信じるんですか？」

「あたし、何を信じていいのか分からないの、なにかもあまりに異常で、……ディックさんも何も分からないと言っているわ。でも、もし無実なら、どうして何も言わないのかしら。」

「あの方はご存じなんです、わたしがあの方を信じていることを……誇りを持って信じていることを。わたしがあの方を疑っているような質問をすれば、あの方がどんなに苦しむことか、そんなことができるとお思いで？」

「君は彼が答えられないと怖れているんじゃないの？」ボールガーが言った。

「そんな！ そんな！ そんなことありません。」

「じゃあ、訊いてみたまえ。何だかんだ言ったって、姉として弟のためにそのくらいのことはすべきじゃないか。訊いてみることだ。」

「でも、あなたには分からないの？——あの方が何もおっしゃらないということは、よくよくの理由があるからだって。」ルーシーはかなり取り乱していた。「人には言えない何かとても大切なことがあって、それに比べたらジョージの死も取るに足らないことだといえるような……」

「君は弟の死をそんなに軽く見てるのか！」

ルーシーはボビーから顔を逸らすと、わっと泣き出した。追いつめられた獣のようだった。次から次へと彼女を責めたてる質問から逃れるすべはないように思われた。

「わたしがあの方を信じてあげなくて、誰が信じてあげるといふの。」

「どうやら君はこの問題に立ち入ることに少々怯えているようだ。」

「わたしは無条件にあの方を信じます。わたしのすべてが、この眼が、耳が、唇が、髪の毛の一本一本が、あの方の正しさを確信しています。」

「ならばなおさら、君があの方に問い質してみたとところで何も問題はないわけだ。あの男が君を信じない理由は全くないってことだろうか？」

「ああ、なぜ放っておいてくれないの？」ルーシーはますます追いつめられ、啜り泣きはますます激しくなった。

「ねえ、ルーシー、」ケルシー夫人が言った。「あたしも腑に落ちないの。マッケンジーさんはあな

たの友達なんでしょ。それなら、秘密なら秘密でいいから、あなたにだけは何か言ってもいいんじゃない？ あなたがそれを公にしないことは確かだから。」

「わたしに何も言わないということは、言わなくてはならないことが何もありません。わたしは誰よりもあの方のことを知っています。あの方はとても高潔な方です。もしわたしたちに分からない何らかの理由であの方が沈黙を続けようと決心なさったのなら、何をしても無駄でしょう。決して弁明はなさらないでしょう。わたしは絶対的にあの方を信じています。これまでに知ったどんな人よりも偉大で、立派な方ですわ。あの方のおそばに仕えることが許されるなら、とても幸せに、とても有難く思います。」

「ルーシー、それは一体どういうこと？」ケルシー夫人が叫んだ。

ルーシーは今、すべての遠慮をかなぐり捨てた。

「つまり、あの方のためになら、たとえ小指一本のためにも、この世の何もかも捨ててかまわないということですよ。ここからあの方を愛しています。だから、あの方があんな卑劣なことをなさるはずがない。なぜって、わたしは何年間もあの方を愛してきた。あの方もそのことが分かっているはず。そして、あの方もわたしのことを愛してくださっている。ずっと愛してくださっていたんです。」

ルーシーは精根尽き果て、大きく息をしながら椅子に坐り込んだ。ポールガーはしばらくルーシーを見つめていたが、気分が悪くなった。これまでは単なる憶測であったものが、ルーシー自身の口から語られたのだ。予想していたよりも遥かに耐えがたい苦しみだった。いまや何もかもが終わったよ

うに思われた。

「あの男と結婚するつもりなんだね？」

「ええ。」

「どんなことがあっても？」

「どんなことがあっても。」ルーシーは挑むように答えた。

ボビーは喉元まで出かかった怒りとも絶望ともつかぬ呻きをかろうじて押さえた。視線はルーシーに注がれたままだった。

「一体全体……、」ようやくのこと彼は言った。「あの男のどこが……、肉親の愛も、名誉も、世間体も忘れさせるような何があの男にあるっていうんだ！」

ルーシーは何も答えなかった。ただ手で顔を覆い、涙の溢れ出るままに激しく身を震わせていた。

ボビーはもうそれ以上何も言わず、振り向くと、部屋から出ていった。玄関の扉が強く閉められる音が聞こえた。ボビーは人気のない静まり返った通りへと出ていった。

翌日、アレックはランカシャーに呼び出された。

朝、家を出たとき、街角に張り出された昨日の夕刊の見出しに炭坑爆発事故の記事が載っているのを見てしたが、頭は他のことであらうで、取りたてて注意を払わなかった。だから、倶楽部に置いて電報を渡され、その事故が他ならぬ自分の炭坑で起こったのを知って衝撃を受けた。何十人も抗夫が生き埋めになっていて助からないのではないかという内容だった。彼自身の心配事は吹き飛んでしまった。彼は時刻表を持ってこさせると列車を探した。今すぐ出発すれば間に合う列車がある。駅へ向かう辻馬車の中で彼は電報を二通したためたが、一通は執事宛のもので、自分の衣類を持ってすぐにランカシャーに来るよう命じるもの、もう一通はルーシーに宛てたものだった。

どうにか列車に間に合い、アレックはその日の午後には坑道の入り口に立っていた。そこには目に涙を浮かべた女たちが集まっていた。生き埋めになった抗夫を救出しようという努力はどれもこれもうまくいっていないようだった。坑内に閉じ込められた者以外にも多くの負傷者がいて、現場監督の住居はそれらの人々の仮収容所となっていた。アレックの眼には、誰も彼もがこの大惨事に茫然自失の状態で、救出活動は遅々として進んでいないように見えた。彼はすぐに仕事にとりかかった。まず

は、悲嘆にくれている女たちを勇気づけることから始めた。つぎに、少しでも役に立ちそうな者を集め、自分も精一杯努力するからと皆を叱咤激励した。夕暮れが近づいており、一刻も無駄にはできなかった。彼らは夜を徹して生き埋めになっている者の救出に努めた。アレックもシャツ一枚になり、屈強な抗夫に交じって一心不乱に働いた。彼には休むことも食べることも必要ではないようだった。歯を食いしばり、無言で死神と闘い、やがて三十人の抗夫が救出された。夜が明け、アレックは風呂に入って元気を取り戻すと、急いで怪我人の見舞いをすませ、坑道の入り口に引き返した。

他のことを考えている余裕はなかった。だから、まさにこの日の朝、デイリー・メール紙にマキナリーの新たな投書が載ったことをアレックは知らなかった。その投書は、幾つかの「決定的証拠」を付け加えることよって、事件に関する筆者の論点の信憑性を高めようとしたもので、アレックへの誹謗はますます激しいものになっていった。アレックの沈黙に驚くと同時に腹を立てていた新聞各紙も足並みを揃えて彼を批難していたが、そのことも勿論アレックは知らなかった。事件は今では政治問題に発展し、急進派の政党はこの醜聞を現在政権の座に着いている「死にかかった老いぼれ馬」を鞭打つ好材料と考え、ついにはこの件について下院で質疑が行なわれることになった。

アレックは自身の栄光という風船が今まさに弾けようとしていることを知りもしなければ、いわずや気に掛けることもなく、懸命な闘いを続けていた。すでに四十八時間が経過していたが、まだ生き埋めになっている抗夫たちがいた。アレックとともに救出のための穴を掘っている屈強な者たちの表情にも絶望の色が濃くなり始めていた。アレックはそうした者たちに、なお一層の奮闘を求めた。今必要なのは何事にも屈しない忍耐力なのだ、それしかないではないか。アレックの驚くほど強靱な肉

体がこの困難な状況において大いに役立った。彼は二十時間休むことなく働くことができた。いかなる労も惜しまなかった。そうした彼の姿が、一緒に救出活動に当たる者のこのころに、彼ら自身信じられないほどの忍耐力を呼び起こすのだった。アレックに比べれば自分たちのしていることなど何も苦しいことではない、そう抗夫たちは感じた。そして彼らは休むことなく穴を掘り続けた。しかし、希望は時間とともに萎んでいった。この壁の向こう側で、ひもじさと不安に怯えながら三十人の仲間が横たわっている。ひよつとしたらずで何人かは死んでしまっているのかもしれない。今彼らを襲っているにちがいない恐怖——次第に増してくる水の恐怖、暗闇の恐怖、このまま餓死するのではないかという恐怖——それを思うと胸は掻きむしられた。閉じ込められた者たちの中に十四歳になる少年がいた。最近こころランカシャーで過ごした或る日のこと、アレックはこの少年と偶然話す機会があり、その生意気な陽気さを愉快に思った矢先のことだった。口元がいつも笑っている、青い眼をした少年だった。その少年の生きる喜びが、この不条理な、忌々しい惨事によって粉々にされたことを思うと、沈痛な思いに満たされずにはいらなかった。少年の父親はこの事故ですでに死んでおり、変わり果てた黒焦げのその亡骸は、いま遺体安置所に横たわっている。少年とともに彼の兄もまた坑内に閉じ込められていたが、その兄は結婚していて、すでに子供も二人いた。アレックは運命に対する怒りに燃えて再び穴を掘り始めるのだった。負けるわけにはいかなかった。

そして、壁の向こうに音が聞こえた。幽かな、くぐもった音だったが、間違いなかった。何人かは確実に生きているのだ。救出にあたっている者たちは活気づいた。もう時間の問題だ。閉じ込められている者がすぐ近くにいと判って、男たちに新たな力が湧いてきた。疲労は吹き飛んだ。もう少し

の努力なのだ。

ついに、やった！

歓声になるうとしてなりきれぬ安堵の呻きとともに、最後の障壁が取り除かれ、生き埋めとなっていた者たちは救われた。彼らは次々と坑道から外に運び出されていった。皆、頬は落ちくぼみ、顔色は死人のように青黒く、眼は久しぶりに見る明るい世界に耐えられないようだった。自分の足で立っていることもできなかった。青い眼をした少年がアレックの逞しい腕たくまに抱かれて出てきた。少年は何か軽口を叩こうとしたが、唇に浮かんだ笑いはすぐに噁り泣きうすに変わり、顔をアレックの胸うすに埋めると、すっかり弱気になって大声で泣くのだった。彼の兄も運び出されたが、すでに息はなかった。妻が坑道の入り口で夫の出てくるのを待っていた。幼い二人の子供が母親の傍そばに立っていた。

このありふれた事故は新聞の片隅に小さく載っただけだったが、アレックの気持には大きな変化をもたらした。彼自身の個人的な悩みなど些細なことなのだと思えるようになったのだ。夫を失った女たち、孤児となってしまった子供たちの痛ましい悲劇、人生の盛りに命を絶たれた男たちの無念を前にして、自分の行為が世間に引き起こした波風はすっかり頭の中から消えていた。疲労は極限に達し、気持は落ち着かなかった。すべきことは無数にあつて、一刻の猶予も許されなかつた。まずは炭坑を再開できるようにあらゆる方策を講じなくてはならない。一家の稼ぎ手を失った者たちに生活に必要なものを宛あてがわなければならぬ。緊急を要する様々な重大事がアレックを取りまいていて、自分自身の悩み事にかまけている時間はなかつた。やがてどうにか自分自身のことを考える余裕ができたときアレックが感じたのは、この事故が今にも陥りそうになっていた狭い見から自分を救ってくれた

ということだった。自分は悪意に満ちているとしか言いようのない運命と隣り合っていたのだ、道理をわきまえぬ「偶然」という残酷なものと必死に闘ってきたのだ——そのことを思うとアレックは、いま彼に非難を浴びせている卑しい根性の持主たちに対して軽蔑以外の何ものも感じなかつた。いいではないか、結局良心よこしまに疚やましいところは何もないのだから……。

ルーシーに手紙を書いたとき、アレックのころにはロンドンを発つまえに起こった出来事について何か言及しなくてはならないという考えは全く浮かばず、彼は手紙のなかでもつばらここ数日の苦悩と、精一杯の救出活動について語った。いかに死神と闘い、その手に捕らえられた者を奪い返したかについて書いた。次に送った手紙の中では、復興のために今どんな対策を講じているか、さしあつての生活に困っている者たちにどんな援助を行なっているかについて書きしるした。胸を熱く焦がすルーシーへの愛情を綴つづってみたいとどんなに思ったことか。しかし生来の羞恥心からそれはどうしてもできなかった。いま世間が声を張り上げている自分への非難については、一言もこれに触れることはなかつた。

ルーシーはアレックの手紙を何度も読み返した。二通の手紙は不思議なほど淡泊なものに思われ、得心がいかなかつた。被災地から遠く離れているルーシーは現地の焦燥や不安を理解できず、アレックがロンドンに帰って来ないことにひどく落胆していた。いまこそアレックに側そばにいてほしいのに……、アレックがいないために自分はこの重荷を一人で背負わなくてはならない……。

マキナリーの二度目の投書が新聞に載つたとき、ケルシー夫人は黙ってルーシーにそれを渡した。

とんでもない内容だった。すべてが途方もなく馬鹿げていたが、しかし、辻褄は合っていた。ルーシーは気が狂いそうだった。そこには何か真実らしきものがあって怖くなった。なぜアレックは口を閉ざしたままなのだろう？ きっと平定した地域に接する国々に関する何らかの政治的必要性があつてアレックは沈黙を貫いているのだ、そう自分に言い聞かせてみた。しかしすぐに、この説明はいかにも有り得ないものに思えてくるのだった。ルーシーは新聞に書かれているものはすべて読んでみたが、どれもこれもアレックを批難するものばかりだった。今やことは政治問題に発展していたので、アレックの属する政党は彼の援護にまわっていた。しかしそれは熱心なものとはとても言えず、結局は彼らの主張がいかに根拠に乏しいものであるかを露呈したにすぎなかった。ルーシーはこれまで、アレックが沈黙を守っている理由を思いつくかぎり想像し、何度も何度もこころの中で繰り返していた。だからなおさらこの二度目の投書を読んだ後では、彼に対する非難が彼の擁護論よりも説得力があるように思えてならないのだった。それに良心の痛みがあつた。ボビーの言つたあの残酷な言葉が脳裏によりがえり、今問題になつている事件の犠牲者は他でもない自分の弟なのだと考えると、自責の念に圧倒された。自分はまったくの薄情者か、それともまったく救いがたい人間にちがいない。そう感じたとき、ルーシーは自分の中に残された力のすべてを振り絞つて、わたしはアレックを信じている、と叫ぶのだった。あの人に裏切り行為ができるはずがない……。

しかし、とうとうルーシーは耐えきれなくなり、電報を打った。「オネガイデス、スグニキテ。」この惨めな情態をもう一日たりとも耐え抜くことはできそうになかった。ルーシーは気も狂わんばかりの不安のなかでアレックを待った。自分を恥じる気持、説明できない屈辱感でいっぱいだった。

アレックが到着するまでの時間を、ルーシーは、三時間、二時間、一時間、と数えていった。アレックが遅れるはずがない。冷静さはすっかり消え失せ、ルーシーは子供のようになり、自分を守ってくれるアレックのあの逞しい腕に抱きしめられることを願うのだった。

ついにアレックが来た。ルーシーはアレックがイギリスに戻つて初めて会つたときと同じ部屋で彼を待っていた。彼女は、蒼褪めた、熱に浮かされたような表情で椅子から飛び上がると、アレックの腕の中に身を投げた。

「ああ、やっと来てくださったのね。あなたを永遠に待ち続けなくてはいけないのかと思つた。」

アレックはなぜルーシーがこんなにも取り乱しているのか分からなかったが、優しく彼女に接吻をした。するとルーシーの苦しみは不思議なことに突然和らいだ。アレックの誠実さにあふれた物腰がルーシーを励まし、慰めてくれるのだった。しばらく彼女は口を利くことができず、アレックにしがみつき、啜り泣くだけだった。

「どうしたのですか？」やがてアレックが尋ねた。「なぜ私を呼んだのです？」

「あなたの愛が必要なの。どうしても言えぬ温かなものがこもっていた。」

アレックの愛撫には何とも言えぬ温かなものがこもっていた。彼のような気難しい男にこのような優しさがあるうとは誰にも想像できなかったらう。

「どうしてもあなたにお会いしなくては、と思つたの。」ルーシーは相変わらず啜り泣いていた。「この数日がどんなに苦しいものだったか、あなたには分からない。」

「かわいそうに。」

アレックはルーシーの髪に、苦痛にゆがんだ蒼白な額に接吻をした。

「なぜ行ってしまったの？ わたしがあなたを必要なことは知っていらつしやったくせに。」

「申し訳ありません。」

「本当に惨めだった。自分がこんなに苦しみに耐えられるなんて、……考えもしなかった。」

「こちらへ坐って、何もかも話してください。」

アレックはルーシーをソファアへ導くと、その横に腰掛け、彼女の腰に腕を回した。ルーシーは彼にもたれかかり、しばらくは何も言わず、長い長い苦悶の日々から救われた安堵感に身を任せていたが、やがて涙の中からかすかに微笑んだ。

「あなたと一緒にいると自信が湧いてくるの、幸せを感じるの。」

「私と一緒にいるときだけですか？」

アレックの声はまるで愛撫するかのようで、これまでに彼の口から聞いたことのない、低く情熱的なものだった。ルーシーは答える代わりに、いつそう彼に身を押しつけた。アレックは微笑みながら質問を繰り返した。

「ねえ、私と一緒にいるときだけですか？」

「わたし、ボビーと伯母様に、あなたと結婚するつもりだと言ってしまったの。あんまり苦しめるんですもの、言うしかなかった。秘密にしておけなかった。あなたについて、とつてもひどいことを言うんですもの。」

彼はしばし黙っていた。

「当然といえば当然ですね。」

「あなたにとつては何でもないことでしょう。」ルーシーは興奮して叫んだ。「でもわたしにとつては、……ああ、わたしがどんなに辛い思いをしてきたか、あなたには分からない。」

「結婚のこと、言ってくださってよかったと思いますよ。」

「ボビーはわたしが薄情で残酷な女だと言うの。本当かもしれない。あなたを思うとジョージのことはどうでもよくなってしまうんですもの。頭はあなたのことでいっぱい、他のことを考える余裕がないの。」

「私の愛が少しでもあなたの失ったものの埋め合わせになればと思います。あなたには幸せになっていただきたい。」

ルーシーはアレックの腕から身を引くと、ソファアの隅すみに寄りかかった。いま自分のところを深いところで苦しめているものをどうしても言わなくてはならないのだが、それを言うことが恥ずべきことのように感じられ、アレックの顔をまともに見られなかった。

「二人に言ってしまった理由はそれだけではないの。ああ、わたしって臆病者なのね。まえにはもつと勇気があると思っていたのに。」

「なぜ？」

ルーシーは突然胸のあたりが締め付けられるように感じ、身震いがした。言葉を続けるには大変な意志の力が必要だった。彼女は心底怯えていた。口が渴き、つぎに言葉を発したとき、とても自分の

声のように聞こえなかった。

「逃げ道をふさいでしまったかったの。自分に自信を持ちたくて……。」

今度はアレックが黙り込んでしまった。ルーシーが何を考えているかが今はっきり解ったからだ。自分はルーシーを失うことになるのだ、そう考えるとところは沈んだ。しかしそのことなら、とうの昔、あのアフリカの深いジャングルの中で覚悟したことではないか。ルーシーは、愛はなくともやっていけるが、自尊心なくしては生きていけない人なのだ。

アレックは立ち上がるようにした。しかしその時、坐っていてほしいというようにルーシーが素早く手を差しだした。と、突然情熱の炎が彼を捉え、最後までやれるだけのことはやってみようという気持ちになった。

「おっしゃっていることがよく分かりませんが……。」アレックは静かに言った。

「ごめんなさい、アレック。」

ルーシーはアレックの手を自らの手の中に包み込むと、早口に話し始めた。

「わたしがどんなに辛い思いをしているか、あなたにはお分かりにならない。本当にまったくひとりぼっちでみんなに立ち向かわなくちゃならないの。みんな、あなたのことをひどく言って、誰一人、よく言わない。何もかもが異常で、何がなんだか分からない。ジョージが、……かわいそうにジョージが死んだのはあなたの責任だと言う人ばかり、……そう思っていないのはわたし一人のようなの。ああ、それで、みんなはわたしのことを、冷たい、薄情な女だと言って言うの。」

「人がどう考えるか、そんなに問題なのですか。」アレックが重々しく訊いた。

「自分で自分が恥ずかしい。こんな考えはここから閉め出すべきだって、分かっているの。でも、できない。できないのよ。勇気を持つと努めたわ。みんながあなたをひどく非難することに根拠があるかどうかなんて、考えること自体拒否してきた。ディックさんに話してみようかとも思った——あの方、あなたのこと、とてもよく思っているから——でもできなかった。だって、あなたへの裏切り行為のようなんですもの。それに、このことがわたしにとって大きな意味を持っていることを誰にも知られなくなかったし……。最初の投書はそれほどでもなかったの、でも二通目は……ああ、今度のは怖ろしいくらい真実味があつて……。」

アレックは顔をさつとルーシーの方に向けた。新聞に新たな投書があったことを聞くのはこのときが初めてだった。あの熱に浮かされたような炭坑での不安の日々の間、アレックは一刻の猶予も許されぬ救出活動以外のものに注意を払う余裕がなかったのだ。しかし彼は黙っていた。

「わたし、何度も何度もあの投書を読み返してみた。でも、何のことなのか理解できなかった。これで決定的だとボビーが言ったときも、わたし、何の意味もないと答えました。……でも、……わたしの言おうとすること、分かってくさる？ はっきりしないこと、それが不安なの。耐えられないくらい不安なの。」

ルーシーは突然言葉を切って、アレックを見つめた。その訴えかける眼差しは哀切きわまりもないものだった。

「初めはわたし、あなたを完全に信頼していました。」

「ところが今はそうではない。」アレックが静かに言った。

ルーシーは再び視線を落とすと、涙声になった。

「これまでどおり信頼しています。あなたがあんな酷いこと、なさるはずがない。でも新聞にああして活字になって現れると……、あなたはそれに対して何も反論なさろうとしない。」

「説明するのはとても難しいのです。だからあなたに、私を信じてほしいとお願ひしたのです。」

「信じてます、アレック、」ルーシーは熱をこめて叫ぶように言った。「この底から。でも、お願ひ、わかつて、わたしは自分で思っていたほど強い人間じゃないの。一人で耐えてゆくことはあなたにとっては易しいことでしょう、あなたは鉄のような方だから。岩のような方だから。でもわたしは弱い女なのよ、憐れなほど、軽蔑すべきほど弱い女なのよ。」

アレックは首を横に振った。

「そんなことはありません。あなたは他の女性とは違う。」

「父や弟のことに關して気を強く持つてゆくことは易しかった。けれど今は違う。愛がわたしを変えてしまったの。みんなの言うことに耐えてゆく勇氣は、今のわたしには、もう、ない。……」

アレックは立ち上がり、部屋の中を二度三度と行きつ戻りつした。何か深く思いをめぐらしているようだった。ルーシーは自分の心臓の鼓動を彼に聞かれているような気がした。アレックがルーシーの前で立ち止まった。彼の声の中に響く深い苦惱にルーシーは心臓が締め上げられるようだった。

「憶えていらっしやいませんか？——ほんの数日前あなたに、私はもう一度やれないようなことは何もしなかったと申し上げた。自分を責めなければならぬことは何もしていないと名譽にかけて誓った。」

「ええ、わかつています。」ルーシーが叫ぶように言った。「本当に自分が恥ずかしいんです。でも、この疑いにもう耐えられないんです。」

「疑い？ ……とうとうおっしゃった。」

「自分に言い聞かせてはいるんです、あなたに対するこのひどい非難をわたしは一言だって信じていない、……そう繰り返し繰り返し言い聞かせていますわ。あなたが無実なことを信じている、自分は信じているって。」

ルーシーはアレックに対する死にもぐるいの愛情の中で勇氣をふり絞った。この決定的な瞬間に、自分に必要なあらゆる力をふり絞った。

「でも、この底に疑いがあるんです。その疑いを拭いきれないんです。」

ルーシーはアレックが答えるのを待った。しかし彼は何も言わなかった。

「その苦い、辛い疑いの氣持をなんとか消し去りたかったです。そして思ったんです、——みんなに向かつて、あなたに対するわたしの信頼はとても大きなもので、どんなことがあってもわたしはあなたと喜んで結婚するつもりだと宣言すれば……、そうすれば、氣持の平安が得られるのではないかと。」

アレックは窓際に進み、外を眺めた。西に傾いた陽が、通りに光の縞模様を作っている。向かいの家の前には馬車や自動車が停まり、玄関へと通じる階段のところらに馭者や運転手がたむろしている。パーティーが開かれているのだろう、開いた窓を通して着飾った女性たちの姿も見える。空は抜けるように青かった。アレックは振り向くとルーシーを見た。

「あなたのおっしゃっている二番目の投書を見せていただけますか。」
「まだご覧になっていらっしやらないの？」ルーシーは驚いて尋ねた。

「忙しくて新聞を見ている暇がなかったのです。それに誰も、私に新聞を見せなければ、と思つてくれなかつたようです。」

ルーシーは現在二人がいる部屋とはアーチ型の廊下で隔てられたもう一つの居間に行き、デイリー・メール紙を持ってくると、アレックに手渡した。彼は黙つて受け取ると、椅子に坐り、注意深く投書を読みはじめた。アレックはマキナリーに苦々しい軽蔑を覚えながらも、彼がこの事件を描くときの微に入り細を穿つ徹底した態度には舌を巻かずいられた。この中でマキナリーは、前の投書では不足していた部分を埋め尽くし、事件の全体像をいっそう首尾一貫したものにしていた。彼の提出している証拠には充分人を納得させるものがあつた。なぜならそれは遠征に参加した荷役人夫やアフリカ兵自身の言葉を引用したものだつたからである。誰にも気づかれぬほんの小さな嘘が、誰もが事実と認めるものと巧みに絡み合わされ、驚くべき力を持つて、見事に事件の全体像を変容させていた。ルーシーが疑念を抱いたのも至極当然なことと認めざるをえない。マキナリーの語る物語には真実があふれており、もしこれが誰か自分以外の人間に関する事件であつたなら、アレックも容易にマキナリーの物語を信じていたであらう。様々な事実が充分な正確さを持つて語られていた。唯一真実でないものは、かの任務をジョージに与えたアレックの動機だつた。しかし、誰かが何かをするときは動機が他人に分かるものなのだろうか。アレックは新聞をテーブルに置くと、椅子の背に凭れかかつて顔を両手で覆い、深く物思いに沈んだ。彼の目の前にはあの時のありさまが浮かんでいた。

テントの外では風が唸りをあげている。雨が激しく降り続けている。彼はジョージの真つ青な顔を思い出した。自分を狙つて銃を撃つたときの狂気じみた表情、ウォーカーとアダムソンに取り押さえられたときの屈辱的な表情。その青年も、彼の罪も、彼の弱さも、今はアフリカの大地の下に眠っているのだ。使者を鞭打つことで己を救うことはできない。それに、ルーシーにとっては、彼女自身の命以上に、弟ジョージが男らしく勇敢であつたことが大切なのだ。そんなルーシーにどうして辛い思いをさせることができよう？ 弟は臆病者のごろつきであつたがゆえに死んだのだなどと、どうして言えよう。ルーシーにとつて何よりも大切なアラトンの家名をついに回復することのできなかつたジョージの憐れむべき行動の一部始終を、どうして語れよう。そして、何かを自分が言つたとして、それを証明できるものがあるだろうか。ウォーカーはジョージが殺された同じ夜に死んだ。ああ、あの陽光だつたウォーカー！ いかなる苦境に立たされようとも常に快活、楽天的だつたウォーカー……彼の死の責任もまたジョージ・アラトンにあるのだ。そして、アダムソンは熱病で死んだ。事の真相を薄々でも感じていたのはこの二人だけだろう。この二人ならマキナリーの物語に重大な疑いを抱かせよう。自分も感じていたのはこの二人だけだろう。……しかし、とアレックは唇をかみしめた。たとえきたとしても、自分は彼ら二人を証言台に立たせることなど望んでいないのだ。それにあの約束がある。自分はジョージに厳肅に誓つたのだ。その誓いは、あの時、あの場所でなされたものであるがゆえにいつそう重みのあるもののように感じられ、アレックは、弟においていた信頼は誤つたものだつたのかもしれないと一瞬でもルーシーに疑いを持たせるような言葉は吐くまい、そう決心していた。彼は誠実ということを几帳面なほど大切にする男だつたが、それは道徳を重んじるがゆえではなく、

どちらかといえば趣味の問題であって、ジョージとの約束を破ったとき生じる不快感を思うと約束を破れなかったのだ。とは言っても、それは彼が真実をルーシーに語りたくない動機の中では些細なものにすぎなかった。たとえジョージがアレックから何の言質も取らなかつたとしても、彼は沈黙を守つたであろう。彼のころの底にはすさまじいプライドがあるのだつた。今回の件で自分がしたことには何のやましいところもない、彼はそう意識していた。強くそう意識するがゆえに、ルーシーもまた自分と同じ意識を持つべきだと期待した。自分が語ることをルーシーは信じなくてはならぬ、信じられるはずだ、なぜなら自分がそう語るのだから……。アレックは自分を弁護するという屈辱には耐えられなかつた。もしルーシーが自分を疑うのなら、彼女の自分に対する愛は大したものではない、アレックはそう感じていた。そしてその強烈な誇りゆえに、多分アレックはルーシーに対して不当だつた。彼は他の人間にだつたら決して求めない試練を今ルーシーに求めようとしていることに気がついていながつた。

アレックは立ち上がり、ルーシーの顔を見た。

「それで、具体的には、私にどうしろとおっしゃるのですか。」

「お願い、分かつて、あなたをころから愛しているわ、だから分かつてほしいの。もし嫌なら世間に向かって言つてくださらなくてもいいの、でもわたしには本当のことを言つてほしいの。あなたが嘘をつける人でないことは分かっています。あなた自身の口から言つてくださりさえすれば、わたし、信じます。確証がほしいの、確証が……。」

「解つていただけないのですか。もし少しでも良心に疚しいところがあれば、あなたに結婚を申込むことはなかつたでしょう。」アレックはゆつくりと語つた。「解つてほしいのです、私が口を閉ざしているのはそれだけの理由があるということ。そうでなければ、私の名誉がずたずたに引き裂かれていく間どうして平静を装つていられるでしょう。」

「でも、わたしはあなたの妻になるのよ。ああ、アレック、あなたを愛しています。あなたがわたしを愛してくださっていることも分かっています。」

「それなら、どうかそれ以上訊かないでほしい、お願いだ、ルーシー。過ぎ去つたことは過ぎ去つたことにして、いま二人がお互いを愛していること、それだけを考えよう。なんであれ、今の私には何も言えない。」

「ああ、でも、……でも言つてくださらなくては。」ルーシーは切に求めた。「もしも、……もしも何かがあつたのなら、もしもあの投書のどこかに真実があるのなら、わたしに自分で判断する機会を与えてくださらなくては。」

「申し訳ありませんが、それはできない。」

「でもそれなら、わたしたちの愛は？ わたしはあなたを愛せなくなるわ。」

ルーシーは飛びあがるように椅子から立ちあがると、両手を胸に押しつけた。

「わたしのころの奥にひそんでいる疑い、その疑いがこの胸を押しつぶそうとしているの。どうしてあなたは、わたしをこんなに苦しめるの？」

アレックの平静を装つた目を苦悩の影が横切つた。全身に沈痛な思いがあふれていた。

「あなたは私を信じてくださっているものと思つていました。」

「お願い、ひとつだけ言って。それさえ言うてくだされば、わたし、満足します。」ルーシーは両手を頭の上に持っていたが、その取り乱した、意味をなさない動作が彼女の動揺の深さを物語っていた。「ああ、あなたを愛したために、わたし、どうなってしまったの？」彼女は絶望にふるえて叫んだ。「わたしは弟を誇りにしていた。ここから弟を愛し、弟のために努めてきた。でも、あなたを愛してしまい、過去のことを考えることができなくなってしまった。過去の不幸も、失ったものも、すべてを忘れてしまった。今この瞬間にも、あなたのおそばにいと、過去のことはほんの些細なことにはしか思えない。最初に頭に浮かぶのはあなたのことだけ。あなたを何のこだわりもなく愛してもいいということはどうしても知りたいの。何のうしろめたさもなくあなたを愛せることを……。一言だけ言うてください、そうすれば、わたし、満足します。あなたは、あの夜ジョージを送り出したとき、ジョージが死ぬことになるとは知らなかったのよね？」

アレックはじつとルーシーを見つめたままだった。再び彼は、あの豪雨に打たれ、強風に煽られたアフリカのテントの中にいる自分の姿を思い浮かべていた。あの時は、ジョージには生き延びるチャンスが残っていると自分自身に納得させようとした。事実ジョージには自身の口から、もつとも危険な瞬間がおとずれたとき落ち着いて、自信を持って行動するなら生き延びることができるとかもしれないと言ったのだった。しかし、こころの深いところでは感じていたのだ。いや、もつとずつと前からはっきりと分かっていたのだ、いま自分がジョージを赴かせようとしているところには、死以外の何もものないことを。というのも、悪党なら悪党なりの最後の美德——勇気すらジョージには欠けていたからだ。

「アレック、お願い、知らなかったと言って。」ルーシーが繰り返した。「新聞が言っていることは本当じゃない、——そう言うてくだされば、わたし、あなたを信じます。」

沈黙があった。ルーシーの心臓は籠に閉じ込められた小鳥のように早鐘を打っていた。ルーシーは怖ろしい不安の中でアレックの言葉を待った。

「しかし、本当なのです。」アレックの声は静かなものだった。

ルーシーは何も言えなかった。恐怖におののく目でアレックを見るばかりだった。頭の中がぐるぐると回りだし、自分が気を失うのではないかと思われた。今自分を覆いつくそうとしている夜の闇をルーシーは全力で追い払おうとした。

「本当なのです。」アレックが繰り返した。

ルーシーは苦悶の叫びをあげた。

「分からない、分からないわ。ねえ、アレック、わたしを子供のようには扱わないで。お願い！ 真面目になって。わたしたち二人にとって生きるか死ぬかの問題なのよ。」

「全く真面目です。」

ルーシーは何か恐ろしく冷たいものに捕らえられたように感じた。指先の感覚がなくなっていた。「死ぬと判っている罠の中にジョージを行かせたというの？ ジョージが生きては戻れないと知っていたというの？」

「奇跡でもなければ、……」

「そして、あなたは奇跡なんて信じていない？」

アレックは答えなかった。ルーシーはつのる恐怖のなかでアレックを見た。その視線は人間のものというよりも野生の動物のものようだった。彼女は質問を繰り返した。

「そして、あなたは奇跡は信じていない？」
「ええ。」

ルーシーは相反するさまざまな感情に捉えられ、それらがこころの中で激しい闘いを繰り返していった。恐怖、狼狽、苦しい怒り、ジョージの死に対して自分が冷淡だったことへの自責の念。そして同時に、アレックに対する押さえきれぬ愛。しかし、どうして今自分に彼を愛することができるのか。「ああ、本当のではありません。」ルーシーは叫んだ。「それじゃ、あまりにもひどい。ああ、アレック、アレック、アレック……」。ああ神様、どうすればいいの？」

アレックは背筋を伸ばしてまっすぐに立っていた。歯を食いしばった顎はいつにもまして角張って見えた。彼の声は恐ろしいほどに厳格だった。

「私のなしたことはすべて、ああする以外なしようがなかったことなのです。」

ルーシーは彼の声を聞いて顔を真っ赤にした。突然、怒りと憎悪が他のすべての感情を圧倒した。

「このことが真実なら、他のこともみんな真実に違いありません。あなたは自分の命が惜しくて弟を犠牲にしたんだわ。どうしてそのこともお認めにならないの。」

しかしその怒りや憎悪はすぐに消え去り、ルーシーは深い絶望感に襲われた。

「ひどい。理解できない。」彼女は訴えるような必死の眼差しでアレックを見た。「何かおっしゃってくださいることはないの？ わたしがジョージをどんなに愛していたか、あなただっでご存じのはず

よ。父の犯した罪の記憶を拭い去ってくれる、そういう人生を弟が送ってくれたら、それがわたしにとつてどんなに大きな意味を持つか、ご存じだったはずよ。未来はすべて弟を中心に廻っていた。だから、……あなたが平気でジョージを犠牲にできたはずがない。」

アレックはしばし躊躇っていた。
「このことだけは言ってもよいかと思えます。私たちはアラブ人の罠に陥り、助かる途は我々のうちの誰かが犠牲になることしかなかった。」

「そこでああなたはジョージを選んだというわけね、わたしを愛していたから、というわけね。」

アレックはルーシーを見つめた。彼の目には無限の悲しみが浮かんでいたが、ルーシーは見えていなかった。アレックの声は重苦しいものになった。

「ルーシー、責任は弟さんにあつたのです。ジョージくんは重大な過ちを犯した。自らが招いた苦境のために最後はあのようなことになった、……それはあながち不当とは言えない。」

「でもあんな状況じゃ、何が不当で何が正當かなんて、誰に言えて？ それに弟はとっても若かつたんですもの。若くて、素直で、正直で……。ジョージの命の代わりにあなたの命を犠牲にしたほうがずっと気高い行為だったんじゃないやありません？」

「ああ、ルーシー、」アレックはできるかぎりの優しさを込めて答えた。「あなたはお分かりになっていない。人間、自分の命を捧げることは容易いことなのです。一方、公正に振舞うことが単に優しい人間でいることに比べてどんなに難しいことであるか！ あなたは私のことを分かっただけじゃない。もしあの時の状況が私の命と引き替えに解決できるようなものであったら、私は躊躇なくこ

の身を捧げたでしょう。あの時は私が生き延びることが必要だった。私にはやらなければならぬ仕事があった。あの地域の各部族とは神聖な条約を結んであって、私はそれに縛られていた。たとえそれだけが私を縛るものであったとしても、あそこで私が死んだとしたら、それこそ卑怯なことだったのです。」

「言い訳は何とでも言えます。あなたが男らしく勇敢でなかったことは確かだわ。」ルーシーは怒りと軽蔑を込めて、吐き捨てるように言った。

「どうしても私という人間が必要だった。私が連れていった白人、彼らは道具として選んだのであって、リーダーとしてではない。もし私が死んだら、遠征隊はてんでんばらばらになってしまったでしょう。我々に忠誠を尽くしてくれた原住民の部族をまとめ上げていたもの、それは私という人間の影響力だったのです。私は奴隷狩りを根絶するまでは決して彼らを見捨てないと約束していた。もしその私が死んだら、二日もしないうちに我が軍は蜘蛛の子を散らすように消えてなくなり、白人もまったく無力になってしまったでしょう。誰一人として生きてはいられなかった。そしてあの地域は、守ってくれるものもなく、再びあの呪うべきアラブ人の手に落ちていた。約束した平和の代わりに焼討ちと殺戮が再現され、国全体が不毛の荒野と化していたでしょう。だから何としても生き延び、仕事をやり遂げること、それが私の義務だったのです。」

ルーシーは居ずまいを直し、アレックをしっかりと見据えた。彼女の声は小さかったが断固としたものだった。

「臆病者！ 臆病者！」

「あのと私には判っていた、自分のしようとしていることであなたを失うことになるかもしれない。しかし、あなたには解っていただけないかもしれないかもしれませんが、あなたのためにやったことなのです。」

「鞭があればいいのに、……あなたの顔を思いきり打ってやりたい。」

アレックはしばらく何も言わなかった。ルーシーは憤りと侮蔑で身を震わせていた。

「やはり、あなたの愛を失うことになった。避けられないことだったのでしよう。」

「あなたを愛したことを恥ずかしく思います。」

「さようなら。」

アレックは振り向くと、ゆっくりとドアに向かって歩き出した。背筋を伸ばし、頭を上げ、前方を見据えて歩くその姿にはどんな感情も表われていなかった。アレックが出ていってしまうと、しかし、ルーシーはもはや自分を抑えておくことができなかった。椅子に坐り込み、手で顔を覆うと、胸が張り裂けんばかりに泣きはじめた。

翌日、アレックはランカシャーへ帰っていった。炭坑を再開するためになすべきことはまだまだ沢山あり、彼はそうした仕事に忙殺された。ルーシーはそうすんなりとはいかなかった。すべきことはこれと違ってなく、ただアレックと交わした会話をこころの中で反芻するだけだった。眠れない夜を何日も過ごし、体力は衰え、気持は惨めになっていった。ケルシー夫人にマッケンジーとの婚約は解消したと告げてあったが、その理由は言ってなかった。夫人もルーシーの、青白い、思い悩んだ顔を見て、あえて質問はしなかった。この善良な夫人は、しよげかえっている姪の姿を見ても、どう救いの手を差しのべたらよいか分からなかった。ルーシーは決して他人からの同情を求めるとはせず、むしろどんな問題でも一人で耐えることを好む子なのだ。社交の季節も終わりに近づいていたので、田舎への出発の日取りを一週間か二週間早めようかと夫人は提案してみた。しかしルーシーは現在の苦悩から逃げ出すようなことをする気は全くないようだった。

「どうして伯母さまが計画を変更しなくてはならないのか、分かりませんわ。」ルーシーの声は落ちていた。

ケルシー夫人はルーシーに思い遣りあふれる視線を送り、それ以上主張しようとはしなかった。夫人にはなぜかルーシーが自分とは異なった土塊で出来ているように感じられるのだった。とても優しく、落ち着いていて、気持のよい性質の子ではあるが、すっかり打ち解けるといふことはない。ルーシーが悲しみに素直に身を任せてくれたら、どんなにありがたいことか。この子が飛び込んで来てくれさえすれば、いつでも両手を広げて待っているのに……。

ルーシーは、すっかり落ち込んでいた。しかし、彼女の性格の一部となっている強い自制心をもって、世間に見苦しく見えないよう振舞おうと精一杯努めていた。人から憐れみを掛けられるのを怖れて、いつもと同じ明るい態度をとるよう心掛けていた。が、その緊張は耐えがたいものだった。これまでルーシーは幸せのすべてをアレックに賭けてきた。そのアレックが自分を裏切ったのだ。ルーシーは意識して、最近あまり思い出さないうつや父のことを考えるようにし、二人を失ったのがついこのあいだのことであるかのように二人の死を悼んだ。いまはなるべくアレックのことを考えないようにすること、それしかなかった。だから、彼のことが頭に浮かぶと、怒りにも似た決意をもってそれを追い払うのだった。

やがて別の考えがルーシーの心に浮かんだ。ボビーとの関係を修復する責任が自分にはあると感じたのだ。ボビーは最初の投書が新聞に載るや、すぐに真実を見抜き、それを指摘したために——勿論そうするのが従兄としての義務なのだが——わたしからひどい言葉を受けることになった。ボビーの態度はきわめて親切、寛容なものだった。それに答えた自分の言葉は、何と残酷、忌まわしいものだったことか。多分ボビーは自分がアレック・マッケンジーとの婚約を解消したことをもう知っているだろう。その理由も薄々感じているにちがいない。しかしあの舞踏会の夜以来ボビーはこの家に近づ

こうとしない。ルーシーは、アレックが自分に語ったことは自分一人に向けて語られたもので、他の人々に無闇矢鱈にいうべきことではないと考えていた。だから、知り合いの誰かがこの件について話を始めようとすると、即座にそれとはっきり判る態度で、このことについて話すつもりはないことを示した。しかしボビー・ボールガーは例外だ。これまでの経緯からして、ボビーにだけは少ないながらも自分の知っている事実を告げておく必要があるだろう。そう考えながら、ルーシーは突然自己犠牲の欲求に捉えられた。彼の長い間の献身的な愛に報いるのも、もしかしたら自分の義務かもしれない。少なくとも彼の良い妻になることはできるだろう。自分がボビーに対してどんな気持ちでいるのか、それを正直に説明することはできる、嘘はいけない。いま自分の人生には何の価値もない。だから、もし自分と結婚することがボビーにとってそれほど意味があると言うのなら、結婚に同意するのが正しい選択なのかもしれない。それに彼の求婚を受け入れることには別の意味もある。このことで自分とアレックとの間に決定的な壁をつくることができるのだ。

ケルシー夫人は毎木曜日、知り合いを何人か昼食に招くことにしていた。ルーシーは夫人に、いつかボビーも一緒に招待してほしいと頼んだ。夫人は大いに喜んだ。というのは夫人はこの甥のことをとても愛していたし、ここしばらく会えないでいることに心を痛めていたからである。すでに夫人はルーシーの婚約が解消されたことを知らせる短い手紙を送ってあったのだが、甥からは何の返事もなかった。招待状はルーシーが自分で書いた。

ボビー、

今度の木曜二時にわたしたちとお食事をしてくださらない？ アリス伯母様がとても楽しみにしているの。ディックさん、ジュリア・クローリーさん、それに参事司祭スプラットさまもご招待するつもりです。もしお出でになれるようなら（きつと来てくださいますよね）、他の方々よりも早めに来てくださると嬉しいんですが。ちよつと二人だけでお話したいことがありますの。

かしこ

ルーシー

すぐに返事が来た。

ルーシー、

喜んで伺います。一時半ならそちらのご都合もよろしいかと思えます。

匆々

ロバート・ボールガー

「なぜ、ずっと、会いに来てくれなかったの？」約束の時間に現れたボビーの手を取りながら、ルーシーが言った。

「僕にはあまり会いたくないんじゃないかと思ってね。」

「ごめんなさい、この間は、わたし、あなたの気持も考えずに、ずいぶん酷いこと言ったと思う。」

「なあに、全然気にしてないさ。」ボビーが優しく言った。

「わたし、言っておくべきだと思ったの、あなたが言ったように、わたしがしたことを、——わたし、マッケンジーさんに単刀直入に訊いてみました。そうしたらマッケンジーさんは、ジョージの死についてはお自分に罪があるとお認めになりました。」

「気の毒に。」

「なぜ？」顔を上げてボビーを見たルーシーの眼には涙が浮かんでいた。

「だって、君は彼を心底愛していたんだろう？」

ルーシーは顔を赤らめた。しかし言わなければならぬことはまだ沢山あった。

「わたし、舞踏会の晩、あなたにとってもひどい態度をとってしまったわ。あなたがああ言ったのは正しかった、わたしが馬鹿だったのよ。あなたにあんなひどいことを言ってしまったって、後悔しているの。どうか赦して。」

「赦すも赦さないもないさ。」ボビーの声は温かなものだった。「君が言ったことなんてちつとも気にしてない。だって僕は君のことが大好きだからね。」

「その好意に報いるようなことを、わたし、何もしてこなかった。それがとても恥ずかしいの。」

ボビーがルーシーの手を取った。ルーシーはその手をほどうとうとはしなかった。

「ルーシー、気持を変えてくれない？」

「ボビー、わたし、あなたを愛していないのよ。愛せればどんなにいいことでしょう。でも、だめ、絶対できそうもないと思うの。」

「それでもいいから僕と結婚してくれない？」

「そんなにわたしのこと、大切に思ってくれているの？」痛々しい声だった。

「ひよっとしたら、そのうち僕を愛してくれるようになるかもしれない……。」

「そんなに謙遜しないで。わたし、ますます恥ずかしくなる。ボビー、もしあなたを幸せにできるなら、そうしたいと思うわ。わたしとの結婚をそんなにも望んでくれているなんて、とてもありがたいと思います。でも、あなたに対して正直でいたい。わたしには分かっているの、単にあなたの幸せのためにわたしが喜んで結婚すると言ったら、それは自分を欺くことになる。わたしがあなたと結婚したいのは、怖いからの、アレックへの執着を断ち切りたいからの、……でも今のこの決意が崩れていくかもしれない、それをくい止めたいからの。ねえ、わたしって、ひどい、計算ずくの女ですよ。ボビー、これがわたしがあなさに差し出すことのできるすべてなの。」

「僕と結婚する理由が何かなんて、そんなこと、どうだっていい。どうしても君が欲しいんだ。」

「ああ、そんなふうにわたしを取らないで。でも、これだけは言わせて。もしあなたが本当にわたしを結婚に値する女だと思ってくれているなら、わたし、喜んで良い妻になるように努めます。たとえ燃えるような愛を捧げることができなくても、好意と感謝の気持は充分に持っています。それにあなたには幸せになってもらいたいと思っています。」

ボビーはその場にひざまづくと、ルーシーの手に熱烈にキスをした。

「嬉しい、彼はつぶやいた。」とっつても嬉しい。」

ルーシーも膝を折ると、ボビーの髪にキスをした。大粒の涙が二つ、頬を伝って落ちた。

五分後、ケルシー夫人が入ってきた。明らかに甥と姪が仲の良い関係に戻ったことを見て夫人は喜んだ。しかし夫人には二人の間にどんなことが起こったのかを知るだけの時間はなかった。というのは、すぐに参事司祭スプラットが到着したからである。ケルシー夫人は空席となっていた主教の職にスプラット司祭が任命されたことを知っていて、彼がロンドンを去ることを悲しんでいた。彼は夫人にはうってつけの精神的助言者だったからだ。ハンサムで、垢抜けていて、夫人が老齢であるにもかかわらず親切このうえなく、加えて家柄も良かった。まさに主教になるべき人だった。つぎにクロリー夫人が現れた。ディックが来るまで彼らは少しばかり待たされたが、やがてディックの来訪も告げられた。彼は陽気にゆったりとした足取りで部屋に入ってきた。皆をたっぷり十五分は待たせたことなどまったく意識していないようだった。全員が揃った。

スプラット司祭がその場において集いが退屈になることなどありえず、会話は愉しく進んでいった。夏用のワンピースを着たクロリー夫人はうっとりするほど魅力的で、その彼女がひたすら司祭に話しかけるのだから司祭のご機嫌きわめてうるわしいのも当然といえば当然だった。クロリー夫人は司祭の軽薄な冗談にいちいち楽しそうに笑い、きらきら輝く眸を挑発するように司祭に向けた。司祭は、世界でもっとも素敵な人間はアメリカの女性だと考えていることを隠そうともせず、夫人の方も、教会の高い地位を占める人には魅力的な人が多いという見解をおおっぴらに述べた。二人は大袈裟なお世辞を交わしあっていた。けれども、この善良な男には、夫人が優雅にその魅力を振りまいているのは、実は、彼女のもう一方の側でイライラしながら昼食を取っている中年男を怒らせるのが目的に

すぎないということは分かっていたいなかった。食事の後でもクロリー夫人はディック・ローマスに話しかけないままで済ませた。しかし、彼女がケルシー夫人に別れの挨拶をすると、ディックも立ち上がり、

「お宅までお送りしましょうか。」と申し出た。

「わたし、家には帰りませんの。でももしヴィクトリア通りまで送ってくださるなら、ぜひ。そこで四時に約束がございますの。」

二人は玄関を出ると、馬車に乗り込んだ。ディックはハマーミスへ行くよう平然と馭者に命じ、満足そうな笑みを浮かべて夫人の横に腰掛けた。

「ハマーミスって、一体何をなさるおつもり？」

「あなたにちよっとお話をさせていただけこうと思ひましてね。」

「まあ、素敵なこと。でも、わたしの約束はどうなってしまうのです？」

「私にはどうでもいいこととして。」

「じゃあ、わたしの気持にも構わないでいていただけませんか？」夫人は皮肉っぽく応えた。

「関心なんて毛頭持っていないから、ご安心を。」ディックは軽く笑った。

クロリー夫人は自分が見事にディックの罠にかかったことが内心可笑しくてしようがなかった。それとも彼の方がわたしの罠にかかったのかしら。夫人にはよく分からなかった。

「こんなふうには誘拐なさって、お話があるんなら、早くなさったほうが良くはなかつて？ 楽しいだけじゃなくて、ためになるお話をしてくださるとうれしいわ。」

「まず指摘させていただきたいのは、昼食の席で隣に坐った男を此見よがしに無視するのは礼に敵ったことではないということです。」

「わたし、そんなことしました？　だとしたら、ごめんなさい。でもあなたはとてもお腹が空いていて、大海老のマヨネーズ焼きに夢中になっていらっしやるんだなって、そう思ったの。」

「私は、どちらかというところ、自分はあなたが嫌いなんじゃないかと思ひ始めてます。」ディックはつぶやくように言った。何か思案しているふうだった。

「ああ、だから永いこと会いに来てくださらなかったのね。」

「何をおっしゃる。先週三回もお宅を訪問したことをお忘れですか？」

「わたし、最近外出することが多くって……。」夫人は手を軽く振りながら答えた。

「ナンセンス！　一度はピアノの練習をしているのが聞こえましたし、一度は窓のカーテン越しに私のほうを覗いているのがはっきり見えましたよ。」

「じゃ、なぜそのとき怒った顔をなさらなかったの？」

「覗いていたことを否定しないんですか？」

「だって、覗いていたんですもの。」

ディックは笑いを堪えられなかった。自分はジュリア・クローリーの肩を掴んで揺さぶってやりたいか、それとも抱きしめてキスしたいのか、よく分からなかった。

「で、お尋ねしてもよろしいですか、——一体全体なぜ私にはそんなひどい扱いをなさるんです？」ディックは穏やかに訊いた。

夫人は長い付睫毛の下から横目でディックを見た。この人は女性が文明の生み出した様々な武器を巧みに使うのを喜ぶ人なのだ。それに、いま自分が被っている可愛らしい帽子、装飾りのついたモスリンのワンピースも気に入っているにちがいない。

「そうしなかったから。」夫人は微笑んだ。

ディックは肩をすくめると、やれやれ、あなたには敵わない、といった表情をした。

「結婚しないならこのまま意地悪を続ける、とおっしゃるのであれば、必然の前に跪くしかありませんまい。」

「何をおっしゃっているの？　わたしには何のことやらさっぱり分かりません。」夫人は眉をあげて応じた。「自分では分かっているらっしやるの？」

「私はただ、日取りを指定してください、ということを取って表現しただけです。子羊はいつでも生贄にされる心の準備は出来ています。」

「それって、もしかすると、結婚の申込み？」夫人は陽気に尋ねた。

「じゃなければ、その双子の片割れみたいなもんですよ。」ディックがやり返した。

「そう言っていたでうれしいわ。だってそう言っていたかなければ、道で会っても何も気づかないで、完全に無視して通り過ぎてしまったでしょうから。」

「まったく！　国会の首相答弁と同じで、あなたには質問に答えようという気がまるで見られない。」

「ねえ、そのお申込みのなかに、ほんの少しロマンの香りを注いでくださらない？　わたし、アメリカ

カ人でしょ、だから、こうしたところの問題に関しては、ちよっぴり感傷的な味付けが欲しいなっと思うの。」

「なるほど、それは素敵な考えですな。しかし思い出していたきたい、私はこうしたことに関する経験が皆無ときている。」

「まア、それは誰の目にも明らかね。」夫人はやり返した。「でも、いかが、跪いて申込むぐらいのことはなさつてもいいんじゃないやなくて？」

「小型の馬車のなかでするには危険な芸ですな。それに、そんなことしたら、擦れ違う馬車の馭者から大変な注目を集めてしまう。それはちよつと恥ずかしい。」

「でも何かそうしたことをしてくださらずに、あなたの熱いお心が伝わってきませんか。」

「跪いて結婚の申込みをするなんて、まったく時代遅れなこと。昨今の恋人たちは中年にさしかかつていて、そんなことすれば、関節はギシギシいうし、ズボンの膝が出てしまいます。」

「そうね、最後の理由は至極もつともね。ものの分かった女性なら、殿方にズボンの膝をぶかぶかにするようなことをお願いするわけにはいかないわよね。」

「ズボンの膝が見苦しく出てる、そんな男、どんな女性が好きになると思います？」ディックが大袈裟に叫んだ。

「でも、何はどうあれ、自分はあなたにはまったく値しない者ですが、とかなんとかぐらいはおつしやってくれてもよくはなくて？」

「かくも真実から離れたことは、たとえ荒馬に引かれたって、口にできません。」ディックは澄まし

て答えた。「桜の木を切ったのは僕ですと言って褒められたのは、お国の大統領だったはず、……」

「それに当然、もしわたしが同意しなければ自殺する、と脅すぐらいのことはしてくださるべきだわ。札に適ったことだと思えますけど、……。」

「まったく、女性ってのは！ 決まり切った手続きにうるさいんだから。」ディックはため息をついた。「およそ独創性がない。陳腐なものに変な情熱を持っていて、感情が盛り上がると——本能なんでしょうな——間違いなくメロドラマめいた豪華絢爛、キンキラキンなものに飛びつきたがる。」

「わたし、できたらあなたには難しく長たらしい単語を使っていたきたいわ。そうしていただくと、なんだかずっと大人になったような気になれますもの。」

「ところでジュリア、いま何歳なんです？」ディックが突然質問した。

「二十九よ。」夫人はすぐさま答えた。

「ご冗談を。まさか、そんな話を誰が……、」

「そうかしら。」夫人は厳かに抗議した。「女中頭の歳はいつでも二十九よ。でも、なぜあなた、そういう頻繁に話を横道に逸らすの？」

「逸れましたっけ？ 申し訳なし。ところでどんな話をしていたんですしたっけ？」

ジュリアはくすくす笑った。馬車がどこに向かっているのか分からなかったが、まったく気にしていなかった。今のこの成行きが何とも言えず楽しかった。

「人間的魅力を大いに持った妙齢の女性にいかにもプロポーズすべきか、わたくしの豊富な経験からあなたに教授してさしあげていたところですよ。」

「あなたの忠告にあまり価値があるとは思えませんな。だってあなたは申込みはみんな断ってきたんだから。」

「そんなことありません、」夫人は即座に答えた。「全部受け入れることにしていましたわ。」

「そりゃ、また、勇気づけられるお言葉で。」

「もちろんお望みならあなたのやり方でなさってよろしいのよ。でもちゃんとした形の申込みでなくちゃいけないわ。」

「どうも私の知性には限界があるようで、ほんの四語もあれば事足りるように思えるんです。」デイックはゆっくり指を立てながらその四語を数えた。「私と——結婚——して——くれませんか？」

「単純にして明快ですこと。」夫人は、デイックの使われないで置かれたままの親指を立てると、「わたしは一語でお答えします。いいえ。」

デイックは吃驚した顔つきで夫人を見つめた。

「すみません、もう一度言っていただけですか。」

「あなたのお聞きになったとおり、」夫人は微笑んだ。「答は否定文。」

夫人はこの馬車のなかでインディアンの踊りを踊りたいという、気狂いじみた、誠に都合の悪い誘惑に耐えていた。

「ご冗談でしょう？」デイックが穏やかに言った。「冗談ですよね。」

「わたし、あなたの妹になってあげます。」

デイックはしばらく何か考えていたが、やがて顎を撫でながら、

「よろしいですか、チャンスは二度とめぐってきませんよ。」と言った。

「その言葉に含まれた脅しには、耐えることにいたしますわ、泰然と。」

デイックはクルツと軀を夫人のほうに向けて手を取り、それを唇のところへ持ってゆくと、

「心から感謝します。」と熱をこめて言った。

夫人には何のことか解らなかった。

「この人、変なの。」彼女は通りかかった歩道の縁に立っている巡査に向かってつぶやいた。「ほんとに気が狂っているの。」

「私が心底大切だと思っていること、確信していることの一つは、本当に好い女性というのは愛する男と結婚するなんて、そんな残酷なことは決してしないということなんです。あなたは、私のあなたに対する評価が間違っていないかったことを証明してくれた。このことは決して忘れないと約束しましょう。」

クローリー夫人は笑いを堪えることができなかった。

「あなたみたいな軽薄な人は誰とも結婚できないと思うわ。おまけにあなたみたいな嫌味な人はいない。」

「クローリーさん、わたしはあなたのお兄さんになってあげます。」

デイックは屋根を開け、馭者にヴィクトリア通りへ馬車を返すようにと命じた。が、ハイド・パークの角まで来ると、散歩がしたいから下ろしてくれるよう夫人に頼んだ。彼が馬車を降り、ドアを後ろ手に閉めたとき、ジュリアは身を乗り出して、

「お出かけになる前に紹介の手紙が欲しいんじゃないやありません？」と声をかけた。

「何で、また？」

「だって、あなたの魂が人間的な感情にまだ完全には無感覚になっていないとしたら、きっとこの悲しみを慰めるためにロッキーマン脈で大熊狩りでもなさりたいんじゃないかしら、ニューヨークにいるわたしの友達に二、三通ご紹介の手紙を書いてさしあげればお役に立つんじゃないかしらって、そう思ったの。」

「それはまた思い遣り深いことで。しかし今はまだグリズリー狩りにふさわしい季節ではないでしょう。パリで一週間ほど過ごそうかと考えていたところですよ。」

「じゃ、お願い、黒のスエードの手袋を一ダース送ってくださいませんか？」夫人が冷やかにやり返した。

「サイズは六。」

「それが最後のお言葉ですか？」ディックが陽気に訊いた。

「そうよ、なぜ？」

「いや、なに、サイズは六・五と訂正するんじゃないかなと思ひましてね。」

彼は帽子を脱ぎ捨て挨拶すると、そのまま歩み去った。

数日後、ケルシー夫人とルーシーはテムズ川に面した小別荘に移り、ジュリア・クロリーもコート・リーズ荘に移った。到着した翌日、朝食に下りてゆくと、スウェードの長手袋六組がジュリアを待っていた。彼女はサイズのサイズと品質を確かめ、嬉しそうに微笑んだが、同時に少しばかり苛立ちも覚えた。本当はディックが結婚を申込んだとき、それを受け入れるつもりは充分あったのだ。自分なぜ断ったのか全く解らなかった。会話の流れに乗っていったら、意に反してあんなってしまったのだ。わたしはいわゆる当意即妙、丁々発止の会話が大好きで、それができる機会があると、結果を考えずに、つついやりすぎてしまう。わたしの言葉をまともに受け取ったディックがいけないのだ。そう思うとディックに対してちよつと腹が立ってきた。パリへ行ったのは勿論当てつけにすぎず、一週間もすれば必ず戻ってくる。わたしが彼のことが大好きなように、彼もわたしが大好きなのだ。だから、あんなふうに気取るのは馬鹿げている。

毎日ジュリアは今か今かと郵便を待った。ディックから、昼食に伺いたいという手紙が来るのを期待していたのだ。ディックに食べてもらう素敵な昼食のメニューももう決めてあった。そして彼の情熱的な求婚について屈することになる場面を、繰り返し頭のなかで予行演習した。こちら大いに乗

り気だといったふうに求婚を受け入れるのは賢明ではないだろう。しかしディックからはなんの便りもなかった。一週間が過ぎた。ディックにはユーモアのセンスがないのだとジュリアは考え始めた。二週目が過ぎ、三週目も過ぎた。多分他に何もすることがないから、いつもの自分らしくもなく、こんなにディックのことばかり考えて、……困ったことだ、まったくどうかしている。彼女はディックが姿を現わさない理由をあれこれと思いめぐみ、何度かは甘やかされた子供のよう泣いた。しかし夫人は分別のある人で、もし自分がディックなしに生きられないなら——どうして彼をそんなにも求めるのかは解らなかったが——自分のほうからディックに来てもらうようにするしかあるまいと覚悟を決めた。八月も終わりを迎え、退屈で淋しかった。彼女はディックに正直とは言い難い文面で電報を打った。

キンヨウ、ベンゴシニアイニ、ロンドンヘユクヨウアリ。五ジ、オチャニウカガイタシ。ジュリア

彼からの返事がやっと届いたのは、二十四時間後だった。それも、発信地はドイツのホンブルクになっていた。

ザンネンナガラ、イマ、エンポウニテ、ザイタクセズ。リチャード・ローマス

ジュリアはその小さな足で地団駄を踏んだ。そして、腹を立てている自分が可笑しくて笑った。わたくしが、想像もできないくらい退屈な生活を送っているというのに、彼といたら、賑やかな温泉で陽気にやっている。あんまりじゃない。彼女は再び電報を打った。

アリガトウ。キンヨウ、オアイデキルモノト、キタイ。ジュリア

約束の日、彼女はロンドンに出向き、ノーフォーク通りにある自分の家に行くと、鏡に向かい、旅の疲れが顔に現われていないことを確かめた。メイフェアに人気はまばらで、半分近くの家の窓に埃を防ぐための新聞紙が張り付けられていた。暑い日で、雲一つない空から太陽が照りつけ、石畳は白く輝いている。ジュリアはロンドンで自分一人が涼しげな様子をしていることに満足を感じていた。窓の下に行く人々の気怠そうな表情がいつそその満足感を増した。海辺で一月を過ごしたことで新鮮味に加わった完璧な容貌、そよ風になびく魅力的な服は、きつと、外国から帰ったばかりの四十の紳士を喜ばせるにちがいない。鏡に映る自分の姿を眺めながら、わたしほど均整の取れた躰をした女は見たことがない、と夫人はつぶやいた。

馬車でディックの家に行った。窓の花受けには真新しい花が飾られ、居間に通されたとき最初にジュリアを迎えたのは、いたるところに生けられた赤いバラの香りだった。ブラインドが下ろされていて、焼けつくような通りから入ってきた躰には、薄暗いこの部屋の涼しさはとて心地好かった。小さなテーブルの上に、いつ注がれてもいようにお茶の支度がしてある。ディックは勿論彼女を迎え

るべくそこにいた。ジュリアは気持が高ぶり、ディックと握手しながら、くすくす笑い出したくなるのを必死で堪えていた。

「やっと戻っていらっしやった。」

「いや、ちよっと立ち寄っただけですよ。」ディックは気取ったふうに手を振った。

「どちらからどちらへ行く途中？」

「ホンブルクからイタリアの湖水地方へ行く途中でして。」

「随分と遠回りじゃなくって？」ジュリアは微笑んだ。

「ちつとも。私はマンチェスターからリヴァプールへ行くときには、はるばるロンドンに立ち寄るんですよ。まあ、それが趣味の一つでしてね。」

ジュリアは明るく笑った。そして二人は素晴らしいお茶を飲みながら、たわいもないことを喋りあつた。二人とも滑稽なほどの再会を喜んでいて、なんであれ相手が話すことには進んで面白がつてあげようと決めていた。しかし、この時の二人の会話を聞いている人がいたとしたら、何がなんだかさっぱり解らなかつたことだろう。というのも、ほとんどいつも二人は同時に話していたし、時には相手に対し、もつと自分の話を聞くようにと喧嘩腰になる始末だつたからである。

突然クローリー夫人がやれやれといったふうにと両手をあげると、

「ああ、わたし、なんて莫迦なのかしら。」と叫んだ。「すっかり忘れてた、——先日あなたに電報を打ったわけをお話ししなくちゃ。」

「結構です、判つてますから。」ディックがやり返した。

「そう？ なぜ？」

「なぜって、あなたほど恥ずかしげもなく男といちゃつきたがる人にはお目にかかつたことがないからですよ。」彼は即座に答えた。

ジュリアは役者よろしく目をパッチリ開けて、いかにも驚きましたといった表情をつくつた。

「ローマさま、あなた、ご自分の姿を鏡でご覧になつたことないんじゃないやなくて？」

「あなたは、私に与えた大変な痛手については、少しも気がとがめていないようすな。」ディックが大袈裟に、叫ぶように言った。

ジュリアは何も答えないで微笑んだ。その微笑みがあまりにも魅力的だったので、ディックは苛々したように、前にもまして大きな声を出した。

「ああ、あなたがそんなふうに見えなきやいいのに。」

「わたし、どんなふうに見えて？」ジュリアは微笑んだ。

「私のように純情可憐な者の眼には、早くキスして、と言っているように見えますね。」

「この、人でなし！」ジュリアが叫んだ。「もう絶対口をきいてあげないから。」
「そんなに急いで宣言なさらぬほうがよくありませんか？ あなたは二分だつて口を閉じていられないんだから。」

「まあ、侮辱！ あなたこそ。あなたといると、わたし、口を挟みたくても挟むことができない。」ジュリアがやり返した。「まったく、あなたってお喋り箱なんだから。」

「どうしてそんなふうに、いかにも不当な扱いを受けたふりをなさるんです？ 怒り心頭に発してし

かるべきは私のほうだということをお忘れのようですが……。」

「逆だわ。一月前のあなたの態度、あれは優しさにあふれたものとはとても言えなかったわ。それでも今日わたしがここに来たのは、キリスト教徒としての博愛の気持があればこそよ。」

「この四週間、私が粉々に砕け散った我が心を丹念に拾い集め、縫い合わせていたことを、お忘れですか。」

「それは、ゼーンぶあなたが悪いからよ。」ジュリアは笑った。「どうせ申し出を受け入れるだろうって、あなたがあんなに自信たっぷりじゃなかったら、絶対断らなかったわ。わたし、『ノー』と言ってみたくらい誘惑に耐えられなかったの。あなたがどうお取りになるか、見てみたかっただけなの。」

「はばかりながら、しつかり受け取りましたよ。」

「ちがうわ。あなたにはユーモアのセンスがまったくないってことを示しただけ。まともな女性なら一回目の申込みで『イエス』と言うことはありえない、そんなことぐらいお解りになってもいいんじゃないかって？ それを、まるで何も気にしてませんっていうふうにはホンブルクに行ってしまうなんて、おめでたい方。もう一度申込みをなさるまでに一月も待たなくちゃならないなんて、どうしてわたしに分かって？」

ディックは冷静な顔つきでしばらくジュリアを見ていた。

「もう一度申込みつもりは、これっぽっちもありませんね。」

しかしジュリアを周章あわてさせるにはこの程度の言葉では不十分だった。

「じゃ、一体なぜわたしをお茶に招待なさったの？」

「謹んで申しあげますが、あなたがご自分でご自分を招待なさったのです。」ディックは抗議した。

「男の方って、そういう考え方をなさるのよね。すぐに、どうでもいい、些細なことを問題にしたがる。」

「まあ、そうふくれないで。」ディックは笑った。

「ふくれたいときには、ふくれるわ。」ジュリアが足を踏み鳴らしながら叫んだ。「あなただったら、本当に思い遣りがないんだから。」

ディックは何か考えている様子でしばらくジュリアを見ていたが、やがて目をキラキラと輝かすと、

「ねえ、もし私があなただったらどうするか、お分かりになりますか。」と訊いた。

「いいえ。どうするの？」

「いいですか、私のほうとしては、また拒絶されるという屈辱には耐えられない。そこで、どうですか、あなたのほうからプロポーズしていただけませんか。」

「まあ、図々しい！」

二人の視線が合い、ジュリアは微笑んだ。

「仮にわたしがプロポーズしたら、あなた、なんとおっしゃって？」

「やり方次第ですね。」

「でも、わたし、プロポーズの仕方なんて知らないわ。」いかにも哀れを誘うようにジュリアがつぶやいた。

「どうして、どうして、よくご存じですよ。先日は私に素晴らしい講義をしてくださいました。まず跪いて、それから、あなたには値しないような人間ですが、と言う。」

「あなたみたいに意地の悪い人はいないわ。」ジュリアは笑った。「あなたみたいな人が奥さんを殴ったりするのよね。」

「毎週土曜の夜には間違はなく。」ディックが請け合った。

ジュリアはディックを見つめたまま、しばし躊躇っていた。

「それで？」ディックが尋ねた。

「できないわ。」

「じゃ、私はあなたのお兄さんのままでいましょう。」

ジュリアは立ち上がり、片膝を折ると、

「ローマスさま、わたくしは未亡人で、年齢は二十九、結婚の相手として誠に望ましい者でございます。わたくしのメイドは舌のどろけそうな料理を作ってくれますし、行きつけの洋服屋は素敵な服を作ってくれます。それにわたくしは、あなたが冗談をおっしゃったとき笑えるだけの知性を持ち合わせておりますが、その冗談が何を下敷きとしているのか判るほどの学識はございません。……」

「こりゃ、また、随分と回りくどい。私はたったの四語で言ったのに。」

「確かにあなたの申込みは簡潔でした、簡潔すぎました。だって、断られたんでしょ。」ジュリアは微笑み、両手を差し出した。ディックがその手を取った。

「わたし、お手紙で申込みさせていただきました。なんだかそのほうがふさわしいような気がしますか

ら。」

「今この場で済ませてしまふべきだと思いますがね。」

「本当はわたし、あなたと結婚したいなんて気持、少しもありませんのよ。ただ、あなたがお喜びになるかと思って……。」

「その無私の精神には敬服いたしますな。」

「それで、あなた、もしわたしが申込んだら、承諾なさって？」

「それはここでは明かさないでおきましょう。」

「まったく頑固なんだから！」

ジュリアはできるだけ膝を折ろうとした。というのも、ディックが彼女の手をしっかりと握っていたので深く跪くことができなかったのだ。

「ローマスさま、謹んで、わたくしとの結婚をご承諾いただきたく、お願い申しあげます。」

ディックは仰々しくお辞儀をすると、

「奥さま、衷心からの喜びを持って、その申し出、お受けいたします。」

それからディックはジュリアを自分のほうに引き寄せると、彼女の身に腕を廻した。

「たかが結婚ぐらいの些細なことでもこんなに大騒ぎする人、見たことないわ。」ジュリアがつぶやいた。

「君みたいに柔らかな唇にキスしたことないね。」

「もっと真面目になつてくださらない？」ジュリアは笑った。「言っておかなくちゃならない大切な

ことがあるの。」

「君の過去の生活について聞かされるんじゃないね。」

「そうじゃないわ。婚約指輪のことを考えていたの。わたし、婚約指輪にはカボションエメラルドが欲しいの。集めているのよ。」

「言うよりも為すが早し。」

そう叫ぶと、ディックはポケットから指輪を取りだし、ジュリアの指にそれを嵌めた。ジュリアは指輪を眺め、つぎにディックの顔を眺めた。

「君がエメラルドの専門家だつてことは知ってたんだ。」

「じゃ、ずっとプロポーズするつもりでいたのね？」

「恥ずかしながら、そういうこと。」

「ああ、前もって判つてたら……、」

「どうしたつていうんだい？」

「もう一度断つたに決まつてるでしょ、この、お莫迦さん。」

ディック・ローマスとクローリー夫人は婚約については誰にも何も言わなかった。中年の紳士と年齢不詳の未亡人との結婚は誰にも関わりのないことに思えたからである。結婚式はロンドンから社交界の人々が去つた九月の或る暖かな日、寂れた教会でとどこおりなく行われた。クローリー夫人を新郎に引渡す役を務めたのは彼女の顧問弁護士、証人として証書にサインしたのはその教会の堂守だつ

た。この幸せな二人はコート・リーズ荘へ二週間のハネムーンに出かけ、十月の初めにはロンドンに戻つてきた。そして秋が深まつたらアメリカへ行こうと決めていた。

「ニューヨークの友達にあなたを見せびらかしたいの。」ジュリアが楽しそうに言った。

「みんな、僕のことを好きになつてくれるかな？」

「無理ね。みんな、きつと言うわ。可愛い、お馬鹿のジュリア・クローリーが、また、いまましいイギリス人と結婚したつてね。」

「礼になつた言葉とは言えないけど、そのいまましいイギリス人つてのは、韻を踏んでいてなかなか結構。」ディックもやり返した。「僕の友達、親類は、もうすでに言つてるよ。かわいそうに、一体全体またなぜディック・ローマスはアメリカ人なんかと結婚したのかね？ 金には困つていないと思つていたのにな。」

二人は大笑いした。世界の何もかもが素晴らしい冗談に思える、そんな幸せな気分二人は毎日を送っていた。お互いを笑い合い、世の中全般を笑つていた。生きることが愉快だった。だから、他の人たちがなぜ自分たちのように人生を気楽に考えないのか、理解できなかった。

二人は新しい家と家具が揃うまでカールトン・ホテルに部屋を借りていた。それぞれロンドンに家を持つていたのだが、相手の家に住むのは二人とも気が進まなかつたから、第三の家を探すことが必要だったのである。ジュリアは、独身男性の臭いがする家に住むのは結婚した女にとってはできかねること、と力説した。ディックはディックで、ノーフォーク通りにあるジュリアの家に移り住むのは何か妻の財産目当てに結婚したという気持ちにさせられて嫌だ、と拒絶した。それに新しい家を手に入

れることは二人に浪費の喜びを与えてくれた。たくさん金を持っていることの唯一の利点はそれを不必要なものに使えることである、二人にはそのことがよく分かっていた。二人は無邪気な子供のようで、自分たちが二十五歳を越えているとは絶対に考えようとしなかった。

ケルシー夫人とルーシーはテムズ川沿いの小別荘コテージからベルギーのスパ温泉へ夫人の療養のために出かけていたが、ジュリアは二人が温泉から戻るとすぐに、結婚の挨拶と自分たちの現在の幸せな生活を報告するために出かけて行った。コテージから戻ったジュリアは物思いに沈んでいた。ホテルの部屋で昼食のテーブルについたとき、ディックは妻が何か心配そうな様子をしていることに気づき、どうしたのかと尋ねた。

「ルーシーはロバート・ポールガーとの婚約を解消したんですって。」

「あの娘は婚約を破棄する専門家のようなだ。」ディックは素っ気なかった。

「いまでもマッケンジーさんを愛しているようなの。」

「じゃ、一体なぜボビーのプロポーズを受け入れたんだね？」

「ねえ、あなた、ルーシーがポールガーの申込みを受け入れたのは腹立ち紛れっていうものよ。だからその怒りがおさまったときには、あの娘、とても賢い娘だから、当然考え直したのよ。」

「どうも君たち女性の理屈には承伏しかねるな。」ディックが皮肉っぽく言った。

ジュリアは可愛らしい肩をすくめると、

「あら、わたしの知っている女性の半分は、誰か他の男に当てつけたくて今の旦那様と結婚したのよ。」と言り返した。「これは、間違いなく、結婚生活に至るもつともありふれた理由の一つだわ。」

「やれやれ、神よ、我を結婚生活から救いたまえ。」ディックが叫んだ。

「だめ。救ってあげない。」ジュリアは笑った。

しかしすぐまた真顔になると、

「あの二人がスパ温泉にいる間、マッケンジーさんはブリュッセルにいたんですって。」

「今朝あいつから手紙が届いたよ。」

「新聞によると、あの人、またアフリカに出かけることになるって、そうケルシー夫人がおっしゃってたわ。きっとそれでルーシーが動転しているんだと思うの。ブリュッセルはマッケンジーさんのことで大騒ぎだったそうよ。」

「うん、すべて準備は整って、すぐにも出発するつもりだと書いてあった。今度はコンゴ自由州で仕事をしよう。新しい水路を見つけないと言っている。ベルギー国王は彼に自由裁量権を与えたらいい。」

「ベルギーの王様は、人がアフリカでどんな酷い生活を送ることになるかなんて、まるで気にしていないのね。」

二人はそれぞれの思いに浸りながらしばらく黙っていた。

「あなた、ルーシーがマッケンジーさんとの婚約を解消した後、あの人に会ったでしょ？」やがてジュリアが言った。「あの人、落ち込んでいた？」

「あいつは一言も言わなかった。僕はアレックを慰めたいと思ったんだが、その機会をくれなかった。ルーシーの名前すら出さなかった。」

「悲しそうだった？」

「いや、いつもどおりだったよ。冷静で落ち着いていた。」

「本当？ まったく、あの人ったら人間の感情がないのかしら。」ジュリアはじりじりして叫んだ。

「アレックはこの子供っぽい時代においては異例の人間なんだ。」ディックも同意した。「服はサヴェイローで仕立てるが、その中身は古代ローマ人ってとこかな。」

「じゃあ、イギリスでは生きにくい存在、アフリカに戻ったほうが好いというわけね。」

「そう思うね。ここでは、なんだか、カナリアでいっぱい鳥小屋の間違って一緒に閉じ込められた鷲みたいだ。」

ジュリアはなにか物思いに耽るように夫を見つめていた。

「あの人と最後まで友人として付き合ってきたのは、あなただけよね。」

「僕ならそうは言わないね。要はあいつの友人と呼べるのは昔も今も僕一人なんだ。知り合いなら沢山いた。しかし、人が窮地に陥ったとき平気で見捨てるのが知り合いというものさ。」

「どんなことがあっても信じてくれる、そういう友達がいたことは、あの人にとって、とっても大きな意味を持っていたと思う。」

「こういったら不道徳に聞こえるかもしれないけれど、仮にアレックがどんな罪を犯したとしても、それで僕があいつを嫌いになるなんてことは絶対ないね。これまで僕にどんなに優しく親切にしてくれたことか……。もしあいつがモーゼ率いる十戒軍を敵にまわしてサッカーをやるとしたら、僕は躊躇なくアレックのチームを応援するね。」

ジュリアの感情が突然変化するのはいつものことだったが、今彼女はディックに話しかけながら目に涙をためていた。

「ディック、あなたって本当に天使みたいに善い人ね。いま改めてそう思ったわ。」

「そんなこと言わないでほしいな。」彼は素早く答えた。「なんだかいかにも中年だって気がしてくる。年寄りの天使でいるよりは若い罪人でいたいよ。」

微笑みながらジュリアが手を差し出し、ディックはその手を取った。

「ねえ、あなた、わたしあなたのことが好きにならずにいられないけれど、あなたの生き方は間違っていると思うわ。」

「おや、こりやまたなぜ？」

「だって、わたし、男の人は働くものだって教えられて育ったでしょ。なのに、あなたったら恥ずかしげもなく何もしないでいるんですもの。」

「おやおや。アメリカ人の女性と結婚するのは全くもって骨の折れる仕事なんだよ。宇宙の創造主のエネルギーと、その創造主の宮殿に仕える者の忍耐強さを兼ね備えていなくちゃならないんだから。」

「莫迦な人。」ジュリアは笑った。

しかし彼女の思はずぐにルーシーのもとへかえっていった。ルーシーの青白い、ふさぎ込んだ顔が記憶から離れず、その美しい眼に宿っていた絶望的な悲しみがジュリアのこころを苛んでいた。

「アレック・マッケンジーさんについてのあの話、本当だったことに疑いはないよね？」ジュリア

が考え込むように言った。

「デイツクは素早くジュリアを見た。妻は何を考えているのだろう。」

「僕の考えを言おうか。僕と同じようにアレックを知っている者なら誰だつて確信を持って言えることは、あいつが卑劣な、唾棄すべき動機で行動することはありえないということだ。アレックを臆病者だと非難するのは馬鹿げている——あいつほど勇敢な男を僕は知らないね。それに、アレックが性格の弱い人間だと非難するのも馬鹿げている。僕の考えはこうだ。つまり、アレックは何事も中途半端ですますような男ではない。あいつに躊躇いはない。『目的を強く欲する者は、また、手段を強く欲す』という格言をここから信じている。だから情けも容赦も捨てることは充分ありえるし、ときには残忍さと紙一重のところまで過酷にもなりえる。マキナリーがデイリー・メールに送った二通の投書の行間を読むに、アレックは誰かが犠牲にならなくてはならないと判ったとき、ジョージ・アトンを意図的に選んだのだと思う。そうじゃないかな？ なぜならアレックにとつてジョージは全く役に立たない人間で、いなくなつても少しも困らない人間だったからだ。あの程度の小さな遠征でも、『歩』として弾丸の餌食になつてもらわなければならぬ人間が何人かどうしても必要なのだ。ジョージが役に立たない存在だと判つたとしたら、たとえアレックの心のどこかにルーシーに対する配慮があつたとしても、ジョージをその『歩』として選んで少しも不思議はない。」

「もしそうなら、どうして率直にそう言わなかったのかしら？」

「言つたからつて、それで事態がよくなつたと思うかい？ イギリスの大衆つてのはセンチメンタルなんだ。戦争においてはときに無慈悲になることも必要なのだ、ということをなかなか理解してくれ

ない。それに、もしアレックがルーシーに、ジョージは単なる『歩』として使つた、もつと大事なことを成し遂げるために犠牲になつてもらつたと正直に告白したとして、それでルーシーとの間がうまくいったと思うかい？」

「ああ、何もかも本当に恐ろしい。」ジュリアは身震いした。

「それに一般大衆に関して言えば、アレックが沈黙を守つたことは賢明だつたと、だんだんはつきりしてきたらう？ あいつに対する嵐のような非難も、その後何も事実が出てこないから、結局収まつてしまつた。確かにあいつの信用は多少落ちたかもしれない。しかしそれも漠然としたものだ。アレックの非を決定的に証明したものは何もない。世論なんて畢竟気まぐれなものさ。すでに世間の連中は忘れ始めている。で、忘れるにつれて、自分たちの判断は間違つていたんじゃないかと考え始める。アレックがベルギー国王のために再び遠征を行なうことが発表されれば、九分九厘反動が起こつて、あいつの評価はまた上がり始めるだろう。」

二人は昼食のテーブルから立ち上がった。コーヒーが運ばれ、二人は煙草に火をつけた。どちらもしばらく何も言わなかった。

「アレックがアフリカに出発してしまふ前に、ルーシーが会いたがつているの。」突然ジュリアが言った。

デイツクは妻を見つめ、苛々したように肩をすくめた。

「まさに女らしく、最後の修羅場を堪能したいつてわけか。もう充分あいつを苦しめただろうに。」
「デイツク、そりゃ、あんまりにも酷い言い方よ。」ジュリアの輝く目に涙があふれてきた。「どん

なにあの娘が悲しい思いをしているか、あなたには分かっているよ。今日あの娘に会って、わたし、胸が張り裂けそうだった。」

「ねえ、ジュリア、……君がしてほしいと言うことなら何でもするよ。」デイクは妻の方に身を屈めながら言った。

ジュリアはどんなに哀切な感情に襲われているときでも滑稽なものを滑稽と感ずることのできる人だった。

「ルーシーが、やりきれない、惨めな気持でいるとき、どうして、あなた、わたしにキスなんかしていられるの？」ジュリアは涙のなかから微笑んだ。

そしてデイクの腕のなかに心地よく身をまかせながら、真面目な声で、

「あなた、なんとかしてくださいさる？ ルーシーはアレックに手紙を出したいんだけど、出せないでいるの。」

「よく分からないのだが、こういう嬉しい報せは君自身の口から伝えたほうがよくはないかな。実はアレックに今日の午後来るように頼んであるんだ。」

「もう、まったく、勝手な人なんだから。でも、もしそうなら、わたしをアレックと二人きりにしてくれない？ 多分涙が溢れて止められなくなると思うの。あなたに見られたくないの。だって、あなたったら、きつとわたしのこと馬鹿にして笑うでしょうから。」

「そりゃそりゃ。じゃ、思いつく限りのところにハンカチを置いておきなきゃ。」

「こんな場合のために、わたし、いつもバッグに一杯ハンカチを持ち歩いているのよ。」

午後、アレックが来た。気持の優しいジュリアは、ロンドンを離れていた三ヶ月の間にアレックが変わってしまったことに、こころを痛めた。最初見たときにはほとんど変化に気づかなかった。冷静で落ち着いていて、これまでも強く印象づけられたことだが、他人は自分の命令に従うものだという雰囲気を漂わせていたし、独特の力強さも相変わらず躰から滲み出していて、女という弱い肉体を持った存在には、それが或る種の安心感を与えてくれるのだった。しかしジュリアの鋭い観察眼は彼が意志の力によってかろうじて自分を持ちこたえていることを見逃さなかった。何とも痛ましかった。精神的緊張に苛まれていたことは、その落ちくぼんだ目、無理にキツと結んだ唇を見れば明らかで、すでにほとんど限界に達しているように思われた。今日の彼は以前にもまして厳しく、口数が少なかった。どんなに深く悩み苦しんできたかが見て取れ、その悩み苦しみは、なんとしても乗り越えてみせるといふ決意ゆえに、いっそう痛ましく思えるのだった。彼のもとに行つて、どうかそんなに自分に厳しくなさらないで、と言つてあげたかった。もう少し自分の弱さを認めることができれば、少しは楽になれるのに……。しかし同時に、彼は前より優しくなつてもいた。ジュリアは今日は彼に対してしばしば感じる畏怖の念のようなもの——そのせいで彼とは付き合いくつたのだが——あの畏

れのようなものは感じていなかった。アレックが最初にいった言葉は、予想もできないほど温かさにあふれていた。

「あなたに結婚おめでとうと言えるなんて、こんなに嬉しいことはありません。」彼はジュリアの手を取り、めったに見られない独特の優しい微笑みを浮かべて言った。「これまではディックと別れるときちょっと不安だったんですが、これからは安心してあなたの手に任せていける。ディックは私の知っている人間のなかで最も好い奴、最も素晴らしい男です。」

「よせよ、アレック。」ディックが間髪を入れず叫んだ。「そんな真面目くさった、父親みたいなこと言うなよ。ジュリアが泣き出しちゃうじゃないか。泣くのが大好きなんだから。」

しかしアレックはディックを無視して続けた。

「ディックは最高の旦那さんになると信じています。なぜって友人として最高でしたからね。」

ジュリアはこのとき初めてアレックを本当に聡明で魅力的な人だと思った。

「ええ、わたしもそう信じています。」彼女は幸せな気持で答えた。「でも、わたしの考えていることを何もかも言ってしまうと、この人、自惚れて、手に負えなくなるんじゃないかと思って、言わないでいますのよ。」

「おいおい、純真無垢な人間の顔が赤くなるようなことを言わないでくれ。それより、ジュリア、お茶を淹れてくれたらどうだい。」

ジュリアは笑いながら、ディックの希望にこたえてお茶の準備に取りかかった。

「それで、マッケンジーさん、本当にすぐにもアフリカに出発なさるの？」準備の調ったテーブルに

つきながらジュリアが訊いた。

アレックは頭を後ろに反らした。表情が晴れやかになっている。

「ええ。すべて順調に進んでいます。今度は、これまでのように私みずから食糧を確保したり、荷役人夫を集めたりする必要はありません。私がやらなくてはならないのは、できるだけ速やかに出発すること、それだけです。」

「その悍ましい探険を止めてくれると誠に有難いんだがね。」ディックが声高に言った。「おかげで、残った僕らがかひどくのほほんと太平楽な生活を送っているように感じられちまう。」

「しかし僕はこれがないと息が詰まってしまうのさ。」アレックが答えた。「君には解らないだろうな、毎日危険と隣り合わせでいること、うきうきした気分、野生の動物しか歩いたことのないところを踏みしめて行くときの快感……」

「嫌だね、僕は絶対やりたくないね。」ディックが口を挟んだ。

アレックは急に椅子から離れると、両脚を真つ直ぐに伸ばして立った。話し始めたとき、今まで感じられた気怠さのようなものはすっかり消え、珍しく興奮していた。

「果てしない大地、躰にあふれる開放感、そうしたものを考えると、もう、居ても立ってもいられないんだ。ここでは人間が小さくなる。卑しくなる。アフリカでは全てがもっと崇高な基準で作られているんだ。あそこでは男は真に男らしくなれる。勇氣とは何かを理解することができる。意志とは何か、力とは……。ああ、君には解らないだろうな、恐ろしいジャングルを通り抜けた後、大平原の縁に立って、澄みきった、胸を刺すような空気を呼吸することがどんなことなのか。」

「ハイド・パークの果てしない広さだけで僕には充分だね。」ディックが言った。「それに六月ともなりや、晴れた日のピカデリーの街並みが、充分すぎるほどいろんなことを感じさせてくれるさ。」
ジュリアは、しかし、予想もしなかったアレックの流麗な台詞に感動し、一心に彼を見つめていた。「でも、お仕事が終わってしまったら何が手に入るといえるの？——いろいろな危険や、いろいろな苦勞の後で。」

アレックはその真剣な黒い眼差しをジュリアに向けた。

「何も。欲しいものは何もないのです。ひよつとしたら、羚羊アンテロープの新種を発見するかもしれない。あるいは新種の植物を。それとも、運が良ければ、新しい水路を見つけられるかもしれない。それだけです。それで充分なんです。力と技の限りを揮うことのできる場、それが私の望むすべてなのです。いろいろな国王や国民が与えてくれる金びかの賞賛など、私が気に掛けているとお思いですか？」

「いつも言ってきたが、君はまさにメロドラマの主人公だよ。」ディックが言った。「そんな安っぽい文句は聞いたことがないね。」

「それで、最後は？」ほとんどつぶやくようにジュリアが尋ねた。「最後はどうなるの？」

ほんの一瞬、アレックの口元にかすかな笑いが浮かんで消えた。彼は肩をすくめ、

「最後は死です。」と答えた。「しかし、私は立ったまま死ぬつもりです。今度の最後の旅にも、私は、これまでの旅と同じ覚悟で、……」

アレックは言葉を切った。彼はどうしても最後まで続けられなかった。ジュリアがアレックに代わってそれを言った。

「何も怖れることなくお出かけになる。」

「あのとんでもない悪わるの準男爵バロネットと同じで、」からかうのが好きなディックが大きな声で言った。「船に乗っちゃえば、もうこつちのものよつてわけだ。」

ジュリアはしばらくの間考えに耽ふけっていた。いま自分のところを満たしているアレックに対する称讚の気持ちに逆らいたくはなかった。しかし、死を覚悟で出かけて行くという考えには身震いを覚えた。この人は普通の人間の範疇はんちゆうには収まらない人なのだ。

「みんなに自分のことを憶えておいてほしいとお思いになりますの？」ジュリアは尋ねた。

「ひよつとしたら憶えていくれる者もいるかもしれませんが。」アレックはゆつくりと答えた。「ひよつとして、百年も経ったら、どこか少しばかり栄えた町で——私が発見したときには荒野以外の何ものでもなかった町で——二流の彫刻家に依頼して私の銅像を建てるかもしれない。そこで私は証券取引所の前に立って、鳥の格好すまかの単すまかになりながら、人間の浅ましい行為を永遠に見下ろすことになるかもしれない。」

アレックは突然短く笑うと、そのまま黙り込んでしまった。ジュリアはディックのほうをちらっと見た。ディックはそれをアレックと二人きりになりたいという合図と受け取った。

「ちよつと失礼するが、いいかね？」

ディックは立ち上がり、部屋を出ていった。沈黙が続いた。アレックは自分の考えに深く沈み込んでいるようだった。やがてジュリアが先程のアレックの言葉に応えた。

「本当にそれすべて？　こころの底には、これまで誰にもお話しになつたことのないものがあるに

ちがないと思うんですけど。」

アレックはジュリアを見た。二人の視線が合った。夫人は心から自分に同情してくれている、自分を助けたいと心から願ってくれている、アレックは突然そう思った。二人とも肉体は溶けだし、魂が裸で向かい合っている、そう感じた。すると、自身の性質のなかで最も愛おしく思ってきたもの—— 慎み深さという壁が崩れ落ち、誰も結局は理解してくれないだろうと、奇妙なほどの繊細さゆえに、これまで一度も明かしたことの無いものを話してみたいという切迫した欲求を感じた。

「多分お会いすることは二度とないでしょうから、あなたにはお話ししてもかまわないでしょう。馬鹿だとお思いになるかもしれませんが、恥ずかしながら、私はかなり……かなりの愛国者なのです。国を本当に愛しているのは、私たちのように祖国を離れて暮らしている人間だけなのではないでしょうか。私はイギリスを大褒誇りにしています。そしてイギリスのために何かをしたいと考えてきました。アフリカにいるときも私はよくイギリスのことを考えた。自分の仕事を成し遂げるまではなんと死にたくないと思った。」

アレックの声は震えていた。彼は少し言葉を切った。ジュリアは今初めてこの男のことが解つたような気がした。ルーシーもこの場において、アレックが恥ずかしそうに、しかし熱い感情を込めて語る言葉を聴いたらどんなによかったことだろう。

「不朽の名声を手に入れた軍人や政治家の後ろには、煉瓦を一つ一つ積み上げ、この大英帝国を築いてきた何千何万という人間がいるのです。彼らの名前は忘れ去られ、その歴史を学ぶのは学校の生徒くらいのものでしょう。しかし彼らはこの国に、それぞれ新しい領土を付け加えてきた。私もそうし

た男の一人なのです。何年も何年も、昼も夜も、私は頑張ってきた。そしてついに、豊かで肥沃な、広大な地域を祖国に渡すことができた。イギリスは、私の欠点も過ちも、私が死ねば忘れてくれるでしょう。イギリスが私の苦労に対して報いた嘲りや軽蔑については、何も気にしていない。何故なら、私はその王冠に、新しい、美しい宝石を付け加えることができたのだから。私は報酬は望んでいない。望むのは、ただ、愛するこのイギリスのために仕えるという名誉、それだけです。」

ジュリアは立ち上がるとアレックのところに行き、彼の腕にそっと手をおいた。「じゃ、なぜ——あなただって本当はとってもいい人なのに——他の人たちには、まったくひどい人間だっと思わせるようなことばかりなさるの？」

「笑わないでください、もうお解りでしょうが、僕は本当は『意地悪婆さん』にすぎないんです、ちよっとセンチメンタルな……。」

「あなたのことを笑いたいなんて思いませんわ。どちらかって言えば、こんなことしたらひどくまづつくんじゃないかと思うからあえてしませんが、できたらあなたにキスしたいくらいよ。」

アレックは微笑み、ジュリアの手を取ると、唇のところに持ってゆき軽くキスをした。

「まあ素敵。わたし、あなたにこんなに素敵なこと教えてさしあげられたんですもの、これからは自分のこと、素晴らしい女だって考えることにします。」

ジュリアはアレックを坐らせ、自分もその横に腰掛けた。

「今日は来てくださって本当にありがとう。あなたとお話がしたかったの。もしわたしが或ることを言ったら、あなた、怒って？」

「そんなことはないと思いますが。」アレックは微笑んだ。

「ルーシーのことについてお話がしたいの。」

アレックは突然身を固くすると、ジュリアから視線を逸らせた。それまでの雰囲気が一変した。彼は再び、いつもそうだったように、よそよそしく、打ち解けない人間に戻ってしまった。

「その話はしたくありません。」アレックの口調は冷やかなものだった。

しかしジュリアはそう簡単にへこたれる人ではない。

「もしもルーシーが今日ここに来るとしたら、あなた、どうなさって？」

アレックは振り向き、ジュリアを鋭い目つきで見た。そしてゆっくりと慎重に答えた。

「これまで私は礼儀を大切にする社会で生きてきました。その習慣に逆らおうという気は少しもありません。ですから、もしまたまルーシーさんがお出でになるようなら、ご安心ください、誠実に、礼に合った対応をするつもりです。」

「それだけ？」ジュリアは声を強めた。

アレックは答えなかった。彼の顔には野蠻とも呼べる表情が浮かび、ジュリアはぞつとした。アレックがなんとしても感情を抑えようとしているのが手に取るように判る。ああ、この人がもう少し弱い人であってくればどんなにいいことか。

「ルーシーがどんなに苦しんできたかをお知りになれば、そんなに頑なにはなれないと思うんですけど。」

アレックは再びジュリアを見たが、その眼差しには、苦々しき、不当な運命に対する激しい怒りが

あふれていた。この人は僕が苦しんでこなかったとでも考えているのだろうか。誰彼かまわず自分は惨めだと泣き言を言わないからといって、気にしていないとでも思っているのだろうか。彼は椅子からさつと立ち上がると、部屋の反対側へ行った。この婦人がどんなに自分に同情してくれているようにも、今の顔は見られなくなかった。自分は、可愛い女性に会うたびに恋に落ち、また恋から醒めるといった人間ではない。これまでの人生を通し、一つの理想をずっと追いつめてきたのだ。アレックは獐猛な顔つきでジュリアの方を見た。

「あなたには解っていらつしやらない、恋に落ちるといふことが私にとって何を意味するか。私は、いわば、一生監獄のなかで暮らしてきた。そして最後にルーシーが現れ、私の手を取ってそこから出してくれたのです。生まれて初めて、私は天にも昇るような自由な空気を呼吸した。」

アレックは急に話すのを止めて、口を堅く結んだ。そのためにどんなに苦い思いをしたことか、この人には話すまい。その苦々しさのために、激しい怒りに駆られ、あらゆるものに反抗したくなったことについては、決して話すまい。その苦悶が、絶望が、どんなに深いものであるかは、誰にも知られたくなかった。同情に身を任すわけにはいかない。もし今自分を縛っている縄を少しでも緩めれば、きつと自分は崩れ落ち、おいおいと泣き出してしまおう。アレックは、突然、そこに坐って自分の弱さを見つめているジュリアに、言いようのない憎しみを感じた。しかしジュリアは、まるで彼の危機的な感情を察したかのように、アレックから目を背けると、床に視線を落とした。彼女は何も言わなかった。アレックが感情を必死で抑えつけようとしているのを感じ、ひどく心を乱していた。近寄って慰めてあげたかった。しかし自分を寄せつけないであろうことも分かっていた。己の闘いは、

誰の助けも借りず、己一人で闘いたい人なのだ。

やっとアレックは自分の感情に打ち勝ったようだった。再び話し始めたとき、その声は奇妙につぶれ、途切れがちだった。低い、しわがれた声だった。

「私の愛は、人間として、私の最後の弱点でした。だから当然その苦い薬を飲まなくてはならなかったのです。そして今それを最後の澱^{おろ}まで飲み干した。私は、幸せだとか気楽な人生だとかいうものを手に入れるようには生まれついていない、それ以外の生き方をするように生まれついている、そのことが分かってしかるべきだったのです。」

アレックは暫^{しば}し話すのを止めた。落ち着きが戻ってきたようだった。

「そして、もうこの最後の誘惑に打ち勝ったのだから、いつでも次の仕事に取りかかる心の準備はできています。」

「でも、ご自分を哀れだとはお思いにならない？ ルーシーの気持は、お考えになってあげないの？」

「私のしたことはすべてルーシーのためだったと、ここで繰返し申し上げなければならないのでしょうか。そして、今もここからルーシーを愛していると。」

彼の言葉には、もはやなんの苦々しさも含まれていなかった。穏やかで、諦念にあふれたものだった。この人は本当に闘いに勝ったのだ。ジュリアは涙が流れてやまず、何も言えなかった。アレックが進み出て、彼女の手を取ると、

「あなたが泣いてはいけない。」と微笑みながら言った。「あなたは、この世界で、あなたのように

幸福な性質をもたない者たちに陽の光をもたらしあげ、そうした役目を担^{にな}った人の一人なのです。だからあなたはいつも幸せで、子供のようにならなくていいよ。ジュリアは啜^くり泣きのなかで笑った。

「ありがとう、わたし、ハンカチならたくさん持っていますよ。」ジュリアは啜^くり泣きのなかで笑った。

「今日私が申しあげたくだらないことは、みんな忘れてください。」

アレックはそう言うと、もう一度微笑んで、部屋から出ていった。

ディックは寢室の椅子に腰掛けて夕刊を読んでいたが、ジュリアはその部屋に入るなり、泣きながら夫の腕のなかに飛び込んだ。

「ああ、ディック、わたし、こんなに素敵な涙、流したことないわ。とっても幸せで、とっても不幸せな気持なの。きつとわたしの鼻、赤いでしょうね。」

「ねえ、前から気がついてたことだけど、泣いたときの赤い鼻が君ほどよく似合う人はいないね。君はそのためにわざと泣くんじやないの？」

「ひどい！ まったく思い遣りのない人なんだから……。わたし、アレックって本当に素敵な人だと思う。あの人にキスしたかったんだけど、きつと死ぬほどびっくりなさるだけだから、止めたの。」

「止めてよかった。そんなことすれば、アレックは君のことを尻軽な女だと思っただろうからね。」

「わたし、あの人とも結婚したかったわ、……。きつと良い旦那様になったと思うの。」

一日と過ぎてゆく時を、アレックは旅に必要な準備に費やしたが、ルーシーは気の滅入るような不安のなかで送っていた。過去二ヶ月、様々な感情が彼女の中で闘いを繰り返していた。アレックへの愛は、森の大きな木のようにしつかりと根を張り、どんなに激しい嵐もその頑固な根を揺るがす力は持っていないかのようで、理性、常識、恥、そうしたものは力を失っていた。ルーシーは、慈悲深い死がこの恐ろしく中途半端な状態から自分を解放してくれることを神に祈った。元気はなく、何かよく分からないものに怯えていた。自分の弱さを軽蔑し、そして時には、立て続けの不幸で自分を粉々にしてしまつた運命に抗議した。わたしはいつも義務を果たそうとしてきた、自分なりの基準に従つて謙虚に行動してきた、それなのに、わたしが関係することはどれもこれも手も触れた途端に粉微塵に砕けてしまう。自分は幸福になるように生まれついていないのだろう、そうルーシーもまた思い始めていた。アレックを憎むべきだということは分かっていた。しかしできなかった。彼のやったことを思えば、名状しがたい恐怖で満たされて当然であることも分かっていた。しかし理に反して、アレックが不実で卑劣な人だとは信じられなかった。一つだけルーシーが堅くここに決めていたことがある。それはロバート・ボールガーに約束したことは必ず守るということだった。ところがボール

ガー自身が彼女に自由を返してくれたのである。

ある日彼がやって来て、しばらくとりとめのない会話が続いた後、いきなり事の核心に踏み込んできた。

「ルーシー、頼みたいことがあるんだ。僕たちの婚約を解消してくれない？」

ルーシーは心臓が喉から飛び出しそうで、体が震えだした。ボビーは続けた。

「こんなこと言うのは恥ずかしいんだけど、僕はどうしても君と結婚したいほどに君を愛してはいないよなんだ。」

ルーシーは黙ってボビーを見つめていた。涙が溢れてきた。彼のぶっきらぼうな話し方はいかにも不自然で、優しさから出たその意図は明らかだった。

「あなたがそうお考えなら、これ以上お話しすることはないわね。」

ボビーがルーシーを見る顔は苦渋に満ちたもので、この見せかけだけのやりとりを続けても意味はない、自分たちを騙しおおせるものではない、そうルーシーは感じた。

「わたしはあなたの愛には値しないの。あなたを惨めにするだけ。」

「僕はどうでもいいんだ。でも、君まで惨めにならなくちゃならない理由はない。」

「ボビー、わたし、あなたが望むことならどんなことだってする。」

「僕に同情してくれるからというだけで、結婚はできない。前はできると思った、でも、……それじゃ、君に多くを求めすぎることになる。もうこれ以上この話はよそう。」

「本当にごめんなさい。」ルーシーはつぶやくように言った。

「ねえ、君はまだアレック・マッケンジーを愛してるんだらう？」

ポールガーは微かな望みを持って、ルーシーが否定してくれることを願った。しかしこの中には、そんなことはありえないと分かっていた。

「ええ、そんなことがあっても、これからもずっと……。自分ではどうしようもないの。」

「そうだね。運命ってものだろう。」

ルーシーは激しい感情に駆られて、飛び上がるように立ち上がった。

「ねえ、ボビー、すべてを納得のいくように説明することはできないの？」

ポールガーはちよつと躊躇った。これは難しい質問だった。

「これだけは言えると思うが、騒ぎが収まるにつれて、マキナリーの話を用いる人は少なくなってきた。あの男はごろつきで、どうやらマッケンジーをネタに一儲けしたという話のようだ。」

「それで、どうなの、あなたは？ あなたは今でもあの人がジョージの死に責任があると思ってる？」

「そう思う。」

ルーシーは再び椅子に身を沈めると、何かを考えるように頬杖をついた。

「それで、君はどうなんだい？」 ポールガーが訊いた。

ルーシーは真剣な表情でしばらく彼を見つめていた。頬が赤らんだ。

「そうは思わない。」 彼女は断固として答えた。

「なぜ？」

「理由は無いの。ただあの人を愛しているから。」

「それで、これからどうするつもりなんだい？」

「分からない。」

ボビーは立ち上がると、優しくルーシーの頬にキスをして、部屋から出ていった。ルーシーはその後彼に会うことはなかった。数日後、ボビーがロンドンを離れたという噂を耳にした。

ルーシーは、アレックがアフリカに出發してしまふ前になんとしても会わなければと考えていたのだが、生来の内気さゆえに、手紙を書くことはできなかった。アレックは自分と会うことを拒むのではなからうか。あの人が会うことを望んでいないのであれば——そうに違いないとルーシーは思った——無理強いすることはできない。しかし、そうは思っても、あの晩自分がしてしまったひどい行為をどうしても詫びておきたかった。アレックの赦しが欲しかった。もしあの人が自分のことを少しでも哀れに思ってくれていると判れば、この侘びしく重い人生も多少は耐えやすくなるだろう。自分がどんなにうちひしがれているかを見れば、あの人もきっと赦すと言ってくれるだろう。

しかし時は日一日と過ぎてゆき、ジュリアが新婚の喜びで顔を輝かせながら教えてくれた、アレックの出發の日は間近に迫っていた。

ジュリアもまたここを痛めていた。アレックとああした会話を交わした後では、直接彼に、ルーシーと会ってやってほしい、と頼むわけにはいかなかった。アレックが拒否することは明白だったからだ。どんなに説得しても気持を変えさせることはできないだろう。会えば二人とも苦しむことは目

に見えている、アレックはその苦しみをルーシーにも彼自身にも与えたくないのだ。それに傷はまだ癒えたばかりなのだ。その傷口を再び悪化させるような危険を犯すわけにはいかない、——そう考えたとしても当然だろう。ジュリアはすべてを自分の手で行なおうと決心した。出発は明日で、アレックは夕方ディックとジュリアのところへ別れの挨拶に来ることになっていた。ジュリアは、ルーシーも来るようにと短い手紙を書いた。

そのことを言うと、ディックは呆気にとられたようだった。

「しかし、君、そりゃひどいよ。アレックをそんなふうに畏にかけちゃいけない。」

「ひどいことは分かっています。でも、アメリカの女がイギリスに住んで良かったって一つだけ思えるのは、そのひどい、常識はずれの行動がとれることなの。あなた方イギリス人はわたしたちを、インディアン の 親類だ、どんなことでもする人種だと思ってる。アメリカでは、わたし、自分の行動にずいぶん注意しなくちゃならないよ。人のいるところじゃ絶対煙草は吸わないし、レストランで男の人と二人きりで昼食を取るなんて考えられない。アメリカほど因習に囚われた国はないわ。わたしは、そうした因習を後生大事に守る女なの、……アメリカにいるときにはね。でも、ここでは、あなた方が勝手にニューヨークは気楽で自由な社会だと錯覚していらっしやるから、わたしたちアメリカの女はなんの束縛も感じないで自由気儘に振舞える。誰もそれを変だなんて思わない。」

「でも、ジュリア、これは人間としての常識の問題だと思いがね。」

「時には常識だけじゃことが運ばない場合だってあるわ。」

「アレックは君を赦さないとと思うよ。」

「そんなこと気にしない。あの人、ルーシーに会うべきなのよ。でも、会ってやっつと頼めば断るに決まってるから、断る機会を与えないの。」

「で、もし彼がお辞儀だけして帰ってしまったら、どうするんだい？」

「あの人、礼儀作法を心得た人間として行動するって約束してくれたわ。」

「僕は身を引くからね。君のしようとしていることはひどいことだ。弁解の余地はないと思うな。」

「弁解の余地があるとは言ってません。」ジュリアも認めた。「でも、あなた、わたしは哀れな女、かよわい女にすぎないのよ。誰もわたしに、羞恥心だとか、たしなみだとかは期待してないわ。だからお願い、馬鹿な女だからこそできることを、やらせて。」

ディックは肩をすくめて微笑むと、

「血を流すのは君なんだから、やるだけやってみるさ。」と答えた。

「駄目でもととなんですものね。」

アレックがジュリアの居心地のよい居間に来て十分もしないうちに、ルーシーの来訪が告げられた。その場の気まずさを繕うために、ジュリアはルーシーのところへ歩み寄ると大袈裟に彼女を出迎えた。アレックの顔から血の気が引いたが、狼狽している様子は見せなかった。ディックだけがおろおろしていた。何をどう言っよいか途方に暮れているようで、明らかに機嫌が悪かった。

「わざわざ来ていただいて本当ありがとうございます。」自分がルーシーの来るのを待っていたことをアレックに示すべくジュリアが言った。

ルーシーはアレックをちらつと見て頬を染めた。アレックは立ち上がり、進みでると、手を差し出した。

「こんにちわ。」とアレックが言った。「ケルシー夫人はお元気ですか？」

「ありがとうございます。おかげさまで、かなり元気になりました。わたしたち、伯母さまの療養のためにスパ温泉に行っていましたの。」

ジュリアは心臓がドキドキしていた。アレックとルーシーがこうして会っていることに興奮を抑えられなかった。これこそ自分の考えるロマンチックな場面なのだ。この二人は、心の中に燃えたぎる愛情を抱きながらも、礼儀をわきまえた大人として当り障りのない会話を交わしている、これこそ洗練の極みというものではなからうか。とりわけアレックは、ルーシーの来訪を知った瞬間の当惑から立ち直り、今やその態度、振舞いはまさに「都会風」だった。

「あなた方が外国へいらっしやつたと誰かから聞きました。」アレックが言った。「ディック、君だったかな？　こいつは本当に驚くべき男で、まるで人物地名辞典のように、誰が何処にいるか、みんな知っているんです。」

ディックは気を揉んでいる様子で、ルーシーに坐ってもらおうと椅子を動かし、外套を脱ぐよう勧めた。

「ケルシー夫人に、出発のご挨拶にもうかがわす申し訳ありませんとお伝えください。」アレックが言った。「文字通り眼の玉が飛び出すくらい忙しかったのです。」

「そんなこと、少しもかまいません。」

ジュリアはアレックのほうをちらつと見た。彼がこの場の話題を、ルーシーが単なる知り合いであったなら交わしそうな、どうでもよい平凡なものに限っておこうと決意していることは明らかで、その口調にはどこか冗談を言っているようなところがあつた。そうすることでアレックは様々な感情が表に出るのを避けようとしているのだろう。ジュリアはこの先をどう進めていったらよいのか困惑していた。

「ロンドンというのは誠に素晴らしいところで、自分がいかにつまらない人間か教えてもらうには打ってつけの場所ですね。ある時ちよつと有名になる、それで自分はかなり重要な人物なんじゃないかと自惚れる。ところが、しばらくロンドンを留守にして、さて戻ってみると、驚いたことに、自分がロンドンを留守にしていたことなんて誰も気づいていないんですから。」

ルーシーはどう応えてよいのか分からず、口元に笑みを浮かべるのが精一杯だった。ディックがいつもの上機嫌を取り戻して、すぐに救いの手をさしのべてくれた。

「アレック、君は謙虚すぎるよ。もしそうじゃなかったら、今頃はすごい人物になっていただろうな。僕は、知り合いには、自分がいかに無くてはならない人間か説明することになっている。そうしておけば、みんなは僕を必要不可欠な人間だと考えるようになるからね。」

「必要不可欠か……。そう、君はまさに英国的正義という大きくて重いパンを膨らますために必要不可欠な、軽佻浮薄なイースト菌つとこだな。」アレックが笑った。

「賢明なる者はつまらないことを常にきわめて真面目に考えている、そりや確かだ。」とディックは言い返した。

「なぜなら優雅に何もしないでいるためには首相になるより知恵と才能が必要だから、——そう言いたいんだらう？」

「そのとおり、嬉しいこと言ってくれるね。」ディックの声が弾んだ。「僕の一番好きな言葉を面と向かって言ってくれるとは、君も、どうして、なかなかじゃないか。」

ジュリアは夫の顔をまじまじと見ると、

「あなた、たしか、できないと分かっていることだけがする価値のあることだ、つておっしゃっていませんか？」と言った。

「おや、そうだったかな。そりや、きつと何か箴言集しんげんの見出しでも引用してたんだらうよ。」

ルーシーは、自分も何か言わなければ、と感じた。これまでずっと、胸が張り裂けそうな思いでアレックを見つめていたのだ。ルーシーはディックのほうを向くと、

「ローマスさまはサウサンプトンまで見送りにいらつしやいます？」と訊いた。

「ええ、もちろん。僕はアレックの肩に顔をうずめて、塩辛い涙しよっぱを流すつもりです。それが一番効果的でしょう。僕はどうも感情が盛り上がったとき辛辣しんらつな名文句を吐きたがる癖がありますからね。」

アレックが突然立ち上がった。彼はしかめつ面つらをしていたが、それがディックの陽気な表情と奇妙な対照をなしている。

「僕はあの重苦しい別れの挨拶つてやつは大嫌いだ。永遠の別れでも、日帰りでブライトンまで出かけるのでも、ちよつと頷くか、ちよつと微笑む程度の別れ方のほうが好きだね。」

「わたし、何度も申しあげてきましたが、まったくあなたつて人は！ 人間らしい感情に欠けた、怪

物ですわね。」ローマス夫人は笑おうとした。が、笑いにならなかった。

アレックは苦笑いを浮かべて夫人の方を見た。

「この二十年、ディックは私に、人生をもっと気軽に考えたらどうかと、さかんに忠告してくれました。それでやつと私にも解つてきました——物事が重大に見えるのは、それを重大に受け取るからだ、それはひどく馬鹿げているつてことが。真面目でありながらも馬鹿げて見えないようにすることは生易いことじゃない。それができるのは、まあ、女性だけの特権かな。女性は、生も死も、人間のあらゆる状況を、単に自分が服装を替える好い機会いい機会だけにしか考えない。結婚式は新調の白で着飾つて、神に祈りを捧げるときにはパリ製の帽子ボンネットを被つてみるんですよね。」

アレックがこの場の会話を、陽気な、遊び半分のもので終わらせようと決心していることは明白だった。滑稽なものに対して鋭い感性を持つジュリアには、アレックのその手際の悪さ、ぎこちなさが見えてしまい、笑いを堪こらえるのに苦労した。しかし同時に、彼女には判っていた——彼の苦渋に満ちた声が、彼の語る内容のすべてと際立った対照をなしている。アレックの言葉のすべてを貫いているのはこころの苦しみなのだ。彼女もまた決心していた——自分が計画したこの出会いが、たとえ四人全員にとって気詰まりなものであると、このまま無に終わらせてしまうわけにはいかない。自分らしく、真つ直ぐ要点に入つてしまおう。ジュリアは立ち上がると、

「二人だけで話したいことがおありなんじゃなくなつて？」と切りだした。

アレックを見ると、追いつめられた動物のように、黒い瞳がいつそう黒くなっている。しかしジュリアは容赦しなかった。

「アメリカへ送りたい手紙が何通かありますの。綴りに間違いがないかどうか、ちゃんとイギリス風に綴ってあるかどうか、ディックに見てもらわなくちゃ……。」

アレックとルーシーが何も言えないでいると、この小さな、決断力に富んだ婦人は夫の腕に手を絡ませ、あとは御勝手に、とばかり部屋を出ていった。取り残された二人の間になおしばらく沈黙が続いた。

「今日わたしが来ること、ご存じなかったのね。」やっこのことルーシーが言った。「ジュリアさんがあなたを畏に掛けたなんて、知らなかった。ごめんなさい、もし知っていたらここには来なかったでしょう。」

「あなたにお別れの挨拶をする機会を与えてもらって、有難く思っています。」

アレックは相変わらず、こうした場面ではかくあるべきだという礼にかな適った態度を続けていて、その壁を打ち破ることはできそうになかった。

「ディックさんもジュリアさんとても幸せそうで、よかった。愛し合っているのね。」

「愛は、結婚の土台としては、考えうる限り最悪のものだと思いますね。」アレックが答えた。「愛は幻想を生み、結婚はそれを打ち砕く。真に愛し合っている者同士は結婚しないほうがいいのです。」

再び沈黙が訪れ、再びそれを破ったのはルーシーだった。

「いよいよ明日、ご出発ですね。」

「ええ。」

ルーシーはアレックを見たが、アレックは視線を合わせようとしなかった。彼は窓のところに行くにぎと、賑やかな通りを見下ろした。

「またアフリカにいらっしやることができ、うれしい？」

「ええ。いよいよこれでロンドンも見納めかと思うと……。穏やかに澄みきった無限に広がる海……、あなたには解ってもらえないと思いますが。」

ルーシーは嗚咽を抑えようとしたができなかった。アレックが一瞬びくつとした。しかしそれ以上は動かず、相変わらず窓の外を見つめている。通りには霞んだような秋の陽に照らされて大小さまざまな馬車が忙しく行き交っている。

「アレック、後に残していったさみしく思う人はいらっしやらないの？」

ルーシーにアレックと呼ばれたことで彼の心はちぢに乱れた。ルーシーが自分をアレックと呼ぶとき、それはいつも一種の愛撫のように感じられたものだが、今ルーシーの唇からその音が発せられ、彼は再びこれまでの悩み苦しみのすべてを思い出したのだった。しかし、自分の感情を悟られてはならない。彼は振り向くと、ルーシーをまじまじと見た。彼女をためら躊躇うことなく見るのは今日これが初めてだった。そしてアレックは、あらかじめ心に決めていたことを語りながら、ルーシーのえも言われぬ優美な顔の曲線、美しく柔らかな髪、そして悲しみに暮れた眼差しを意識したのだった。

「そうですね、ディックは結婚した。私は邪魔しないのが一番なのです。男が結婚したら、その独身時代の友人はいさか潔くその男の人生から離れていくのが賢明というものでしょう、もうおまえは必要ないと言われる前にですね。」

「ディックさんの他には？」

「私には友達ほとんどいませんし、親類もない。有難いことに、私がアフリカへ発つからといって悲しむ者はほとんどいません。」

「ああ、アレック、あなたには人のところがないの？」ルーシーの声は低く、かすれていた。

アレックは歯を食いしばった。そして自分にこのような苦渋をなめさせたジュリアに苦々しい怒りを感じた。

「もしあったとしても、このカールトンホテルのようなところへは持つてきませんね。心のような感傷的な臓器はこうした場所にはふさわしくくない。」

ルーシーは飛び上がるように立ち上がった。

「ああ、どうしてわたしを赤の他人のように扱うの？ どうしてそんなに冷たくなれるの？」

「ものごとを斜しやに構かまえて眺めること、時にはそれが厄介な情況から身を護る唯一の方法なのでは？」アレックの声は言っていることとは裏腹に重苦しいものだった。「実際、こんな話をするより、天気の話でもしていたほうがずっと賢いと思いませんか？」

「わたしが来たから怒っているの？」

「そんな失礼な気持は毛頭ありません。ただ、私たちがこうして再び会うことはそれほど必要なかったのかもしれない……。」

「あなたはわたしが来てからずっと、演技をしているのだわ。そんなふうには皮肉っぽい、無関心な話し方をして、その不自然さにわたしが気づかないと思ってる？ わたしにはあなたのことはよく分かっ

ています。あなたが本当の自分を仮面の後ろに隠そうとしていることがわたしに判らないはずがありません。」

「もしそうなら、私の意図するところは明らかかなはず。おっしゃるように、本当の自分を隠しておくたいのです。」

「どうしてそんなふうには、言葉だけは丁寧で、でも、冷たく突き放したような話し方をなさるの？ むしろ、わたしを罵ののりたいだけ罵ののってくださいれば……。」

「あなたを喜ばせるのは、なかなか難しいですね。」

ルーシーは感情を抑えきれず、アレックに歩み寄った。しかし彼はルーシーに触れられまいとするかのように一歩退さがった。大きく伸ばされたルーシーの両腕は再びむなしく下に降ろされた。

「ああ、あなたは鋼鉄のような方だわ。」痛ましい声だった。「アレック、アレック、あなたが出発する前に、どうしてももう一度お会いしたかったの。わたしがどんなに辛い思いでいたか、それを知ればあなたも満足するでしょう。少しは憐れみをかけてくださるでしょう。わたしのことをひどい女だと取らないでほしいの。」

「私がどう考えるか、そんなに問題なのですか？ 私たちは五千マイルも離れてしまうのですよ。」

「わたしのこと、心底軽蔑しているのね。」

アレックは首を振った。そして、自らのところを無惨に傷つけていた偽りの冷静さをかなぐり捨てた。自分がどんなに苦しんでいるか、今は隠そうともしなかった。アレックの声は感極まったようにふるえていた。

「あなたを軽蔑する？ あなたへの愛はそんなに小さなものではなかった。信じてください、どんなにあなたの幸福を願っていることか。最初の苦い思いの消えた今、私には理解できる、あなたはああするしかなかったのだと。あなたには、本当に、幸せになっていただきたい。ロバート・ポールガーは素晴らしい若者です。きつと、私などよりずっとあなたを幸せにしてくれると信じています。」

ルーシーは髪の根元まで赤くなった。こころは沈んだ。が、その動揺を隠そうとはしなかった。

「わたしがロバート・ポールガーと結婚するって、みんなが言ったのね？」

「違いますか？」

「ああ、ひどい。みんな、何て勝手なことを！ 確かに、ボビーと結婚の約束はしました。でも、あの人のほうからそれを取り消してくれたんです。あの人には分かっていたんです、どんなことがあっても、わたしがあなたを愛しているってこと、わたしの命より愛しているってことが……。」

アレックは俯いたきり、身じろぎもせず、黙り込んでしまった。

「ああ、アレック、どうか、わたしのこと、少しは憐れに思って、……一言でいいから、出発の前に優しい言葉をかけて。」悲しみに呻くようにルーシーが言った。

「でも、ルーシー、何も変わっていないのですよ。あなたが私から去っていったのは、私が弟さんを死に至らしめたからなのです。」

ルーシーは、今度は両手を後ろに組んで、アレックの前に立った。二人は互いの眸を覗きこんだ。つぎに話し出したとき、ルーシーの声は、こころの中にわだかまっていたものを吐露すること^{ひとみのぞ}で気持ちが安らぐのか、穏やかな、落ち着いたものになっていた。

「確かに、あの時はあなたを憎みました。でも、このこころの中の、あなたへの愛を押しつぶすことはどうしてもできなかった。わたしがボビーと結婚の約束をしたのは、怖かったからなんです、まだあなたを愛している自分が……。それに、あなたを愛することはジョージに対するひどい裏切りのように思えた。でも、あなたへの愛はわたしのなかで燃え上がるばかりでした。何度もその思いをこころから閉め出そうとしました。でもそのたびに、あなたのおっしゃった言葉が頭に浮かぶんです。憶えていらつしやいませんか？ あなたはおっしゃった——あなたのなさったことはすべてわたしのためだったと。その言葉が、鉄床を叩く槌の音のように頭を離れない。わたしは必死で、それは嘘だと自分に言い聞かせました。あなたはジョージを、冷酷に、無慈悲に、計算づくで犠牲にしたのだ、そう信じようと思いました。でもできなかった。あなたへの愛が、そんなことはありえないとわたしにつぶやくんです。一方に、このたった一つの忌まわしい噂がある。そうしてもう一方には、これまでのあなたの全人生がある。あなたが或る瞬間だけまったく別の人間になってしまうなんてありえない。この惨めで辛かった三ヶ月の間に、わたしはあなたという人をこれまで以上に理解できたような気がします。そしてわたしは、自分のしてしまったことを恥ずかしく思うのです。」

「恥ずかしい？」

「ええ。だから今日ここに来たんです。わたしにはなぜあなたがあのようなことをなさったのか分かりません。でも、それを理解したいとも思わない。今はあなたをこころから信じています。あなたのことを……神様以上に。あなたのなさったことが何であれ、それは、間違いのない、正しいことだったに違いない。なぜって、それをなさったのはあなたなのだから。」

アレックは暫しルーシーを見つめていた。やがて手を差し出すと、
「ああ有難い。」とつぶやいた。「そう言っていただいて本当に感謝します。」

「それだけ？ 他におっしゃりたいことはないの？」

「遅すぎたのです。今となつては、すべてどうでもいいことなのです。私は明日出発するので……永遠に……」

「でも、お戻りになるんでしょう？」

アレックは自嘲するように短く笑った。

「コンゴでの仕事を私が引き受けて、みんな喜びましたよ。誰も引き受け手のなかった仕事ですからね。私がこれから行く所はヨーロッパの人間がほとんど戻ってきた例のない場所なのです。」

「ひどい！ アレック、お願い、行かないで！ わたし、耐えられない……」

「今となつては行くしかありません。準備はすべて完了し、今さら引き返すことはできないのです。」

ルーシーは失意のうちにアレックの手を離し、

「もうわたしを愛してくださらないの？」とつぶやくように言った。

アレックはルーシーを見つめていたが返事はしなかった。ルーシーはアレックから視線を逸らすと、椅子に沈みこみ、声を上げて泣きはじめた。

「ルーシー、お願いだ、泣かないで。」これまでとは打って変わってアレックの言葉は途切れ途切れだった。「私をこれ以上苦しめないください。」

「ああ、アレック、アレック、解ってくださいさらないの、あなたをどんなに愛しているか……」

アレックはルーシーの上に身を屈めると、その髪を優しく撫でた。

「ルーシー、気を強く持つて。」

ルーシーは訴えるようにアレックを見上げ、彼の手を取った。

「あなたなしでは生きていけない。わたし、もう充分すぎるほど苦しんできました。もし本当にわたしのことを思っていてくださるのなら、アフリカに行っておしまになれるはずがない。」

「ここからあなたを愛しています。しかし今はもう、行くしかないのです。」

「じゃ、わたしも連れて行って——一緒に行かせて！」ルーシーが一途に言った。

「あなたが！ あなたがアフリカへ！」

「わたしにだってできることはあるわ。あなたが助けてくださるなら、わたしどんなことでもできます。アレック、お願い、一緒に行かせて。」

「到底無理だ。あなたはご自分がおっしゃっていることがどんなことかお解りになっていない。」

「じゃ、あなたを待たせて。あなたがお戻りになるまで待っているとおっしゃって。」

「それで、もし私が戻らなかったら？」

「それでも、待っています。」

アレックはルーシーの肩に両手をおくと、なんとしても彼女の魂の深淵を見たいというように、その眸を覗きこんだ。ルーシーは自分が無力なのを感じた。涙でくもってアレックの顔がよく見えなかったが、一生懸命微笑もうと努めた。やがてアレックは、何も言わず、両腕でルーシーを抱きしめた。

恍惚とした幸せのなかで啜り泣きながら、彼女はアレックの肩に頭を凭せかけた。

「本当に待っていてくれますか？」アレックが言った。

「わたしには分かっています。あなたはわたしを愛してください。あなたを信じています。」
「では、怖がらないで。私は必ず戻ってくる。この旅が危険なのは、私が死にたいと思っていたからなのです。しかし、今は生きたいと思っている。だから必ず戻ってくる。」

「ああ、アレック、アレック、うれしい。わたしを愛しているのね。」

窓の外からは、木材を敷きつめた舗装道路のうえを絶え間なく行き交う、さまざまな乗り物の音が聞こえてきた。ゴトゴトと重々しい車輪のとどろき、チリンチリンと騒々しいバスのベル、馬の蹄のカタコトいう音、車のクラクションのかん高い響き。ブルーム型電動自動車奇妙に金属的な音をたてながら通りを颯爽と走り抜けていった。

完

訳者あとがき

英国の文豪ウィリアム・サマセット・モーム（一八七四—一九六五）の小説“The Explorer”全文の翻訳である。この小説が世に出たのは一九〇八年、モーム三十四歳のときだったが、その後モームが自選集から外してしまったため、長らく入手困難な作品となっていた。それをニューヨークのキャロル・アンド・グラフィ社が一九九一年復刻してくれ、やっと読むことができるようになった。モームのファンとしては望外の喜びであった。モームが自選集から外した理由については後に述べるとして、この作品が書かれた経緯について、『要約すると』（一九三八）の中から簡単に紹介しておきたい。（第三十二章―第三十四章）

この作品、もとは一八九九年、戯曲として書かれ、初演は一九〇七年、ロンドンのリリック劇場。『フレデリック夫人』が当たりを取り、ロンドンの四つの劇場で彼の四作品が同時に上演されていたときのうちの一つ。例のシェイクスピアがうらめしそうに指をくわえているパンチ紙のポスターでおなじみの方も多いと思う。ただし、他の三作品がロングランであったのに対し『探険家』は「失敗ではなかった程度のもので、まもなく打ち切りとなった。三つの劇が当たりを取ったとはいえず、当時、劇作家の印税は安く、収入はしれたものだった。モームはその頃或る若い女性に入れ込んでい

たのだが、その女は彼のほかにも金持ちの男と付き合っていて、贅沢好きはその女の関心を買うには金が必要だった。そこで『探険家』と、どの作品を指すのかは不明だが、もう一つ戯曲を小説に焼直し、「四、五百ポンド稼ごうと思った」というのである。金のために書いたという言い方、モームらしいといえばモームらしい。(なお、この話には後日談がある。これらの小説の印税を受け取る頃には、この女に対する彼の関心はすっかり消えてしまっていて、その金でエジプトに旅行に行ったというのだ。)

さて、自選集から外した件だが、モームは同三十四章の中でこれら二つの作品について、「恥ずかしいものを書いてしまったものだと、長い間良心が疼いていた。抹殺できるものなら抹殺したかった」と述べている。モームにそう言わしめたところのものは何か。原因は二つあると思う。一つは文体と構成である。後に『人間の絆』『月と六ペンス』『お菓子とビール』といった傑作を「明快・簡潔・心地よい語調」(同十章)でものにしていった彼にしてみれば、正直、『探険家』の文体は未熟で大袈裟なものに思えたであろうし、後の作品でお馴染みの、『お菓子とビール』において完成したと考えられる)、一人称の語り手による自由自在な小説構成は、この作品では影も形も見られず、ひたすら筋を追うのみという印象は免れない。加えて、最後の章がいかに慌しく、後の作品群に感じられる読後の余韻といったものに乏しいことも事実だ。

二つ目は内容の問題である。『探険家』で謳いあげられている主題——純愛、犠牲的精神、理想主義、祖国愛といったものは、後のモームの作品の中ではなかなかお目にかかれない。モームは自伝的大作『人間の絆』を完成した後、こうした問題を意識的に作品の中から排除してきたと言ってもよい。

(彼が再びこうしたテーマと真剣に取りくむには、なんと一九四四年、モーム七十歳の時の『剃刀の刃』まで待たねばならない。)つまり、自ら認める犬儒家となっていたモームは、『要約すると』を書いた一九三八年当時、『探険家』の内容と自己の人生観との間に大きな隔たりを感じ、これを自分の作品と認めなくなかったのであろう。

以上が『探険家』に対するモーム自身の評価、そしてこれまでの世の評価であった。

しかし今あらためて、或いは、初めて『探険家』を読んでもみると、モームの小説家としての力量にやはり感心させられるのではあるまいか。確かに第一章は重苦しいし、最終章は慌しいが、いったん物語に乗ってしまえば一気呵成に読んでいける。ニューヨーク・タイムズが「巨匠は、小説全体を通して、力強く読者を擱んで放さない」と書評に述べているが、あなたがち褒め過ぎともいえまい。

私は不幸にしてこの小説のもととなった戯曲を読んではないので性急な評価は避けたいのだが、この作品はきっと小説で読んだ方が感動が深いのではなからうか。(もし時間があつたら、作品中の会話の部分だけを取り出して読んでみることをお奨めしたい。多分戯曲の方はその部分だけで成り立っていたはず。)ただし、モームは『テラーズ・オブ・テイルズ』の序文の中で、プロの作家なら、同じ話を出版者の要求に従って如何様にも書けるものだという旨のことを、モーパッサンを例に挙げて述べている。「モーパッサンは彼の最も有名な作品の一つ『遺産』を二度書いている。一度は或る新聞のために三百語ほど。もう一度は或る雑誌のために六千語ほど。二つとも彼の選集に載っているが、その二つを読んだ人なら誰でも、前者においては少しも舌足らずのところなく、後者においては一語たりとも余分な言葉はない、と認めてくれるものと思う。」だから、ひよつとすると、もともと

なった戯曲『探険家』も小説に劣らぬものかもしれない。

最後に一言。モームは『要約すると』の三十章で、自分の作品が上演されるのを見るのは嫌いだということを述べながら、次のように続ける。「実際、最も軽い作品の中へも自分の多くを注ぎ込んだので、それが、科白となって、多くの観客の前で露わにされることに当惑を覚えた（傍点訳者）」と。たとえば、後のモームが意識的に作品の中から排除していったものであれ、二十代後半から三十代前半のモームの多くが注ぎ込まれた作品、それが『探険家』である。そして、ここで語られたモームの理想主義、犠牲的精神、純情といったものは、次第に消滅していったのではなく、深く地下の水脈を流れ、やがて『剃刀の刃』のラリーとなって地上に再びその姿を現わすのである。その流れがどんなに豊かであるかは、『剃刀の刃』をお読みになった方なら先刻ご承知のことと思う。

最後の最後に、この本を翻訳するにあたって協力、助言をしてくださった静岡県立静岡高等学校の職員の方々、特に英語科の方々、丹念に校正をしてくださった近代文芸社の木村尚子さん、そして、誰よりも、最初から最後まで二度までも原稿を読んで私の拙い日本語をどうにか読むに耐えるものにしてくださった宮下博司先生に、衷心からの感謝を捧げます。

一九九九年初冬